佐賀県文化財調査報告書 第120集

平原（ひらばる）遺跡 II

― 本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書 2 ―

１９９３年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書 第120集

平原（ひらばる）遺跡 II

―本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書２―

１９９３年３月

佐賀県教育委員会

序

佐賀県の東端部を占める鳥栖市・基山町は、九州の東西と南北とを結ぶ交通の要衝として古くより栄えてきました。また、遥か弥生時代に溯れば、史跡安永田遺跡に代表されるように先進的な文化・技術が華開いた土地であります。

この調査報告書は、佐賀県土木部による本川川防災調節池新設工事に先立ち、佐賀県教育委員会、鳥栖市教育委員会及び基山町教育委員会が協力して平成３年度から平成４年度にかけて実施した、平原遺跡２区発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の調査で数千年に及ぶ土地利用の歴史が明らかになり、なかでも縄紋時代中期の野営地跡や古墳時代の祭祀遺構は、九州では稀な発見として衆目を集めました。

本書が学校教育や生涯教育の資料として活用され、学術文化の向上に幾分とも寄与するものであれば幸いに存じます。

発刊にあたり、酷暑や厳寒の時節を通じ調査作業に従事していただきました地元の皆様をはじめ、関係各位から賜った深い御理解と多大な御協力に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成５年３月

佐賀県教育委員会
教育長　堤　　清　行

例　　言

1．本書は本川川防災調節池事業に伴う埋蔵文化財の事前調査のうち、平成３年度から平成４年度にかけて発掘調査を行った鳥栖市柚比町所在の平原遺跡２区の調査報告書である。

2．発掘調査は、佐賀県土木部の依頼を受けて、佐賀県教育委員会が主体となり、鳥栖市教育委員会及び基山町教育委員会と合同で実施した。

3．発掘調査にあたっては、地域振興整備公団鳥栖都市開発事務所、佐賀県開発局新都市対策課、佐賀県土木部河川砂防課・鳥栖土木事務所、北部丘陵新都市開発事務所、鳥栖市建設部北部丘陵対策課、基山町企画課、並びに地元各位の協力を得た。

4．本書の執筆と編集は徳永 貞紹が担当し、湯浅 満暢・百崎 正子の協力を得た。
なお、付編の「平原遺跡の古環境変遷」はパリノ・サーヴェイ株式会社による。

5．発掘調査及び報告書作成作業は下記の分担で行った。

発掘作業：秋吉 ヤツエ・飯田 学・井上 正義・岩永 和子・緒方 アキエ・緒方 定雄
鬼塚 義和・空閑 隆利・熊田 シヅ子・倉成 イツヨ・黒田 キクノ・古賀 伍六
後藤 チドリ・佐々木 ツゲノ・佐藤 サチ子・佐藤 千代子・佐藤 ミチ子
田熊 スマヨ・田熊 ツユカ・高原 唯則・寺崎 イツ子・寺崎 和枝・時 シマ子
都甲 トシコ・中島 康幸・野下 八重子・春田 良弘・久光 新・平田 シゲ子
平山 逸子・福山 ハツ子・藤田正一・藤田 トモエ・松川 由三・松隈 キミ
松隈 紀子・村山 作次・門司 功・山下 親滋・山下 正義・山本 セツ子
吉戸 タツエ・渡辺 トキ子
伊東 キヨノ・伊東 登・緒方 キヨミ・小川 ウタ・古賀 道江・夏秋 政治
納富 トシ子・野中 光代・野中 義雄・平尾 ハルヨ・福島 忠義・松本 玉樹
森園 ヨシエ・横尾 政一・吉田 初美
内川 キクエ・垣永 スヤ子・島 節子・篠原 春代・角田 シヅエ・角田 チヨ子
角田 ヤエ子・角田 美野・中島 春代・池田 マスエ・池田 ミチエ・江頭 キクエ
江頭 ツク子・川崎 シゲ子・川崎 フヂエ・北島 二枝・佐々木 チエ子
園田 幸子・乗富 シヅカ・原田 ユキエ

遺構実測：天本 和子・石橋 和子・市川 浩文・井上 トヨ子・緒方 恭子・川副 麻理子
佐田谷 昌子・佐藤 ヨシエ・渋田 信子・渋谷 格・高田 加代子・高嶋 カホル
武谷 和彦・寺崎 和枝・時 シマ子・徳永 貞紹・中島 佐知子・永渕笑美子
久山 高史・松野 富子・湯浅 満暢・横枕 栄子
（有）埋蔵文化財サポートシステム

遺構写真撮影：徳永 貞紹・久山 高史・湯浅 満暢

遺跡空中写真撮影：（有）空中写真企画

遺物整理：天本 和子・新井 久美・嬉野 みつ代・佐田谷 昌子・佐藤 ヨシエ・渋田 信子
陣内 香代子・瀬山 由規子・高田 加代子・高嶋 カホル・田中 美穂子
土井 マサ子・野田 美恵子・村瀬 邦子・室岡 勝代・森崎 和子・山口 カズヨ

遺物実測：飯田 考俊・石橋 和子・江副 朋子・緒方 恭子・蒲原 淑子・上瀧 光子
末吉 由紀子・田中 聡一・鶴田 啓子・徳永 貞紹・永渕 笑美子・兵動 律子
槙林 啓介・松野 富子・光石 逸子・村里 育子・横枕 栄子・吉田 雅子

整図：江副 朋子・兵動 律子・三好文子・光石 逸子・村里 育子・徳永 貞紹

遺物分布図作成：（有）埋蔵文化財サポートシステム（武広 正純・野田 典子）

遺物写真撮影：高瀬 哲郎・山田 親・湯浅 満暢

写真現像焼付：天本 千津代・天本 美穂子・江島 紀子・黒木 優子・古賀 栄子

6．測定値の表示に用いた単位は遺構がm、遺物がcmである。

7．方位は国土座標第II系の座標北で、磁北はこれより西偏約6°10′である。

本　文　目　次

第１章　調査の経過

１．調査に至る経過……1

２．調査組織……2

３．発掘調査の経過と方法……3

第２章　遺跡の位置と環境

１．地理的環境……6

２．歴史的環境……8

第３章　調査の内容

１．平原遺跡２区の概要……16

２．中央部の遺構と遺物……18

(1)土層堆積と遺構・遺物……18

(2)下層の遺構と遺物……22

(3)上層の遺物……90

(4)その他の遺構と遺物……105

３．北側部の遺構と遺物……108

(1)泥炭部の遺構と遺物……108

(2)SX238……115

４．南側部の遺構と遺物……119

(1)SX222……119

第４章　総括

１．まとめ……157

２．縄紋時代中期の遺構と遺物……158

３．祭祀遺構SX222について……162

付　編　平原遺跡の古環境変遷　㈱パリノ・サーヴェイ

はじめに……169

１．平原遺跡２区の層序と試料……169

２．分析方法と結果の表示法……173

３．化石の産状……175

４．遺跡周辺地域の古環境について……188

５．縄文時代中期の集石に関する分析調査……192

６．総括……193

挿　図　目　次

図１　平原遺跡の位置 …… 7
図２　周辺の主要遺跡 …… 9
図３　平原遺跡２区の位置 ……13～14
図４　調査区画と遺構・遺物包含層の位置 ……17
図５　中央部の土層 ……19～20
図６　縄紋土器の垂直分布投影 ……21
図７　中央部下層の遺構と遺物分布 ……23～24
図８　下層の集石と礫の分布 ……25～26
図９　集石の配置 ……27
図10　集石１ ……29
図11　集石２ ……30
図12　集石３ ……31
図13　集石４ ……32
図14　集石５ ……35
図15　集石６ ……37
図16　集石７ ……39
図17　集石８ ……40
図18　集石９ ……42
図19　集石10 ……44
図20　集石11 ……47
図21　集石12 ……48
図22　集石13 ……50
図23　集石14 ……52
図24　集石15 ……54
図25　下層の集石と土器の分布 ……57
図26　集石中の土器，SX208，SX208出土土器 …59
図27　下層の縄紋土器１ ……60
図28　下層の縄紋土器２ ……61
図29　下層の縄紋土器３ ……62
図30　下層の縄紋土器４　拓影による紋様の展開 …63～64
図31　下層の縄紋土器５ ……66
図32　下層の縄紋土器６ ……67
図33　下層の縄紋土器７ ……69
図34　下層の縄紋土器８ ……70
図35　下層の縄紋土器９ ……71
図36　下層の縄紋土器10 ……72
図37　下層の縄紋土器11 ……74
図38　下層の縄紋土器12 ……75
図39　下層の縄紋土器13 ……76
図40　下層の縄紋土器14 ……77
図41　下層の縄紋土器15 ……79
図42　下層の縄紋土器16 ……80
図43　下層の集石と石器の分布 ……82
図44　下層の石器１ ……84
図45　下層の石器２ ……85
図46　下層の石器３ ……86
図47　下層の石器４ ……87
図48　下層の石器５ ……88
図49　下層の石器６ ……89
図50　中央部上層の遺構と遺物分布 ……91
図51　上層の縄紋土器１ ……92
図52　上層の縄紋土器２ ……93
図53　上層の縄紋土器３ ……94
図54　上層の石器分布 ……96
図55　上層の石器１ ……97
図56　上層の石器２ ……98
図57　上層の石器３ ……99
図58　上層の石器４ ……101
図59　上層の石器５ ……102
図60　上層の石器６ ……103
図61　上層の石器７ ……104
図62　SK212，出土遺物 ……106

図63 銅鏃・ナイフ形石器・石鏃 ……106
図64 弥生時代以降の遺物 ……107
図65 北側泥炭部，土層 ……109
図66 泥炭部の縄紋時代遺物１ ……110
図67 泥炭部の縄紋時代遺物２ ……111
図68 泥炭部の縄紋時代遺物３ ……112
図69 P-１，出土遺物 ……114
図70 泥炭部の弥生土器・土師器 ……114
図71 SX238，出土土器１ ……116
図72 SX238出土土器２ ……117
図73 SX238出土土器３ ……118
図74 SX222の位置と土層 ……121～122
図75 SX222の上部 ……123～124
図76 SX222の下部 ……125～126
図77 SX222A出土土器１ ……127
図78 SX222A出土土器２・手捏土器 ……128
図79 SX222B出土土器１ ……129
図80 SX222B出土土器２ ……130
図81 SX222B出土土器３ ……131
図82 SX222B出土土器４ ……132
図83 SX222B出土土器５ ……133
図84 SX222B出土土器６ ……134
図85 SX222B出土土器７ ……135
図86 SX222B出土土器８ ……136
図87 SX222B出土手捏土器１ ……137
図88 SX222B出土手捏土器２ ……138
図89 SX222B出土手捏土器３ ……139
図90 SX222B出土手捏土器４ ……140
図91 SX222B出土銅鏡 ……140
図92 SX222出土滑石製模造品１ ……141
図93 SX222出土滑石製模造品２ ……142
図94 SX222出土滑石製模造品３・ガラス小玉 …143
図95 流路・湿地とＳＸ222の位置 ……165

表　目　次

表１　集石遺構一覧……56
表２　下層の石器組成……81
表３　上層の石器組成 ……100
表４　２区出土遺物一覧 ……144

写　真　図　版　目　次

写真図版１　鳥栖市北部から基山町主要部

写真図版２　①平原遺跡全景（南上空から）　②平原遺跡１・２区全景（南上空から）
③平原遺跡２区全景（東上空から）

写真図版３　①SX201（南から）　②SX202（南東から）　③SX203（南から）
④SX204・SX205（南から）　⑤SX204（北から）　⑥SX205（北から）
⑦SX206（南から）　⑧SX206下部（東から）

写真図版４　①SX207（南から）　②SX207・SX224（南から）　③SX208（東から）
④SX209（南から）　⑤SX210下部（南東から）　⑥SX211（南西から）
⑦SX213（西から）　⑧SX218・SX219（南から）

写真図版５　①SX220（南から）　②SX220下部（南から）　③SX221（東から）
④SX223（北から）　⑤SX224（南から）　⑥SX225（東から）
⑦SX226（東から）　⑧SX227（南から）

写真図版６　①SX228（南東から）　②SX237（南から）　③SX241（南西から）
④SX242（北東から）　⑤SX247（西から）　⑥SX248（西から）
⑦SX249（南から）　⑧SX250（北から）

写真図版７　①BD07下層遺物出土状況　②BD07下層遺物出土状況
③BD07下層遺物出土状況　④BE06下層遺物出土状況
⑤SK212（北から）　⑥BG10　P－１編物出土状況
⑦土壌分析の試料採取　⑧泥炭層の発掘作業

写真図版８　①SX222（南東から）　②SX222Ａ（東から）

写真図版９　①SX222遺物出土状況　②SX222北側流路（西から）
③SX222北側流路土層堆積状況（AW07東壁）

写真図版10～13　中央部下層の縄紋土器

写真図版14　中央部下層の石器

写真図版15　中央部上層の縄文土器・泥炭部の縄紋土器

写真図版16～17　SX222A出土土器

写真図版18～22　SX222B出土土器

写真図版23　SX222A出土手捏土器，SX222B出土手捏土器
SX222出土銅鏡・滑石製模造品

報告書抄録

ふりがな	ひらばるいせき
書名	平原遺跡II
副書名	本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書
巻次	2
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第１２０集
編著者名	徳永 貞紹、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840　佐賀県佐賀市城内１丁目１番59号　PHONE:0952-25-7232
発行年月日	西暦　1993年　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらばる 平原２区	さがけんとすし 佐賀県鳥栖市 ゆびまちあざひらばる 柚比町字平原	412031	－	33度 23分 55秒	130度 31分 33秒	19910912～ 19920826	10,000	河川（本川川防災調節池建設に伴う事前調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平原２区	野営地跡	縄文	集石遺構45基	縄紋土器 石器	中期の集石遺構 晩期の包含層
	祭祀遺跡	古墳	祭祀遺構１基	土師器 手捏土器 滑石製模造品 ガラス小玉 内行花紋系倭鏡	滑石製模造品は剣形品・有孔円板・勾玉・管玉・臼玉

第1章　調査の経過

1．調査に至る経過

平原(ひらばる)遺跡１・２区調査の原因となった本川(ほんごう)川防災調節池新設工事は、鳥栖(とす)北部丘陵新都市開発整備事業鳥栖工区の治水・防災を目的とする関連事業で、佐賀県土木部の所管により計画が進められていた。防災調節池が予定された約7.2haの内、西北角の丘陵部については昭和53（1978）年度の鳥栖市教育委員会による試掘調査で、弥生～古墳時代の集落遺跡が確認されていたが、これを除く低地の水田部は埋蔵文化財の有無が不明であった。このため平成２（1990）年11月に稲刈りと麦蒔きの狭間の短期間を利用して佐賀県教育委員会が鳥栖市教育委員会の協力を得て、水田部の試掘調査を実施した。方法としては、掘削機１台と調査員１名を１班とする班編成とし、Ａ・Ｂ・Ｃの３班で計87箇所の試掘を行い、更に畑地部分を１箇所手掘りにより試掘した。

確認調査区の内、本川川に沿った低位の水田部では砂・砂礫の厚い堆積が認められ、旧河道と想定された。また、これより一段高い部分でも同様な砂・砂礫の堆積があり、著しく摩耗した土器片等が出土したことから、調査区の北側、南側と東側の三方は本川川の影響を受けやすく居住地や墓地としては不適当な場所であったことが理解された。

調査区西側の段丘崖下にあたる部分では、耕作土の下に泥炭層が広範囲に認められ、この部分がかつては沼状の湿地であったことが確認された。この泥炭層中には人工遺物がほとんど包含されていないため、その形成の時期等が不明であったが、唯一北端部のＢ－６試掘坑で古墳時代初頭と縄紋時代晩期の遺物が少量出土した。この部分は沼状湿地の岸にあたり、遺物には摩耗が認められないうえ、縄紋時代晩期の遺物が下層に、古墳時代初頭の遺物が上層に包含される状態が観察されることから、この湿地に面した微高地に当該期の遺跡があり、そこからの流入ないし廃棄であることが予想された。

泥炭層の広がりの東側すなわち確認調査区の中央部は現状でも微高地となっており、土層の堆積も必ずしも全面が一様というわけではないが、耕作土下に遺物を含む粘質シルト層が広がり、周辺に比して安定した状況を示していた。中央部分から出土した遺物は縄紋時代から近代までのものを含み、試掘坑毎に様相が異なるため自然層位と遺物の対比は難しいが、下部の淡色シルト層は縄紋時代の包含層として捉えうるものと考えられた。実際に最も安定した淡色シルト層の堆積が認められたＢ－９試掘坑では縄紋時代遺物包含層の下面で集石遺構が検出された。本調査時にＳＸ201と命名したこの集石遺構は焼礫が径50cm前後の範囲に集中し、礫の間には炭化物が含まれ、細片のため時期は不詳ながら沈線紋と竹管刺突紋を施す薄手の縄紋土器が伴出した。また下部構造として浅い土坑を伴うようであった。以上の所見から、これが九州地方では縄紋時代早期に類例の多い、いわゆる集石炉であることがほぼ確実視され、このＢ－９

試掘坑を中心とする範囲が単なる遺物包含層のみでなく、本地域では稀な遺構を伴う縄紋時代の生活遺跡であることが確認された。

縄紋時代以外では弥生時代中期、古墳時代前期、中世後期の遺物がやや目立つが、これに伴う明確な遺構は確認されず、遺跡の主体は縄紋時代であるという結論に達した。また沼状湿地の痕跡を留める泥炭層については、人工遺物の出土は見込めないものの古環境の復元などに有効な資料を得られるものと期待された。以上の検討を経て、中央部分の微高地とその西側の泥炭層の広がりとを合わせた約17,000㎡を調査対象の範囲とし、平原遺跡の拡大として周知化した。

2．調査組織

調査主体	佐賀県教育委員会	
調査協力	鳥栖市教育委員会・基山町教育委員会	
総括	堤（つつみ） 清行（きよゆき）	佐賀県教育長
事務局		
局長	高島（たかしま） 忠平（ちゅうへい）	佐賀県文化財課長
次長	中牟田（なかむた） 賢治（けんじ）	佐賀県文化財課長補佐
	西村（にしむら） 貞幸（さだゆき）	佐賀県文化財課長補佐（平成３年度）
	瀬戸（せと） 明廣（あきひろ）	佐賀県文化財課長補佐（平成４年度）
庶務会計	永松（ながまつ） 和久（かずひさ）	佐賀県文化課庶務企画係長
	濱野（はまの） 清子（きよこ）	佐賀県文化課庶務企画係主査
	小林（こばやし） 宣洋（のぶひろ）	佐賀県文化課庶務企画係主査
	松瀬（まつせ） 弘（ひろし）	佐賀県文化課庶務企画係主事（平成３年度）
	池田（いけだ） 学（まなぶ）	佐賀県文化課庶務企画係主事（平成４年度）
	武次（たけつぐ） 多美子（たみこ）	佐賀県文化課庶務企画係嘱託（平成３年度）
	岸川（きしかわ） 向祥子（ひさこ）	佐賀県文化課庶務企画係嘱託（平成４年度）
調査員		
調査主任	高瀬（たかせ） 哲郎（てつろう）	佐賀県文化財課調査係長
調査員	樋口（ひぐち） 秀信（ひでのぶ）	佐賀県文化財課調査係文化財保護主事
	徳永（とくなが） 貞紹（さだつぐ）	佐賀県文化財課調査係文化財保護主事 （本川川防災調節池工区担当）
	渋谷（しぶや） 格（ただし）	佐賀県文化財課調査係文化財保護主事（平成４年度）
	森本（もりもと） 陽二郎（ようじろう）	佐賀県文化財課調査係嘱託（平成３年度）
	鹿田（しかだ） 昌宏（まさひろ）	鳥栖市教育委員会社会教育課事務吏員

湯浅 満暢　　鳥栖市教育委員会社会教育課事務吏員

（本川川防災調節池工区担当）

久山 高史　　鳥栖市教育委員会社会教育課事務吏員

飛松 広美　　基山町教育委員会教育課文化財保護主事

協力

地域振興整備公団鳥栖都市開発事務所　佐賀県開発局新都市対策課

佐賀県土木部河川砂防課・鳥栖土木事務所　鳥栖北部丘陵新都市開発事務所

鳥栖市建設部北部丘陵対策課　基山町企画課　地元各位

この他、発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々から指導・助言を賜った。

安楽 勉（長崎県教育委員会）　岩永 哲夫（宮崎県教育委員会）　江本 直・木崎 康弘・島津 義昭（熊本県教育委員会）蒲原 宏行（佐賀県立博物館）　坂井 義哉（大牟田市教育委員会）　坂本 嘉弘・吉武 牧子（大分県教育委員会）　新東 晃一・東 和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）　高橋 学（立命館大学文学部）　田崎 博之（愛媛大学教養部）　田島 龍太（唐津市教育委員会）　外山 秀一（皇學館大学文学部）　富永 直樹（久留米市教育委員会）　中村 俊夫（名古屋大学年代測定資料研究センター）　水ノ江 和同（福岡県教育委員会）　渡辺 一雄（山口県埋蔵文化財センター）　渡辺 友千代（島根県匹見町教育委員会）

３．発掘調査の経過と方法

平原遺跡の本川川防災調節池新設工事に伴う調査区は、段丘上の旧畑地部を１区（約3,000㎡）、段丘下の水田部を２区（17,000㎡）として、１区から調査を進めることにした。平成３(1991)年９月から２区の表土除去作業に入り、12月に１区調査の目処がついた段階で２区の掘り下げにかかった。西側の泥炭層部分については地区内で移転の済んでいない家屋に接していることや、湧水等による表土除去後の現場保全等を考慮し、東側の微高地部の調査を進めたうえで追加作業とすることにした。

遺跡名は、佐賀県遺跡地図による「平原遺跡」として、略号ＨＲＢで佐賀県教育委員会の台帳に登録し、調査区の呼称は算用数字を用いた。したがって平原遺跡２区の場合であれば、調査・整理の際の諸記録類は「ＨＲＢ－２」で表示されている。

調査区画については国土座標第Ⅱ系を基準とし、Ｘ＝44,000ｍ、Ｙ＝－44,000ｍの交点を原点として10×10ｍを１桝とする方眼区割を設定し、１㎞四方を同一の方眼区割で覆うことにした。南北列を南からアルファベット２文字の組み合わせで、ＡＡ，ＡＢ，ＡＣ，ＡＤ，……，ＣＫ，ＣＬ、の100列、東西列を東から数字２桁で、００，０１，０２，０３，……，９８，９９、の100列とし、各々の区画は南北列名称の後ろに東西列の名称を付けて「ＢＥ０７区画」の要領で示した。

遺構番号は３桁の一連番号とし、百の位に２区を意味する２を付け、201から始めた。この番号の頭に遺構の性格を示すアルファベット２文字の分類記号を付けて表示した。遺構の分類は地域的に調査例の多い遺構の種類（弥生時代土器棺墓など）や調査時の手順などを勘案して、ＳＡ：柵列・塀、ＳＢ：掘立柱建物・礎石建物、ＳＣ：石棺墓・石蓋土坑墓、ＳＤ：溝・堀・流路、ＳＥ：井戸、ＳＦ：道・道路、ＳＧ：園池、ＳＨ：竪穴建物、ＳＪ：土器棺墓、ＳＫ：土坑、ＳＰ：土坑墓・木棺墓、ＳＴ：古墳・墳丘墓、ＳＸ：その他、の分類を用いる。小穴については遺物の出土したものについて調査区毎に一連番号を付け、Ｐの記号を用いて「Ｐ－１」の要領で表示する。２区の遺構は、集石炉や祭祀遺構など一般的に検出される事例の少ないもので、古墳時代の土坑ＳＫ212以外は全てＳＸで表示される。

調査の進行に従って遺構実測図・土層断面図の作成や、写真撮影を実施した。遺構写真については白黒４×５、白黒・カラーリバーサル35m/mを使用し、全体写真については航空写真撮影を委託した。

前年の試掘調査が非常に限られた期間であったため縄紋時代包含層の厚さや広がりは必ずしも明確ではなく、先ずは集石炉の確認されたＢ－９試掘坑を再検出し、ここから土層の観察を行いながら周辺を掘り下げることにした。包含層下面に相当するこの遺構の標高より数十cm上位の暗褐色粘質シルト層からも土器片や剥片等の遺物が出土しだし、遺物包含層は予想以上に厚く残っているようであったが、出土土器は晩期中葉の黒川式並行期の特徴を有しており、確認調査時の遺構・遺物とは整合しないことが疑問であった。しかし調査が進むにつれ暗褐色粘質シルト層下の淡灰色粘質シルト層から並木式土器を含む縄紋時代中期の遺物が出土しはじめ、この時点で晩期中葉の包含層と中期の包含層及び遺構が重層して遺存していることが明らかになった。下部包含層にあたる淡灰色粘質シルト層は、下部になるに従い砂質となり砂礫層に変わることが判ったが、土層の堆積は予想以上に複雑で、湧水・冠水及び壁の崩落などとあいまって、調査の進捗を遅らせる一因となった。

２区中央部の掘り下げは、方眼区割のＢＣ０５・ＢＣ０６・ＢＣ０７・ＢＤ０５・ＢＤ０６・ＢＤ０７・ＢＥ０５・ＢＥ０６・ＢＥ０７・ＢＦ０５・ＢＦ０６・ＢＦ０７の12区画1,200㎡について実施した。上層の遺物については、この12区画よりやや外側にも広がるようであったが、期間の関係で包含層を全掘することができなかった。下層については、北側のＢＦ０５・ＢＦ０６・ＢＦ０７の３区画を除いた９区画900㎡の範囲でほぼ完掘したと考えられ、45基の集石遺構を確認した。

土器・石器類と礫等の遺物は、１点ずつ一連の番号を付して平面・垂直の位置を光波測距儀と電子野帳を用いて記録した。礫については、人為的に持ち込まれたものか層中に含まれる自然礫なのかが、特に小さい礫の場合に判断が困難であったため、遺構を構成しないものについては便宜的に最大長がおよそ５cm以上の礫を取り上げの対象とした。上層については遺構が検

出されず、礫自体にも赤化や黒色付着物などの受熱の痕跡が認められないことから、調査の遅れが表面化した時点で取り上げを打ち切った。土器については非常に脆い遺存状態であったため、取り上げて水洗する前に含浸強化剤（バインダー17）による処理を施した。

中央部分の調査が進んだ段階で、確認調査時にＢ－６試掘坑を設定したＢＧ１０・ＢＧ１１・ＢＨ１０・ＢＨ１１区画の泥炭部の調査を並行して行った。土層の堆積と遺物の包含状況を確認しながら掘り下げたが、遺物の量が比較的少なかったため層序・区画別に一括して取り上げた。

中央部と北西端の泥炭部以外にも、表土を除去した面で土器の集中する地点が何箇所か確認されており、中央部の調査の目処がついてきた時点で、２区全体の収束に向けてこれらの地点の調査にかかることにした。まず南側のＡＵ０９・ＡＶ０９区画の土器群については古墳時代の土師器がややまとまって出土したが遺構として確認できるものはなかった。次に南東側のＡＷ０５・ＡＷ０６区画で確認していた土器群については、掘り下げを始めたところ多数の土師器があたかも据え置かれたような状態で遺存していることが判明した。しかも土器群に混じって滑石製模造品が認められたことから、これが古墳時代の祭祀遺構であることが判明し、ＳＸ222と命名した。調査の進行上この祭祀遺構の取り扱いに苦慮したが、連日に及ぶ実測作業の応援を得て何とか対応することができた。また北側のＢＨ０６区画の土器群集中は古墳時代初頭の落ち込み状の遺構であることが解り、ＳＸ238・ＳＸ239・ＳＸ240とした。

以上のように予想をはるかに上回る遺構・遺物の出土により、当初予定していた調査期間を延長せざるを得なくなり、最終的には平成４（1992）年８月26日をもって現場での作業を終了した。諸記録類や出土遺物の整理は現場での作業と並行しながら進め、本格的な報告書作成作業は１区の分と併せて平成４（1992）年度に行った。

考古学的調査以外に、パリノ・サーヴェイ株式会社に花粉化石・珪藻化石等を用いた古環境分析を委託し、その報告を「平原遺跡の古環境変遷」として本書に収録した。また名古屋大学年代測定資料研究センター中村俊夫先生のご厚意で、タンデトロン加速器質量分析計を用いた14Ｃ年代測定を実施した。平成４（1992）年３月には、平原遺跡２区を含めた柚比地区遺跡群の地形環境について高橋 学先生の指導を受け、同行された外山秀一先生と共に水田遺構の存在する可能性を指摘されたが、その後の予期せぬ祭祀遺構の確認などもあって、両先生のご指導を生かした調査方針が採れなかったのは、大きな反省点である。

出土遺物と遺構実測図や写真などの調査記録及び遺物実測図や遺物写真などの資料は、佐賀県教育委員会で保管しており、各々登録番号を付けて検索が可能なように整理している。

第2章　遺跡の位置と環境

1．地理的環境

平原遺跡は、佐賀県鳥栖市柚比町字平原・大久保、今町字岸田に所在する。今回調査を行った2区の地籍は、柚比町字平原9番地・10番地外である。

遺跡の所在する鳥栖市は佐賀県のほぼ東端部にあたり、東北は三養基郡基山町と、西は三養基郡中原町・北茂安町と、北は脊振山地の分水嶺を境として福岡県筑紫郡那珂川町と、東は福岡県小郡市と、南は筑後川を境として福岡県久留米市と、各々接している。

仮に市庁舎を中心とすると東経130°30′30″、北緯33°22′30″に位置し、市域は東西8.2km、南北9.0km、面積71.73㎢で、平成2年度の国勢調査によれば、人口55,877人、世帯数16,183戸の地方中核都市である。気候は1991年の観測で、平均気温16.0℃、最高気温34.2℃、最低気温－3℃、年間降水量2,390.2mmと温暖湿潤である。

鳥栖市の地勢は、北西に脊振山地の東端である九千部山系を背負い、南の沖積平野に向かって開ける格好で、この平野部は筑紫平野の奥部にあたると同時に、朝倉平野の西縁部を占める。福岡平野へは基山町から福岡県筑紫野市方面一帯の地峡を経て連絡するのに対し、狭義の佐賀平野とは脊振山地より派生した丘陵地によって遮られ、独自の風土を醸し出している。

地形は、脊振山地の九千部山（847.5m）を主峰として、東南ないしは南方向に支嶺が伸び、次第に高さを減じながら枝分かれする段丘、ついで平坦部となって筑紫平野の一角を成す沖積地へと至る。支嶺は大きくは2方向があり、一方は権現山から南東に下り、杓子ケ峰で一旦東に折れて平原遺跡の所在する柚比町・今町の段丘に達している。もう一方は九千部山の西南から南に下り、石谷山から笛吹山を経て北茂安町千栗辺りを末端とする段丘に続いており、それぞれ市域の東西両側を画する性格を有している。更にこれらの間にあって九千部山の南から始まる支嶺は、城山から南東に下り、群石山で収束する。

河川はこれらの支嶺に源を発し、山麓に扇状地を形成して段丘を開析した後、平野部を南流する。いずれも筑後川水系で、主要なものは東から秋光川、山下川、大木川、安良川、沼川である。本川川は、杓子ケ峰の東麓から柚比町の段丘群を縫うように東流した後、赤坂付近で方向を変え、田代本町の載る中位段丘の東端に沿って南流して山下川に合流する。明治15～16年頃作成された『長崎県肥前国基肄郡村誌』姫方村の項に「深処五尺、浅処弐尺。濶四間乃至八間、其流急ニ其質澄シ。村ノ北境永吉村字本河ヨリ出ツ。因テ本河川ト称ス。」とあり、本川川の由来を知ることができる。

表層地質は、花崗岩類を主体とし、朝日山一帯にのみ三郡変成岩に属する結晶片岩が認められる。土壌は、山地の花崗岩類母材褐色森林土壌、段丘の花崗岩類母材黄色土壌、扇状地と沖積低地の灰色低地土壌、の3つに大きく区分できる。高位・中位段丘では鳥栖ロームと呼ばれ

る阿蘇４火砕流堆積物が覆っているが、柚比地区の段丘群では認められない。

植生は、九千部山頂近くに夏緑広葉樹林帯に属するブナ林が自然植生として見られるものの、これ以下の標高では照葉樹林（暖温帯常緑広葉樹林）が潜在自然植生と考えられ、平原遺跡２区での花粉化石分析の結果から、遺跡周辺においては縄紋時代晩期～古墳時代の古植生も照葉樹林であったことが想定されている。

動物相は、大型獣ではキツネ、タヌキ、アナグマ、イノシシ、ニホンザルの５種が確認されており、脊振山系の他地域ではこれにニホンジカが加わる。また鳥類では、1984年の石谷山における調査でコサギ、マガモ、トビ、コジュケイ、ヤマドリ、キジ等43種が確認されている。

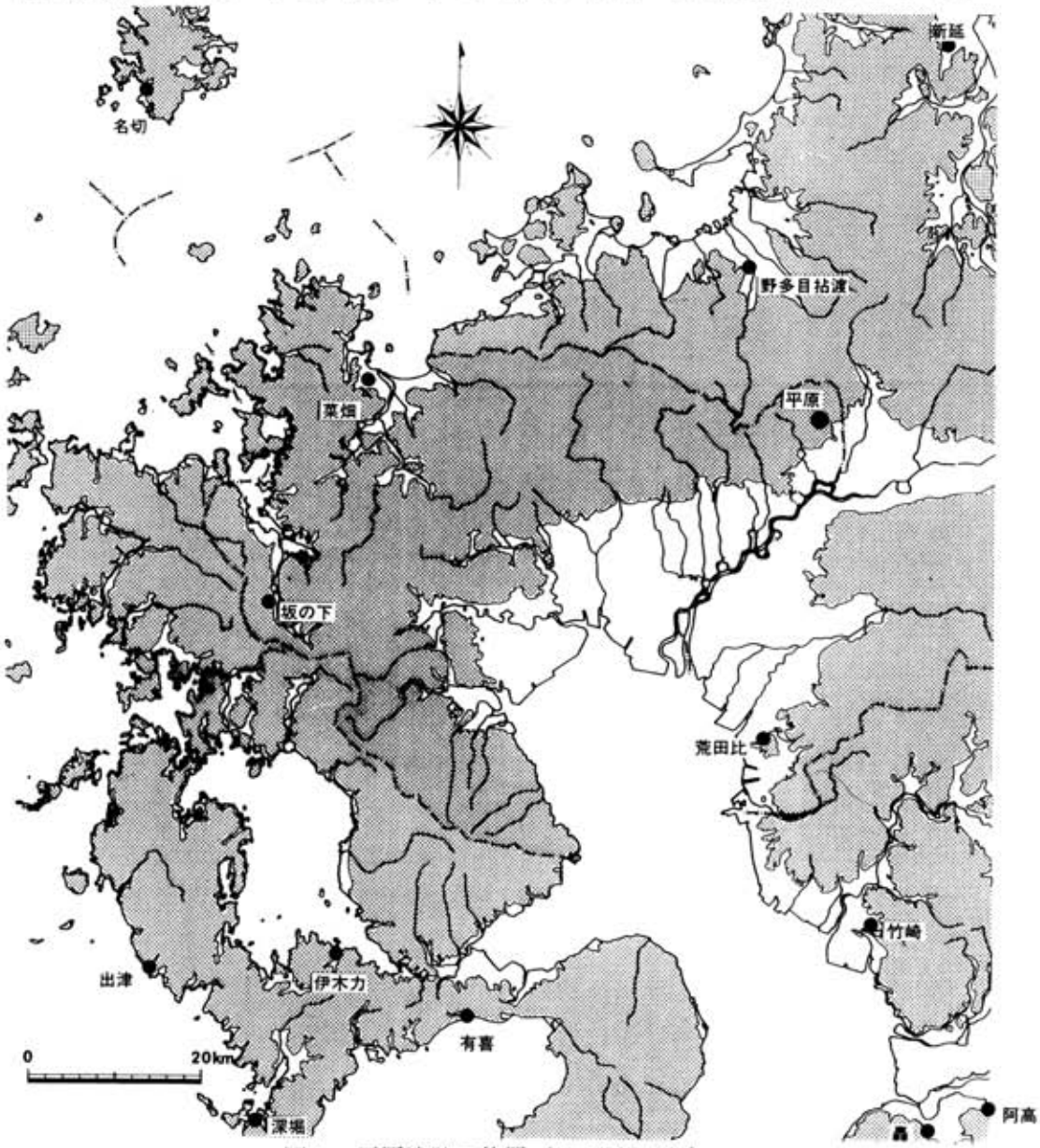


図１　平原遺跡の位置（１：800,000）

２．歴史的環境

旧石器（岩宿）時代では、本川原遺跡[1]・本行遺跡[2]・牛原前田遺跡[3]等でナイフ形石器や角錐状石器といった示標遺物が確認されており、今回の調査区でも混入と思われるナイフ形石器が１点出土したが、遺構や遺物包含層の調査例は今のところない。

縄紋時代では、少ないながらも早期から晩期までの資料が認められる。特に晩期の遺跡は比較的多く、居住と埋葬の双方に関わる遺構が検出されている。縄紋時代の遺跡については、本遺跡の評価とも関わるので、基山町域の遺跡も含めて以下に時期を追って挙げていく。

草創期の資料は今のところ確認されていないが、『新鳥栖市史』[4]に「梅坂遺跡」で押型紋土器包含層より下位の赤褐色粘土層から黒曜岩製「船底形石器」が出土したとの記述があり、削片系細石刃石核の可能性も考えられる。

早期では西田遺跡[5]で押型紋土器を主体とする時期の79基に及ぶ集石遺構や帯状配石遺構が検出されており、遺構数・遺物量や出土土器の内容から長期に亙る遺跡の形成が想定される。この他、安永田遺跡[6]、柚比梅坂遺跡[7]、山浦西北方遺跡[1]、基山町千塔山遺跡[8]、基山町伊勢山遺跡[9]などから押型紋土器の出土が報じられているが、図示されているものは少ない。

前期の資料は山浦西北方遺跡と柚比梅坂遺跡で曽畑式土器が出土している程度である。

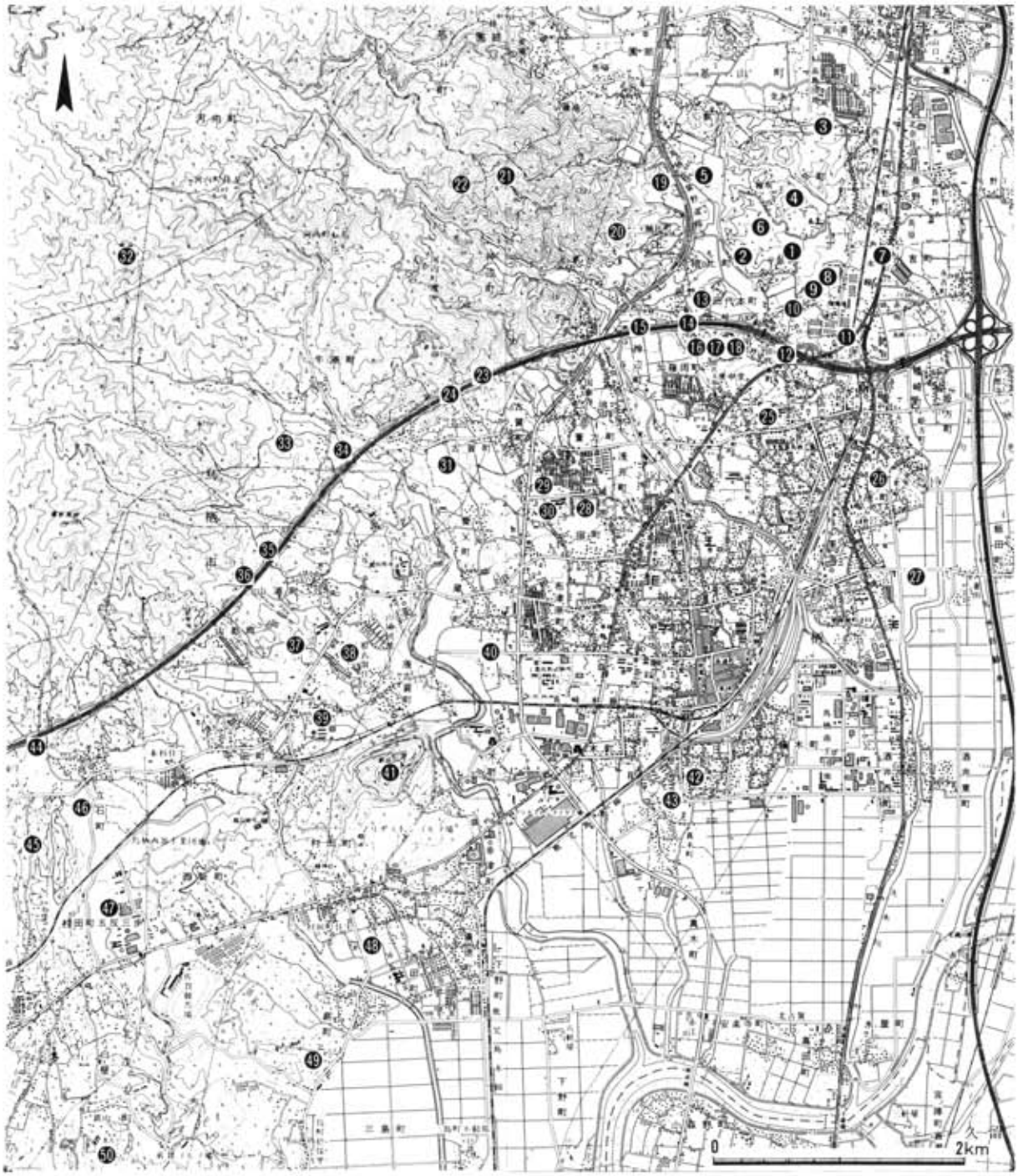
中期では本書で報告する平原遺跡２区で集石遺構45基が検出され、並木式土器の良好な資料が出土した。東北方に接する岸田南遺跡[10]でも確認調査で阿高式土器の破片が出土しており、両遺跡の関係は興味深いところである。柚比地区では他にも明治初年に阿高式土器が出土したとされ[4]、大阪浜寺博物館本山考古室所蔵とのことであるが確認していない。阿高式系土器は笛吹山遺跡（笛吹のかしら遺跡）でも出土が報じられているが[11]、現物は不明である。中期前半の資料としては、西田遺跡で船元式土器１個体が単独出土している。

後期では山田遺跡[12]で阿高式系の凹点紋土器が出土している他、桑ノ木添遺跡[13]で鐘崎式系の磨消縄紋土器と北久根山式が出土しているという。また元古賀遺跡[14]の十字形石器は後期後半頃のものと推定され周辺に当該期の集落が存在したことを窺わせる。

晩期の遺跡はやや調査例が増え、本川原遺跡[15]で黒川式並行期の袋状土坑２基・小穴１、基山町白坂遺跡[16]でも黒川式並行期の土坑群が検出されており、ややまとまった遺物を得ている。安永田遺跡[17]では前半頃の土器棺墓１基が検出されている。本報告の平原遺跡２区上層でも黒川式並行期の遺物包含層が確認された。この他、詳細は不明であるが、基山町立花遺跡[18]でも後～晩期の土坑が調査されている。

縄紋時代晩期後半あるいは弥生時代早期とされる時期の遺跡は、村田三本松遺跡[19]で土器棺墓群が調査され、永吉遺跡[20]では完形の有柄磨製石剣が夜臼式の壺と共に出土し、土坑墓の副葬品である可能性が示されている。

この時期から弥生時代前期前半にかけての集落は実態が不明であるが、前期後半になると北



❶：平原遺跡
❷：大久保遺跡
❸：八ツ並・金丸遺跡
❹：今町岸田遺跡
❺：柚比梅坂遺跡
❻：梅坂炭化米遺跡
❼：長ノ原遺跡
❽：赤坂古墳
❾：剣塚古墳
❿：フケ遺跡
⓫：本川原遺跡
⓬：田代天満宮東方遺跡
⓭：安永田遺跡
⓮：荻野遺跡
⓯：日岸田遺跡
⓰：庚申堂塚古墳
⓱：田代太田古墳
⓲：岡寺古墳
⓳：永田古墳群
⓴：神山古墳群
㉑：杓子ヶ峰古墳群
㉒：東十郎古墳群
㉓：都谷(群石)古墳群
㉔：宮西古墳群
㉕：田代代官所跡
㉖：本原遺跡
㉗：浦田遺跡
㉘：古賀遺跡
㉙：元古賀遺跡
㉚：稲塚古墳
㉛：牛原前田遺跡
㉜：勝尾城跡
㉝：葛籠城跡
㉞：山浦新町遺跡
㉟：山浦西北方遺跡
㊱：西田遺跡
㊲：四の坪遺跡
㊳：山浦古墳群
㊴：薄尾古墳群
㊵：桑ノ木添遺跡
㊶：烽推定地
㊷：今泉遺跡
㊸：真木宮の前遺跡
㊹：山田遺跡
㊺：笛吹山遺跡
㊻：惣楽遺跡
㊼：柳の元遺跡
㊽：村田三本松遺跡
㊾：本行遺跡
㊿：検見谷遺跡

図２　周辺の主要遺跡（１：50,000）

東部の柚比地区の一群と、南西部の朝日山南麓から北茂安町千栗に至る丘陵地に展開する一群との二つの遺跡群が形成される。いずれの地域も段丘と小谷とが複雑に入り組んだ地形であり、初期の水稲農耕集落の立地条件に適ったものであることが従来から指摘されている。

北東部の柚比遺跡群では、八ツ並遺跡[21]・今町岸田遺跡[22]・長ノ原遺跡[23]が集落として早く成立しており、八ツ並遺跡と長ノ原遺跡は後期まで続く拠点的集落である。中期初頭には平原遺跡[24]・安永田遺跡、中期中葉には前田遺跡[25]等の集落が新たに加わる。墓地は柚比梅坂遺跡・安永田遺跡・大久保遺跡[26]・フケ遺跡[27]等の集団墓地が形成されている。中期後半段階には安永田遺跡[28]で鉄剣や細形銅戈を副葬する土器棺墓が、八ツ並遺跡に隣接する基山町久保田遺跡[29]で鉄剣や鉄戈を副葬する土器棺墓が検出されている。また平原遺跡3区[30]で細形銅戈の鋳型が、平原遺跡1区では中期初頭の竪穴建物から青銅器鋳型の小破片が出土し、初期の青銅器生産が明らかになりつつある。更に中期後半から後期初頭には安永田遺跡において銅鐸や銅矛の生産が行われている。

一方、南西部の遺跡群は調査例が少ないため実態の不明瞭な部分が多いが、村田三本松遺跡では前期末～中期後半の土器棺墓群が検出されており、早い時期に集落の成立をみていたことが解る。現在調査中の本行遺跡は中期から後期の拠点的集落で、10数点の青銅器鋳型の出土は柚比遺跡群の安永田遺跡に匹敵する集中的な青銅器生産を示す。本行遺跡を中心とする一帯は、北茂安町検見谷遺跡[31]の中広形銅矛埋納遺構や、周辺からの出土と推測される広形銅戈の鋳型[32]から、中期から後期に至るまで青銅器の生産が継続した地域であることが推測される。

弥生時代後期になると、この二つの遺跡群を核としつつも本原遺跡[33]や牛原前田遺跡等に見られるように、前代まで土地利用の痕跡が比較的少なかった鳥栖市街地を含む扇状地や低位段丘の先端部にも集落の形成が活発に行われ始める。これらは古墳時代前期まで継続して営まれるようで、柚比遺跡群や本行遺跡などの中期から続いた集落が古墳時代に至らずに衰退することと対比して、興味深い傾向と言える。

古墳時代前期～中期の様相は、集落域・墓域の双方において不明瞭な部分が多い。出現期の前方後方墳である赤坂古墳[34]や本川原遺跡[35]・日岸田遺跡[1]の低墳丘方形墳等が前期の、平原古墳[24]・山浦古墳群[36]・薄尾古墳群[37]等が中期の古墳として知られ、集落遺跡では元古賀遺跡でややまとまった資料が得られている。

古墳時代も後期の6世紀になると、新たな集落の形成や国造級の首長墓と見られる剣塚古墳[38]・岡寺古墳[39]・庚申堂塚古墳[40]の3基の前方後円墳の築造等、この地域における政治的状況の大きな変化が窺えるが、その実態や背景については今のところ憶測の域をでない。またこの時期には脊振山系の山麓部を中心に、東十郎[41]・杓子ケ峰・永田[42]・神山・都谷[1]・宮西[1]・立石古墳群等の6世紀後半から7世紀代にかけて群集墳の形成が顕著である。

飛鳥時代～平安時代前半期の律令期においては、肥前国東端の筑前国・筑後国と接する三国

国境にあたり、概ね大木川を境として北東部は基肄郡、南東部は養父郡の範囲である。『肥前国風土記』基肄郡の条には「郷陸所、里十七、駅壹所小路」とあり、『和名類聚抄』に姫社・山田・基肄・川上・長谷の5郷が挙げられている。また、養父郡は『肥前国風土記』に「郷肆所、里一十二、烽壹所」と記載され、鳥樔郷、曰理郷、狭山郷がみえ、『和名類聚抄』には狭山・屋田・養父・鳥栖の四郷が挙げられている。養父郡の「烽壹所」は日の隈山と呼ばれた朝日山に比定され、また基肄郡には基肄城が設けられた他、基肄軍団の存在も想定されており、古くから交通の要衝であるとともに軍事的拠点であったことが窺える。当該期の遺跡としては、荻野遺跡[1]・安永田遺跡・日岸田遺跡・本川原遺跡・本原遺跡・元古賀遺跡で7～8世紀代の、柳の元遺跡[43]で9世紀代の竪穴建物を主体とする集落が調査されている他、平原遺跡で8世紀代の、宮西遺跡・笛吹山遺跡[44]で9世紀代の骨蔵器が出土しており、宮西遺跡での所見から火葬墓と考えられる。

平安時代後期には、永承2（1047）年に神辺荘が、永保3（1083）年に鳥栖荘・幸津荘・幸津新荘が大宰府天満宮安楽寺に寄進されており、律令制の弛緩に伴って多くの荘園が立荘していたものと考えられる。鎌倉時代後期における肥前国内の公領・荘園を網羅的に知り得る史料として著名な正応5（1292）年8月16日「河上宮造営用途支配惣田数注文」[45]によれば、荘園として小倉庄・鳥栖庄・幸津庄・幸津新庄・神辺庄（以上は安楽寺領）・養父庄・村田庄（以上は宇佐弥勒寺領）・奈良田庄・薗部庄・荒保社領・東屋社領が、公領として基肄北郷・基肄南郷・養父東郷・養父西郷・義得保・瓜生野保が挙げられており、大宰府天満宮安楽寺領を主体とする荘園が大きな割合を占めていること、公領では律令期の郡が中世的な郷へと分解し、義得・瓜生野等の名を冠する収税単位が成立していたこと等を知り得る。在地領主としては、曾禰崎氏・土々呂木氏・藤木氏・山浦氏・神辺氏等が史料に散見され、鎌倉御家人として活躍した氏族も多かったようである[46]。遺跡の調査例では、一の坪遺跡[47]・日岸田遺跡・浦田遺跡[48]等で村落の一部が、今泉遺跡[49]では在地領主の館かと思われる遺構群が見つかっている。

南北朝から室町時代の肥前東部地域は、九州探題と小弐氏の覇権争いを軸として戦国期に至るまで戦乱が絶えず、西方に九州探題の本拠地ともなった綾部城を控え、交通の要衝でもある本地域は、諸勢力の錯綜する戦略的な拠点であった。戦国期には現在の筑紫野市原田を本貫地とする筑紫氏が勝尾城を本城として周辺を押さえ、戦国末期の天正14（1586）年に島津氏の北征によって落城するまで、葛籠城等の支城群と総構と推定される外郭線に防御された、領主の館を中心とする城下集落が形成されていた[50]。

天正15（1587）年の豊臣政権による九州平定の後、基肄郡と養父郡の東半分は小早川隆景に、養父郡西半分は鍋島直茂に与えられ、以後前者が対馬藩領、後者が佐賀本藩領として明治維新を迎えることになる。長崎街道が通過するため、領内にはそれぞれ田代宿と轟木宿が設けられ、宿場として栄えた。

註

1）佐賀県教育委員会　1991　『都谷遺跡』佐賀県文化財調査報告書第104集

2）鳥栖市教育委員会が1991年度から調査中。弥生時代中期中葉～後期の拠点的集落。

3）鳥栖市教育委員会が1991年度に調査。弥生時代後期の集落と古墳時代後期の古墳群を主体とする。

4）参考文献②

5）佐賀県教育委員会　1992　「西田遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書10』

6）鳥栖市教育委員会　1985　『安永田遺跡－佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査－』鳥栖市文化財調査報告書第25集

7）鳥栖市教育委員会　1984　『柚比遺跡群範囲確認調査第６年次概要報告書－柚比梅坂遺跡の調査－』鳥栖市文化財調査報告書第18集

8）基山町遺跡発掘調査団　1978　『千塔山遺跡』基山町文化財調査報告書第３集

9）佐賀県教育委員会　1970　『基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡』

10）1991年度の確認調査で新たに発見された縄紋時代遺跡。

11）松尾禎作　1957　『佐賀県考古大観（先史・原史時代編）』　祐徳博物館

12）鳥栖市教育委員会が1990年度に調査。

13）鳥栖市教育委員会が1982年度に調査。

14）鳥栖市教育委員会　1992　『元古賀遺跡II』鳥栖市文化財調査報告書第42集

15）佐賀県教育委員会　1979　『本川原遺跡－第３次調査－』佐賀県文化財調査報告書第49集

16）基山町教育委員会　1988　『白坂遺跡』基山町文化財調査報告書第11集

17）佐賀県・鳥栖市・基山町教育委員会が1992年度に調査。

18）佐賀県教育委員会　1988　「立花遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書６』

19）鳥栖市教育委員会　1983　『村田・三本松遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第17集

20）小田富士雄　1959　「佐賀県田代発見の石剣と土器」『九州考古学』７・８号　九州考古学会

21）鳥栖市教育委員会が1983年度に調査。

22）鳥栖市教育委員会が1984年度に調査。

23）鳥栖市教育委員会　1979　『長ノ原遺跡概報』鳥栖市文化財調査報告書第５集

24）①鳥栖市教育委員会　1982　『平原遺跡・平原古墳』鳥栖市文化財調査報告書第11集
②佐賀県教育委員会　1993　『平原遺跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第119集

25）鳥栖市教育委員会　1984　『前田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第23集

26）鳥栖市教育委員会　1980　『大久保遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第６集

27）鳥栖市教育委員会　1984　『フケ遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第20集

28）中山平次郎　1918　「銅鉾・銅剣並びに石剣発見地の遺物」『考古学雑誌』第８巻第８号　日本考古学会

29）柴元静雄　1971　「基山町久保田甕棺出土の鉄剣について」『新郷土』267号　新郷土刊行会
1990年度の基山町教育委員会の調査で鉄戈が出土している。

30）佐賀県・鳥栖市・基山町教育委員会が1992年度に調査。

31）北茂安町教育委員会　1986　『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第２集

32）中川直之　1987　「広形銅戈の鋳型　鳥栖市で発見される」『新郷土』462号　新郷土刊行会

33）鳥栖市教育委員会　1988　『本原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第36集

34）藤瀬禎博　1988　「赤坂古墳」『第24回埋蔵文化財研究集会　定型化する古墳以前の墓制』第１分冊

35）①佐賀県教育委員会　1974　『本川原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第26集
②佐賀県教育委員会　1975　『本川原遺跡－第２次調査－』佐賀県文化財調査報告書第32集

36）佐賀県教育委員会　1973　『鳥栖市山浦古墳群』佐賀県文化財調査報告書第21集

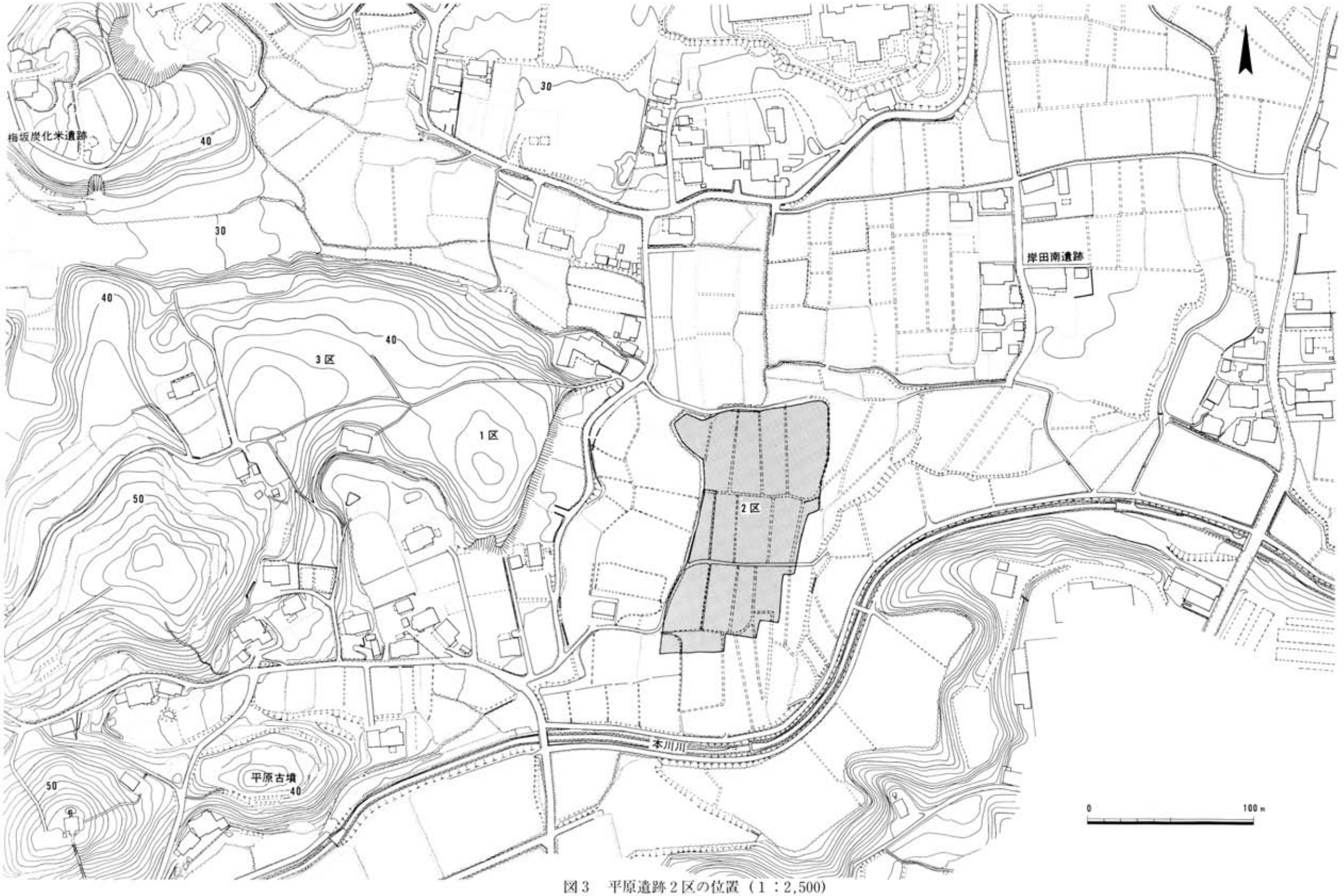


図3　平原遺跡2区の位置（1：2,500）

37) 松尾禎作　1958　「薄尾古墳群について」『鳥栖史談』2　鳥栖史談会
38) 鳥栖市教育委員会　1984　『剣塚前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集
39) 鳥栖市教育委員会　1984　『岡寺前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第21集
40) 佐賀県立博物館　1978　『庚申堂塚調査報告書』佐賀県立博物館調査研究書第4集
41) 佐賀県教育委員会　1966　「東十郎古墳群」
42) 鳥栖市教育委員会　1982　『柚比遺跡群範囲確認調査第5年次概要報告書－永田古墳群の調査－』鳥栖市文化財調査報告書第14集
43) 佐賀県教育委員会　1991　「柳の元遺跡」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書9」
44) 松尾禎作　1954　「東肥前出土奈良時代乃至平安初期の蔵骨器について」「佐賀県文化財調査報告書」第三輯
45) 河上神社文書23号（佐賀県史編纂委員会　1955　『佐賀県史料集成』古文書編第1巻）
46) 瀬野精一郎　1975　「肥前国における鎌倉御家人」「鎮西御家人の研究」　吉川弘文館
47) 鳥栖市教育委員会　1985　『鳥栖市団体営圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』鳥栖市文化財調査報告書第24集
48) 鳥栖市教育委員会が1988年度に調査。
49) 鳥栖市教育委員会が1985年度に調査。
50) 鳥栖市教育委員会　1993　『筑紫氏と勝尾城－鳥栖の町づくりと歴史・文化講座報告書第4集－』

参考文献

①鳥栖市総務部企画課　1992　『'92鳥栖市勢要覧』　鳥栖市
②木原武雄　1969　『新鳥栖市史』　鳥栖市史出版後援会
③鳥栖市史編纂委員会　1973　『鳥栖市史』　鳥栖市
④杉谷 昭・日野尚志・太田順三編　1982　『角川日本地名大辞典　41　佐賀県』　角川書店
⑤砥川隆二　1967・1968　「佐賀の火山灰層のおいたち」『新郷土』223号～228号　新郷土刊行会
⑥佐賀県企画室　1978　『土地分類基本調査　脊振山』　佐賀県
⑦佐賀県　1986　『佐賀東部地域環境利用ガイド（昭和60年度環境庁委託業務報告書）』
⑧佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会　1951　『校本肥前風土記とその研究』
⑨石橋新次　1981　「鳥栖地方の中・近世」『小原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第9集

第3章　調査の内容

1．平原遺跡2区の概要

平原遺跡は、佐賀県鳥栖市柚比町字平原・大久保と今町字岸田に所在する。脊振山地東部、九千部山系の杓子ケ峰（標高312m）から東に伸びる丘陵群の末端部にあたる。遺跡の主体部を占めるのは標高30～54mの高位段丘上に展開する弥生～古墳時代の集落であるが、今回調査を行った2区は段丘崖下で本川川に面する標高25～20mの扇状地形の部分に位置している。

2区の調査対象面積は約17,000㎡であるが、第1章で述べたような事情から、実際に掘削機による表土除去を行ったのは10,000㎡で、そのうち中央部上層の調査面積は1,200㎡、中央部下層の調査面積は900㎡である。

2区は複数の時期と性格の異なる遺跡の集合であり、遺構や遺物は中央部、北西部、北側中央部、南側部に隔たって分布している。出土遺物のみで言えば旧石器（岩宿）時代から近世までの広範な時代の痕跡を遺している。

今次調査の中心となった中央部の下層では、縄紋時代中期の集石遺構45基が検出された。下層の出土土器は、胎土に滑石を混入するものとしないものとの大きく2群に別れ、前者の主体を占めるのは従来良好な資料に恵まれなかった並木式土器である。石器は点数が少ないが、石鏃が多いのに対して磨石・敲石が少なく確実な石斧を欠く等、特徴的な組成を示している。遺跡の立地や遺構の内容と併せて、集落というよりは季節的な野営地である可能性が強い。

中央部の上層では、縄紋時代晩期の遺物包含層が確認され、後期に溯る遺物も僅かに認められた。上層からは弥生時代以降の遺物も若干出土し、弥生時代後期頃の所産と思われる銅鏃が採集された。上層の遺構としては古墳時代前期の土坑1基のみが確認された。

北西部は旧地形が段丘崖に向かって落ち込んで泥炭層が堆積しており、この泥炭層中から古墳時代前期の遺物が、泥炭層より下位から中央部上層と同時期の縄紋晩期の遺物が少量出土した。落ち際の部分では泥炭を埋土とする小穴2基が検出され、そのうち1基から古墳時代中期の土器と編物が出土した。

北側中央部の調査区端では、古墳時代初頭の不定形な落ち込みが検出され、ややまとまった土器群が出土した。器種は多様で、その内容から祭祀行為に伴う廃棄土坑の可能性がある。

南側部では自然流路の肩に多量の土器や手捏土器・滑石製模造品等の祭具が集中的に遺棄された古墳時代中期の祭祀遺構が確認され、当該期の土器編年や祭祀行為の復元にあたって重要な情報を得ることができた。

以上のように、平原遺跡2区は縄紋時代中期・縄紋時代晩期・古墳時代初頭～中期の3つの時期を主体とし、特に縄紋時代中期の遺構・遺物と古墳時代中期の祭祀遺構について大きな成果を挙げた。

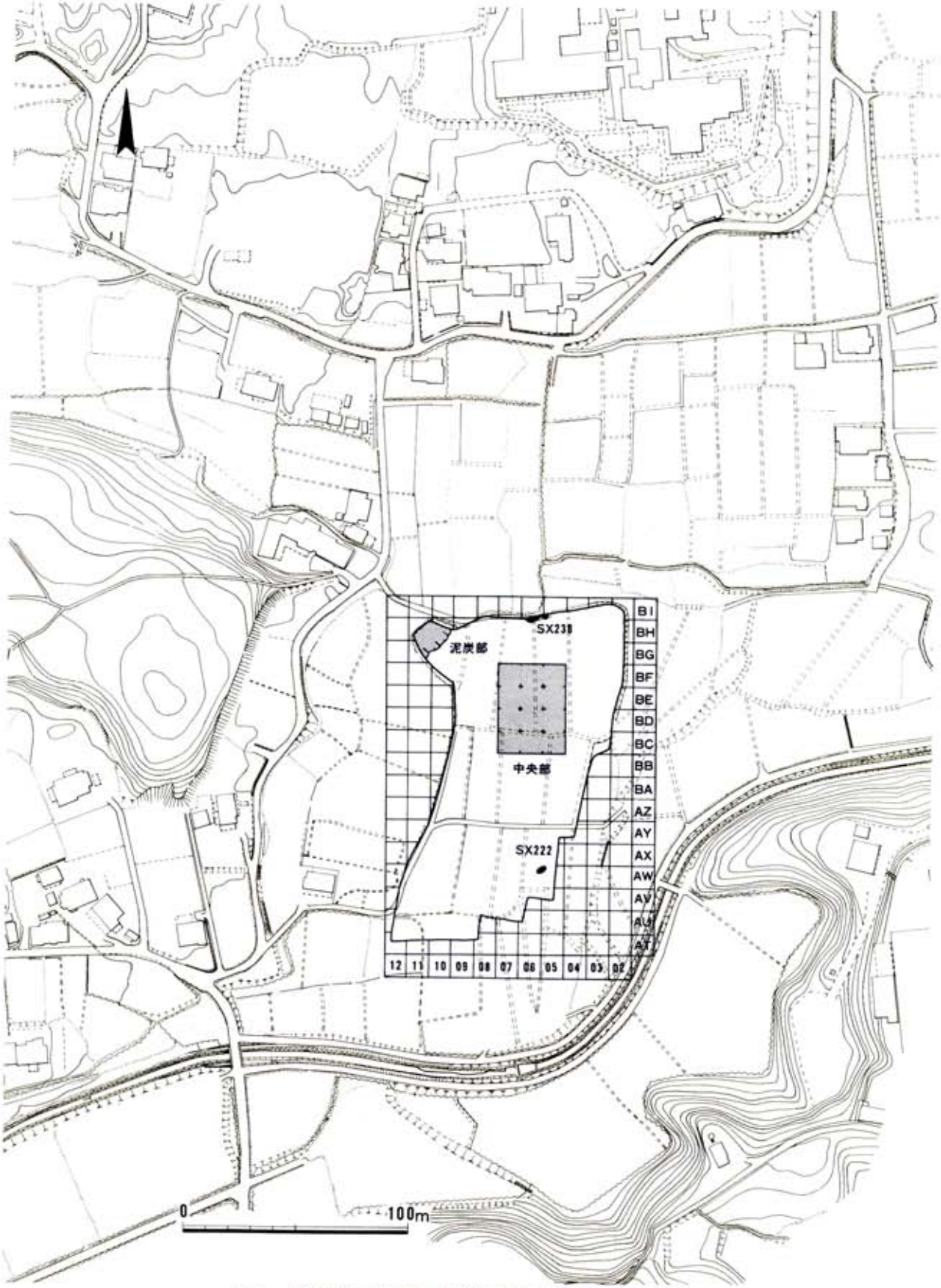


図4　調査区画と遺構・遺物包含層の位置(1：2,500)

２．中央部の遺構と遺物

（１）土層堆積と遺構・遺物

図５は掘削機により表土（水田耕作土・鋤床土）を除去した状態での土層断面図である。粒度や粘性・色調等は漸移的な変化を示しており、個々の説明は省略し、主に粒度による纏まり毎に同じ網をかけて表示した。比較的安定しているＢＤ０６区画辺りを断面図２で見ると、下部の砂礫・砂・砂質シルトと中部の浅黄色系粘質シルト層、更に上部の暗灰色系粘土層の３群として大きく捉えられる。中部と上部の層界は波状を示しており、中部層の土壌化によって上部層が生成したらしい。

中部層とした淡黄色系粘質シルト層は、調査区内で言えばＢＤ０５・ＢＤ０６・ＢＤ０７区画以南で安定しており、これより以北には砂層が広がっている。

上部の暗灰色系粘土層はＢＦ07区画辺りを除いてほぼ調査区内の全域に広がっているが、その堆積状況は必ずしも一様ではなく、例えば東西方向の断面図１ではBF06区画から東側に向かって低く落ち込む様子が看て取れる。これは暗灰色系粘土層形成時における微地形を示しているものであろう。

遺構や遺物との関係は、中部層が縄紋時代中期の包含層、上部層が縄紋時代晩期の包含層で、上位にそれ以降の遺物を少量含む。この対応関係は比較的明瞭であり、以下では中部層と下部層の上部を下層、上部層を上層として報告する。すなわち下層が縄紋時代中期の包含層、上層が縄文時代晩期の包含層ということになる。図６はＢＤ０７区画東壁とＢＤ０６区画北壁に前後幅50cmの範囲の縄紋土器のみを投影したもので、これを見ると先述の層位関係が理解できよう。この図では下層の集石ＳＸ221が中部層の下面に位置していることが解るが、下層の遺構は必ずしもこのように中部層と下部層の層界に限られるのではなく、中部層中で検出されたものも多い。下層の土器については詳しくは後述するが、胎土に滑石粉末を混入するもの（第１群土器）と混入しないもの（第２群土器）とがあり、調査時の所見では両者を層位的に明瞭に区分することはできなかった。強いて言えば滑石混入土器の方が滑石未混入土器より僅かながら上位に位置する傾向を指摘できるかもしれない。

上層は基本的に縄紋時代晩期の遺物包含層であるが、上面には弥生時代以降の遺物が若干含まれており、古墳時代前期の土坑が１基のみ検出された。弥生時代以降の遺物は少量ではあるが各時代に亙っており、弥生土器・石器・土製品・銅鏃、古墳時代の土師器・須恵器・土製模造品、奈良時代の須恵器、鎌倉～戦国時代の土師器・瓦器・白磁・青磁・青花、近世の陶磁器等、多様である。いずれにせよ遺構・遺物の様相から見る限り、調査区内における弥生時代以降の土地利用は集落や墓地としては捉えられず、集落縁辺部の水田を含む生産域の可能性を想定するのが穏当なところであろう。

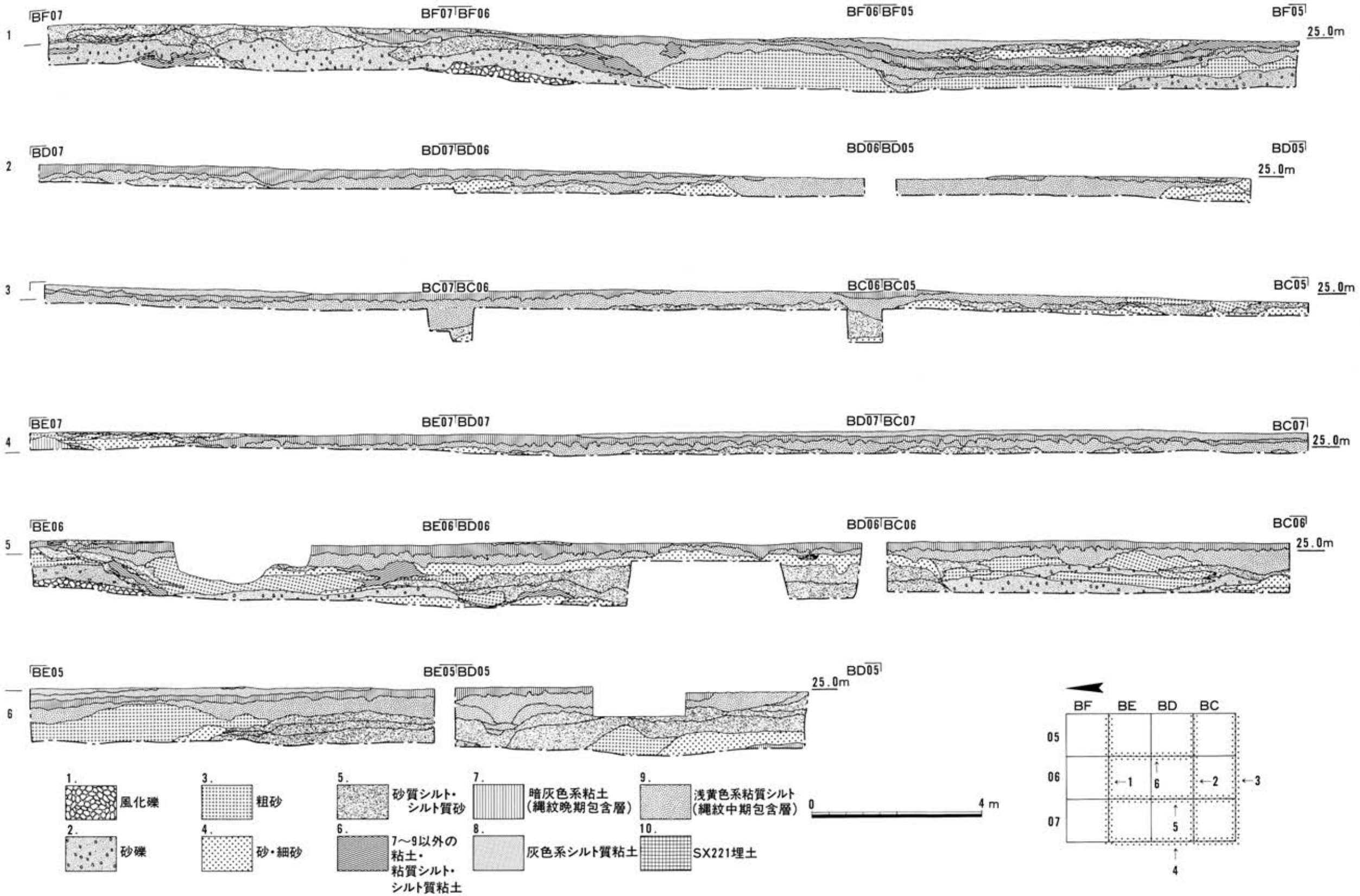


図5　中央部の土層（1：100）

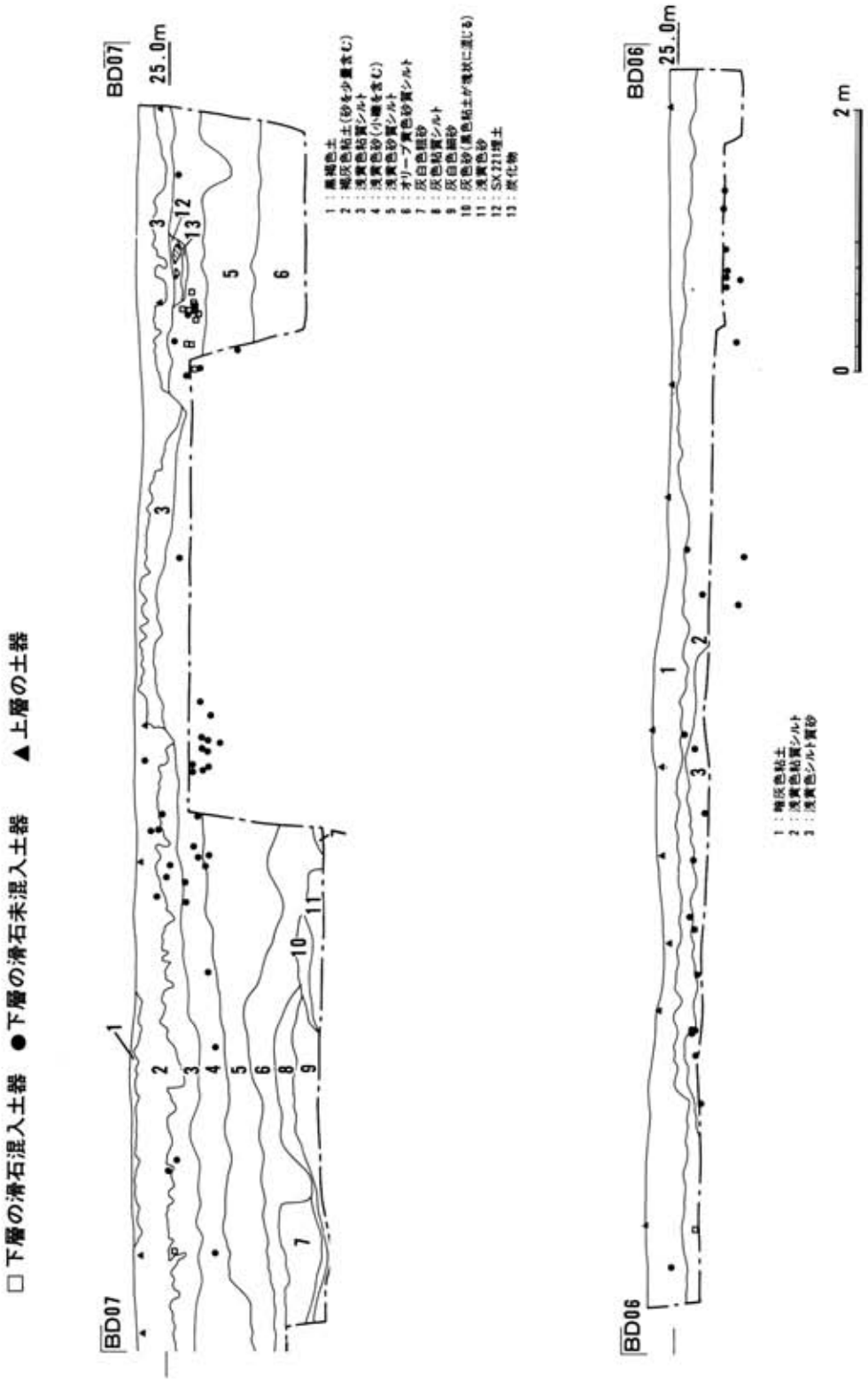


図６　縄紋土器の垂直分布投影(１：50)

出土位置を計測して取り上げた遺物は、層位や種別に関わらず一連番号を付したが、整理作業の段階でアルファベット３列の組み合わせを頭に付け加えてコンピュータに入力した。第１列は出土層位の表示で、Ｕ＝上層、Ｌ＝下層、Ｘ＝攪乱・区域外・不明、を表す。第２列は種別の表示で、Ｐ＝縄紋土器、Ｓ＝石器類、Ｒ＝礫、Ｘ＝その他、を表す。第３列は種別細分の表示で、Ｐ（縄紋土器）はＫ＝中期の滑石混入土器、Ｊ＝中期の滑石未混入土器、Ｂ＝後～晩期の土器の３種に、Ｓ（石器類）はＯ＝黒曜岩製、Ａ＝讃岐岩質安山岩製、Ｘ＝その他の岩石製の３種に、Ｒ（礫）はＳ＝集石構成礫、Ｘ＝その他の礫の２種に、Ｘ（その他）はＰ＝縄紋土器以外の土器・陶磁器、Ｘ＝その他・不明の２種に、各々細分する。この３列のアルファベットと取り上げ番号の組み合わせによって、例えば「ＵＳＡ4013」とした遺物は、取り上げ番号が4013番の上層出土の石器類で讃岐岩質安山岩製であることが示される。この要領でデータベースを作成した後、様々な組み合わせで出力することによって各種の遺構・遺物分布図の作成をかなり短時間に行うことが可能となった。

（２）下層の遺構と遺物

ｉ）遺構と遺物分布（図７～９）

中央部下層で検出した遺構は、45基の集石遺構があり、その他に土器・礫のまとまり１箇所がある。集石遺構はＢＤ０６・ＢＤ０７区画を中心とする範囲に40基が集中し、ＢＣ０５区画のＳＸ225、ＢＥ０５区画のＳＸ237・ＳＸ241・ＳＸ246、ＢＥ０７区画のＳＸ211がやや離れた位置にある。

下層の遺物の平面分布は図７に示した通りであるが、集石遺構と同様にＢＤ０６・ＢＤ０７の２区画に集中する状況が先ず気付かれる。またＢＥ０７区画からＢＥ０６区画に向かって帯状に遺物分布の密な部分が観察されるが、この辺りは砂層であり土層の状況からも原位置を留めていないと考えられるものである。遺構と現位置を留める遺物の分布はほぼ900㎡の今回の調査区の範囲で収まるものと考えられる。

位置を計測して取り上げた下層の出土遺物は総数5,337点で、内訳は土器1,291点、石器類402点、礫3,644点である。この他にＢＥ０７区画等で一括して取り上げた遺物がある。

次に個々の集石遺構について記述していくが、整理の方法と用語について説明しておく。下層から出土した礫の総数は3,644点で、調査時に遺構と認識できる程度に集中する礫のまとまりを集石遺構として扱った。集石遺構を構成する礫は2,760点、包含層中に散在する礫は884点で、これらの礫は全て持ち帰り接合作業を行った。個々の礫について破損の有無、赤化の有無、重量、石質等の属性を観察・計測したが、整理期間の関係で包含層中の礫については割愛し、集石構成礫についてのみ実施した。赤化状態と破損の有無によって、個々の礫は１）赤化完形礫、２）非赤化完形礫、３）割れ面赤化破損礫、４）割れ面非赤化破損礫、５）非赤化破損礫、に区分され、赤化状態による区分では１・３が全面赤化礫、４が割れ面非赤化礫、２・５が非赤

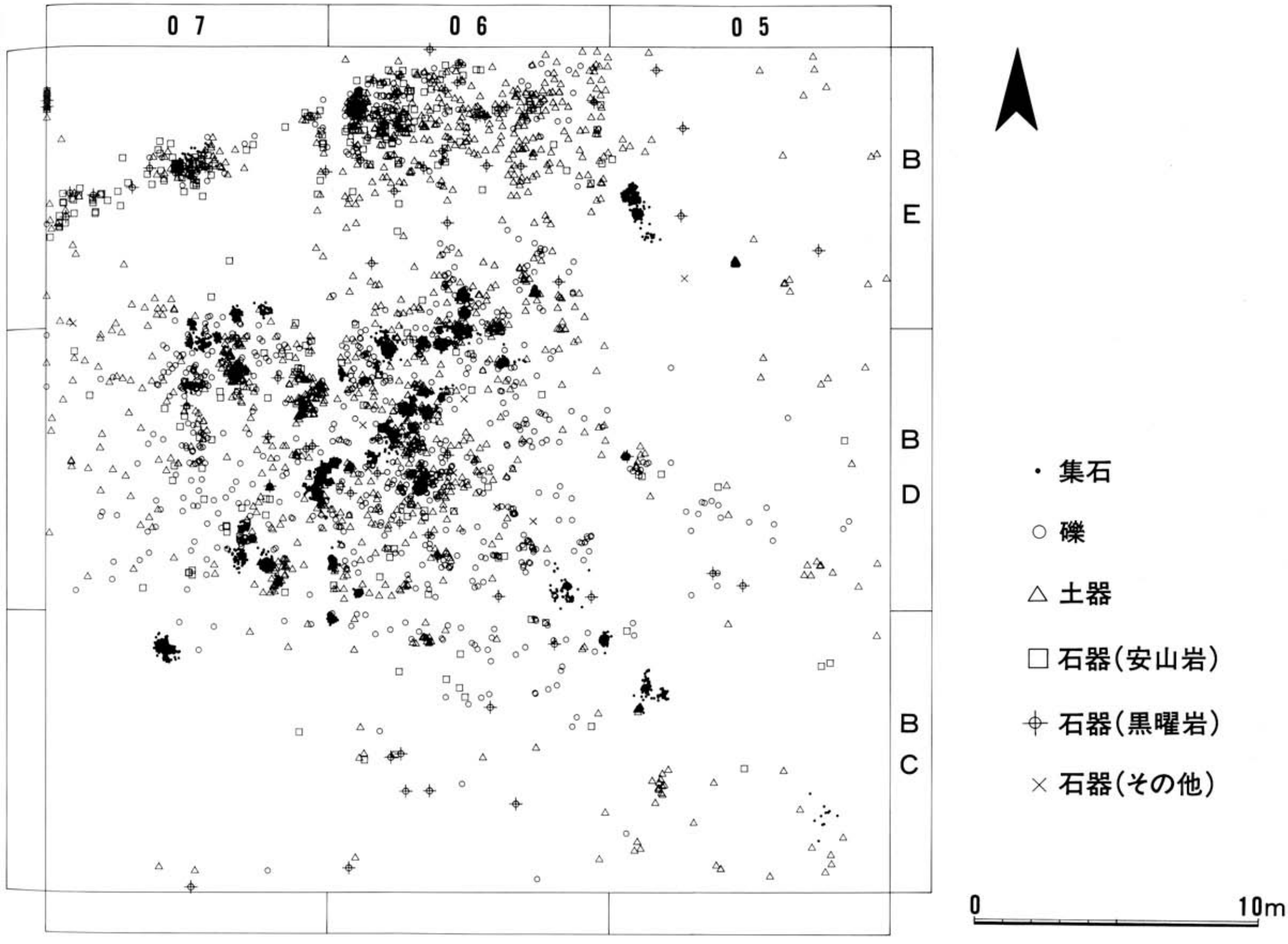


図7　中央部下層の遺構と遺物分布(1：150)

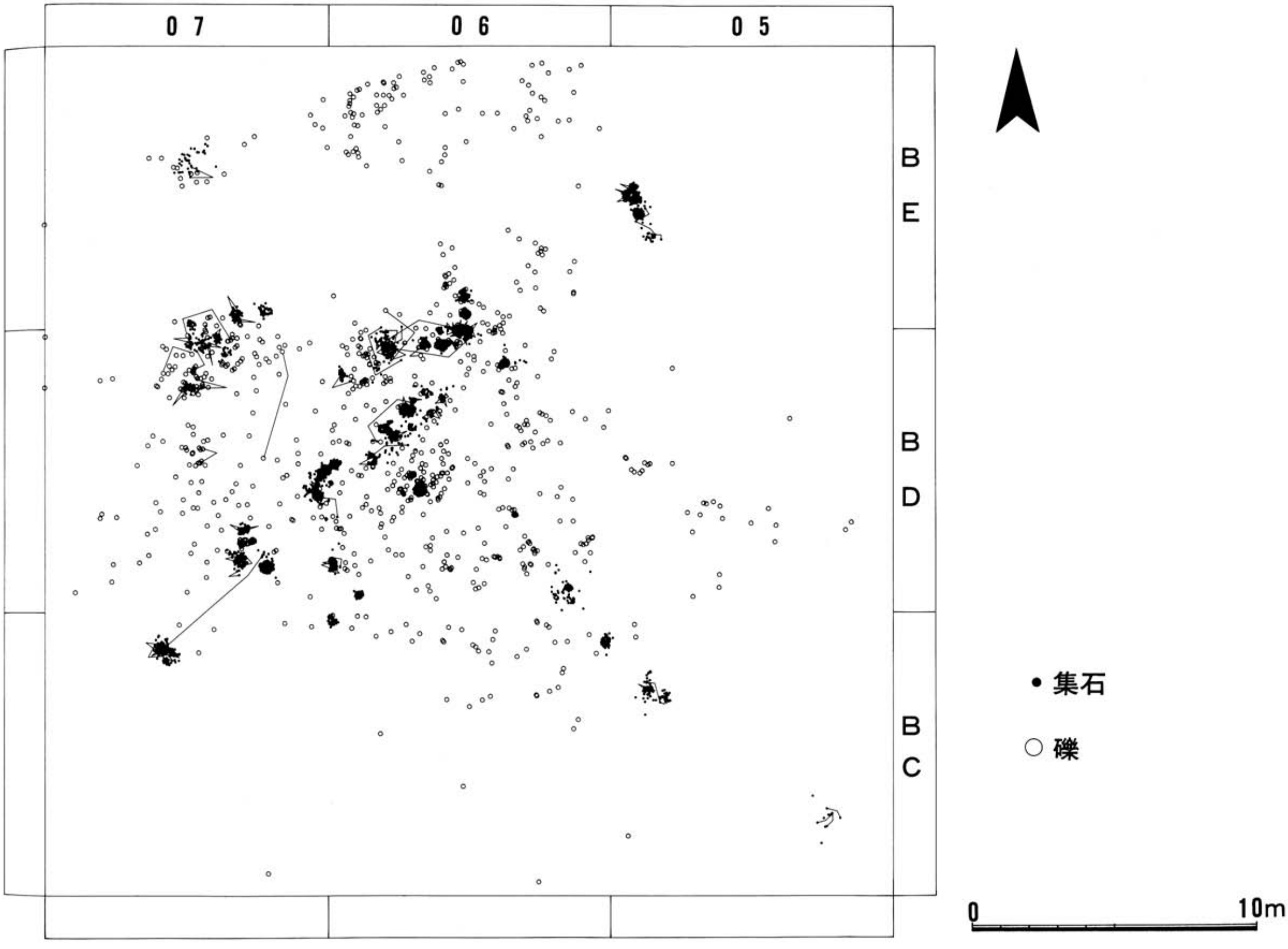


図8　下層の集石と礫の分布(1：150)

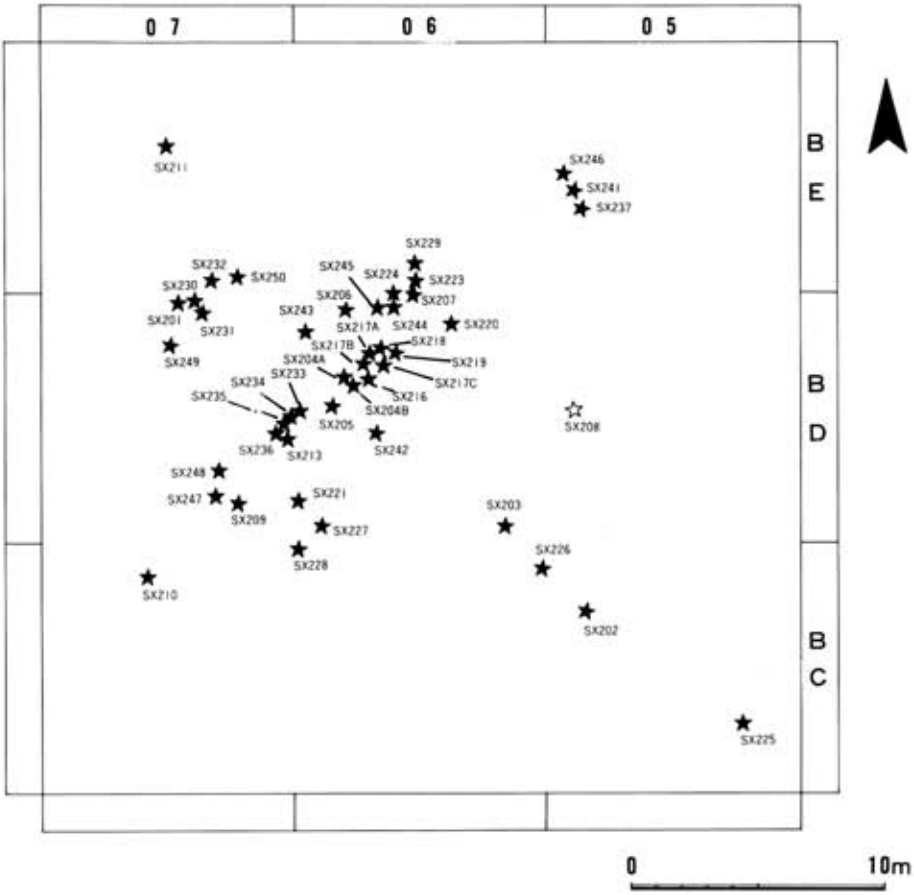


図９　集石の配置（１：300）

化礫となる。礫の赤化については受熱を想定したもので、これは肉眼観察によるものであるが、本遺跡の下部や周辺地域における自然礫層中の礫を検討した限りにおいては、主体を成す花崗岩類はいずれも白っぽい色調を示すもので、集石構成礫と同様な赤化が認められるものはなかった。そこで集石構成礫に顕著に認められた赤化が受熱によるものと仮定して以下の叙述を進める。ただ、非赤化礫であれば全て熱を被っていないとも言えないのであり、受熱の回数や温度等の条件と赤化の対応関係については、今後の理化学的分析や実験に基づく検証が必要である。なお本来は区別して取り扱うべきであるが、煤けたような黒化についても今回の報告では便宜的に「赤化」として一括している。また重量の計測結果に基づき、1,001ｇ以上を巨大礫、501～1,000ｇを大礫、101～500ｇを中礫、11～100ｇを小礫、10ｇ以下を細礫として区分した。集石構成礫の観察・計測結果に基づく上記の属性と接合関係を図化し実測図と共に掲げた。石材については、岩石学的鑑定を受けた訳ではないが、基盤礫層の構成岩石である花崗岩や石英岩を「花崗岩類」とし、それ以外の岩石を一括して「その他」と区分する。

ＳＸ201（図10，写真図版３－１）

ＢＤ０７区画の北辺中央部に位置し、北東に接してＳＸ230がある。長軸1.3m、短軸0.9mに広がり、中心部分は径0.6m程に集中する。西側の一群は標高に明らかな差異があり、別遺構の可能性がある。明確な土坑としては捉えられなかったが、礫の集中部には炭化物が認められ、浅い掘り込みを伴うようであった。

総礫数97点、総重量19,417ｇ、平均重量200.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が60点、破損礫が37点で、破損率は38.1％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が42点、割れ面非赤化礫が18点、非赤化礫が37点である。石質は花崗岩類が93点、非花崗岩類が４点である。礫の接合は11例あり、内３例は包含層中の礫と接合している。全面赤化礫同士の接合が２例、割れ面非赤化礫同士の接合が５例、非赤化礫同士の接合が４例。このうち非赤化礫同士の接合については試掘調査時の破損によるものの可能性がある。

遺物は、確認調査の際に84の土器が集石中から出土した他、周辺から出土したものはいずれも第２群土器である。

ＳＸ230（図10）

ＢＤ０７区画北辺中央部に位置し、南西に接してＳＸ201がある。径0.4mの範囲に礫が集中するもので、下部の掘り込み等は確認できなかった。

総礫数28点、総重量10,078ｇ、平均重量359.9ｇである。礫の破損状態は、完形礫が８点、破損礫が20点で、破損率は71.4％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が11点、割れ面非赤化礫が10点、非赤化礫が７点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合は２例あり、非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ202（図11，写真図版３－２）

ＢＣ０５区画の北西部に位置する。長軸1.3m、短軸1.2mに広がり、下部の掘り込み等は確認できなかった。

総礫数57点、総重量10,201ｇ、平均重量179.0ｇである。礫の破損状態は、完形礫が34点、破損礫が23点で、破損率は40.4％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が17点、割れ面非赤化礫が10点、非赤化礫が30点である。石質は花崗岩類が51点、非花崗岩類が６点である。礫の接合は４例あり、この集石の中で完結している。全面赤化礫と割れ面非赤化礫との接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が１例、非赤化礫同士の接合が２例である。

遺物は、集石中から讃岐岩質安山岩製の削器が出土した他、集石の下位から同一個体の第１群土器８点が出土した。

本遺構の範囲内から採取した炭化物を用いた^{14}Ｃ測定年代は、4,580±140ｙ.Ｂ.Ｐ.（Gak－16540）である（付編〝平原遺跡の古環境変遷〟参照）。

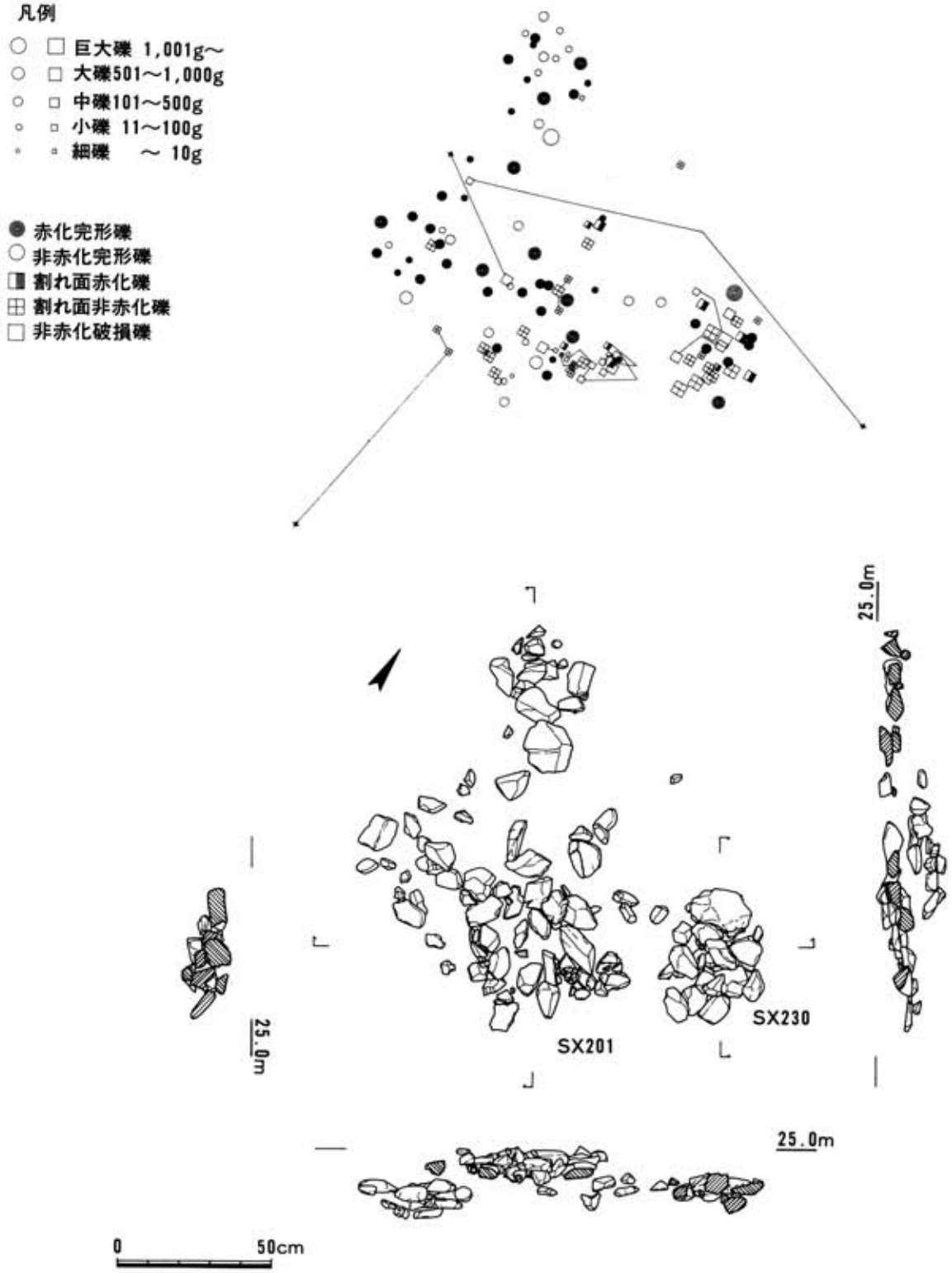

凡例
巨大礫 1,001g～
大礫501～1,000g
中礫101～500g
小礫 11～100g
細礫 ～ 10g
赤化完形礫
非赤化完形礫
割れ面赤化礫
割れ面非赤化礫
非赤化破損礫
25.0m
SX201
SX230
25.0m
25.0m
0
50cm

図10　集石1（1：20）

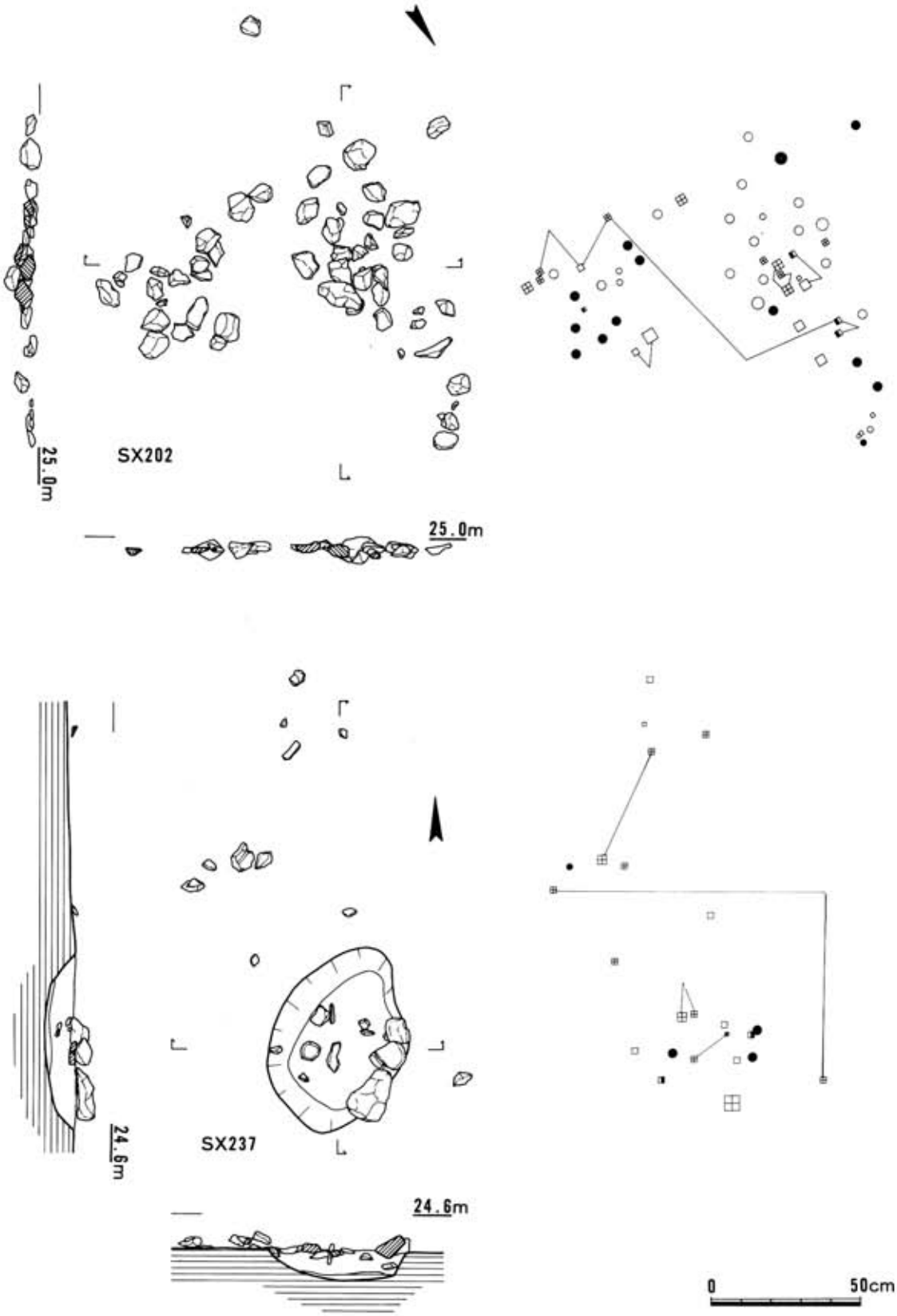


図11　集石２（１：20）

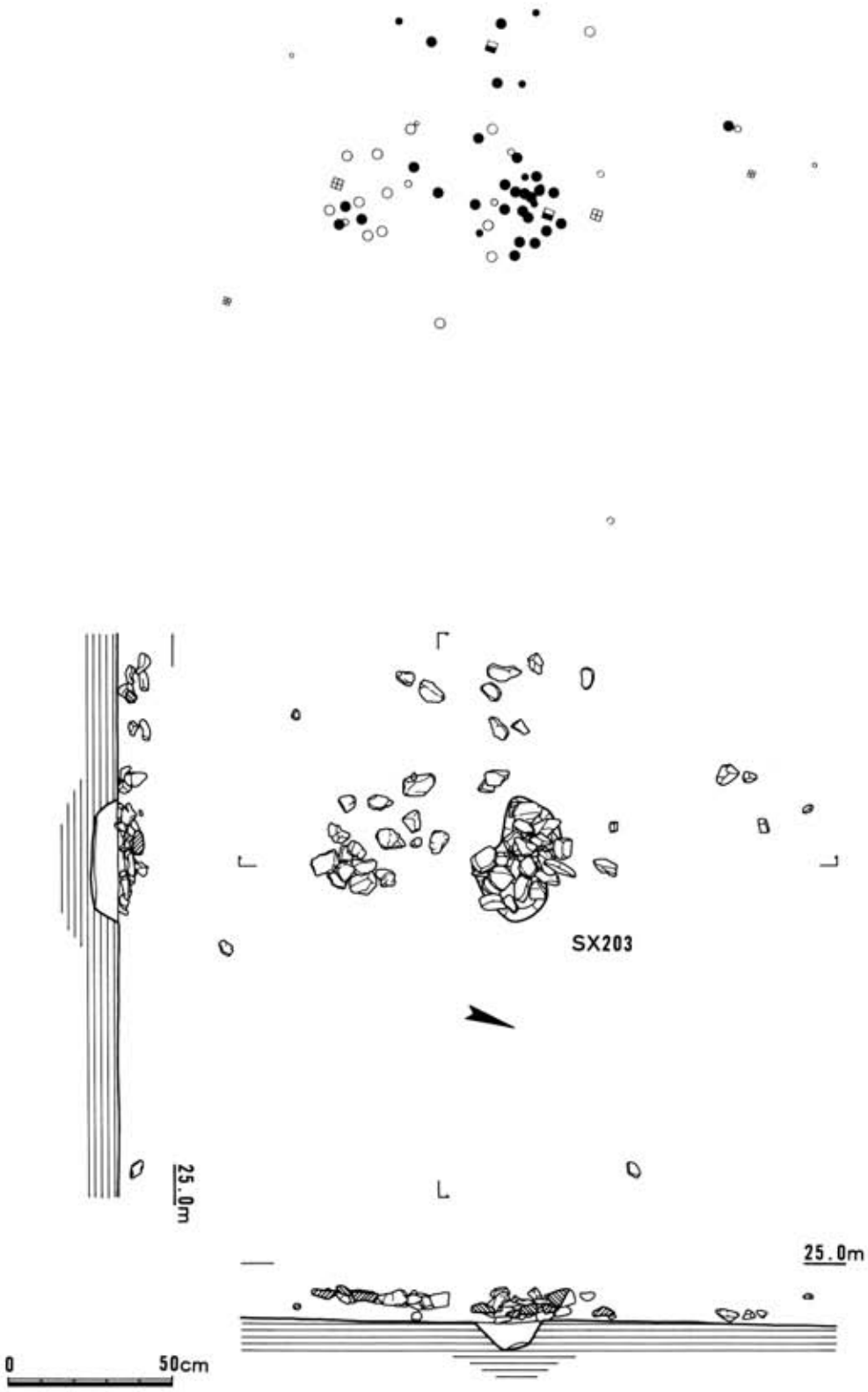


図12　集石３（１：20）

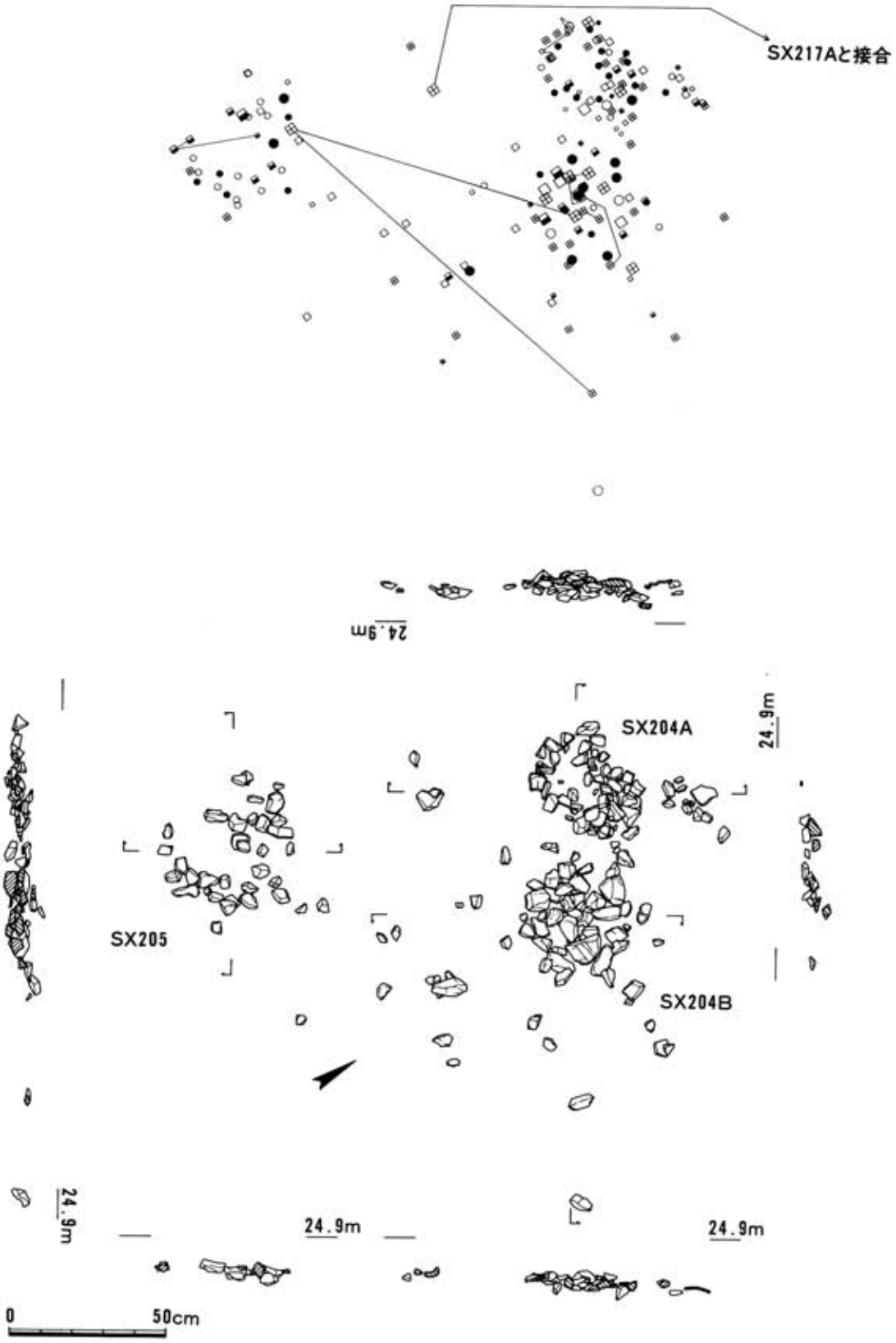

SX217Aと接合
24.9m
SX204A
24.9m
SX205
SX204B
24.9m
24.9m
24.9m
0
50cm

図13　集石４（１：20）

ＳＸ237（図11，写真図版６－２）

ＢＥ０５区画西側中央部南寄りに位置し、北側に接してＳＸ241がある。長軸1.5m、短軸0.6mの広がりを持つが、掘り込みの部分と、それ以外の部分とを同じ遺構として捉えられるかどうかは問題が残る。掘り込みは長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.1mで内部には炭化物が少量混じる。

総礫数24点、総重量3,428ｇ、平均重量142.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が４点、破損礫が20点で、破損率は83.3％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が12点、非赤化礫が６点である。石質は花崗岩類が22点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は４例あり、全て割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ203（図12，写真図版３－３）

ＢＤ０６区画の南東隅に位置する。周辺の礫をどこまでこの遺構に含めるかで、範囲が異なるが、広く取った場合は1.9×1.7m、狭く取った場合は1.0×0.9mの広がりである。中央部北側の礫が特に集中する部分に炭化物の集中が認められ、下部は狭い掘り込みがある。この部分の礫は殆ど赤化が認められる。

総礫数63点、総重量8,657ｇ、平均重量137.4ｇである。礫の破損状態は、完形礫が57点、破損礫が６点で、破損率は9.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が35点、割れ面非赤化礫が４点、非赤化礫が24点である。石質は花崗岩類が59点、非花崗岩類が４点である。礫の接合例はなく、礫の完形率が高いのが特徴と言える。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ204Ａ（図13，写真図版３－４・５）

ＢＤ０６区画の西側中央部やや北寄りに位置し、南東に接してＳＸ204Ｂが、南側にはＳＸ205がある。当初はＳＸ204として大きく捉えていたが、検出を進めたところ明らかに二分されることが解った。礫の集中する部分は径0.4m程と狭く、中央部は空白で、特にこの範囲に炭化物が集中していた。精査したが、明確な掘り込みは認められなかった。

総礫数63点、総重量2,935ｇ、平均重量46.6ｇである。礫の破損状態は、完形礫が24点、破損礫が39点で、破損率は61.9％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が21点、割れ面非赤化礫が17点、非赤化礫が25点である。石質は花崗岩類が61点、非花崗岩類が２点である。礫の接合例は２例で、非赤化礫同士の接合である。

遺物は礫の集中部に接して第２群土器が１点出土した。

ＳＸ204の範囲内から採取された炭化物を用いた^{14}Ｃ測定年代は4,700±120ｙ.Ｂ.Ｐ.（Gak－16541）である。また炭化材はブナ科コナラ属コナラ亜属の一種と同定された（付編〝平原遺跡の古環境変遷。参照）。

ＳＸ204Ｂ（図13，写真図版３－４・５）

ＢＤ０６区画の西側中央部やや北寄りに位置し、北東に接してＳＸ204Ａが、南西にはＳＸ205がある。礫の集中する部分は径0.4～0.5m程で、炭化物もこの部分に集中していた。下部を精査したが、明確な掘り込みは認められなかった。

総礫数73点、総重量6,316ｇ、平均重量86.5ｇである。礫の破損状態は、完形礫が18点、破損礫が55点で、破損率は75.3％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が22点、割れ面非赤化礫が28点、非赤化礫が23点である。石質は花崗岩類が69点、非花崗岩類が４点である。礫の接合は４例あり、いずれも割れ面非赤化礫同士の接合である。このうち１例はＳＸ205と、１例はＳＸ217Ａと接合関係にある。

遺物は、周辺部から第２群土器が１点出土した。

ＳＸ205（図13，写真図版３－４・６）

ＢＤ０６区画の西側中央部に位置し、北東にＳＸ204Ａ・ＳＸ204Ｂがある。礫の集中するのは径0.5mの範囲で、中央部は空白である。炭化物は礫の集中部に多く認められた。

総礫数35点、総重量2,182ｇ、平均重量62.3ｇである。礫の破損状態は、完形礫が20点、破損礫が15点で、破損率は42.9％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が15点、割れ面非赤化礫が３点、非赤化礫が17点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合は２例あり、１例は遺構内で全面赤化礫同士が接合したもの、もう１例はＳＸ204Ｂとの接合で、割れ面非赤化礫同士の例である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ206（図14，写真図版３－７・８）

ＢＤ０６区画北辺の西寄りに位置する。礫がまとまっている部分には、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.2m程のやや不整形な掘り込みがあり、その底面に径0.6mの範囲で礫が特に密集する。掘り込みの下部の礫と上面の礫とは平面分布に若干の違いがあり、断面見通し図から解るように両者の間には礫の疎らな部分がある。

総礫数125点、総重量29,523ｇ、平均重量236.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が73点、破損礫が52点で、破損率は41.6％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が44点、割れ面非赤化礫が34点、非赤化礫が47点である。石質は花崗岩類が123点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は11例あり、内２例はＳＸ207との接合である。遺構内では、全面赤化礫同士の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が５例、非赤化礫同士の接合が３例である。またＳＸ207との接合では、１例は割れ面非赤化礫同士の接合で、もう１例はＳＸ206の方が割れ面非赤化礫でＳＸ207の方が全面赤化礫である。

遺物は、集中部から第２群土器２点が出土し、周辺から第１群土器が１点、第２群土器が８点出土した。

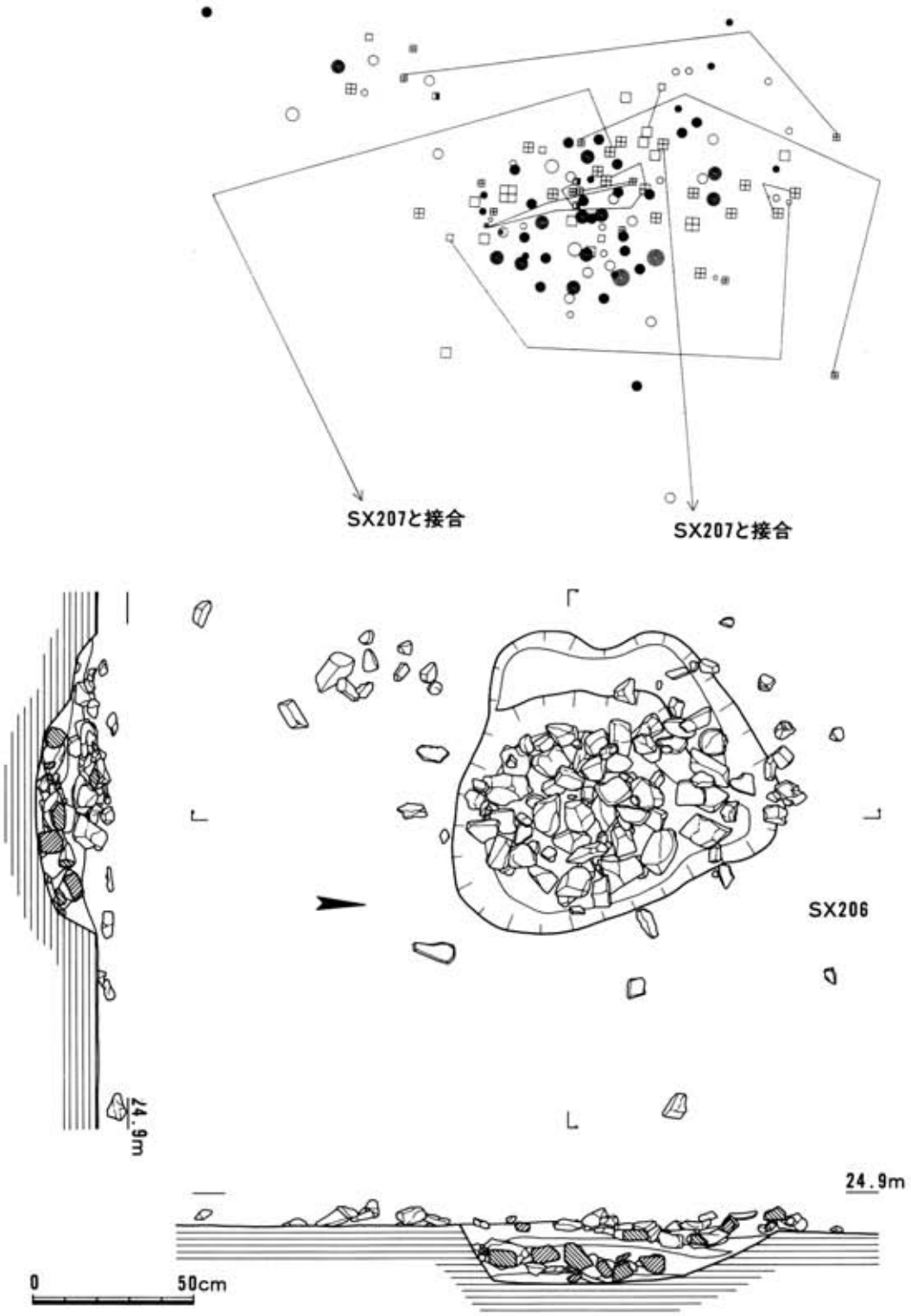


図14　集石５（１：20）

ＳＸ207（図15，写真図版４－１・２）

ＢＤ０６区画北辺の中央部に位置し、西側に接してＳＸ224がある。長軸0.8m、短軸0.6mの広がりをもち、下部の掘り込みからも東側と西側とに二分される可能性がある。

総礫数126点、総重量13,552ｇ、平均重量107.6ｇである。礫の破損状態は、完形礫が71点、破損礫が55点で、破損率は43.7％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が51点、割れ面非赤化礫が42点、非赤化礫が33点である。石質は花崗岩類が122点、非花崗岩類が４点である。礫の接合は11例あり、内２例がＳＸ206との接合である。遺構内では、全面赤化礫同士の接合が１例、全面赤化礫と割れ面非赤化礫との接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が６例、非赤化礫同士の接合が１例である。またＳＸ206との接合では、１例は割れ面非赤化礫同士の接合で、もう１例はＳＸ207の方が全面赤化礫でＳＸ206の方が割れ面非赤化礫である。

遺物は、集石の下部から第２群土器が１点出土し、周辺から第１群土器１点と第２群土器11点が出土した。

ＳＸ224（図15，写真図版４－２・５－５）

ＢＤ０６区画北辺中央部に位置し、東側に接してＳＸ207がある。径0.4m、深さ0.1mの掘り込みの中に径0.3mの範囲でやや大きめの礫が集中する。

総礫数18点、総重量3,315ｇ、平均重量184.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が７点、破損礫が11点で、破損率は61.1％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が４点、割れ面非赤化礫が10点、非赤化礫が４点である。石質は花崗岩類が15点、非花崗岩類が３点である。礫の接合例はない。

遺物は、遺構内から第２群土器が１点出土した。

ＳＸ209（図15，写真図版４－４）

ＢＤ０７区画の南東部に位置する。長軸1.3m、短軸0.5mの範囲に広がるが、集中する部分は径0.6mで、下部に深さ0.16mの掘り込みがあり、炭化物はこの部分に集中する。

総礫数170点、総重量6,654ｇ、平均重量39.1ｇである。礫の破損状態は、完形礫が141点、破損礫が29点で、破損率は17.1％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が61点、割れ面非赤化礫が13点、非赤化礫が96点である。石質は花崗岩類が165点、非花崗岩類が５点である。礫の接合は２例あり、内１例がＳＸ210との接合で、いずれも全面赤化礫同士の接合である。

遺物は、遺構内からは出土しなかったが、南東に接して１個体の第１群土器（15）が集中的に出土した。

ＳＸ210（図16，写真図版４－５）

ＢＣ０７区画の北側中央部に位置する。長軸1.1m、短軸0.9mの範囲に広がるが、径0.5mの集中部分があり、その下部に大きさの揃った礫を敷き詰めたような状況が窺え、更にその下位には深さ0.1mの炭化物を含む掘り込みがある。

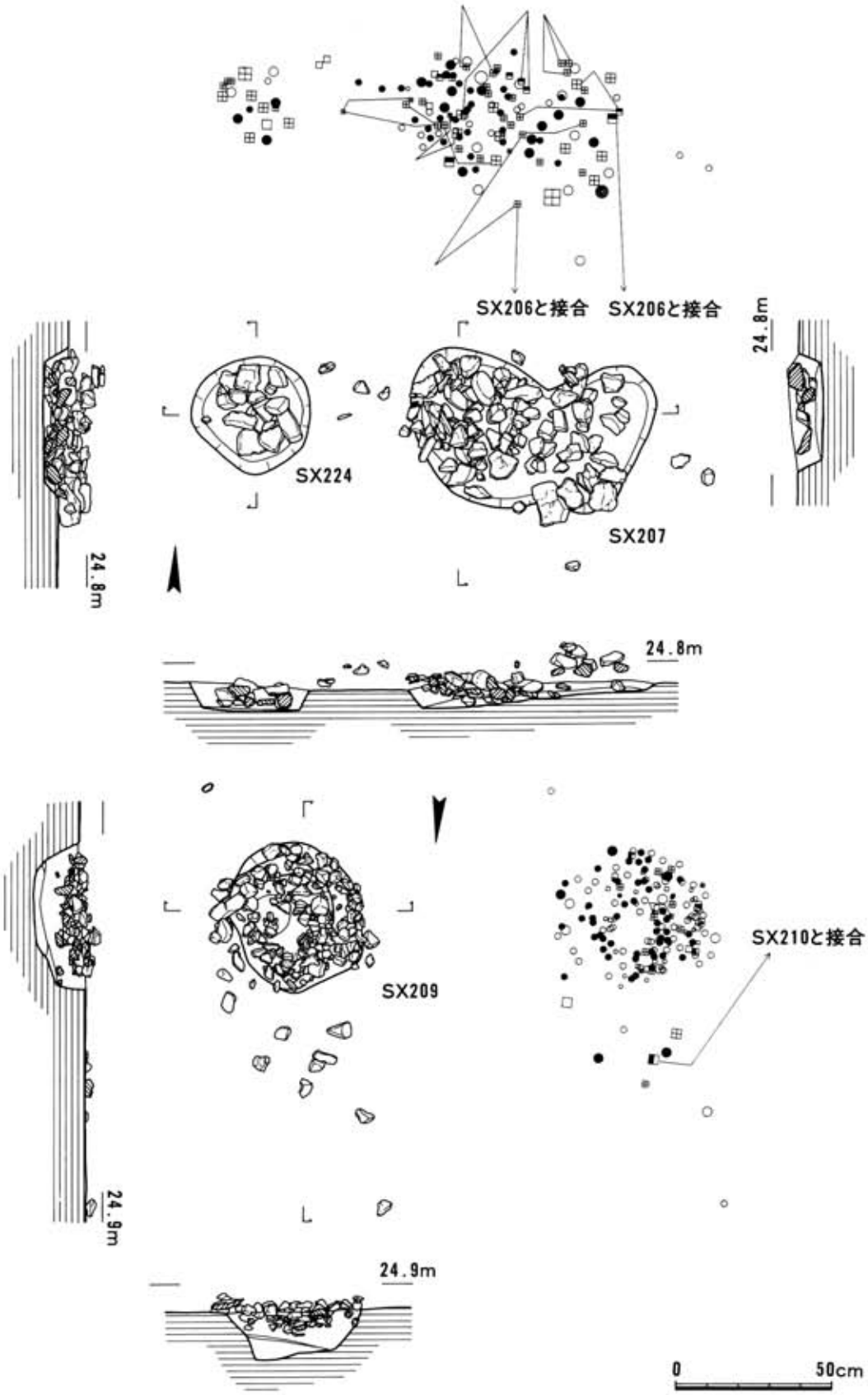

SX206と接合
SX206と接合
24.8m
SX224
SX207
24.8m
24.8m
SX209
SX210と接合
24.9m
24.9m
0
50cm

図15　集石６（１：20）

総礫数132点、総重量16,224ｇ、平均重量122.9ｇである。礫の破損状態は、完形礫が101点、破損礫が31点で、破損率は23.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が44点、割れ面非赤化礫が21点、非赤化礫が67点である。石質は花崗岩類が129点、非花崗岩類が３点である。礫の接合は７例あり、内１例がＳＸ209との接合である。遺構内では、全面赤化礫同士の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が４例、非赤化礫同士の接合が１例である。ＳＸ209との接合は全面赤化礫同士である。

遺物は、集中部とその下部から第１群土器が２点出土した。

ＳＸ216（図16）

ＢＤ０６区画の北西部に位置し、北側に接してＳＸ217Ｂ・ＳＸ217Ｃが、南側に接してＳＸ204Ａ・ＳＸ204Ｂがある。長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.1mの掘り込みがあり、その中と周辺に礫がややまとまる。

総礫数23点、総重量1,581ｇ、平均重量68.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が８点、破損礫が15点で、破損率は65.2％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が９点、非赤化礫が８点である。石質は花崗岩類が21点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は１例で非赤化礫同士の接合である。

遺物は、集中部及び周辺から第２群土器６点が出土した。

ＳＸ227（図16，写真図版５－８）

ＢＤ０６区画の南西隅に位置する。径0.3mの範囲に礫が集中し、下部には長軸0.4m、短軸0.3m、深さ0.05mの浅い掘り込みを伴う。

総礫数41点、総重量2,651ｇ、平均重量64.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が17点、破損礫が24点で、破損率は58.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が18点、割れ面非赤化礫が21点、非赤化礫が２点である。石質は花崗岩類が35点、非花崗岩類が６点である。礫の接合例はない。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ211（図17，写真図版４－６）

ＢＥ０７区画の中央部に位置する。長軸1.6m、短軸0.9mの範囲に大小の礫が散在する。礫の間に炭化物粒が微量に認められた。下部に掘り込み等は確認できなかった。

総礫数36点、総重量6,348ｇ、平均重量176.3ｇである。礫の破損状態は、完形礫が11点、破損礫が25点で、破損率は69.4％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が５点、割れ面非赤化礫が13点、非赤化礫が18点である。石質は花崗岩類が34点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は１例あり、割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は、集石の範囲から第１群土器１点、第２群土器11点、安山岩剥片12点、黒曜岩石鏃片１点、黒曜岩剥片４点が出土した。

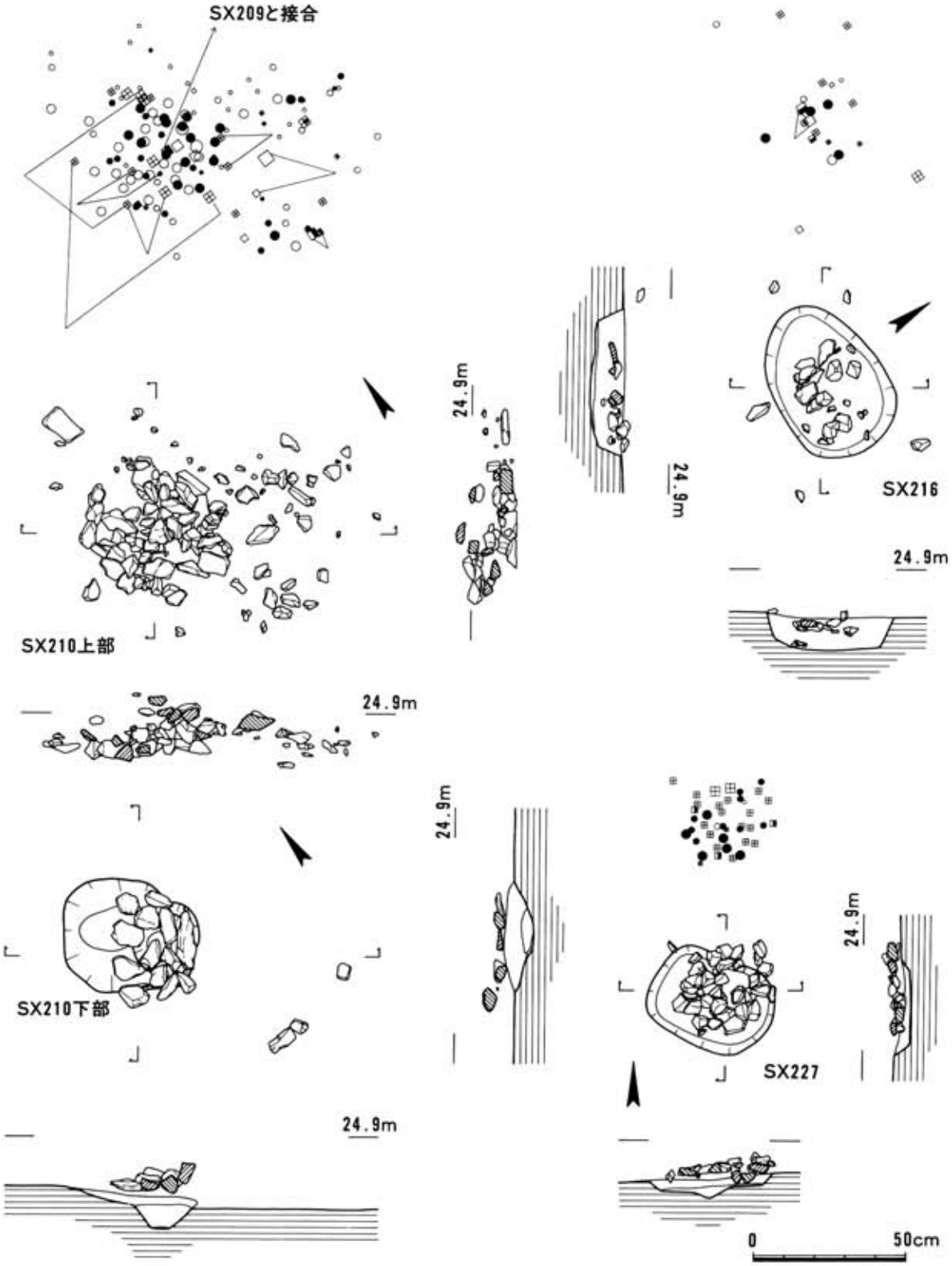

SX209と接合
24.9m
24.9m
SX216
24.9m
SX210上部
24.9m
24.9m
SX210下部
24.9m
24.9m
SX227
0
50cm

図16　集石７（１：20）

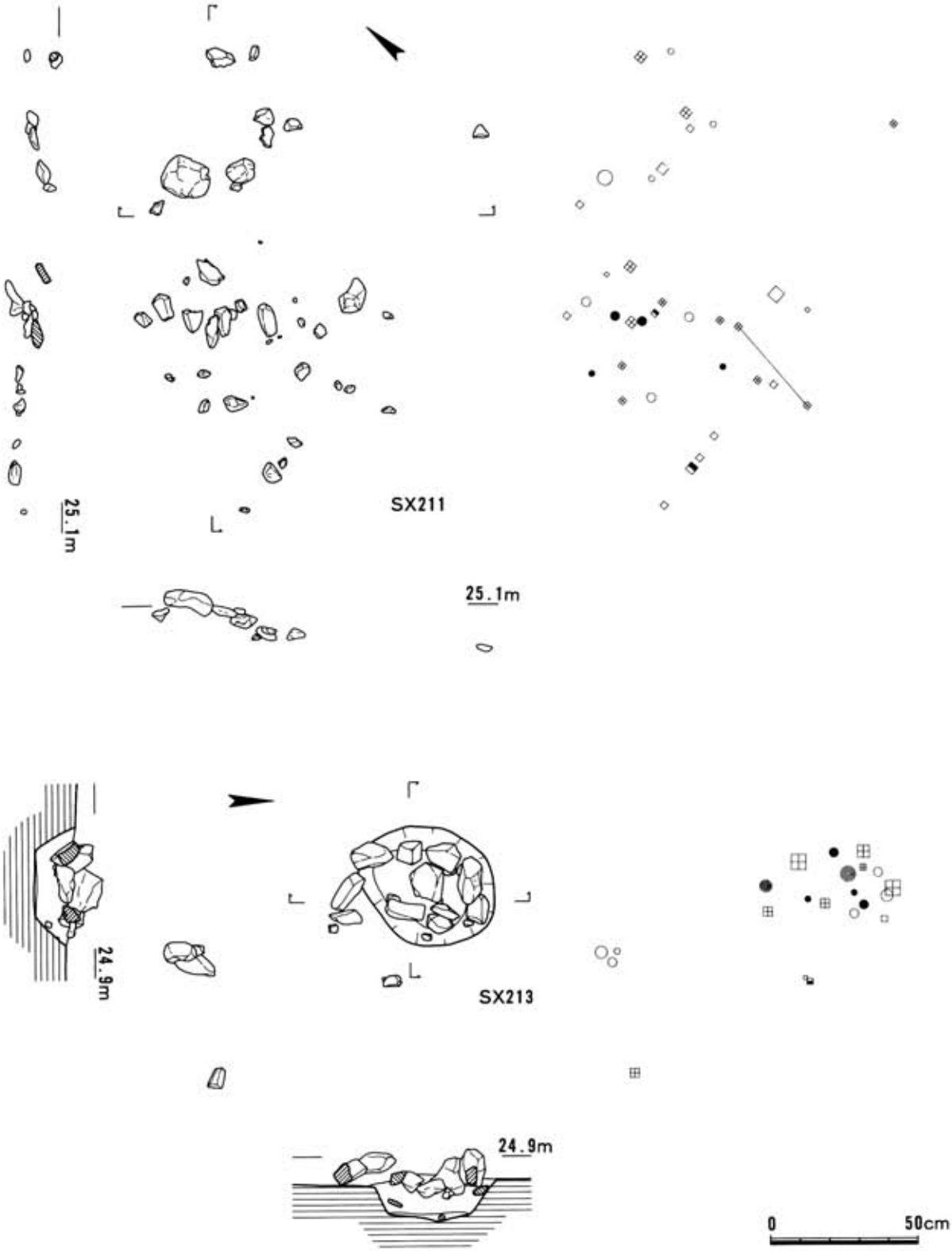


図17　集石８（１：20）

ＳＸ213（図17，写真図版４－７）

ＢＤ０７区画の東辺中央部に位置し、北側に接してＳＸ233・ＳＸ234・ＳＸ235・ＳＸ236がある。長軸0.6m、短軸0.4mの範囲に大きめの礫を環状に配し、中央部にも礫を置く。下位には深さ0.1m程の掘り込みがあるが、炭化物の含有は少ない。

総礫数22点、総重量9,673ｇ、平均重量439.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が12点、破損礫が10点で、破損率は45.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が８点、非赤化礫が８点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合例が１例あり、割れ面非赤化礫同士の接合であるが、集中部から離れた位置の礫と包含層中の礫との接合例であり、本来的にはＳＸ213とは無関係の可能性が強い。

遺物は、礫の集中部から第２群土器２点が出土した。

ＳＸ217Ａ（図18）

ＢＤ０６区画の北西部に位置し、南に接してＳＸ217Ｂが、南東に接してＳＸ217Ｃがある。径0.3mの範囲に礫がまとまり、径0.5m、深さ0.1mの掘り込みを持つ。

総礫数21点、総重量2,311ｇ、平均重量110.1ｇである。礫の破損状態は、完形礫が７点、破損礫が14点で、破損率は66.7％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が11点、割れ面非赤化礫が４点、非赤化礫が６点である。石質は花崗岩類が18点、非花崗岩類が３点である。礫の接合は３例あり、うち１例はＳＸ204Ｂとの接合で、割れ面非赤化礫同士の接合である。また遺構内で接合した２例は、全面赤化礫同士の接合と非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ217Ｂ（図18）

ＢＤ０６区画の北西部に位置し、北側に接してＳＸ217Ａが、東側に接してＳＸ217Ｃがある。径0.5mの範囲に礫が集中し、図化できなかった細礫が多数ある。径0.6m、深さ0.1mの掘り込みを持つ。

総礫数329点、総重量6,335ｇ、平均重量19.3ｇである。礫の破損状態は、完形礫が39点、破損礫が290点で、破損率は88.2％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が53点、割れ面非赤化礫が97点、非赤化礫が179点である。石質は花崗岩類が313点、非花崗岩類が16点である。礫の接合は３例あり、１例が全面赤化礫同士の、２例が割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は、礫の集中部から第２群土器５点が出土した。

ＳＸ217Ｃ（図18）

ＢＤ０６区画の北西部に位置し、西側に接してＳＸ217Ａ・ＳＸ217Ｂがある。径0.7m程の範囲に礫がややまとまり、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.04mの掘り込みを伴う。

総礫数26点、総重量1,743ｇ、平均重量67.0ｇである。礫の破損状態は、完形礫が12点、破損礫が14点で、破損率は53.9％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が

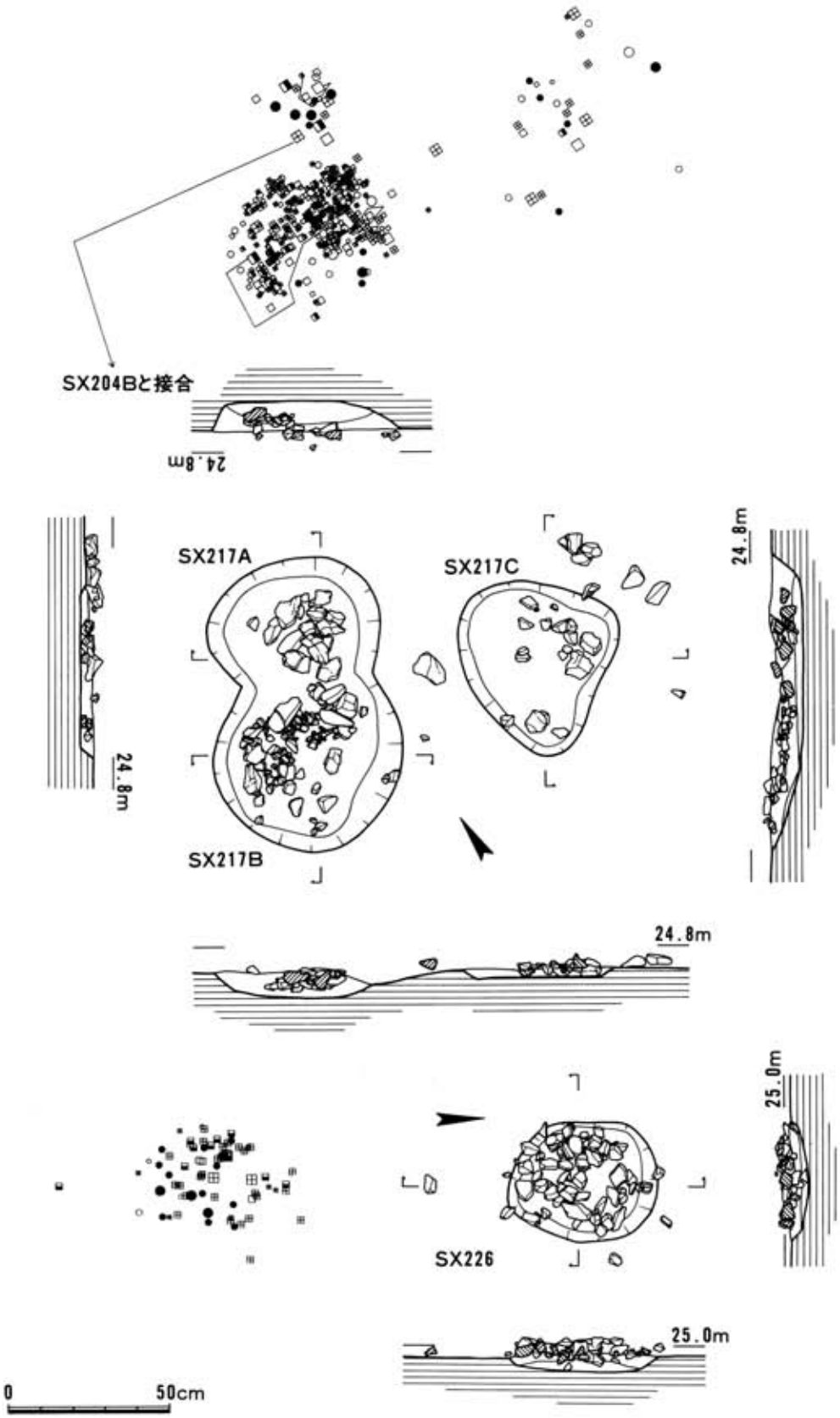

SX204Bと接合
24.8m
SX217A
SX217C
24.8m
24.8m
SX217B
24.8m
25.0m
SX226
25.0m
0
50cm

図18　集石９（１：20）

10点、非赤化礫が10点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合例は１例で、割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ226（図18，写真図版５－７）

ＢＣ０６区画北東隅に位置する。長軸0.5m、短軸0.4mの範囲に礫が集中し、ほぼ同じ範囲に深さ0.05mの浅い掘り込みを伴う。

総礫数68点、総重量3,413ｇ、平均重量50.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が18点、破損礫が50点で、破損率は73.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が24点、割れ面非赤化礫が36点、非赤化礫が８点である。石質は花崗岩類が64点、非花崗岩類が４点である。礫の接合は１例で、割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ218（図19，写真図版４－８）

ＢＤ０６区画の北側中央部に位置し、南に接してＳＸ217Ａ・ＳＸ217Ｂ・ＳＸ217Ｃが、東に接してＳＸ219がある。径0.4mの浅い掘り込みにやや大きめの礫を環状に配し、中央部には平たい礫を水平に据えている。内部には炭化物が集中し、特に底面に置かれた礫の上面には炭化材と思われるまとまりで遺存していた。

総礫数20点、総重量6,896ｇ、平均重量344.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が４点、破損礫が16点で、破損率は80.0％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が３点、割れ面非赤化礫が11点、非赤化礫が６点である。石質は花崗岩類が18点、非花崗岩類が２点である。礫の接合例はない。

遺物は、遺構内から第２群土器２点が出土した他、周辺から第１群土器が１点出土した。

中央部の礫の上面から出土した炭化材を用いたＡＭＳ法による^{14}Ｃ測定年代は4,150±100ｙ.Ｂ.Ｐ.（NUTA－2262）である。

ＳＸ219（図19，写真図版４－８）

ＢＤ０６区画の北側中央部に位置する。南に接してＳＸ217Ａ・ＳＸ217Ｂ・ＳＸ217Ｃが、西に接してＳＸ218がある。長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.06mの浅い掘り込みに礫がまとまり、集中する部分は径0.2m程の狭い範囲である。

総礫数27点、総重量3,373ｇ、平均重量124.9ｇである。礫の破損状態は、完形礫が６点、破損礫が21点で、破損率は77.8％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が13点、割れ面非赤化礫が７点、非赤化礫が７点である。石質は花崗岩類が25点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は４例で、全面赤化礫同士の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が２例、非赤化礫同士の接合が１例である。

遺物は、集石中から第２群土器１点が出土した。

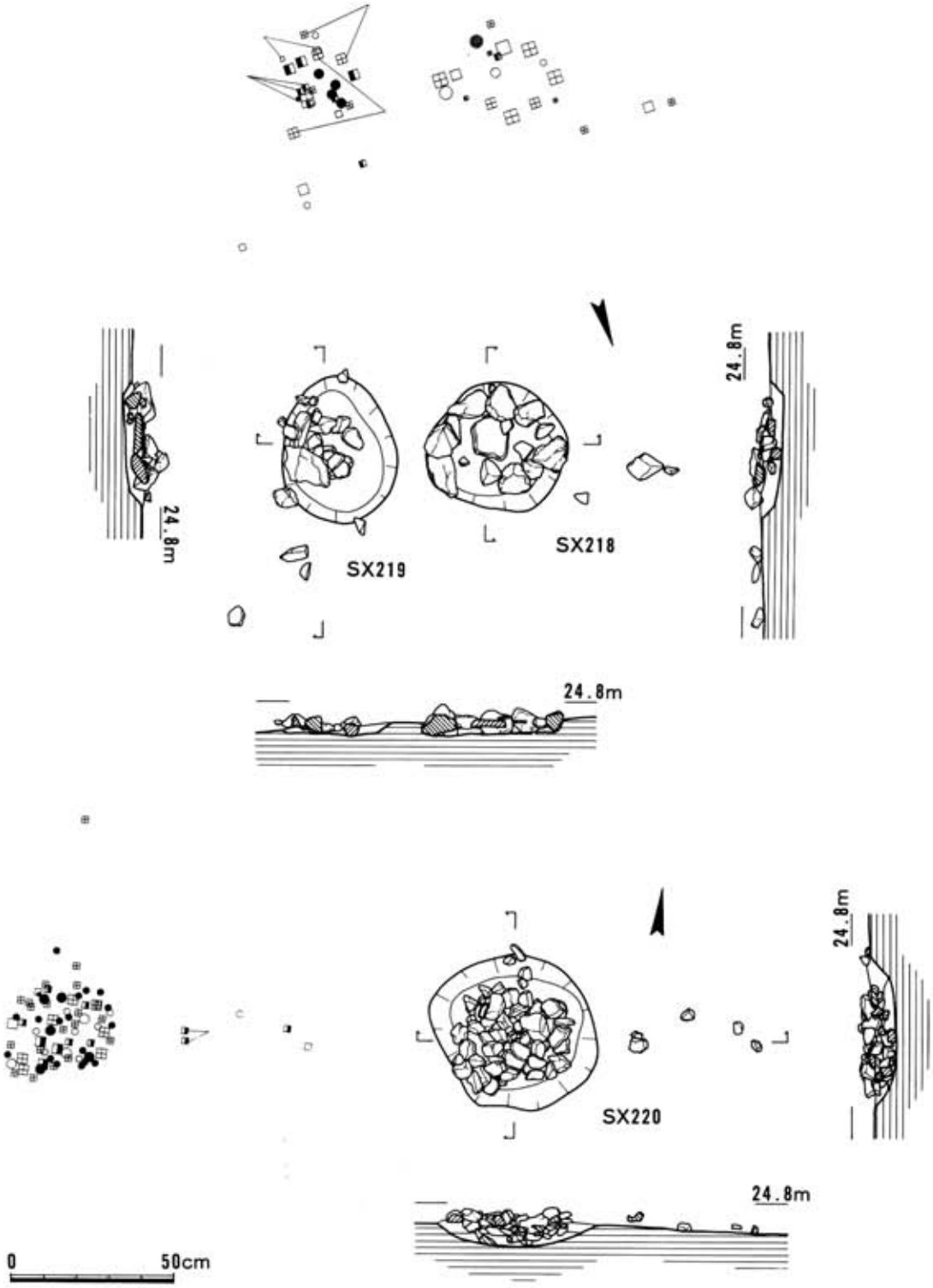


図19　集石10(1：20)

ＳＸ220（図19，写真図版５－１・２）

ＢＤ０６区画の北側中央部やや東寄りに位置する。径0.5m、深さ0.1mの掘り込みに礫が集中し、礫のまとまる範囲は径0.4mである。

総礫数75点、総重量6,687ｇ、平均重量89.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が34点、破損礫が41点で、破損率は54.7％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が34点、割れ面非赤化礫が27点、非赤化礫が14点である。石質は花崗岩類が74点、非花崗岩類が１点である。礫の接合は、掘り込み外の１例のみで、全面赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ221（図20，写真図版５－３）

ＢＤ０６区画西辺の南寄りに位置する。径0.5mの範囲に礫が密集し、西側の一部が土層観察用試掘坑の崩落のために不明である。礫の集中部の下位には比較的明瞭な掘り込みが認められたが、礫の取り上げ後、精査を行う前に崩落したため、図示できなかった。掘り込みの上部は礫と浅黄色粘質シルト・炭化物が混じる層で、下部は炭化物が集中する層である。

総礫数78点、総重量13,694ｇ、平均重量175.6ｇである。ＢＤ０６区画とＢＤ０７区画の境に位置し図６の上図によって説明すると、礫の破損状態は、完形礫が１点、破損礫が77点で、破損率は98.7％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が16点、割れ面非赤化礫が43点、非赤化礫が19点である。石質は花崗岩類が36点、非花崗岩類が42点である。礫の接合は11例あり、割れ面赤化礫同士の接合が９例、非赤化礫同士の接合が２例である。

遺物は、集石に接して第２群土器２点が出土した。

ＳＸ228（図20，写真図版６－１）

ＢＣ０７区画の北西隅に位置する。径0.5mの広がりを持ち、周縁部に板状のやや大きめの礫を斜めに立てるように配し、中央部にこれよりやや小ぶりの礫がある。明確な掘り込みは認められなかったが、断面の状況から掘り方の存在は充分に想定できる。

総礫数26点、総重量6,426ｇ、平均重量247.2ｇである。礫は全て破損礫である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が12点、非赤化礫が８点である。石質は花崗岩類が20点、非花崗岩類が６点である。礫の接合例はない。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ231（図20）

ＢＤ０７区画の北辺中央部に位置し、北西に接してＳＸ230がある。長軸0.7m、短軸0.5mの範囲に礫が広がるもので、確認はできなかったが中央部が窪む状況から、下部に掘り込みを有していた可能性が高い。

総礫数23点、総重量6,218ｇ、平均重量270.4ｇである。礫の破損状態は、完形礫が11点、破損礫が12点で、破損率は52.2％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が14点、割れ面非赤化礫

が７点、非赤化礫が２点である。石質は花崗岩類が21点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は１例で、非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ232（図20）

ＢＥ０７区画の南辺中央部に位置し、東側にＳＸ250が、南西にＳＸ230がある。径0.6mの範囲に礫が集中し、下部の掘り込み等は確認できなかった。

総礫数48点、総重量10,597ｇ、平均重量220.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が20点、破損礫が28点で、破損率は58.3％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が25点、割れ面非赤化礫が18点、非赤化礫が５点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合は２例で、全面赤化礫同士の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が１例である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ223（図21）

ＢＥ０６区画の南辺中央部に位置し、北側に接してＳＸ229が、南側に接してＳＸ207がある。ＳＸ229とは標高差があるが、断面見通し図を見れば明らかなように、この辺りより急に落ち込む旧地形に因るものと考えられる。径0.4mの範囲に礫が集中するが、下部には掘り込み等は確認できなかった。

総礫数39点、総重量3,501ｇ、平均重量89.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が18点、破損礫が21点で、破損率は53.9％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が14点、割れ面非赤化礫が８点、非赤化礫が17点である。石質は花崗岩類が35点、非花崗岩類が４点である。礫の接合例はない。

遺物は、集石中から第２群土器２点が出土した。

ＳＸ229（図21，写真図版５－４）

ＢＥ０６区画の南側中央部に位置し、南側に接してＳＸ223がある。

総礫数29点、総重量2,251ｇ、平均重量77.6ｇである。礫の破損状態は、完形礫が10点、破損礫が19点で、破損率は65.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が13点、割れ面非赤化礫が11点、非赤化礫が５点である。石質は花崗岩類が28点、非花崗岩類が１点である。礫の接合は２例で、全面赤化礫同士の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が１例である。

遺物は、集石中から第２群土器が１点出土した。

ＳＸ225（図21，写真図版５－６）

ＢＣ０５区画の南東側に位置する。長軸1.4m、短軸0.9mの範囲に礫が散在するもので、周辺に顕著な炭化物や遺物の集中は認められなかった。

総礫数11点、総重量3,602ｇ、平均重量327.5ｇである。礫の破損状態は、完形礫が１点、破損礫が10点で、破損率は90.9％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が４点、割れ面非赤化礫

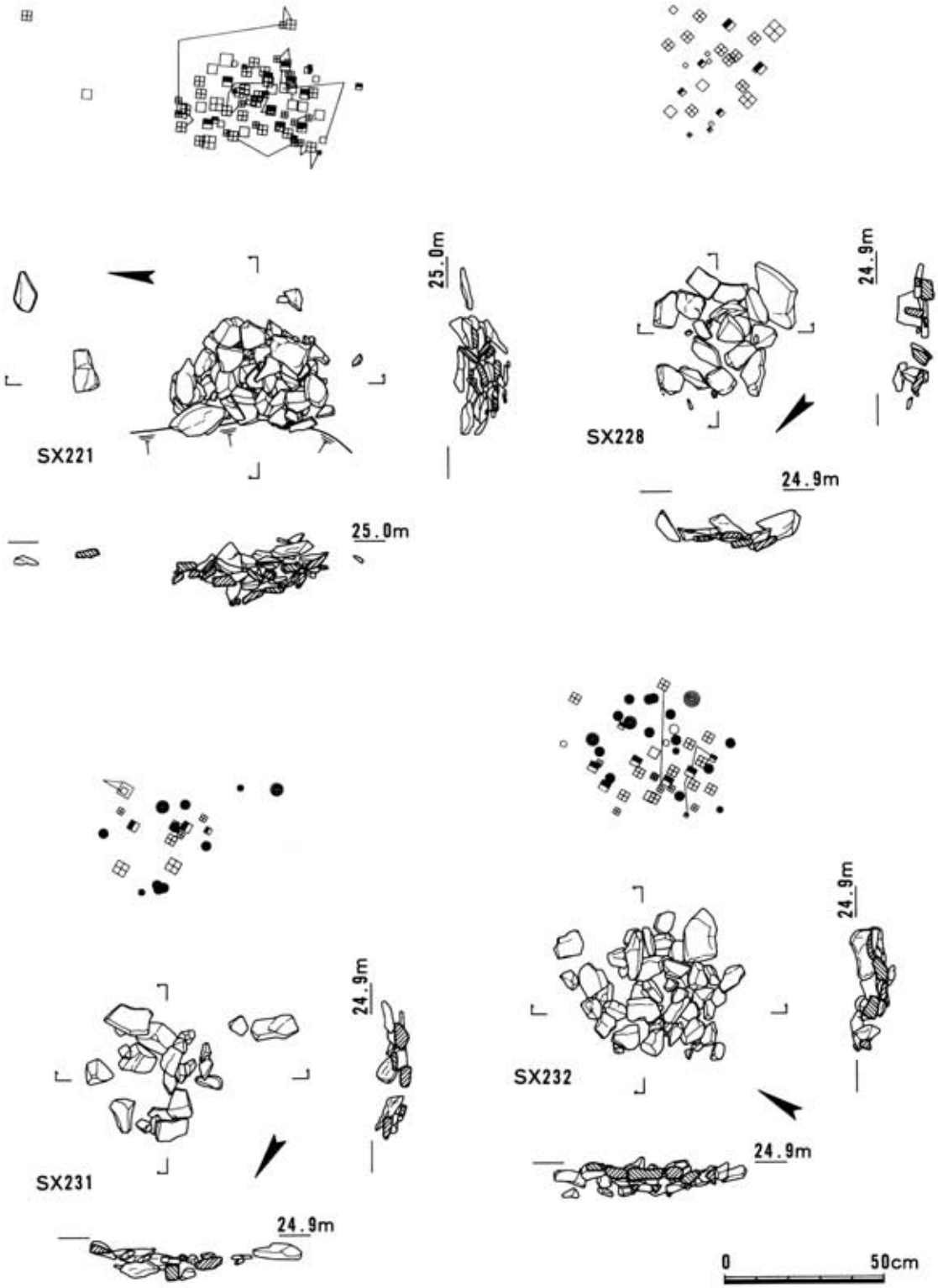

SX221
25.0m
25.0m
SX228
24.9m
24.9m
SX231
24.9m
24.9m
SX232
24.9m
24.9m
0
50cm

図20　集石11(1：20)

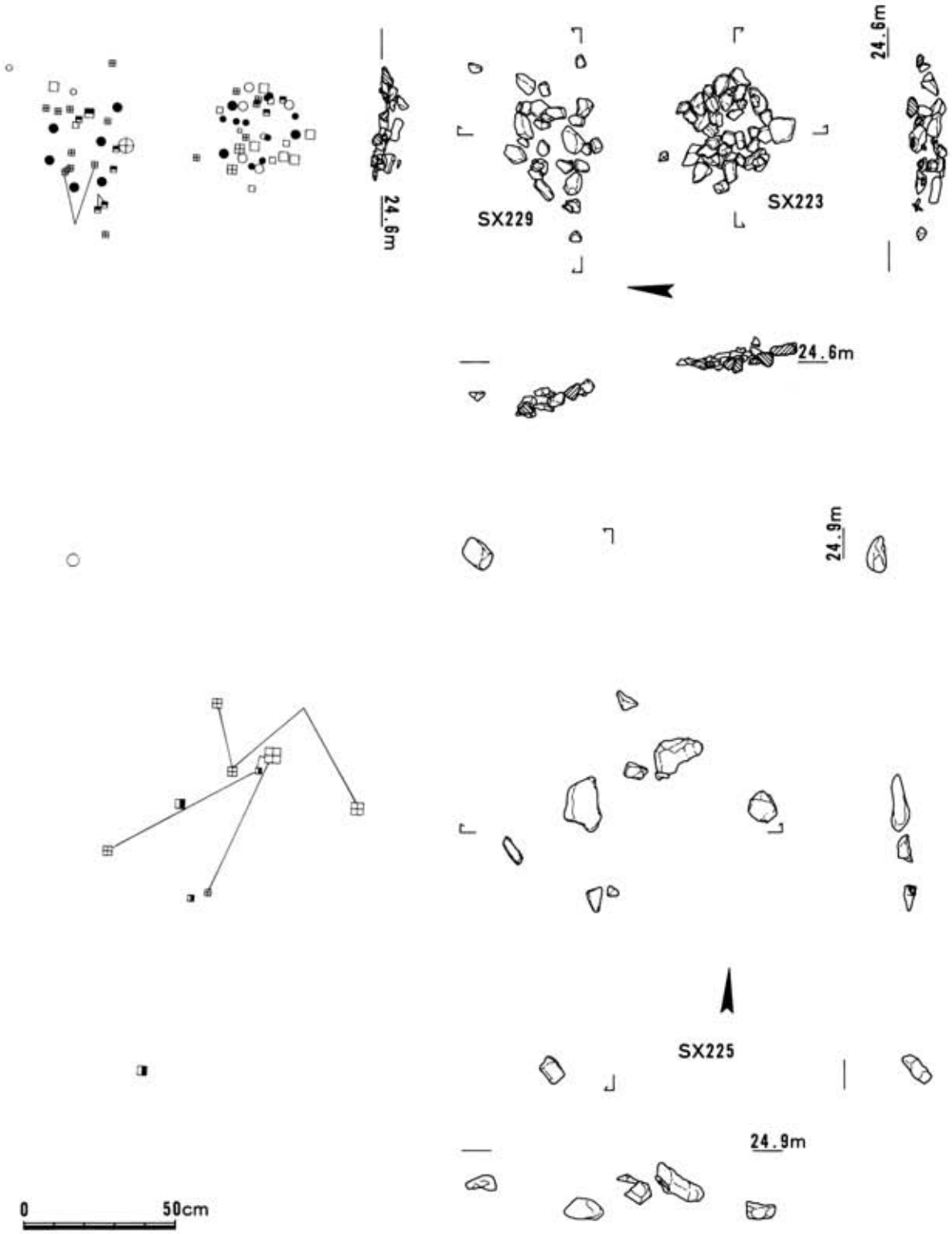


図21　集石12(1：20)

が６点、非赤化礫が１点である。石質は花崗岩類が９点、非花崗岩類が２点である。11点の礫の内、割れ面非赤化礫３点が接合する例と、割れ面非赤化礫３点と全面赤化礫１点が接合する例がある。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ233（図22）

ＢＤ０６区画の西辺中央部に位置し、南西にＳＸ234・ＳＸ235が接する。径0.5mの範囲に礫が集中し、下部の掘り込み等は確認できなかった。

総礫数49点、総重量4,898ｇ、平均重量100.0ｇである。礫の破損状態は、完形礫が12点、破損礫が37点で、破損率は75.5％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が17点、割れ面非赤化礫が23点、非赤化礫が９点である。石質は花崗岩類が46点、非花崗岩類が３点である。礫の接合例はない。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ234（図22）

ＢＤ０７区画の東辺中央部に位置し、北東に接してＳＸ233が、南西に一部重複した形でＳＸ235がある。ＳＸ235とは標高と構成礫の大きさの違いによって区別できる。長軸0.8m、短軸0.6mの範囲として捉えたが、特に礫が集中する範囲は径0.5mの円形である。下部に掘り込み等は認められなかった。

総礫数115点、総重量6,298ｇ、平均重量54.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が39点、破損礫が76点で、破損率は66.1％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が31点、割れ面非赤化礫が31点、非赤化礫が53点である。石質は花崗岩類が108点、非花崗岩類が７点である。礫の接合は１例で、全面赤化礫の接合である。

遺物は、集石の範囲から第２群土器７点が出土した。

ＳＸ235（図22）

ＢＤ０７区画の東辺中央部に位置し、北東に一部重複した形でＳＸ234が、南側に接してＳＸ236がある。径0.5mの範囲でやや大きめの礫がまとまっている。

総礫数12点、総重量3,177ｇ、平均重量264.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が１点、破損礫が11点で、破損率は91.7％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が１点、割れ面非赤化礫が６点、非赤化礫が５点である。石質は花崗岩類が５点、非花崗岩類が７点である。礫の接合例はない。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ236（図22）

ＢＤ０７区画の東辺中央部に位置し、北側に接してＳＸ235がある。径0.6mの範囲に礫が集中するが、集中度はやや弱い。下部に掘り込み等は確認できなかった。

SX233
SX234
SX235
SX236
24.8m
24.8m
SX241
24.5m
24.5m
SX242
24.8m
24.8m
0
50cm

図22　集石13(1：20)

総礫数50点、総重量2,545ｇ、平均重量50.9ｇである。礫の破損状態は、完形礫が８点、破損礫が42点で、破損率は84.0％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が15点、割れ面非赤化礫が23点、非赤化礫が12点である。石質は花崗岩類が45点、非花崗岩類が５点である。礫の接合は２例で、割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は、集石中から第２群土器１点が出土した。

ＳＸ241（図22，写真図版６－３）

ＢＥ０５区画の西側中央部に位置する。北側に接してＳＸ246が、南側に接してＳＸ237がある。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.15mの掘り込みを有し、その中心部の径0.4mの範囲に礫が密集する。

総礫数100点、総重量7,216ｇ、平均重量72.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が29点、破損礫が71点で、破損率は71.0％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が30点、割れ面非赤化礫が20点、非赤化礫が50点である。石質は花崗岩類が85点、非花崗岩類が15点である。礫の接合は１例あり、ＳＸ246との非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ242（図22，写真図版６－４）

ＢＤ０６区画の中央部西寄りに位置する。径0.5mに礫が密集し、下部には礫の範囲と同じ広がりで、深さ0.1mの掘り込みがある。

総礫数133点、総重量8,996ｇ、平均重量67.6ｇである。礫の破損状態は、完形礫が36点、破損礫が97点で、破損率は72.9％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が47点、割れ面非赤化礫が72点、非赤化礫が14点である。石質は花崗岩類が124点、非花崗岩類が９点である。礫の接合は１点で、割れ面非赤化礫同士の接合である。

遺物は、集石中から第２群土器３点が、周辺から第２群土器１点が出土した。

ＳＸ247（図23，写真図版６－５）

ＢＤ０７区画の南東側に位置し、南東にＳＸ209が、北側にＳＸ248がある。長軸1.0m、短軸0.6mの範囲に広がり、炭化物が少量散在する。下部に掘り込み等は認められなかった。南側の巨大な礫は赤化も認められず、おそらくは本遺構の構成礫ではなく、人為的な礫ではなかろうと考えられる。

総礫数45点、総重量31,037ｇ、平均重量689.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が15点、破損礫が30点で、破損率は66.7％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が24点、割れ面非赤化礫が12点、非赤化礫が９点である。石質は花崗岩類が43点、非花崗岩類が２点である。礫の接合は４例で、全面赤化礫と割れ面非赤化礫の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が２例、非赤化礫同士の接合が１例である。

遺物は出土しなかった。

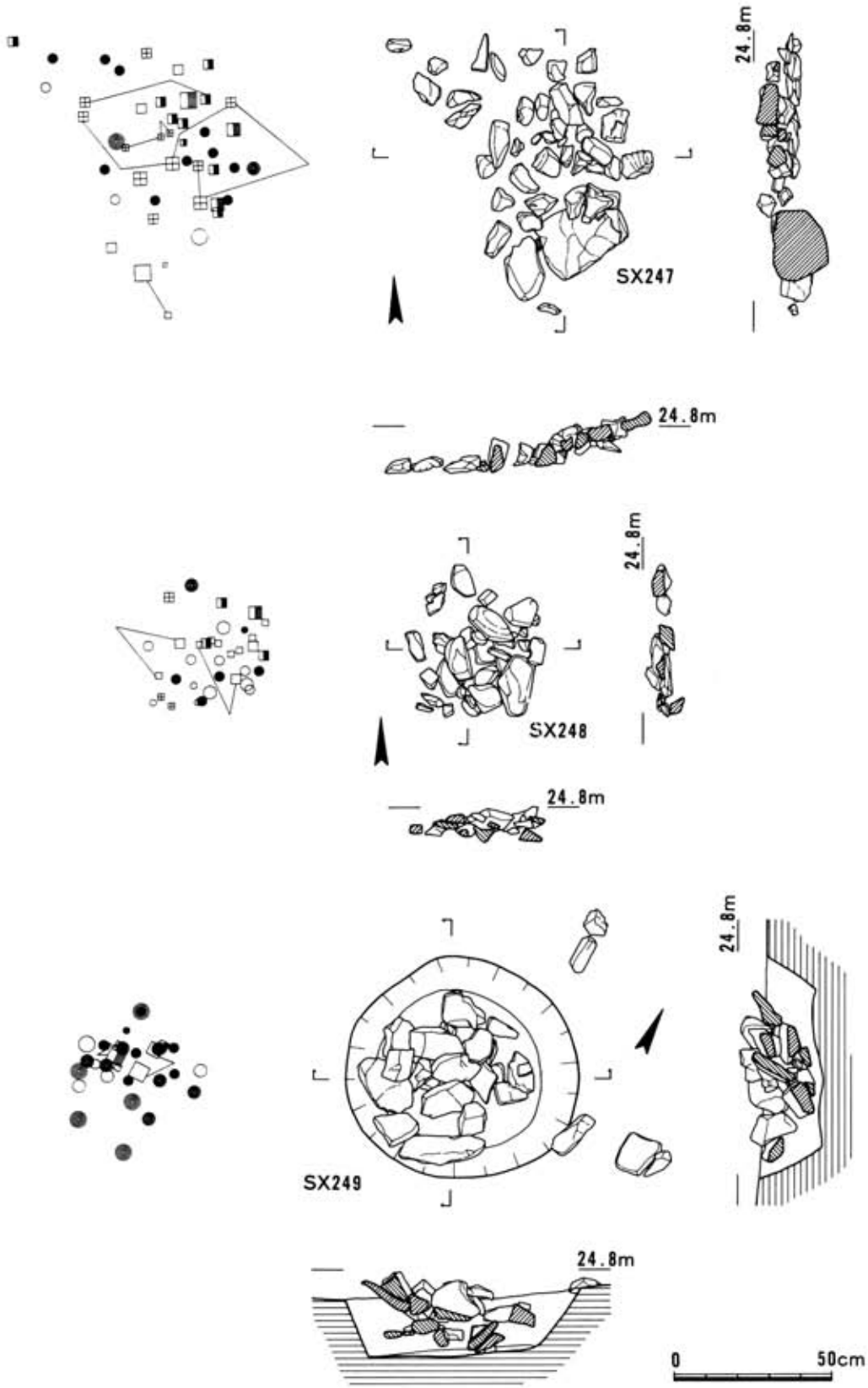


図23　集石14(1：20)

ＳＸ248（図23，写真図版６－６）

ＢＤ０７区画の南東寄りに位置し、南側にＳＸ247がある。径0.5mの範囲に大きさのまちまちな礫が集中するもので、下部に掘り込み等は認められなかった。

総礫数35点、総重量7,853ｇ、平均重量224.4ｇである。礫の破損状態は、完形礫が17点、破損礫が18点で、破損率は51.4％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が10点、割れ面非赤化礫が３点、非赤化礫が22点である。石質は花崗岩類が34点、非花崗岩類が１点である。礫の接合は２例で、非赤化礫同士の接合である。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ249（図23，写真図版６－７）

ＢＤ０７区画の北側中央部に位置する。径0.7m、深さ0.2mの土坑に大きめの礫が入っている。礫は土坑の外にも存在するが、集中するのは土坑中の径0.5mの範囲である。

総礫数31点、総重量21,042ｇ、平均重量678.8ｇである。礫の破損状態は、完形礫が24点、破損礫が７点で、破損率は22.6％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が22点、割れ面非赤化礫が１点、非赤化礫が８点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合は２例で、全面赤化礫同士の接合が１例、非赤化礫同士の接合が１例である。

遺物は、集石中から第２群土器が１点出土した。

ＳＸ250（図24，写真図版６－８）

ＢＥ０７区画の南辺やや東寄りに位置し、西側にＳＸ232がある。長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.15mの掘り込みの上部に礫が集中する。

総礫数30点、総重量14,331ｇ、平均重量477.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が15点、破損礫が15点で、破損率は50.0％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が16点、割れ面非赤化礫が５点、非赤化礫が９点である。石質は全て花崗岩類である。礫の接合例はない。

遺物は、集石中から第２群土器が１点出土した。

ＳＸ243（図24）

ＢＤ０６区画の北西隅に位置する。土層観察用の試掘坑に接しており、調査中に一部が崩落したため、個別図の作成を断念し取りあげのみ行った。構成礫の一部は位置が不明となり、包含層中の礫と区別できなくなったので、ここで報告できるのが本遺構の構成礫全てではないことを断っておく。本来は径0.5m程の広がりを有していたようである。

総礫数37点、総重量4,948ｇ、平均重量133.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が16点、破損礫が21点で、破損率は56.8％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が５点、非赤化礫が26点である。石質は花崗岩類が36点、非花崗岩類が１点である。礫の接合は２例で、全面赤化礫同士の接合が１例、割れ面非赤化礫同士の接合が１例である。

遺物は出土しなかった。

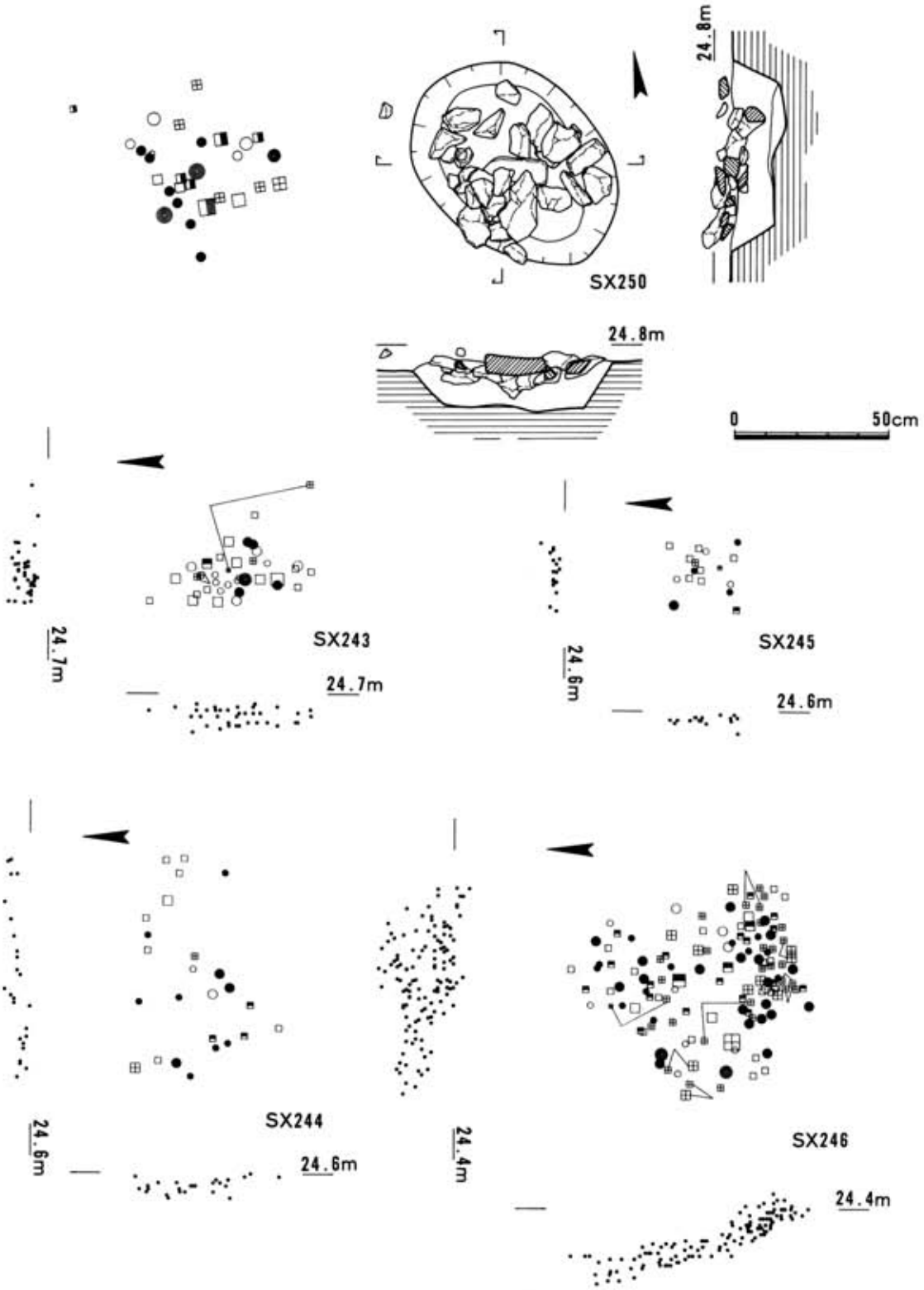

SX250
24.8m
24.8m
0
50cm
SX243
24.7m
24.7m
SX245
24.6m
24.6m
SX244
24.6m
24.6m
SX246
24.4m
24.4m

図24　集石15(1：20)

ＳＸ244（図24）

ＢＤ０６区画の北辺中央部に位置し、北側に接してＳＸ244が、南側に接してＳＸ245がある。調査中の帯水により崩壊の可能性が高かったため、個別実測図の作成を断念し、取り上げのみ行った。長軸0.7m、短軸0.5mの広がりを持ち、下部の掘り込み等は確認できなかった。

総礫数25点、総重量2,404ｇ、平均重量96.2ｇである。礫の破損状態は、完形礫が12点、破損礫が13点で、破損率は52.0％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が13点、割れ面非赤化礫が２点、非赤化礫が10点である。石質は花崗岩類が22点、非花崗岩類が３点である。礫の接合例はない。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ245（図24）

ＢＤ０６区画の北辺中央部に位置し、東側に接してＳＸ244が、西側にＳＸ206がある。ＳＸ244と同様に調査中の帯水により崩壊の可能性が高かったため、個別実測図の作成を断念し、取り上げのみ行った。径0.3mの範囲に礫がややまとまるもので、下部に掘り込み等は認められなかった。

総礫数17点、総重量726ｇ、平均重量42.7ｇである。礫の破損状態は、完形礫が７点、破損礫が10点で、破損率は58.8％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が６点、割れ面非赤化礫が１点、非赤化礫が10点である。石質は花崗岩類が15点、非花崗岩類が２点である。礫の接合例はない。

遺物は出土しなかった。

ＳＸ246（図24）

ＢＥ０５区画の西辺中央部に位置し、南に接してＳＸ241がある。ＳＸ245等と同様に調査中の帯水により崩壊の可能性が高かったため、個別実測図の作成を断念し、取り上げのみ行った。径0.8mの範囲に広がり、複数の遺構が重複したものである可能性も残る。

総礫数128点、総重量15,307ｇ、平均重量119.6ｇである。礫の破損状態は、完形礫が44点、破損礫が84点で、破損率は65.6％である。礫の赤化状態は、全面赤化礫が55点、割れ面非赤化礫が41点、非赤化礫が32点である。石質は花崗岩類が123点、非花崗岩類が５点である。礫の接合は８例で、内７例が遺構内の割れ面非赤化礫同士の接合、１例はＳＸ241との接合で非赤化礫同士である。

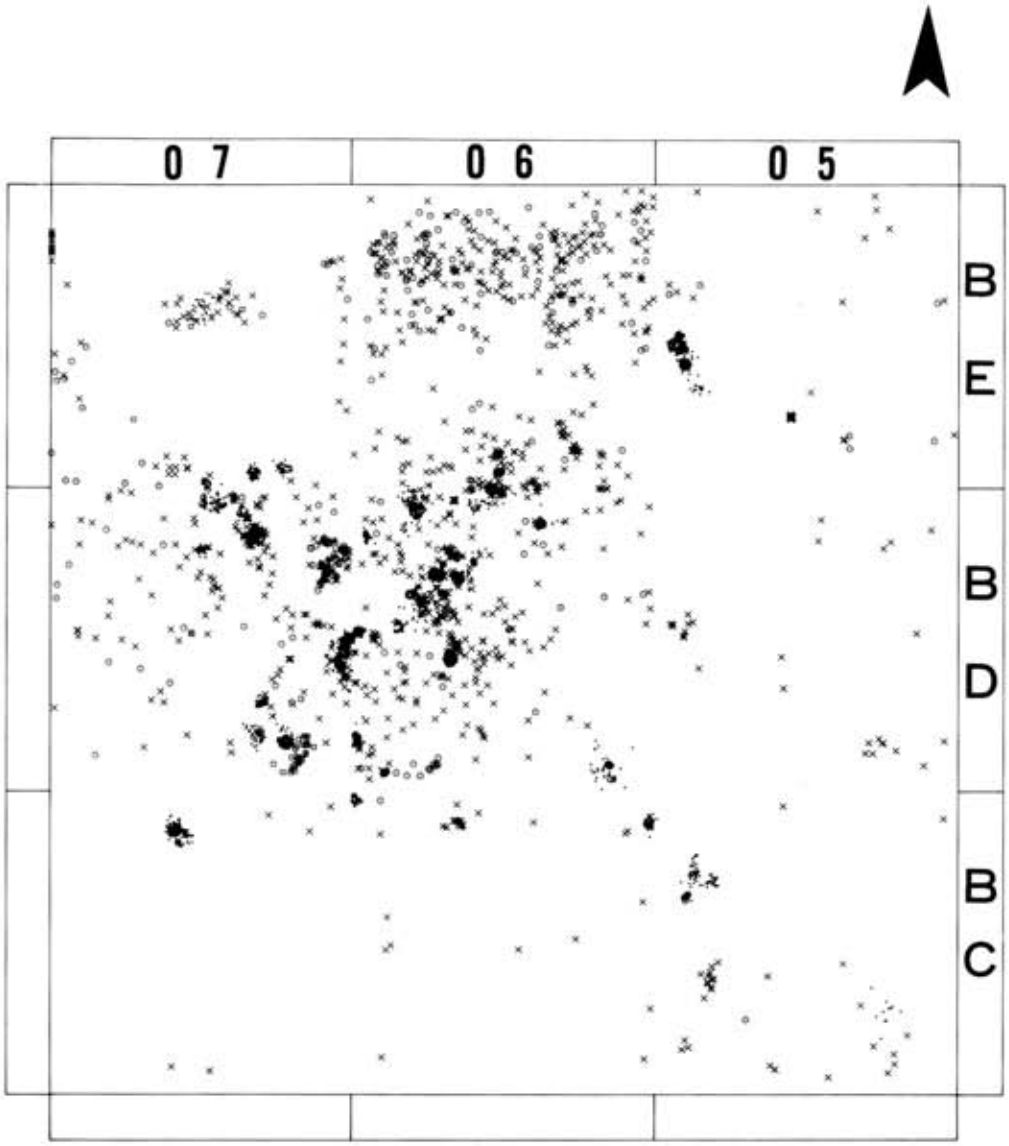
遺物は出土しなかった。

ＳＸ208（図26，写真図版４－３）

ＢＤ０５区画の西側中央部に位置する。長軸1.0m、短軸0.8mの範囲に礫と土器片が弱い集中部を成すもので、礫には赤化の認められるものはなく、周辺に炭化物等は全くなかった。出土した土器は１ないし２個体分の破片である。

表1　集石遺構一覧

遺構名	礫点数	重量(g)		石質		遺存状態		赤化状態		
		総重量	平均	花崗岩類	その他	完形	破損	全面赤化	割れ面非赤化	非赤化
SX201	97	19,417	200.2	93	4	60	37	42	18	37
SX202	57	10,201	179.0	51	6	34	23	17	10	30
SX203	63	8,657	137.4	59	4	57	6	35	4	24
SX204A	63	2,935	46.6	61	2	24	39	21	17	25
SX204B	73	6,316	86.5	69	4	18	55	22	28	23
SX205	35	2,182	62.3	35	0	20	15	15	3	17
SX206	125	29,523	236.2	123	2	73	52	44	34	47
SX207	126	13,552	107.6	122	4	71	55	51	42	33
SX209	170	6,654	39.1	165	5	141	29	61	13	96
SX210	132	16,224	122.9	129	3	101	31	44	21	67
SX211	36	6,348	176.3	34	2	11	25	5	13	18
SX213	22	9,673	439.7	22	0	12	10	6	8	8
SX216	23	1,581	68.7	21	2	8	15	6	9	8
SX217A	21	2,311	110.1	18	3	7	14	11	4	6
SX217B	329	6,335	19.3	313	16	39	290	53	97	179
SX217C	26	1,743	67.0	26	0	12	14	6	10	10
SX218	20	6,896	344.8	18	2	4	16	3	11	6
SX219	27	3,373	124.9	25	2	6	21	13	7	7
SX220	75	6,687	89.2	74	1	34	41	34	27	14
SX221	78	13,694	175.6	36	42	1	77	16	43	19
SX223	39	3,501	89.8	35	4	18	21	14	8	17
SX224	18	3,315	184.2	15	3	7	11	4	10	4
SX225	11	3,602	327.5	9	2	1	10	4	6	1
SX226	68	3,413	50.2	64	4	18	50	24	36	8
SX227	41	2,651	64.7	35	6	17	24	18	21	2
SX228	26	6,426	247.2	20	6	0	26	6	12	8
SX229	29	2,251	77.6	28	1	10	19	13	11	5
SX230	28	10,078	359.9	28	0	8	20	11	10	7
SX231	23	6,218	270.4	21	2	11	12	14	7	2
SX232	48	10,597	220.8	48	0	20	28	25	18	5
SX233	49	4,898	100.0	46	3	12	37	17	23	9
SX234	115	6,298	54.8	108	7	39	76	31	31	53
SX235	12	3,177	264.8	5	7	1	11	1	6	5
SX236	50	2,545	50.9	45	5	8	42	15	23	12
SX237	24	3,428	142.8	22	2	4	20	6	12	6
SX241	100	7,216	72.2	85	15	29	71	30	20	50
SX242	133	8,996	67.6	124	9	36	97	47	72	14
SX243	37	4,948	133.7	36	1	16	21	6	5	26
SX244	25	2,404	96.2	22	3	12	13	13	2	10
SX245	17	726	42.7	15	2	7	10	6	1	10
SX246	128	15,307	119.6	123	5	44	84	55	41	32
SX247	45	31,037	689.7	43	2	15	30	24	12	9
SX248	35	7,853	224.4	34	1	17	18	10	3	22
SX249	31	21,042	678.8	31	0	24	7	22	1	8
SX250	30	14,331	477.7	30	0	15	15	16	5	9
合計	2,760	360,560	—	2,566	194	1,122	1,638	937	815	1,008
平均	61.3	8,012.4	130.7	57.0	4.3	24.9	36.4	20.8	18.1	22.4



・集石　　○滑石混入土器

×滑石未混入土器　□個体１(15)　△個体２(16)

0　　10m

図25　下層の集石と土器の分布(１：250)

ii）遺物

a．遺構出土の縄紋土器（図26）

1～3はＳＸ202の下位から出土した土器で、同一個体である。胎土に滑石を混入し、内面は丁寧にナデている。口縁端部のやや下から縦に等間隔の幅広の沈線を引き、沈線の間に連続刺突紋を施す。

4～6はＳＸ207の範囲から出土した土器である。4は胎土に滑石を含み、外面に半截竹管による押引紋と凹線紋を施す。5・6は胎土に滑石を混入せず、5は上部を欠失するため不確実であるが、口縁部に近い部分を肥厚させ押引気味の連続刺突紋を施す。6は底部で円盤状の平底である。

7はＳＸ217Ｂから出土した土器で、胎土に滑石を混入せず上底状をなす底部である。

8はＳＸ218から出土した滑石混入土器で、押引紋と凹線紋を施す。

9・10はＳＸ221に接して出土した土器で、滑石を混入しない。9は口唇部を棒状工具によって窪ませ断面がＹ字状を示す口縁部で、内外面に貝殻条痕が顕著である。10は平底の底部で、やはり内外面に貝殻条痕を留める。

11はＳＸ249から出土した土器で、滑石を混入しない。ほぼ直行する口縁部で、口唇にやや深い連続刺突を施し、波状に成している。

以上は集石遺構に伴うものとして報告したが、厳密に言えば共伴関係は必ずしも明瞭でない。共時性は別としても、この中で確実に伴うものは7と11である。

12～14はＳＸ208から出土した土器で、いずれも滑石を混入しない。12は口縁部が断面Ｙ字状をなし、外面には二枚貝条痕を留める。13と同一個体である。14は僅かに上底気味の底部で、器面調整はナデでやや異なるが、部位の違いを考慮すれば12・13と同一個体の可能性は充分に考えられる。

b．縄紋土器（図27～図42）

中央部下層から出土した縄紋土器は位置を計測して取り上げたものが1,291点で、これ以外にＢＥ０７区画等で一括して採集したものがある。下層出土土器は大きく２群に分けることができる。第１群（図27～図36、15～66）は胎土に滑石粉を混入する土器である。第２群（図37～図42、67～124）は、胎土に滑石粉を混入しない土器で、器面に１次調整の条痕を留めるものが目立つ。確認できるものでは二枚貝条痕が多いが、ナデによる仕上げがなされているものも多く、原体を特定できないものも少なくない。取り上げ番号を付した1,291点の内訳では第１群が299点、第２群が992点であり、第２群が第１群の3.3倍程の点数である。図示した土器はむしろ第１群の方が多く、出土点数と矛盾しているが、その要因としては、①第２群の方が脆く小破片になっているものが多いため図化に耐える資料が実際よりも減った、②第２群の方が施紋土器の割合が小さいため図化される資料が実際よりも減った、等が考えられる。

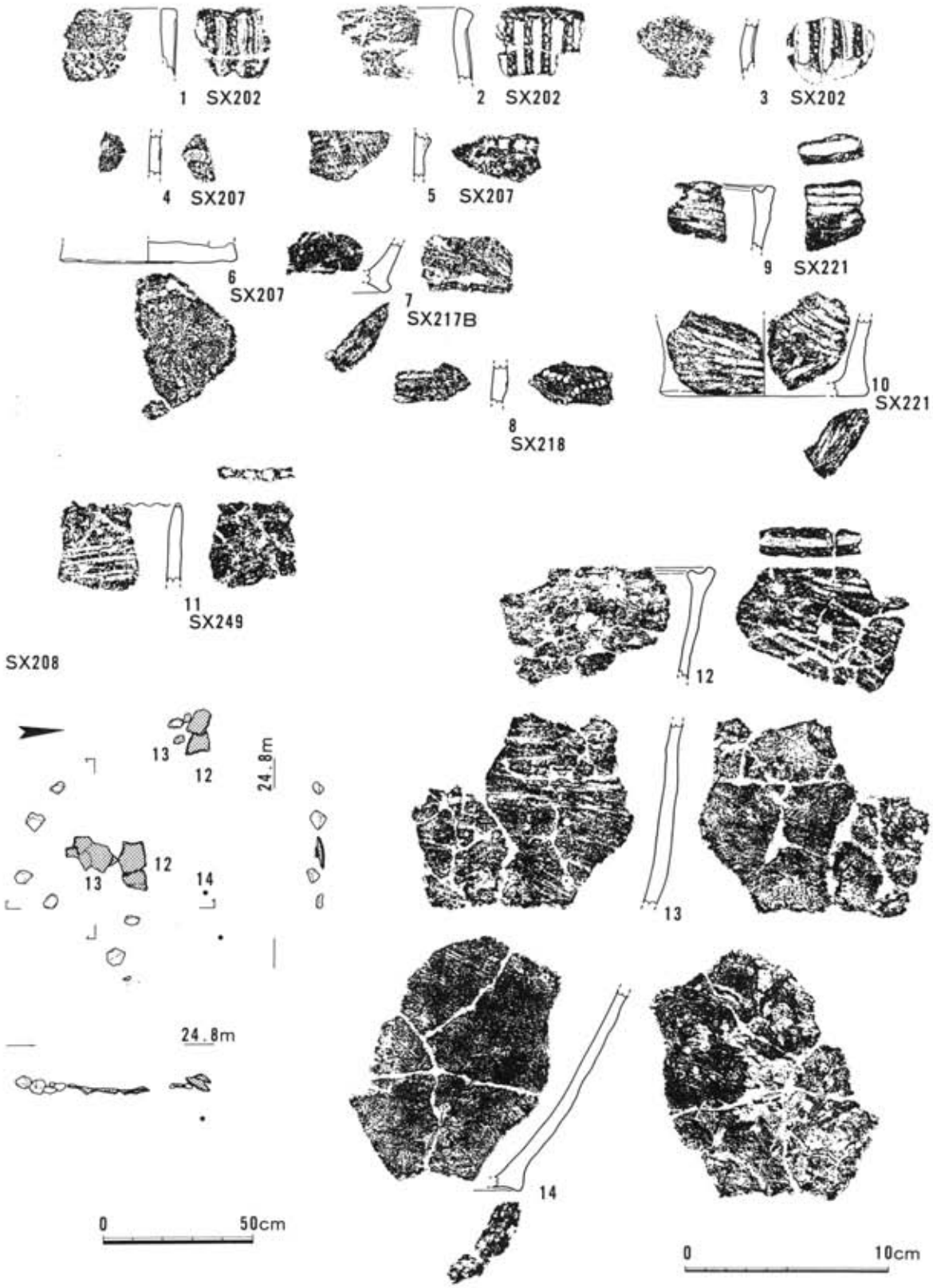


図26　集石中の土器（1～11；1：3），SX208(1：20)，SX208出土土器(12～14；1：3)

第１群ａ類（15～50）

第１群ａ類は、深鉢形土器（以下の記述では○○形土器を○○とのみ省略する）の口縁部外面あるいは口縁部外面と口唇部に、押引紋・連続刺突紋や、これに凹線紋を組み合わせた紋様を施すものである。

15は全形を知り得る資料で、ＳＸ209の南東に接した状況で破片が集中的に分布しており、周辺の遺物分布から見てＳＸ209に伴う個体の可能性がある。器形は口縁部が僅かに外反気味に直行し肩がやや張る深鉢で、底部は比較的小径で分厚く中央部に向かって上げ底状に浮き上がる。

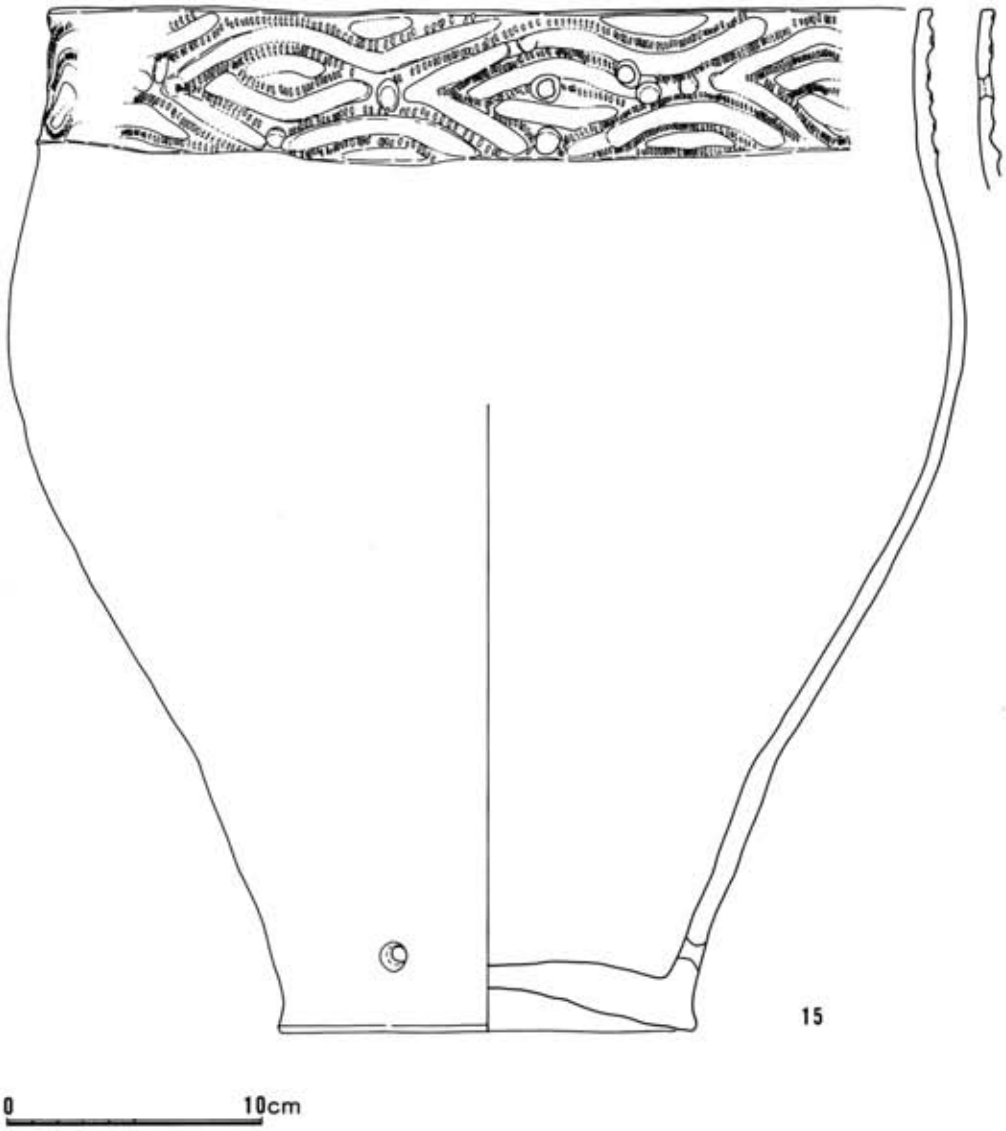


図27　下層の縄紋土器１（１：３）

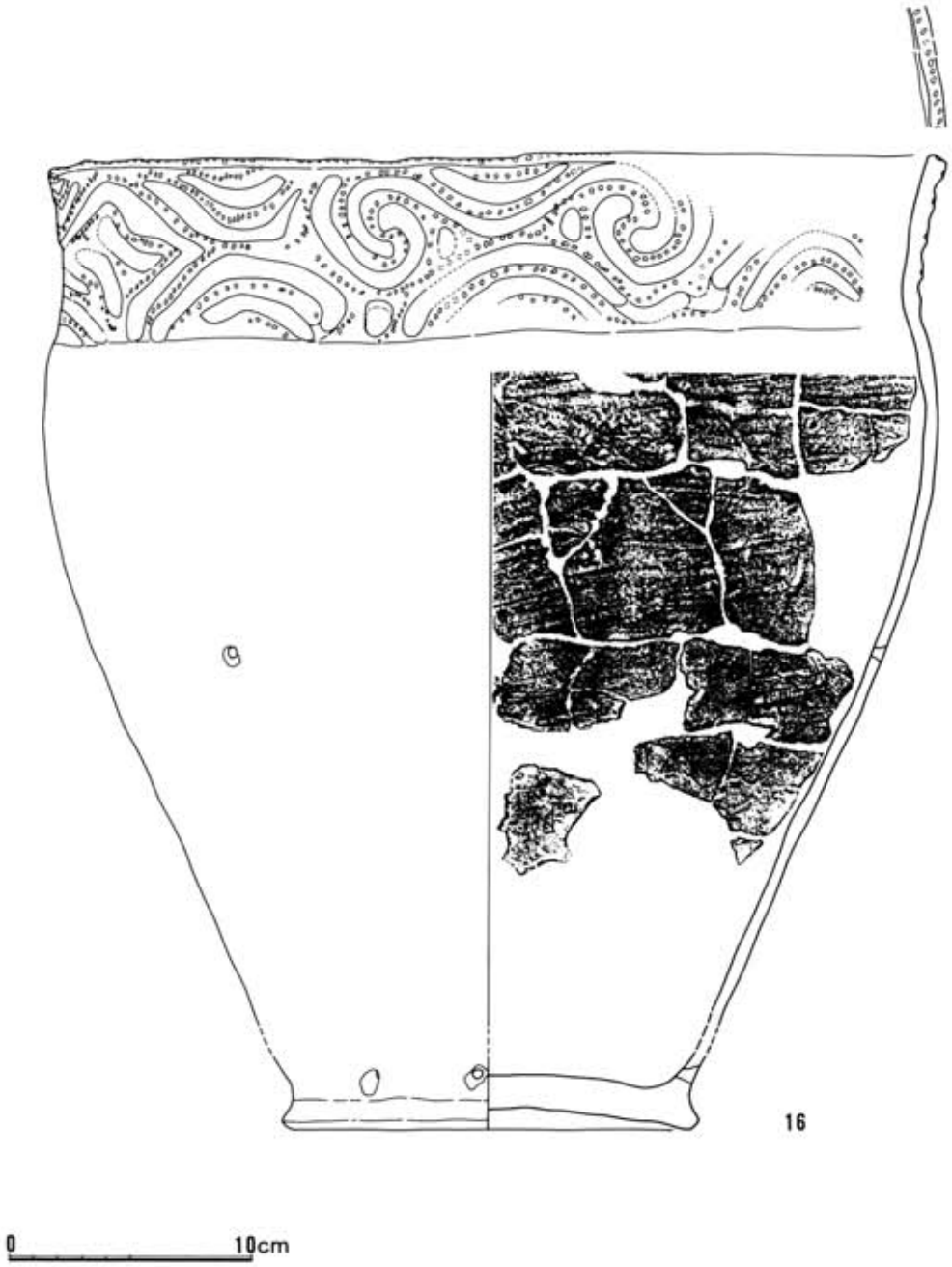


図28　下層の縄紋土器２（１：３）

口縁部は平口縁である。口縁部外面のみに施紋し、紋様帯の下端は僅かながらも明瞭な段を成している。紋様要素は指によるかと思われる凹線紋とその間に施した半截竹管によると思われる小さめの押引紋で、これに押点紋を加えている。底部が厚いのに対して、それ以外の部分の器壁は薄く作っており、特に胴部にその傾向が顕著である。内外面とも器面は最終的なナデ仕上げを行っており１次調整の痕跡は不明瞭であるが、胴部上半にはケズリに近い板ナデを施しているようである。底部の調整は軽くナデる程度である。口縁部に２箇所と底部付近に１箇所の焼成後の穿孔があり、補修孔と考えられる。

16は底部と胴部とが直接は接合しないが、ほぼ全形を知り得る資料である。ＢＤ０７区画東辺北寄りに集中的に分布していた。器形は口縁部が緩やかに外反して直行し肩のやや張る深鉢で、底部は分厚く外側にやや張り出す上げ底状である。口縁部は平口縁である。口縁部外面と口唇部に施紋し、口縁部の紋様は指によるかと思われる凹線紋とその間に施した押引気味の連続刺突紋で、これに押点紋を加えている。口唇部には押引気味の連続刺突紋を施している。底部と口縁部紋様帯の部分は厚く作っているが、胴部は薄い。内外面とも器面はナデ調整を行っ

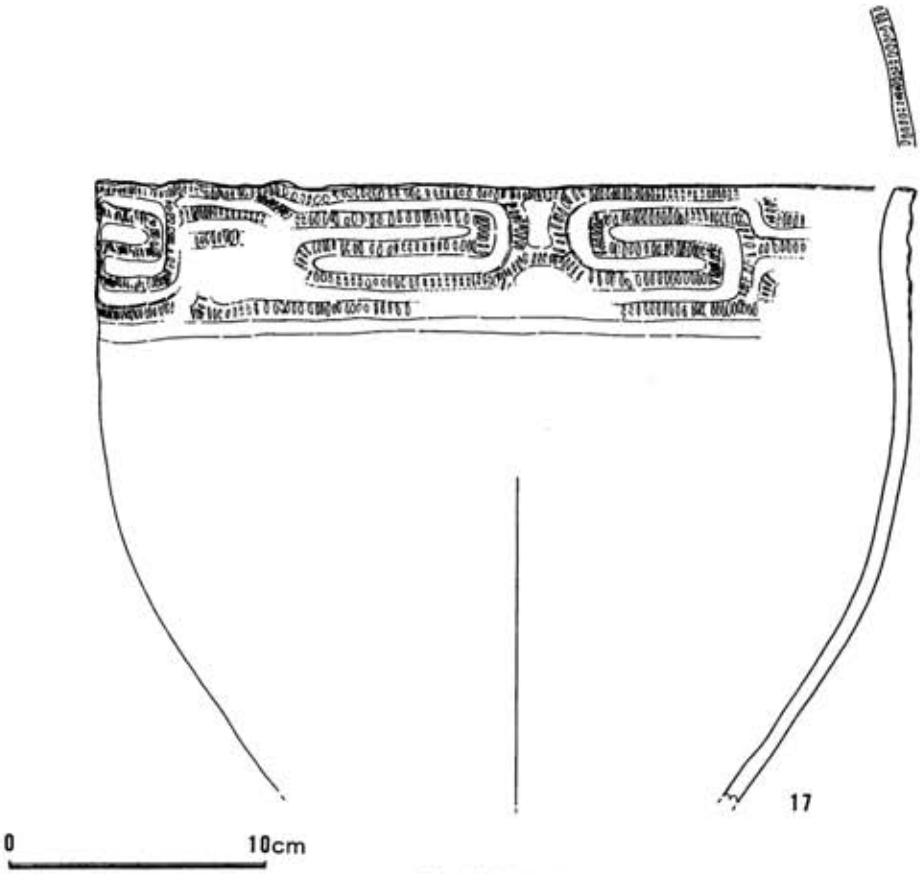


図29　下層の縄紋土器３（１：３）

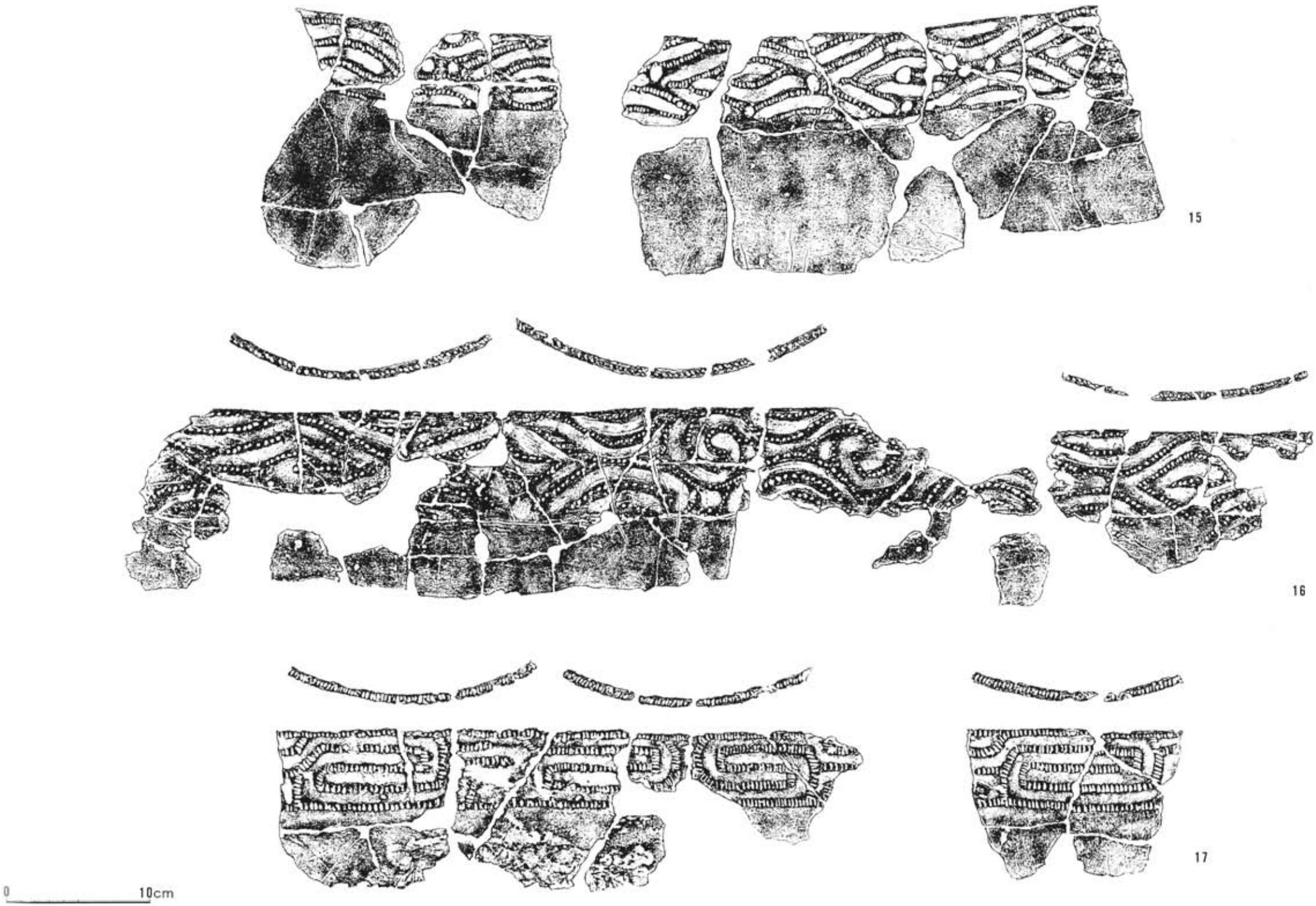


図30　下層の縄紋土器４　拓影による紋様の展開（１：３）

ているが、内面は比較的雑で１次調整の横方向の二枚貝条痕が観察される。また胴部外面はケズリを施して器壁の厚みを減らしているようである。底部の調整は15と同様に軽くナデる程度である。胴部に１箇所、底部に２箇所の焼成後の穿孔があり、補修孔と考えられる。

17は底部を欠くが、概ね全体の形状を窺える資料である。器形は口縁部が僅かに外反気味に直行する深鉢で、胴部の張りはほとんど無く底部に向かって急にすぼまる。口縁部は平口縁であるが、不明瞭ながら僅かに突起状の高まりが観察される。口縁部外面と口唇部に施紋し、口縁部紋様帯の下端を横方向の浅い凹線で画している。口縁部の紋様は押引気味の連続刺突紋と凹線紋で、口唇部には押引気味の連続刺突紋を施している。器壁は厚く、特に紋様帯の部分が顕著である。調整はナデにより１次調整の痕跡を留めておらず、外面は器面がやや荒れているが、内面は丁寧なナデで仕上げている。

18は口縁部が外反気味に立ち上がり胴部の上位が僅かに張る深鉢で、口縁部外面と口唇部に施紋する。口縁部紋様帯の下端を横方向の１条の押引紋で区切り、凹線紋を施した後、半截竹管による押引紋を加えている。外面は丁寧にナデているが、内面は横方向の二枚貝条痕を留める。

19は胴部がほとんど膨らまず、口縁部が僅かに外反気味に立ち上がる深鉢である。口縁部から胴部上半と口唇部に施紋する。口縁部から胴部上半の紋様帯は上下に２分割され、上部紋様帯が凹線紋を伴うのに対し、下部紋様帯は押引紋のみで構成される。口唇部には時計回りの押引紋を施している。外面は器面の荒れのため調整が不明瞭だが、内面は丁寧にナデている。

20は深鉢の胴部破片で、胴部上半に最大径をとり口縁部に向かって一旦径がすぼまる。口縁部から胴部上半部に施紋し、19と同様に口縁部から胴部上半の紋様帯は上下に２分割され、上部紋様帯が凹線紋を伴うのに対し、下部紋様帯は押引紋のみで構成される。外面は縦方向の線条痕を留め、内面は丁寧にナデている。胴部下半に２箇所の焼成後穿孔があり、補修孔と考えられる。

21は胴部の張りが弱く、口縁部が直行する深鉢である。口縁部外面と口唇部に施紋する。内外面とも器面は丁寧にナデている。口縁部は断面を台形状に肥厚させ、口唇部はやや内傾する。口縁は基本的には平口縁であるが、緩やかな突起が１箇所認められ、突起部の断面は内側に肥厚する。口縁部と口唇部に施紋するが、調査時の破損により紋様構成は今一つ不分明な部分がある。口唇部には時計回りの押引紋を施す。

22～25は同一個体と思われる資料である。径は復元できなかったが、大型で口縁部がほぼ直立する深鉢である。平口縁で鰭状の小さめの突起が３箇所以上ある。口縁部外面と口唇部に施紋する。口唇部の押引紋は22・23は時計回りに施すが、25は逆時計回りに施しており、24を見ると鰭状突起の一端を境として逆の方向に施していることが解る。器面は内外面とも丁寧にナデている。

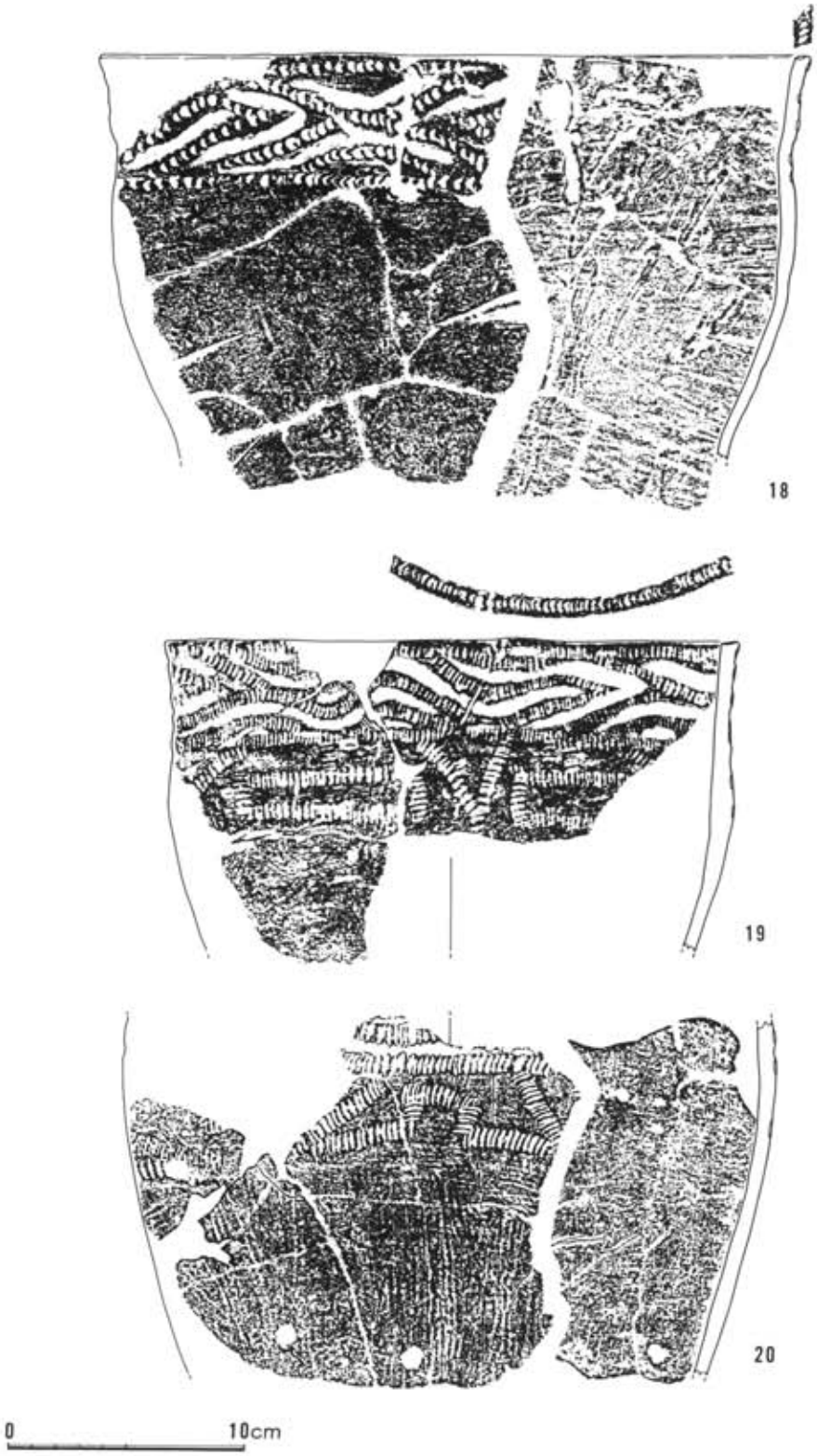


図31　下層の縄紋土器５（１：３）

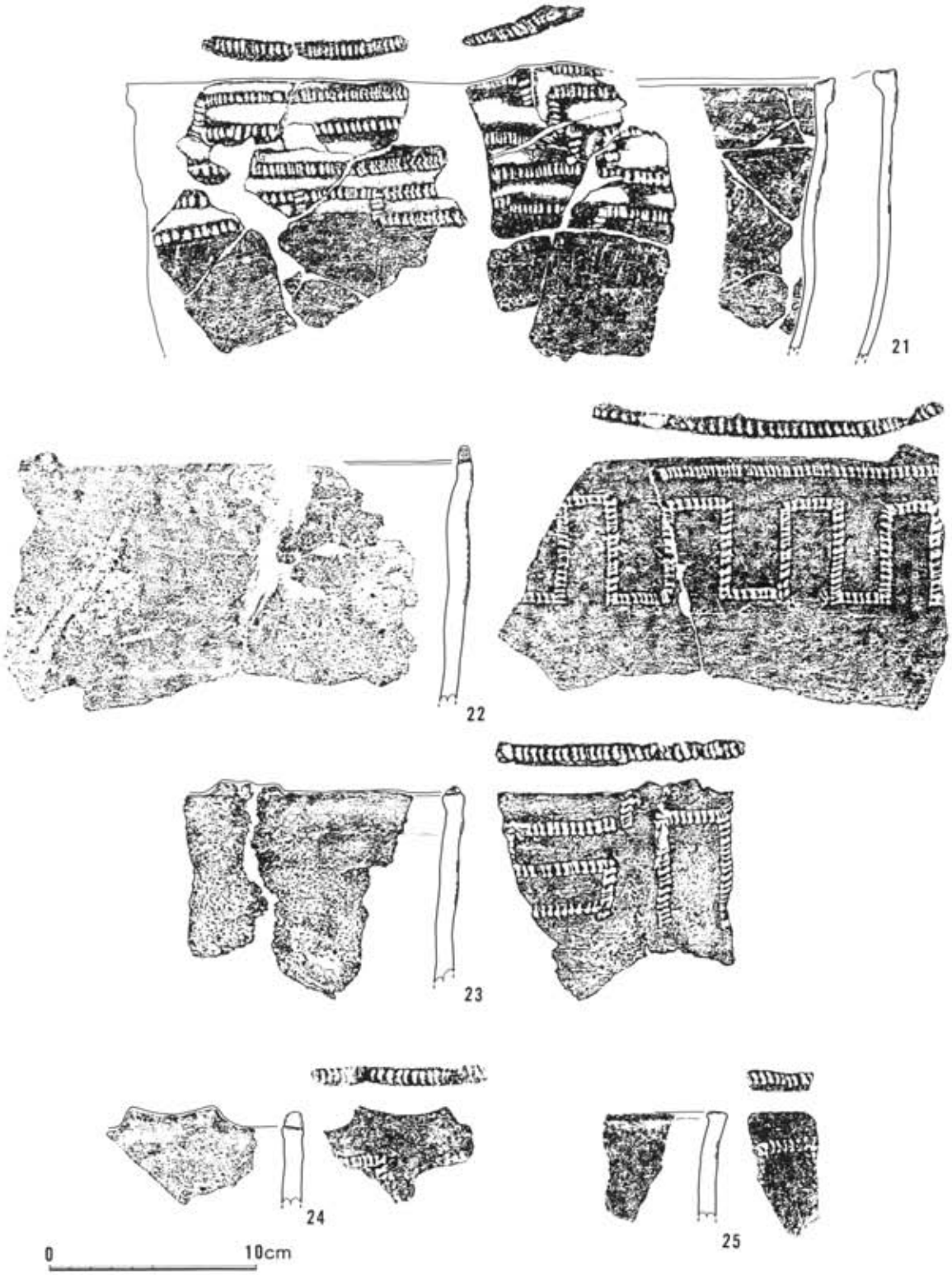


図32　下層の縄紋土器６（１：３）

26は口縁部に押引紋と凹線紋から成る紋様帯を有し、施紋部は器壁がやや厚い。27・28は同一個体の可能性がある資料で、口縁部の紋様は上から横方向の押引紋を２条、横方向の凹線紋を１条、再び横方向の押引紋を２条という構成である。口唇部には時計回りの押引紋を施す。27・28共に焼成後の穿孔があり、補修孔と考えられる。29はほぼ直行する口縁部で、口唇部に時計回りの押引紋を、口縁部外面に押引紋と凹線紋を施す。30は緩やかに外反して立ち上がる口縁部で、平口縁であるが突起を有している。口縁部に押引紋と凹線紋を施す。31は僅かに内湾気味に直行し端部がやや丸みを帯びる口縁部で、外面に押引紋を施す。32は緩やかに外反して立ち上がる口縁部で、外面に押引紋と凹線紋を交互に配している。33～35は口縁部の小破片で、いずれも外面に押引紋と凹線紋を、口唇部に押引紋を施す。36は直行する口縁部で、平口縁にやや大きめの突起を有する。外面に押引紋と凹線紋を、口唇部に時計回りの押引紋を施す。37は器面が剝落しており不明瞭であるが、僅かに内湾気味に直行する口縁部で、外面と口唇部に押引紋を施す。凹線紋の有無は不明である。38は口縁部の突起に続く部分の破片と思われる。外面には押点を施し、そこから両側に向かって押引紋を加えている。口唇部には逆時計回りの押引紋を施す。39も器面の剝落が著しい。僅かに外反気味に立ち上がる口縁部で、外面に押引紋と凹線紋を交互に配している。40も器面の剝落が著しい。41も器面の剝落が著しい。口縁部外面に押引紋と凹線紋、口唇部に時計回りの押引紋を施す。42は口縁部外面に押引紋と凹線紋、口唇部に時計回りの押引紋を施す。44は全体に摩耗が著しいが、外面と口唇部に押引紋を施す。45～50は端部を欠くが、口縁部に近い部分の破片である。いずれも凹線紋と押引紋を施す。48は39と、49は20と同一個体の可能性がある。

第１群ｂ類（51～54）

第１群ｂ類は、ａ類以外の第１群土器を一括した。

51は器形も紋様も特異な土器で、１個体のみ出土した。口縁部から肩部の破片で、胴部に向かって緩やかに膨らむが、全体の器形は明らかでない。口縁部には粘土帯を張り付け、下垂れの突帯状を成している。肥厚部の下端は指先で連続した押さえ付けの痕跡があり、一種の紋様状を呈している。紋様は太い粘土紐を張り付け、指でナデて断面三角形状に成した浮線による。

52は凹線紋のみで紋様が構成される土器で、１個体のみ出土した。平口縁で、突起が付く深鉢である。口縁部紋様帯を横方向の凹線で区切った後、斜方向の直線的な凹線紋を施す。凹線は拓影では意識して明瞭に出したが、実際には浅く施されており、典型的な阿高式の凹線とは異なる印象を強く受ける。

53は外傾する口縁部で、そのまま単純にすぼまる浅鉢なのか、頸部でくびれて胴部が再度膨らむ深鉢なのか不明である。口唇部は刻目を施し波状に成し、外面には３条の不明瞭な紋様状の沈線が横に走る。54は外傾する口縁部で、断面が三角形を成す。端部が面を成し、この部分に縦方向の沈線を刻目状に等間隔に施すが、それ以外の紋様はない。55は直行する口縁部で、

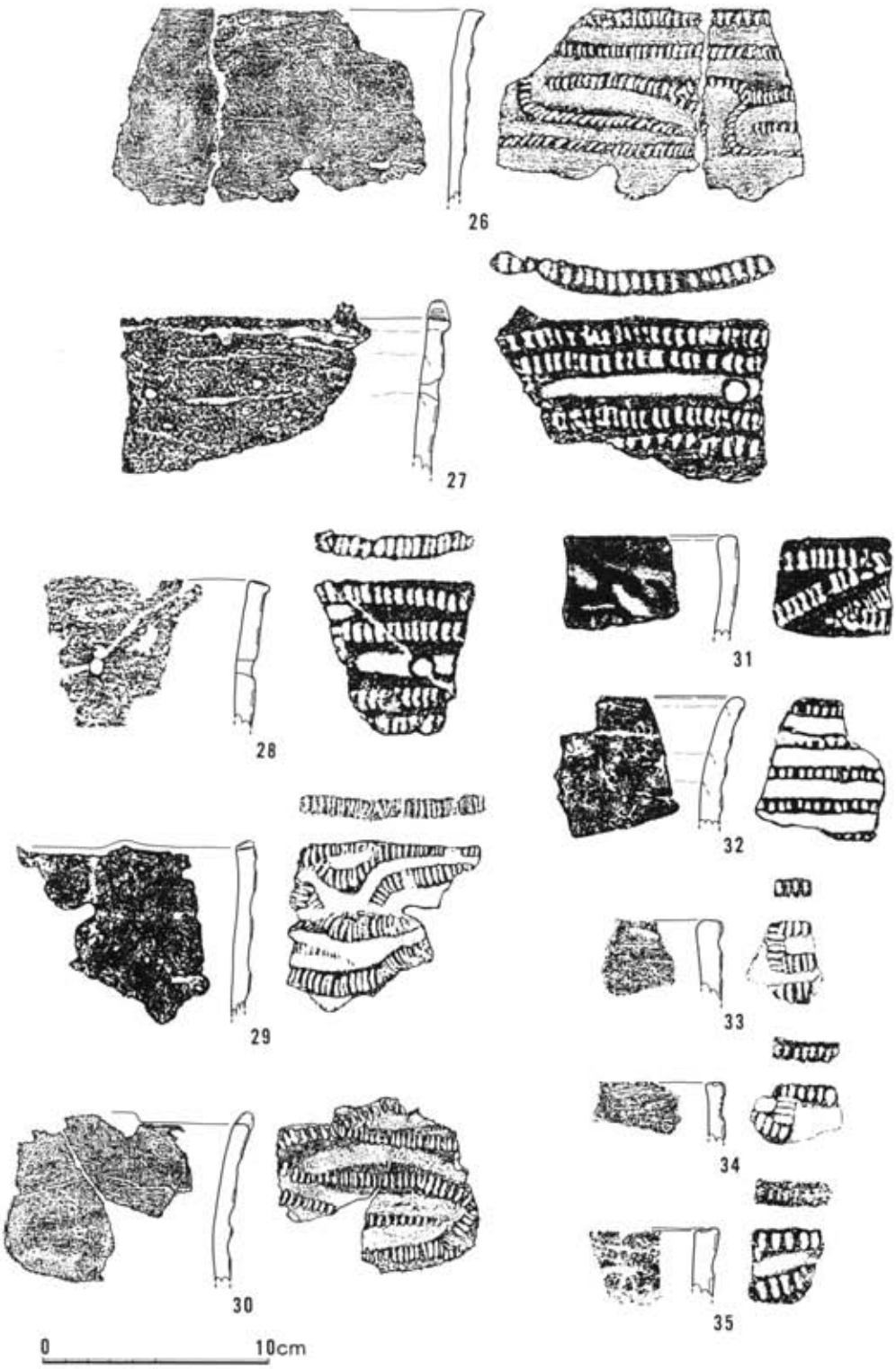


図33　下層の縄紋土器７（１：３）

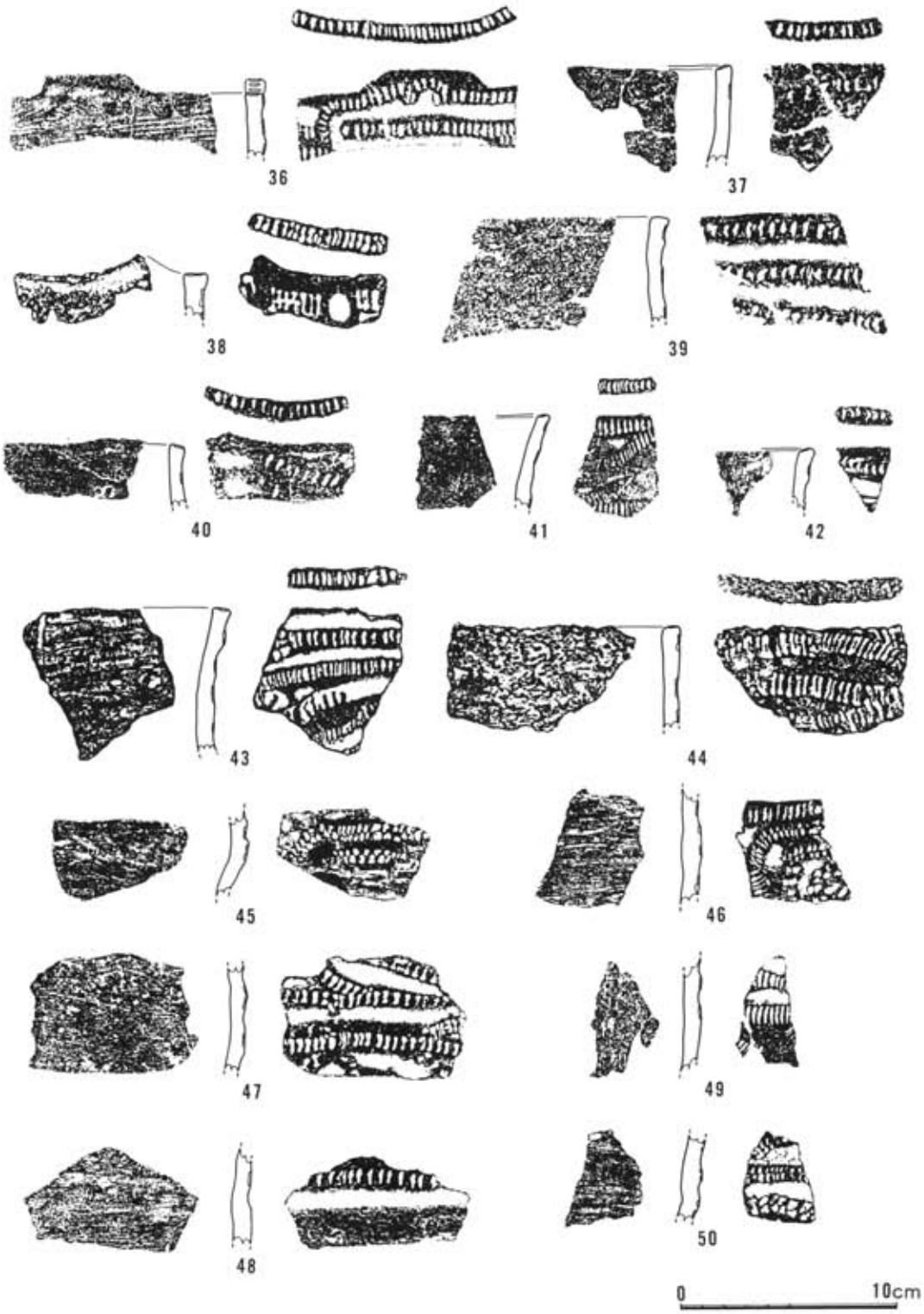


図34　下層の縄紋土器８（１：３）

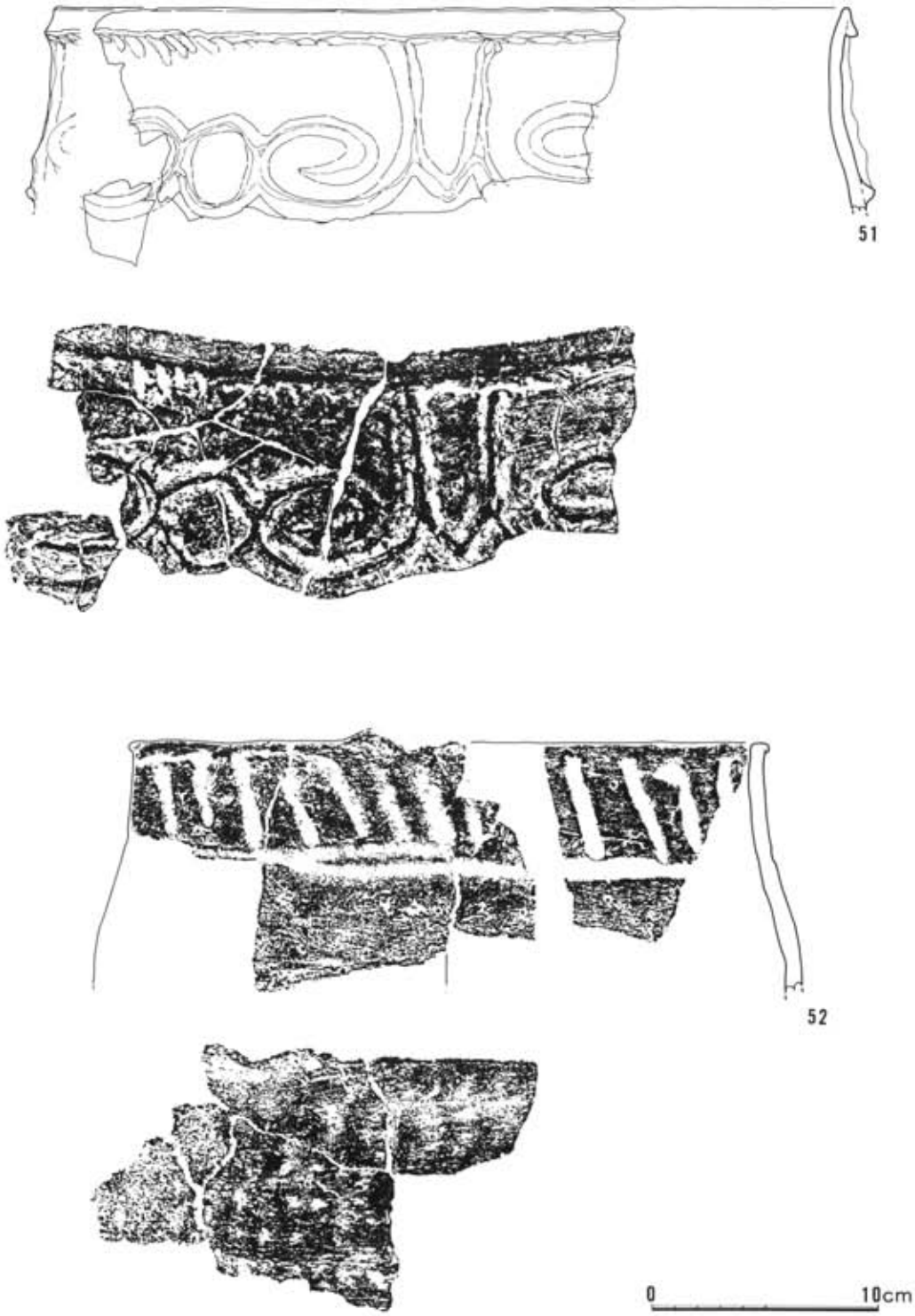


図35　下層の縄紋土器９（１：３）

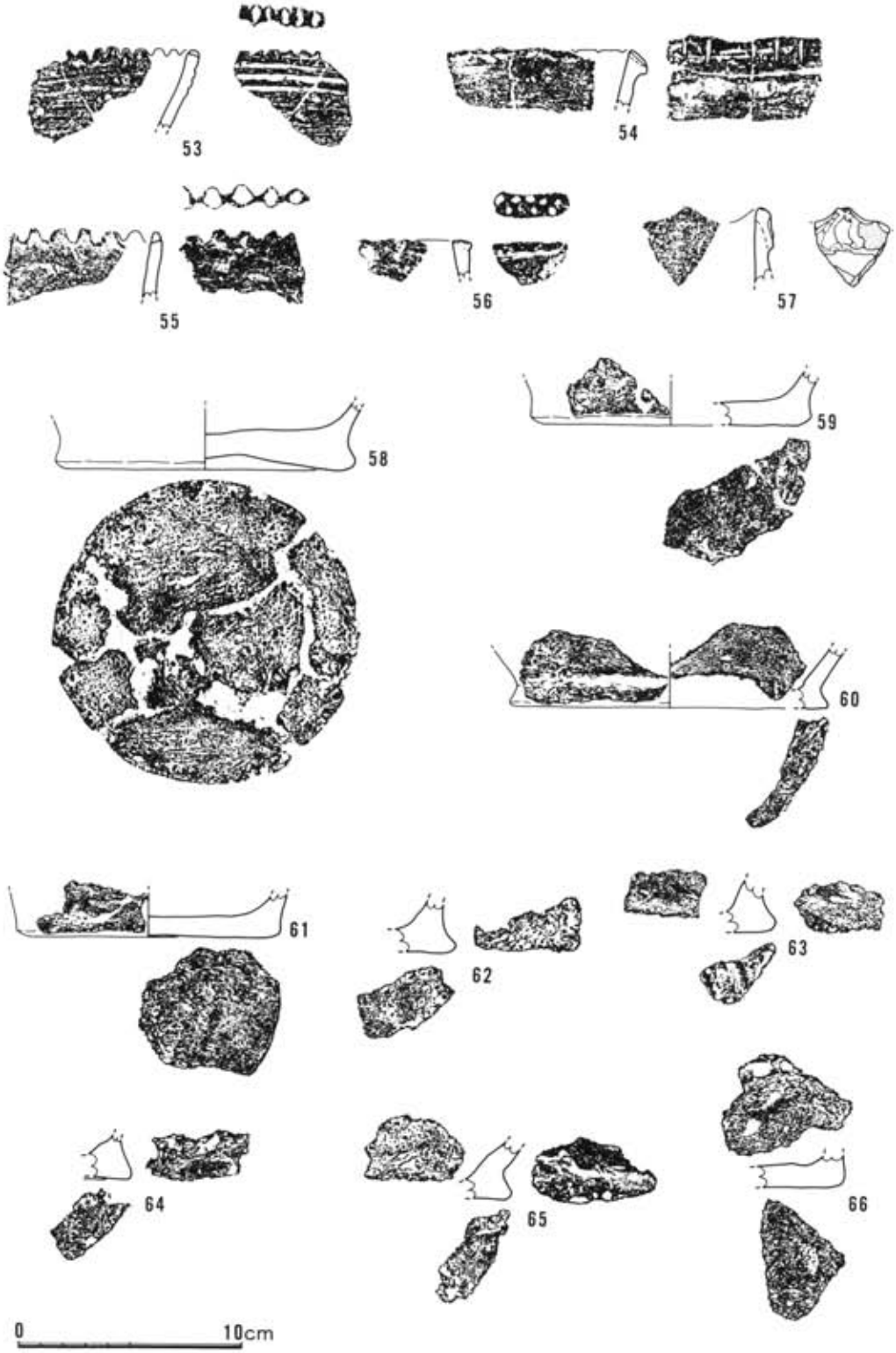


図36　下層の縄紋土器10(1：3)

口唇部を波状を作るのみで紋様は施していない。56は小破片のため不明瞭だが、やや内傾気味に直行する口縁部で、口唇部外端が僅かに張り出す。紋様は口唇部に押引気味の連続刺突紋を施すのみである。57も小破片で表面の一部が剥落しているため、やや不明瞭な資料である。ほぼ直行する口縁部で、口唇部はやや面取りする。外面の幅の狭い肥厚帯の上に粘土紐を張り付け、更に二又状工具による、押引に近い連続刺突紋を施している。

第1群底部（58～66）

58～66は滑石混入土器の底部である。いずれも平底ないし軽い上底で、阿高式系土器に特有とされる鯨脊椎骨の圧痕を持つものはない。外端部がやや張り出すものと、そのまま立ち上がるものとがある。

第2群a類（67・81～95）

第2群a類は、口縁部に粘土帯を張り付けて肥厚させるか、口縁下に突帯を巡らせて肥厚帯を作ったような効果を出した深鉢である。

67はやや内湾気味に大きく開いて、口縁部が直行する深鉢である。口縁部に幅3cm程の粘土張り付けによる薄い肥厚帯を設けている。口縁部上面に接して太い粘土紐を連続山形状に張り付けており、全体で4箇所か5箇所程度と推定される。81～85は口縁部外面に粘土帯を張り付けて肥厚させた一群である。81は内外面に貝殻条痕を顕著に留め、端部を波状に作る。82は波頂部を僅かに欠失する山形口縁で、肥厚部に竹管かと思われる原体による太めの沈線紋を施している。肥厚部とそれ以下の部分との段差は明瞭である。外面は丁寧にナデあげるが、内面には横方向の貝殻条痕を留める。83は口縁端部分を欠くが、肥厚帯にやはり竹管状の原体による沈線紋と刺突紋を施す。84・85は不確実ながら83と同一個体の可能性があるものである。内外面に不明瞭ながら貝殻条痕の痕跡が観察される。86は肥厚部にではなくその下位に沈線紋と刺突紋が施されている。87はやや薄手で大きく開く器形を有し、肥厚部というよりは突帯により区分するのみである。突帯より上位に細い沈線紋が施されている。88は肥厚部に意図的かどうか明らかでない斜方向の短沈線が認められる。89～95は肥厚部をつくるのみで、紋様を施さないものである。

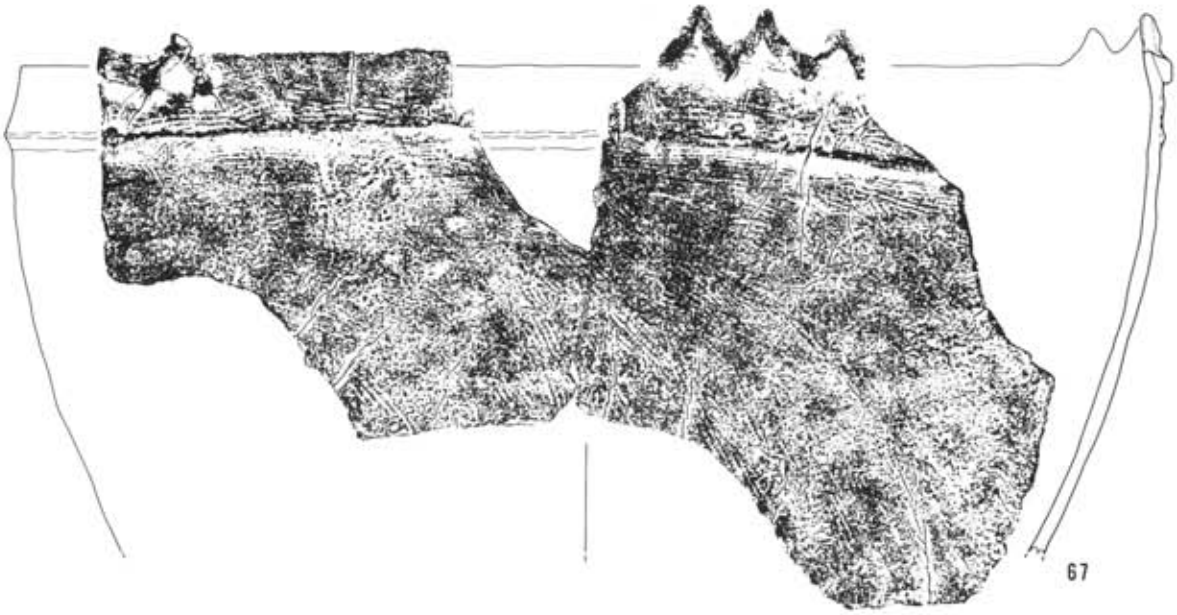
第2群b類（68～70）

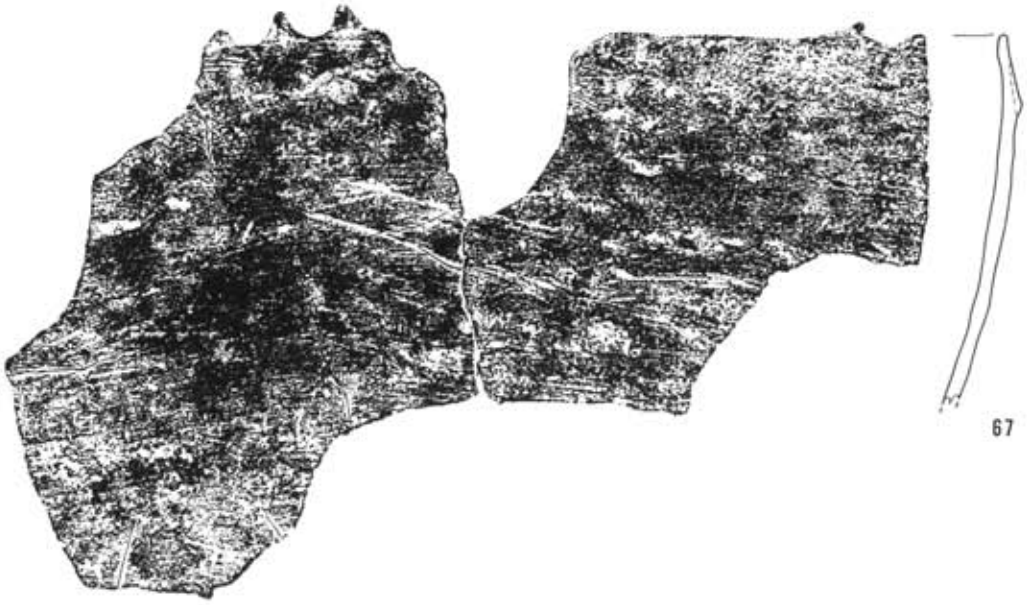
第2群b類は、口縁部が内湾して立ち上がる深鉢である。

68は強くくびれた頸部から一旦外傾し、再び屈曲して立ち上がる無紋の土器である。口縁部に恐らく4箇所程度と推定される突起を有する。69は口縁部が僅かに内反り気味に外傾して立ち上がる無紋土器で、やはり突起を有している。70は口縁部が短く内湾して立ち上がる土器で、口唇部に間隔を取った刺突紋を施す。

第2群c類（71～101）

第2群c類は、a・b類以外で時期的に近いと思われるものである。





0 10cm

図37　下層の縄紋土器11(1：3)

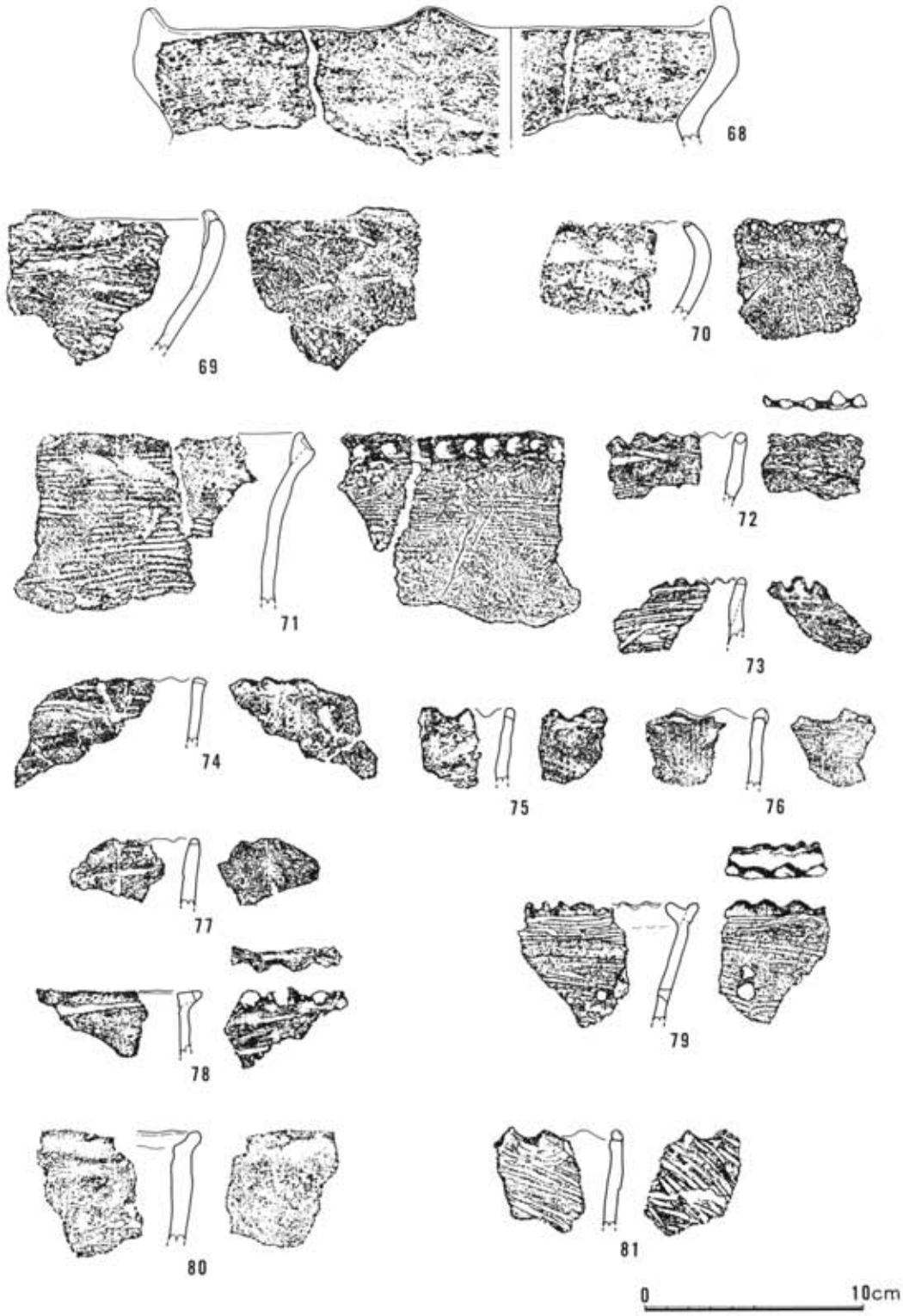


図38　下層の縄紋土器12(1：3)

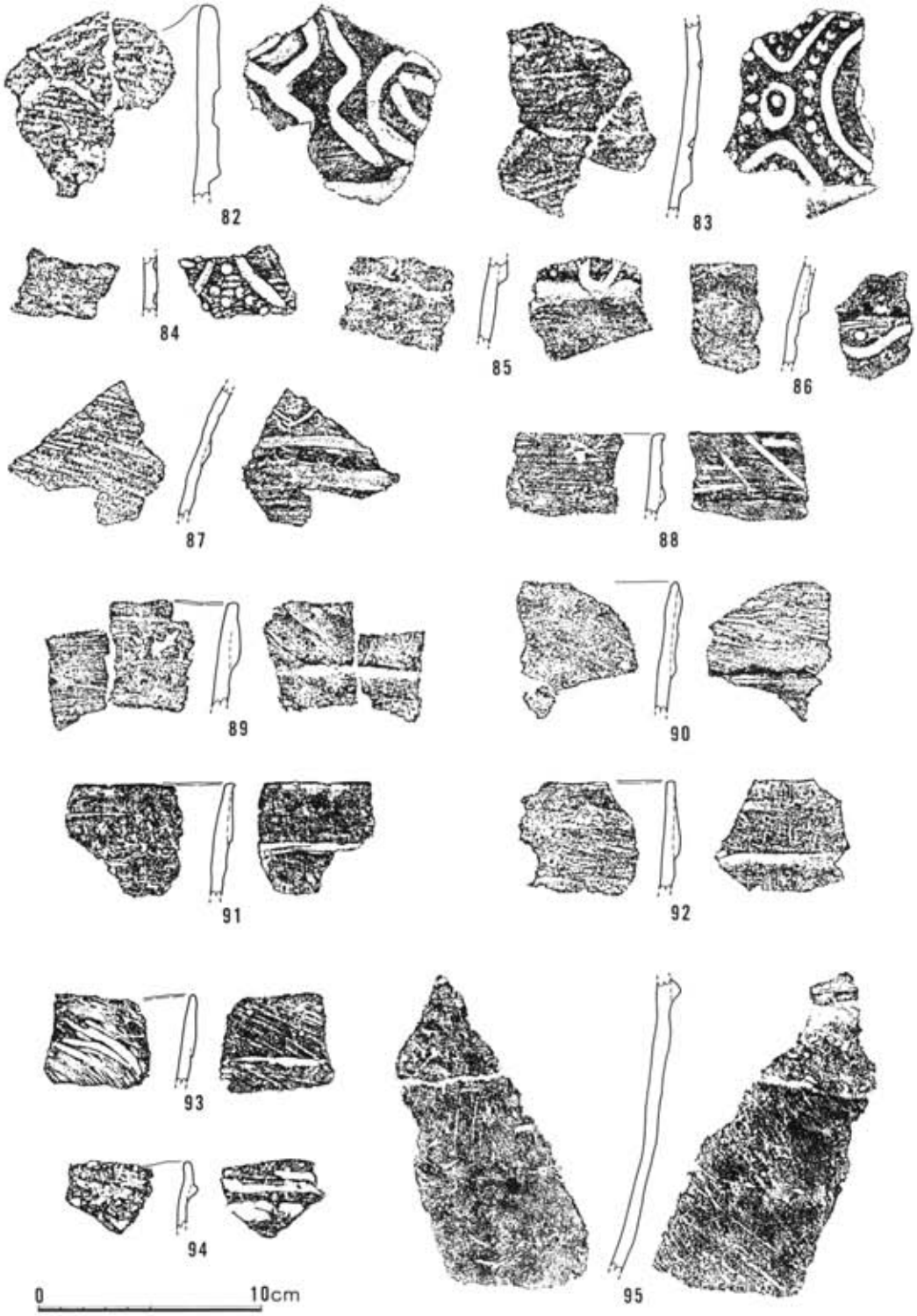


図39　下層の縄紋土器13(1：3)

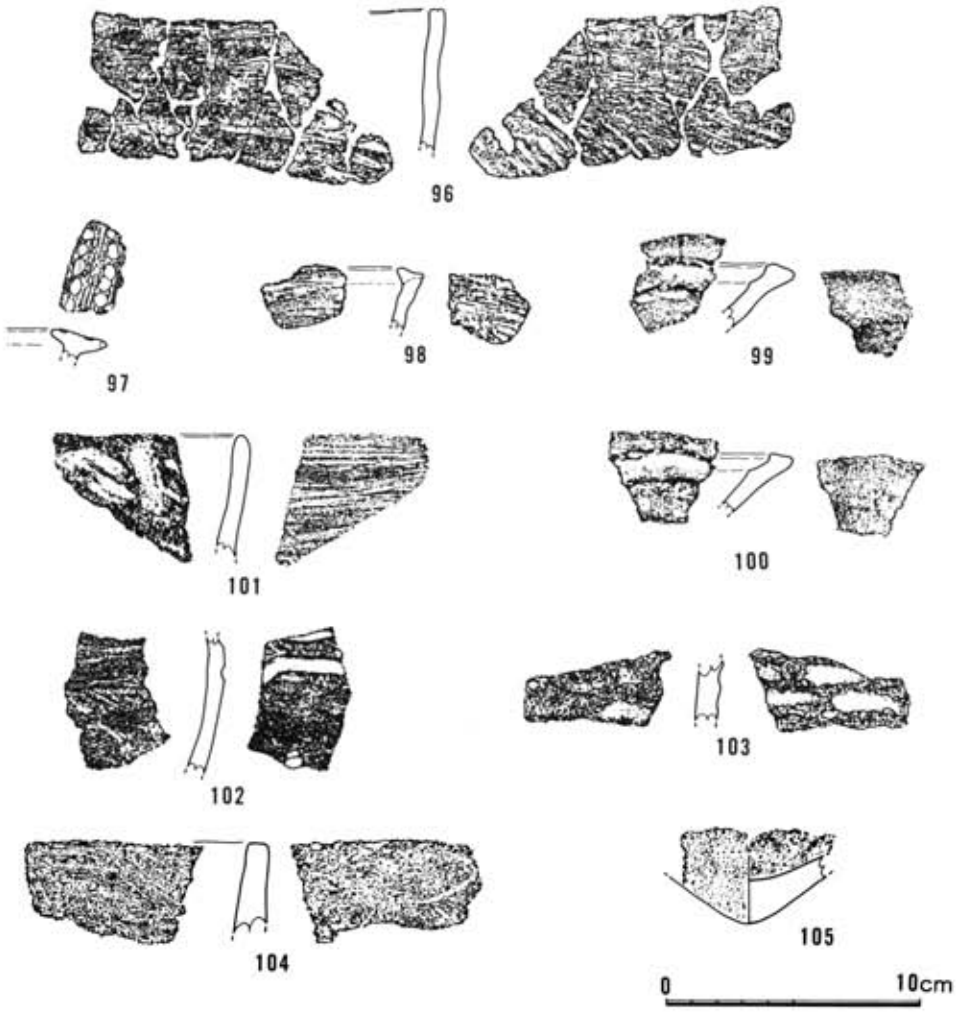


図40　下層の縄紋土器14（1：3）

71は緩やかに外湾しながら立ち上がり、端部に粘土帯を張り付けて断面三角形に成した深鉢形で、端部外面に太い原体による押引紋を有する。内外面に横方向の貝殻条痕を留める。72～77は直行する口縁部で、口唇部を波状につくるものである。２次調整のナデが充分でないものは貝殻条痕を留める。78は粘土紐を張り付け断面Ｌ字状に成した口縁部の外端に刻目を入れて波状に仕上げたものである。79は外傾しつつ立ち上がる口縁部の内側に粘土帯を張り付け、断面をＹ字状にした土器で、外側と内側の双方の端部を波状につくる以外は無紋である。補修孔と思われる焼成後の穿孔が１箇所認められる。内外面に横方向の貝殻条痕を留める。80は口縁部が受け口状に短く外折する無紋の土器で、器形は不明である。96は直行する口縁部で、口唇部を沈線状に作る。内外面に横方向の貝殻条痕を留めるが、紋様はない。97は口縁部をＴ字状に作る土器で、やや広くとった口唇部に２列の押引紋を施し、外端部を波状に作っている。１次調整は貝殻条痕である。98は口縁端部の内面に粘土帯を張り付け短く突出させた土器で、内外面に貝殻条痕を留めるが、紋様は認められない。99・100は同一個体で、小破片のため断定できないが、浅鉢として報告する。内面の口縁端部とやや下位に弱い浮線状の張り出しがある。101は僅かに内湾気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸く仕上げる。外面に貝殻条痕の痕跡を留め、紋様は施していない。

第２群ｄ類（102～105）

ｄ類とした102～105は、滑石を含まないことから便宜的に第２群の中には含めたが、胎土・調整等が先述のａ～ｃ類とはやや異質なもので、別時期の所産である可能性が強い。102は沈線紋を施す土器で、小破片のため器形などは不明である。103はやや厚手の土器で、器面は摩耗が著しい。外面に横方向の太い沈線を施す。104は口縁部で、端部は丁寧に面取りしやや角張っている。器面は著しく摩耗しており調整痕や紋様は全く観察されない。105は著しく摩耗した尖底で、器面調整や紋様は認められない。出土位置も下部の粗砂層中であり、混入と判断する。

第２群底部（106～124）

106～124は滑石を混入しない一群の底部である。１次調整痕を留めるものはいずれも貝殻条痕であり、丁寧にナデられたものもある。106～122は若干の差異はあるものの、上げ底に作る特徴を共有し、更に119～121は外端部を波状につくる独特の底部である。123は端部が大きく張り出し、一旦くびれて大きく開きながら胴部に連なる平底である。124は真っすぐ立ち上がる平底で、小型の深鉢と推定される。

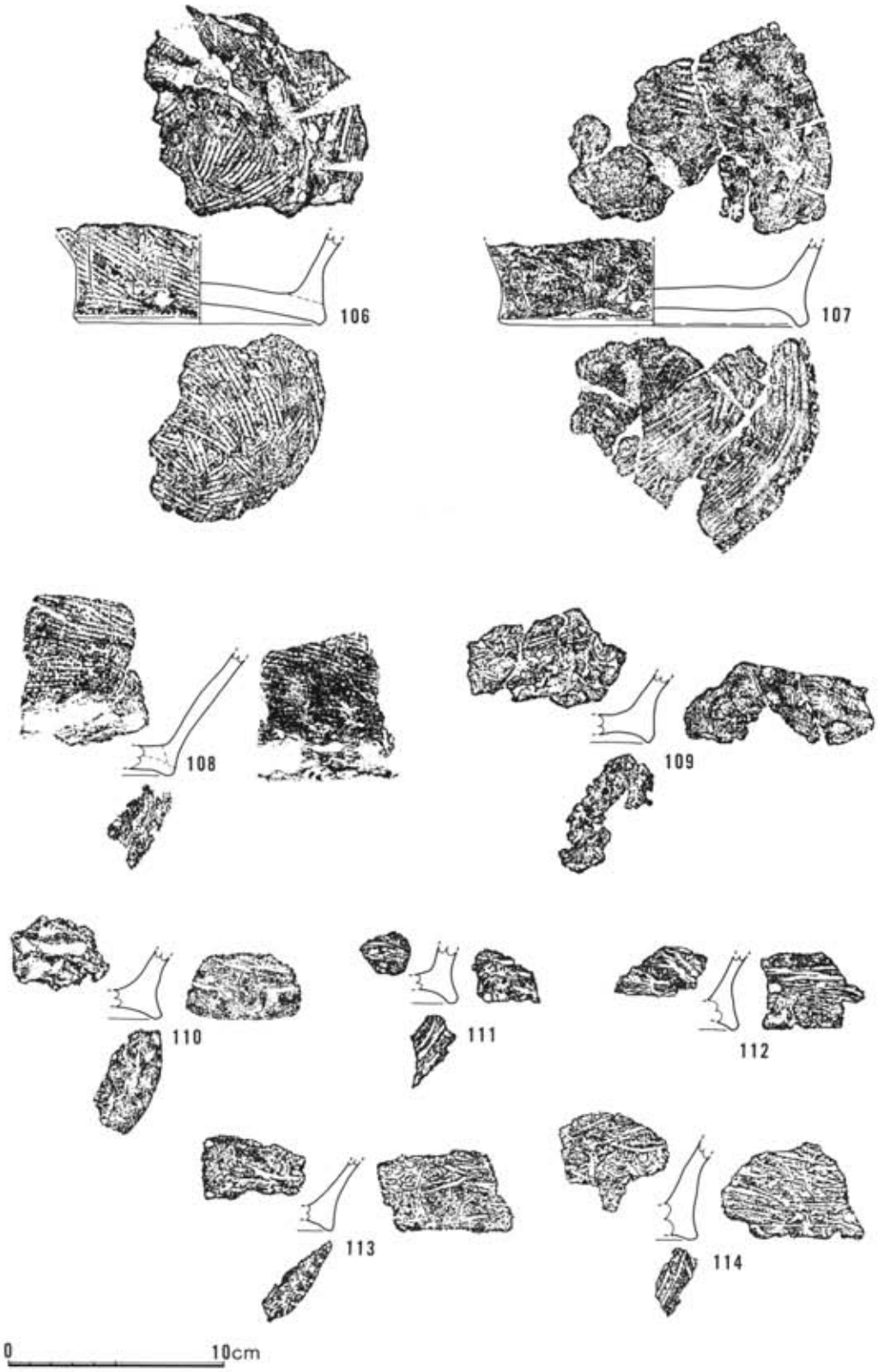


図41　下層の縄紋土器15(1：3)

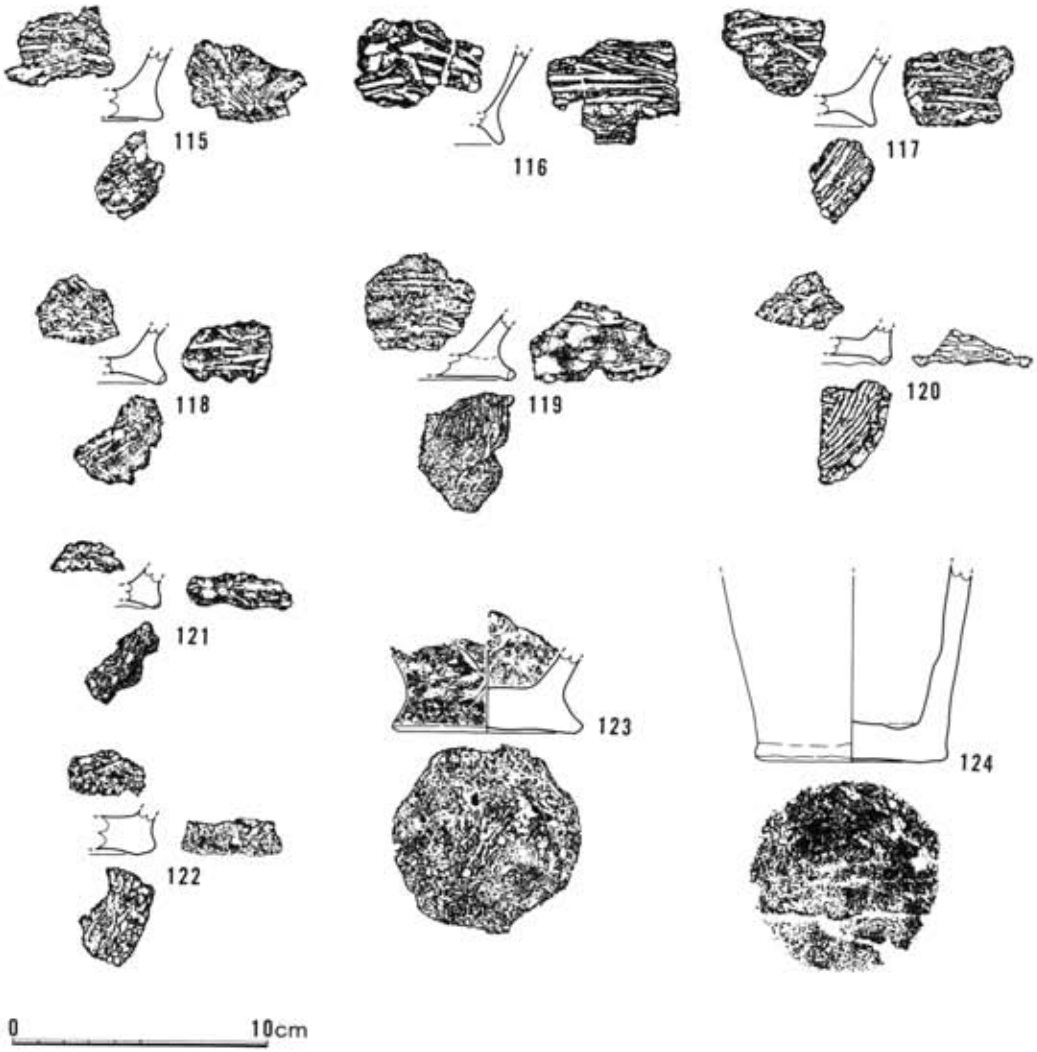


図42　下層の縄紋土器16(1：3)

c．石器（図44～図49）

中央部下層から出土した石器は、位置を計測して取り上げたもので総数402点を数える。その内訳は石鏃30点、削器21点、微細剥離痕ある剥片（以下、ＵＦとする）３点、石斧１点、磨石類５点、石錘７点、石核５点、大型剥片168点、微細剥片162点である。削器としたものは一辺の1/2以上に及ぶ連続的な加工を施した刃部を有するもので、いわゆる石匙もこの中に含める。磨石類としたものは敲石と磨石の２種を含むが、兼用と思われるものもあるので、ここでは一括した。石斧としたものは磨製石斧の可能性がある断片資料で、図示しなかった。大型剥片と微細剥片については、全く便宜的に長さ２cm以上を大型剥片、未満を微細剥片とした。通常用いられる剥片と砕片の区分が現実的にはかなり難しいと判断したからでもある。両者を合わせて剥片と呼ぶため、本報告で言う剥片とは通例の剥片と砕片を合わせたものを指すことになる。石材は讃岐岩質安山岩が295点で73％を占め、次いで黒曜岩が94点で23％、その他の石材が13点で３％である。黒曜岩を用いた製品は石鏃のみであり、讃岐岩質安山岩は石鏃、削器、ＵＦに用いられている。その他の石材は礫石器の素材としてのみ用いられている。

図43は下層の石器分布を示したものである。ＢＥ０６区画からＢＥ０７区画にかけての帯状の集中部については現位置を遊離したものである可能性が強いので、取り敢えず考慮外とすると、やはり土器や集石・礫の分布と同様にＢＤ０６・ＢＤ０７区画を中心としたまとまりが明らかである。その一方で、大きなこの分布域の中では比較的散漫な出土状態であり、取り立てて集中度の強い部分などは認められない。強いて言えば、集石と直接重なるというよりは、集石群の脇や間の部分に分布するような傾向を指摘できようか。廃棄と遺棄の認定の問題はあるが、集石が求心的な位置を占めていたとするよりも、集石をその一部に取り込んだ形で生活空間が広がっていたとみる方が理解しやすい。

表２　下層の石器組成

種別 / 石材	石鏃	削器	ＵＦ	石斧	磨石	石錘	石器小計	大型剥片	微細剥片	石核	素材小計	計
黒曜岩	11	－	－	－	－	－	(11)	23	60	－	(83)	94
安山岩	19	21	3	－	－	－	(43)	145	102	5	(252)	295
その他	－	－	－	1	5	7	(13)	－	－	－	－	13
計	30	21	3	1	5	7	(67)	168	162	5	(335)	402

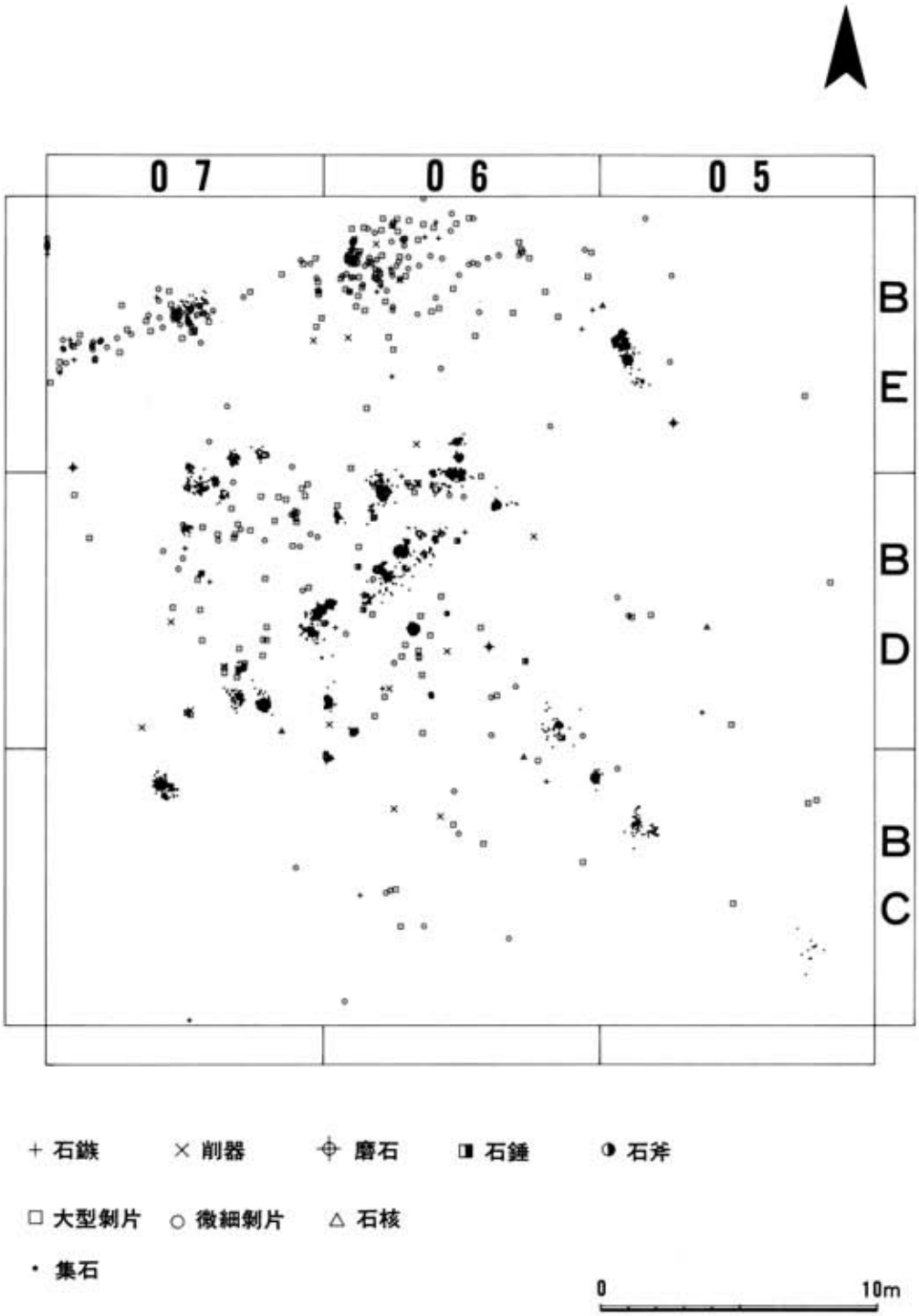


図43　下層の集石と石器の分布(1：250)

石鏃（125～159）　30点出土し、これら全てを一括出土の５点と併せて図示した。基部の形状等、平面形に基づく分類が可能であるが、ここでは特徴的ないくつかの個別例について述べ、それ以外については図示するに留める。125はやや大型の石鏃で、基部は僅かに張り出す。126・127は全体に粗い調整で、126は主要剥離面側には調整加工を施しておらず、127は片方の側縁と基部にのみ連続した調整を加えている。133は片面に主要剥離面を大きく残し、素材剥片の歪みを留めている。134は側縁が鋸歯状を成す。159は未製品と思われる資料である。一面は調整剥離がほぼ加わるが、もう片面は主要剥離面を残したままで、目的とする大きさや形状を確保できなかったために製作が放棄されたものらしい。

削器（160～170）　21点出土し、うち10点を試掘調査時に出土した１点と併せて図示した。160は一端を欠くが、ほぼ二等辺三角形の削器で、面的な調整加工からも、125のような大型の石鏃の可能性が残るが、ここでは削器とした。161は周縁に角度のある調整加工を施して刃部を形成したものである。刃部の両面とも加工が施されており、あるいは掻器とすべきかもしれない。表面は風化が著しく、時期的に縄紋中期より古いものである可能性がある。162は確認調査のＢ－９試掘坑から出土したもので、いわゆる縦型の石匙である。横長剥片を横位に用い、一端に広いつまみ部を作出し、やや不連続な調整加工を施して刃部を形成している。163はいわゆる横型の石匙で、刃部はやや丁寧な調整加工によって作出している。164・165は厚みのある剥片ないし残核を素材とし、面的な調整加工を施したものである。166・167は素材剥片の形状を大きく改変せずに１ないし２辺に浅くやや丁寧な調整加工を施したものである。168～170は大型の剥片を用い、１辺にやや粗い調整加工を施したものである。

石核（171～174）　５点出土し、うち４点を図示した。171は厚みのある盤状の剥片を素材とし、剥片の縁辺に沿った連続的な剥片生産が行われており、線状ないし点状打面の幅広で小型の剥片が想定される。172～174は礫素材の石核で、礫の平坦な面や剥離面を打面とし、１～２回の打面転移を行いつつ、剥片剥離を進めている。

石錘（175～179）　７点出土し、うち５点を図示した。いずれも小型の偏平な自然礫の両端に打ち欠きを加えた石錘である。

磨石類（180～182）　５点出土し、うち３点を図示した。180・181はやや丸みが強く、明確な敲打痕は認められない。182は一端が潰れたように欠損し、もう一端に敲打痕を留めるものである。

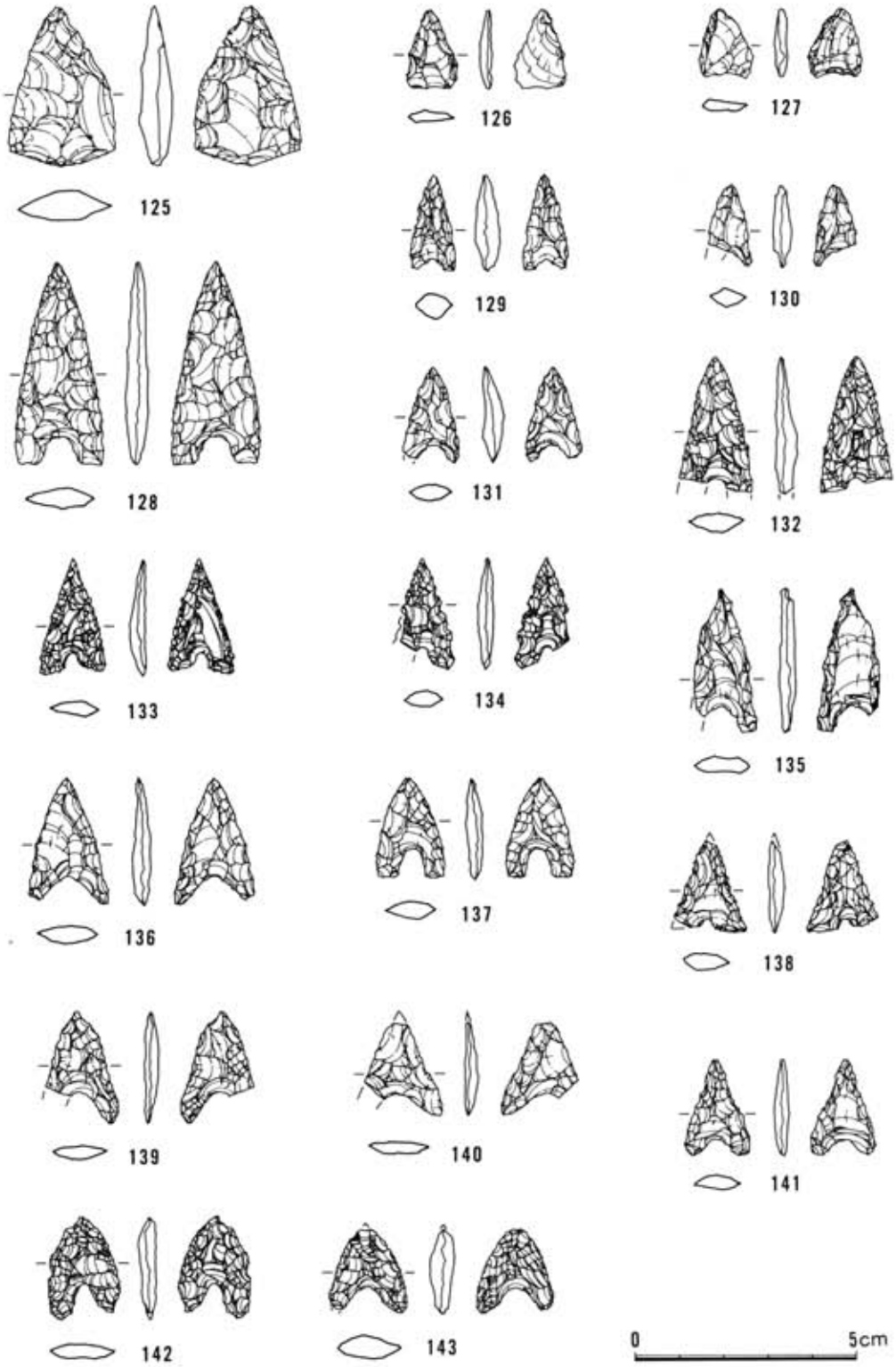


図44　下層の石器1（2：3）

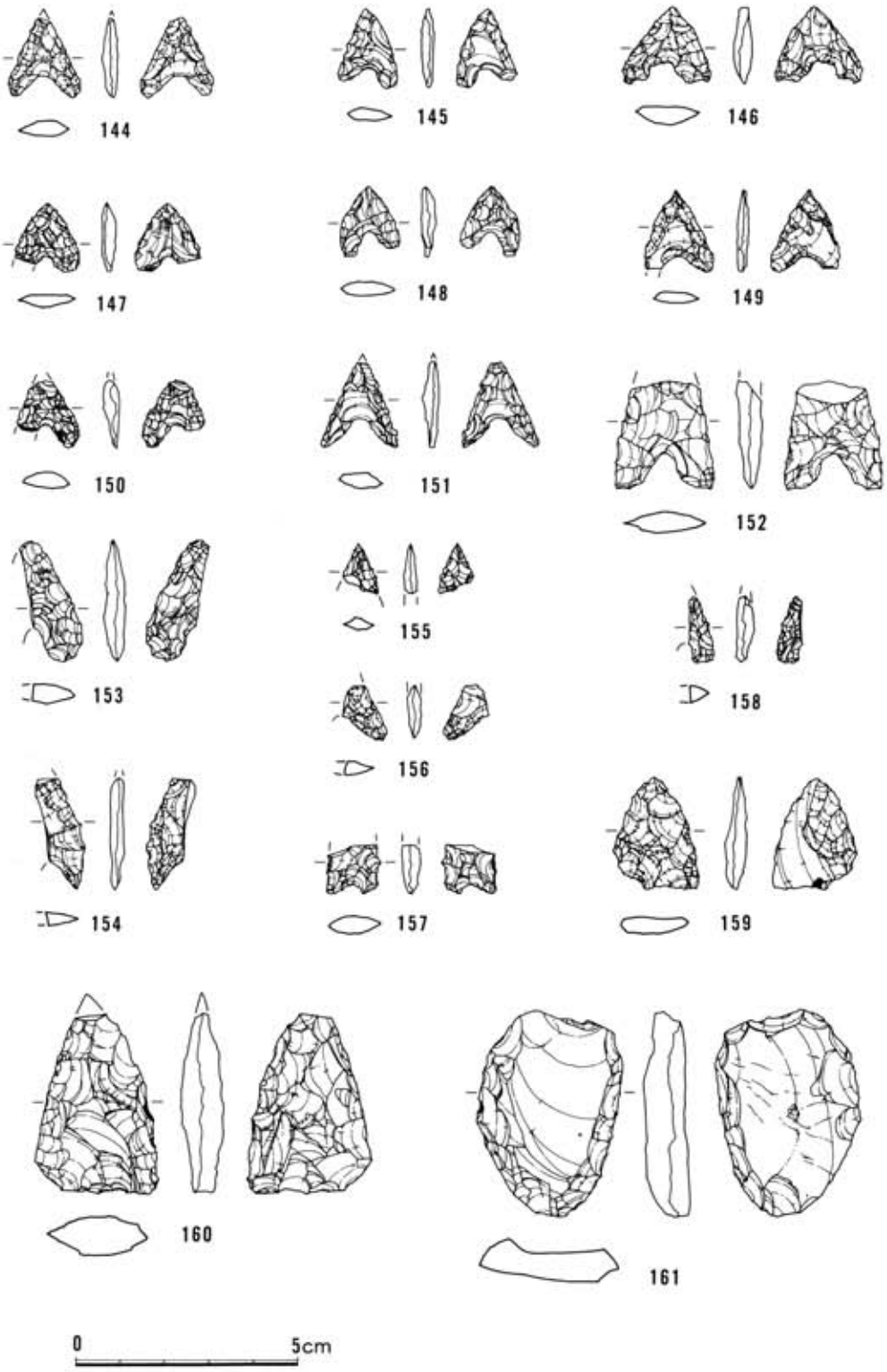


図45　下層の石器２（２：３）

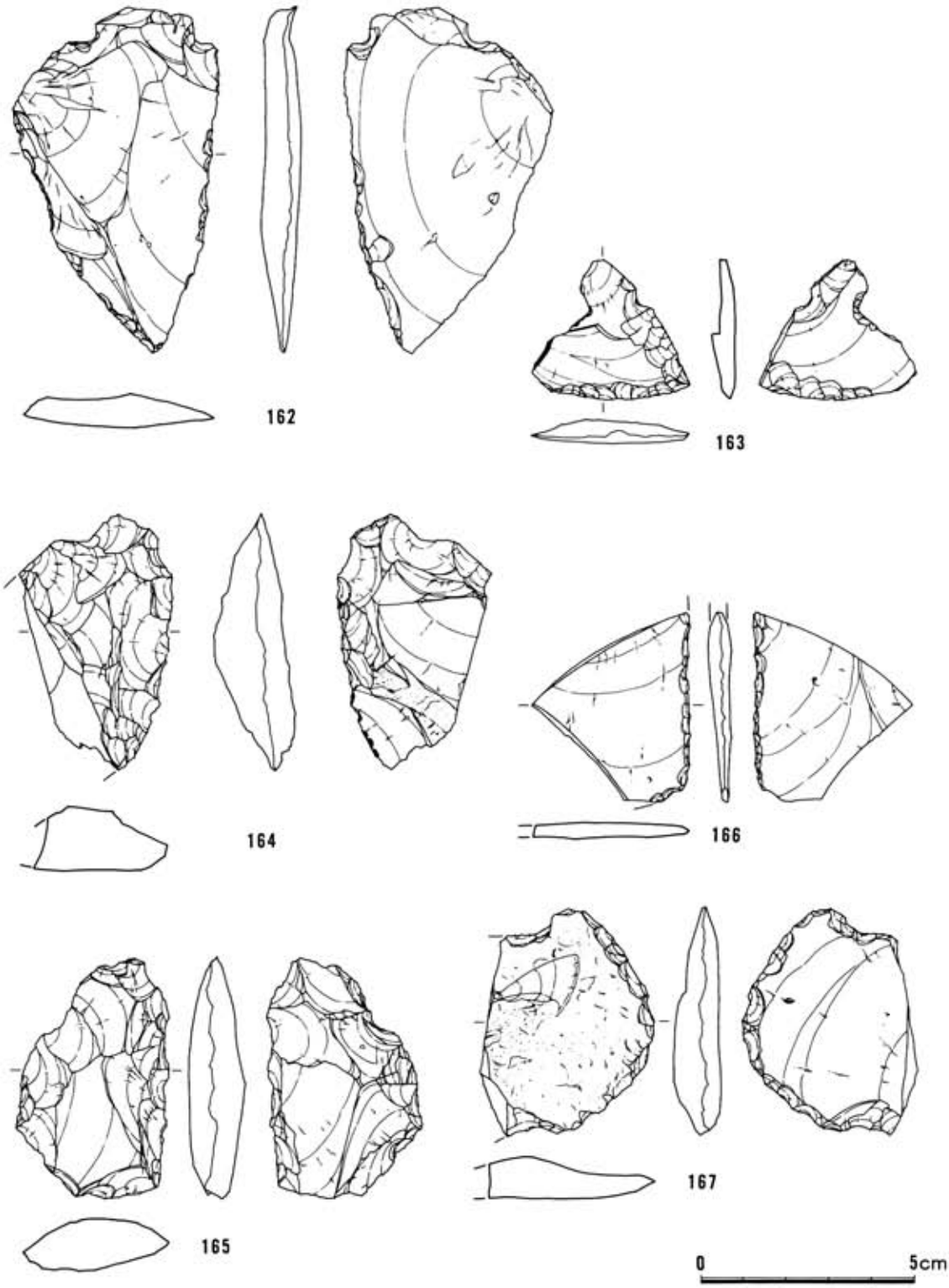


図46　下層の石器３（２：３）

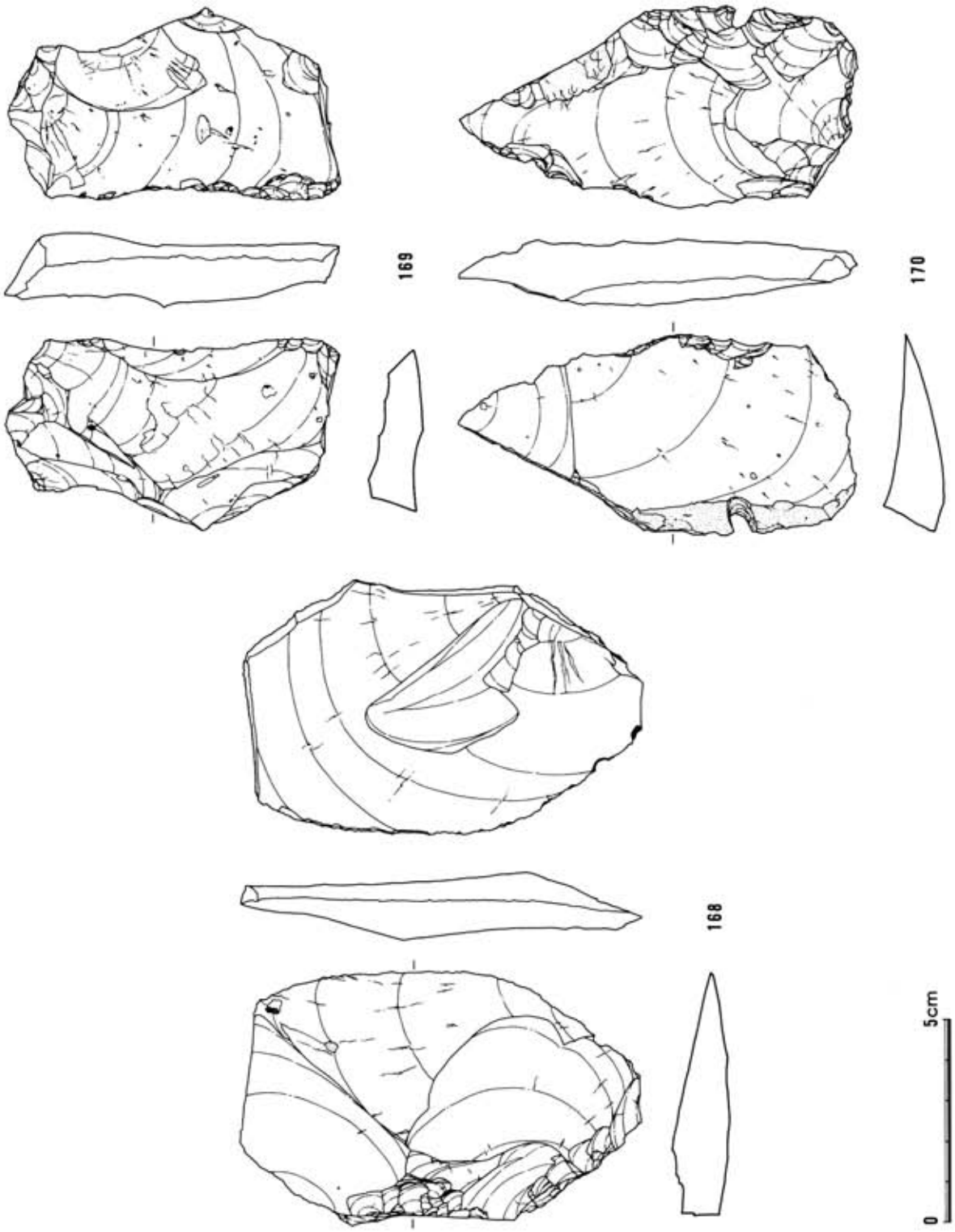


図47　下層の石器４（２：３）

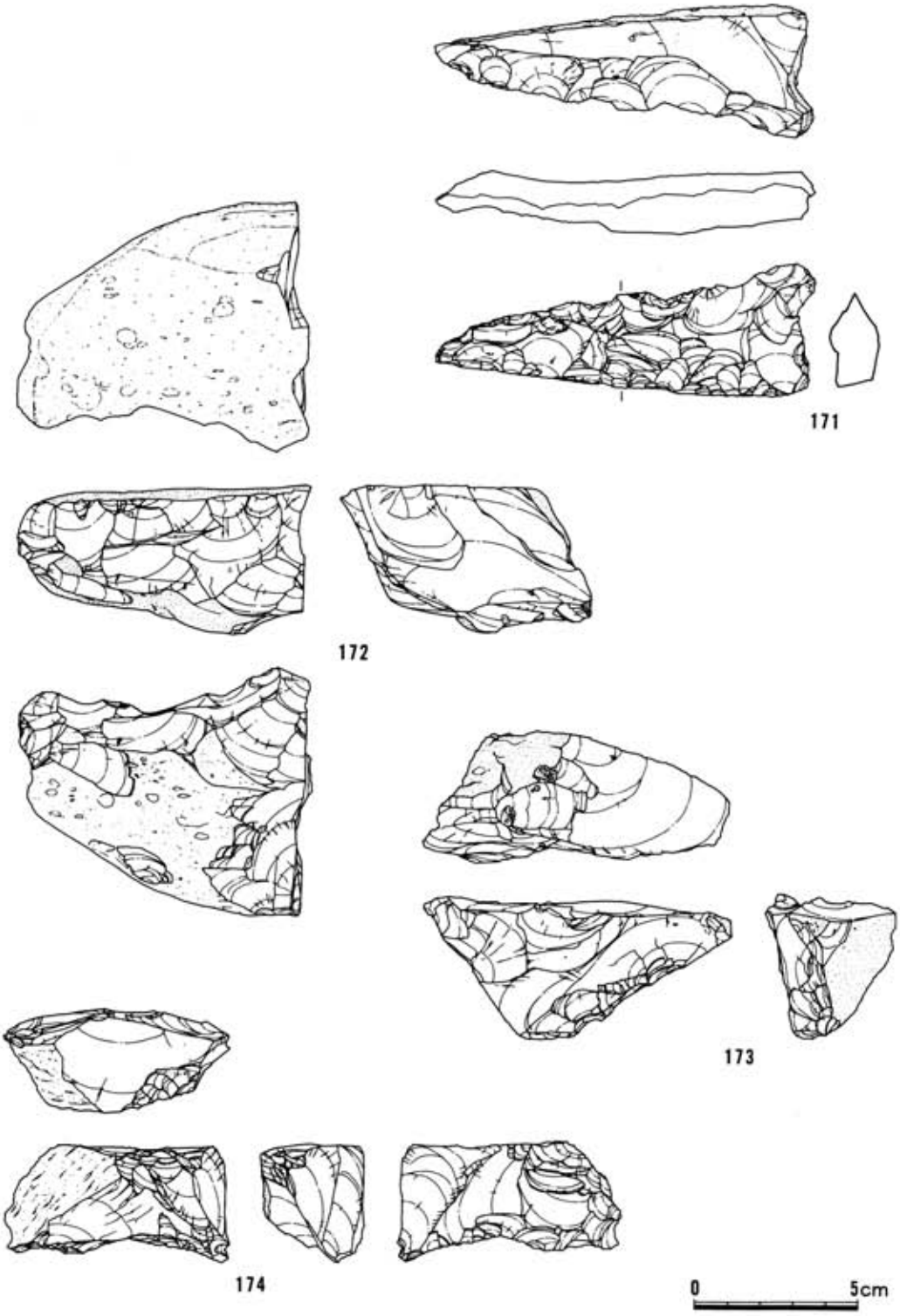


図48　下層の石器５（１：２）

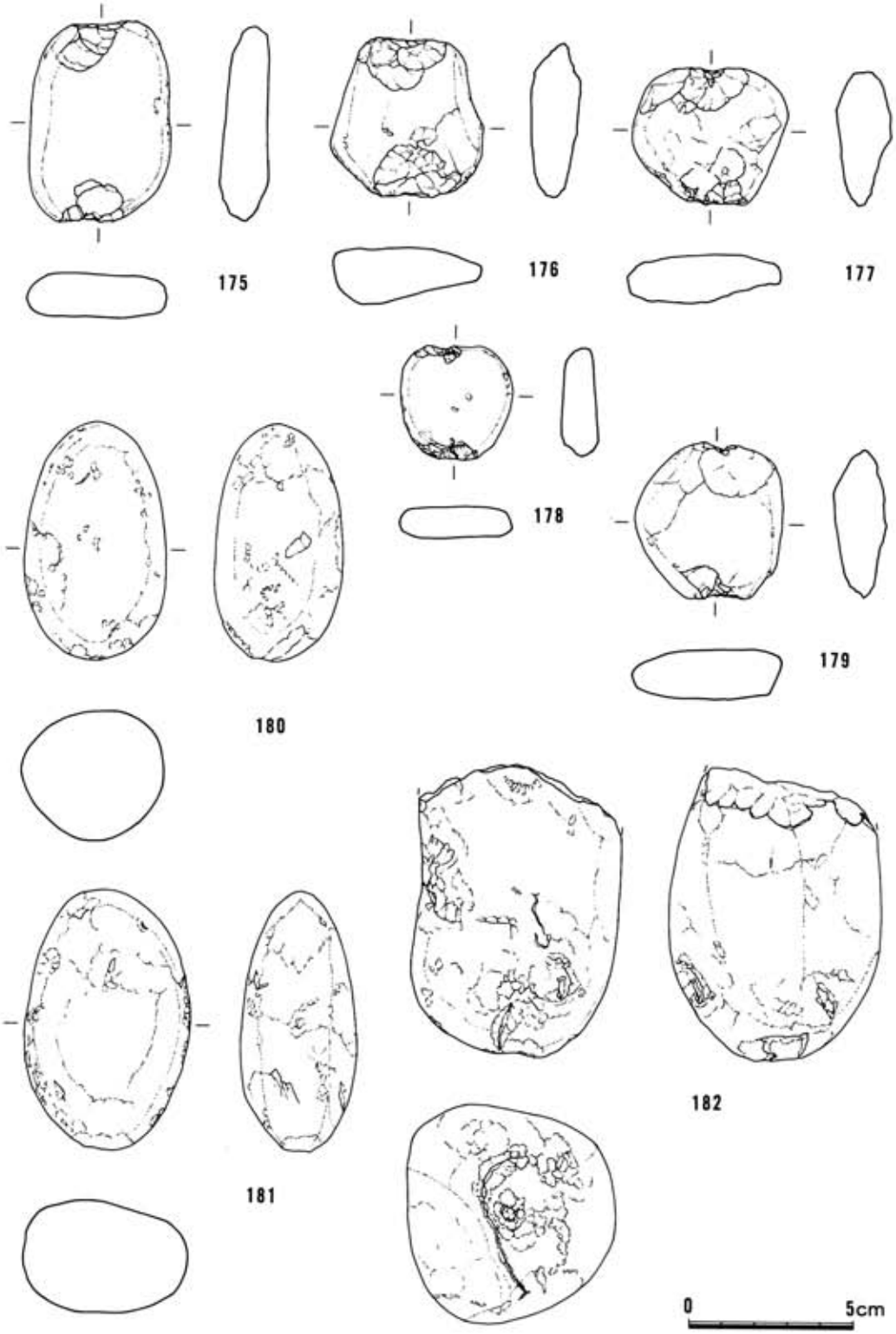


図49　下層の石器６（１：２）

（３）上層の遺物

ｉ）上層の遺物分布（図50・54）

中央部上層では後述する古墳時代の土坑１基以外には、明確な遺構は全く確認されなかった。今回の調査区が遺物の量や内容から、居住域に近接する生活の場であったことはほぼ間違いないであろうが、その性格について決定的な所見は得られなかった。弥生時代以降の遺物は量も僅少で、分布も散在的であり、ここでは縄紋時代遺物の分布について述べておく。図50に示されるように、上層の縄紋時代遺物の分布はＢＤ０７・ＢＥ０７区画からＢＥ０６区画・ＢＥ０５区画を中心に密であり、調査区の南西から北東に向かって帯状に分布し、南東側と北西側は希薄である。遺物分布は明らかに調査区外にも広がっている様子が窺える。また、ＢＤ０７区画北東寄りの長方形の空白部は確認調査時のＢ－９試掘坑によるものであり、各区画の境に細長く認められる希薄部は土層観察用畦の部分で、サンプリングエラーによるものと考えられる。

ii）縄紋土器（図51～図53）

上層で出土した土器はほとんどが晩期の土器で、それ以外には、後期の土器と下層からの浮き上がりと思われる中期の土器が各々数点出土した程度である。位置を測定して取り上げた上層の後～晩期の土器は1,637点である。

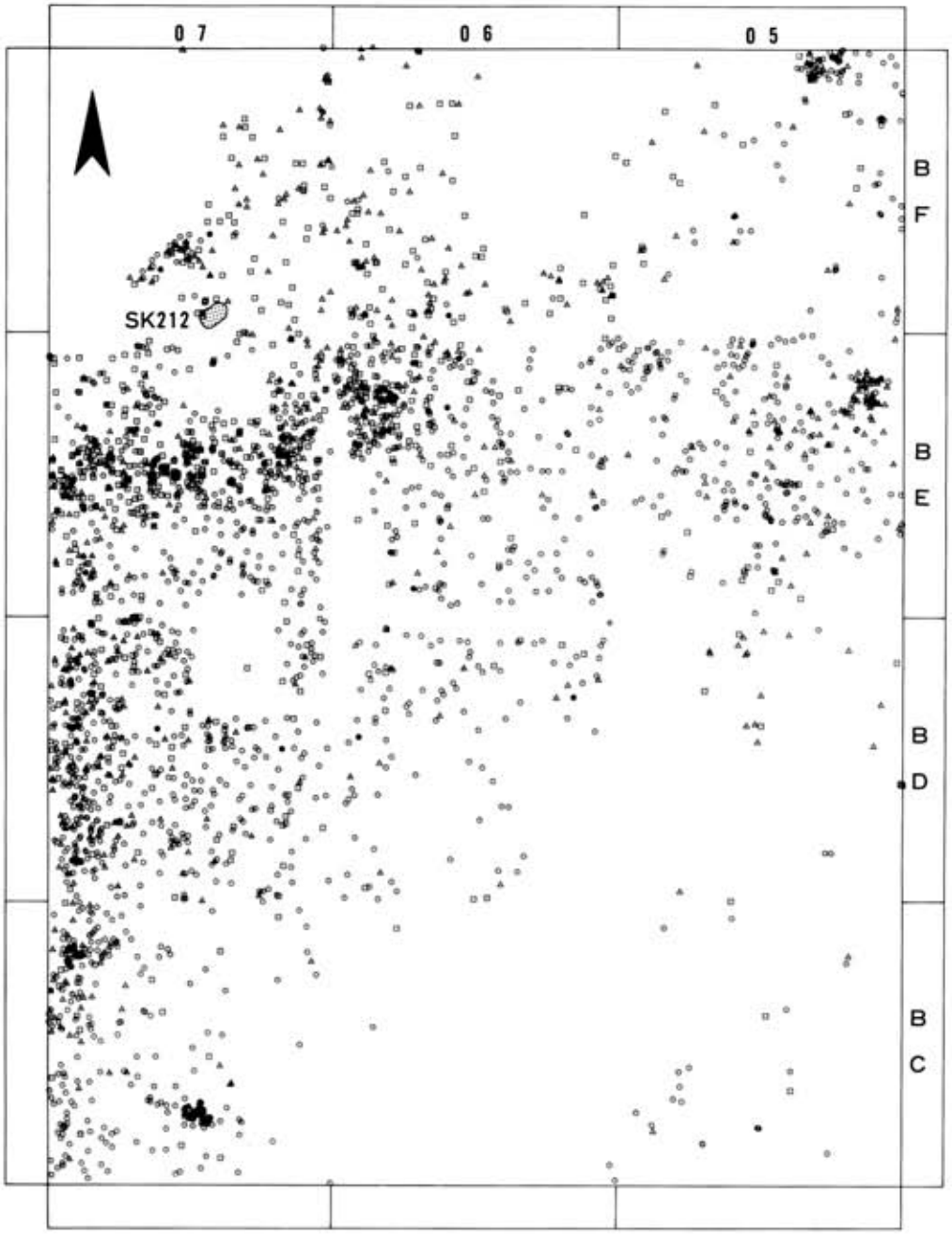
晩期の土器（183～224）

浅鉢（183～201）　小破片が多く全体の器形の不明なものが多い。器面調整も遺存状態のため不明瞭なものが多いが、確認できるものはいずれも横方向の丁寧なヘラミガキである。胴部が屈折し、頸部で強く折れて口縁部が外反するものと胴部の丸みがやや強いものとがあるらしい。口縁端部が全体に丸みを帯び、内外ないし片方に沈線を廻すが、沈線は浅く痕跡的なものが多いようである。また、口縁部で短く折れて外反するもの（198・199）や、口縁部から単純にすぼまり口唇部を跨ぐように短い粘土紐を縦に張り付けたもの（200）、体部が球形に近く口縁部のみ短く外折するもの（201）がある。

深鉢（202～224）　やはり小破片が多く全体の器形の不明なものが多い。202は口縁部外面に、明瞭な沈線紋とは言えないが紋様を意識したと思われる線条痕を有する。202～206は頸部がくびれ、胴部が屈曲する器形であろう。208は横方向の二枚貝条痕を留めるが、これ以外は器面をナデで仕上げている。210は緩やかに外反する口縁部である。211・212は胴部の屈曲する部分の破片である。213は胴部の屈曲部に張り付けていたものと思われる蝶ネクタイ状の突起である。214～224は深鉢の底部で、いずれも厚手である。形態的には円盤状のものや台形状にやや張り出すものがある。

後期の土器（225～228）

225は上層の攪乱部（厳密に言えば近代以降）から出土した口縁部破片である。山形口縁の波頂部に刺突を施し、紋様は口縁端から順に、縄紋、横方向の２条の沈線紋、再び縄紋、再び２



○ 縄紋土器　△ 石器(黒曜岩)

□ 石器(安山岩)　⊗ 石器(その他)

0　10m

図50　中央部上層の遺構と遺物分布(1：250)

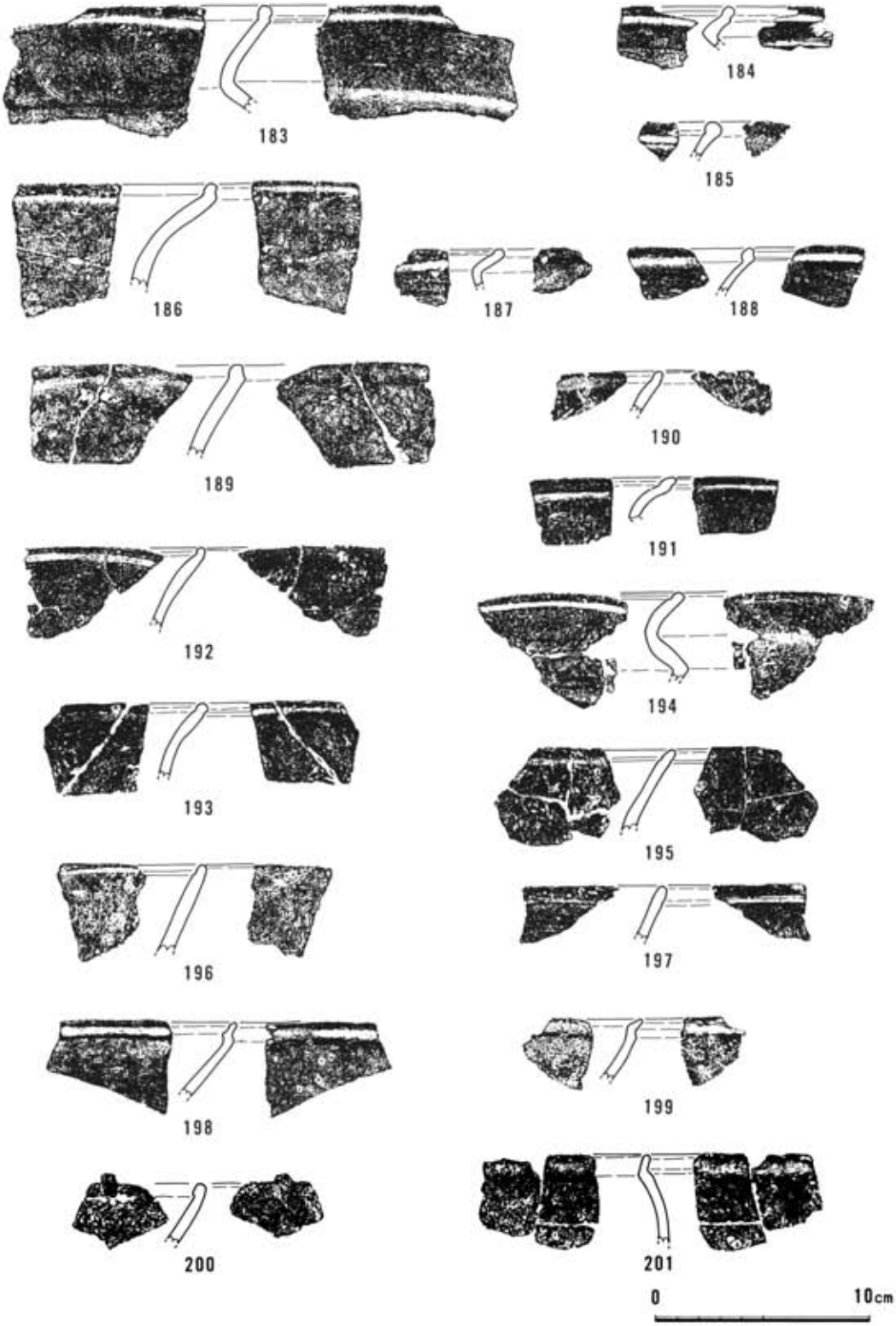


図51　上層の縄紋土器１（１：３）

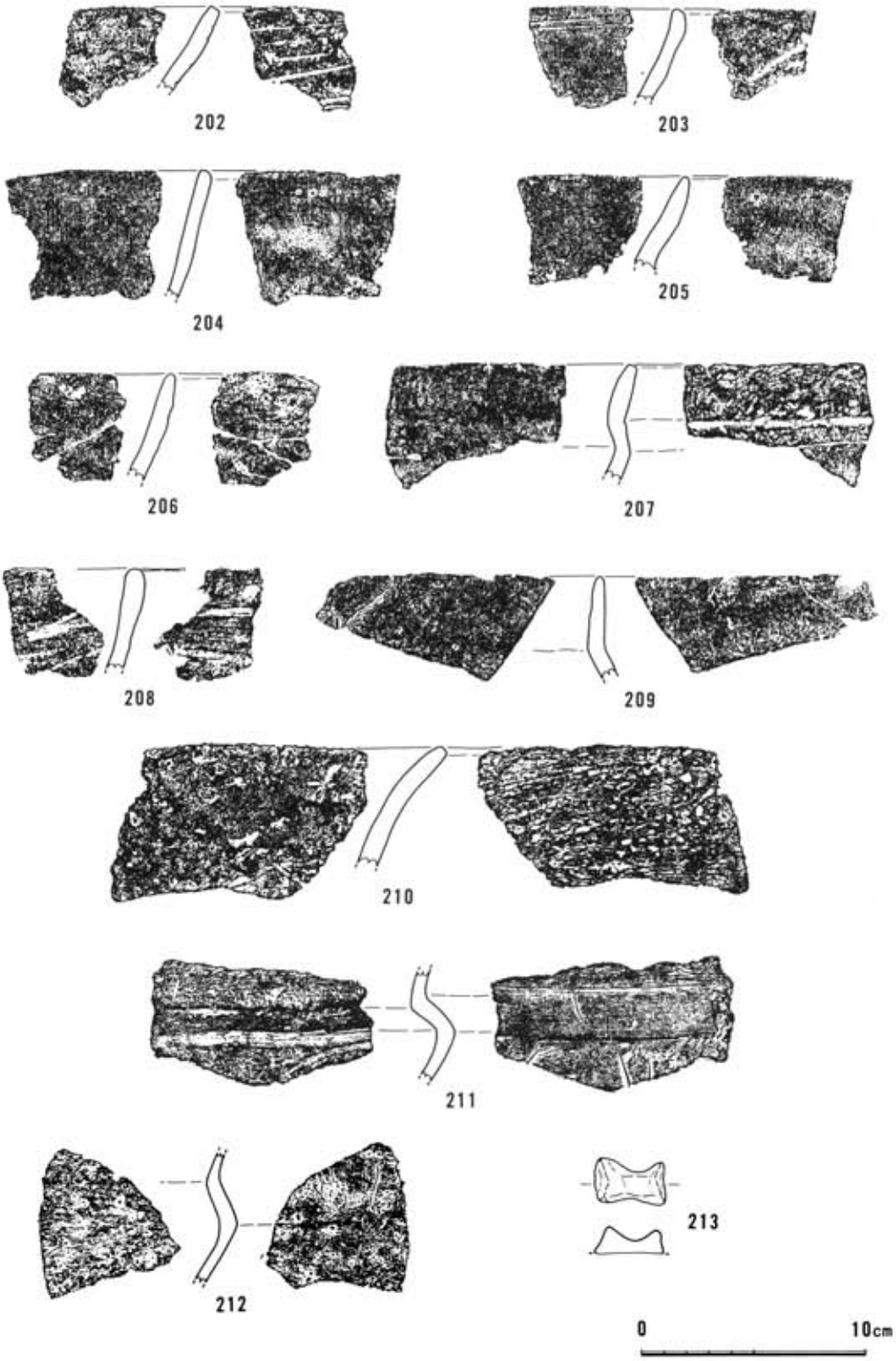


図52　上層の縄紋土器２（１：３）

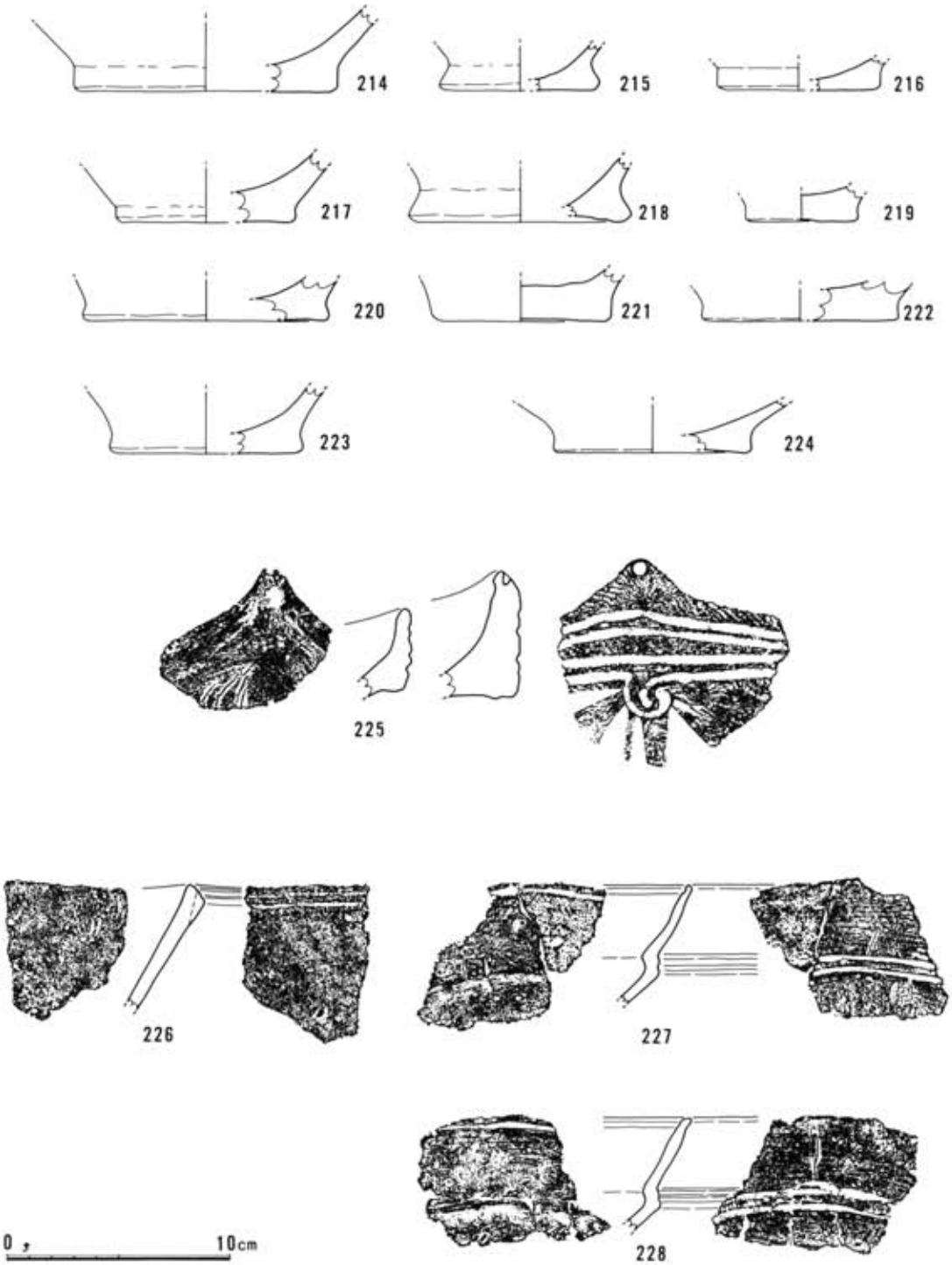


図53　上層の縄紋土器３（１：３）

条の沈線紋、という構成である。下位の２条沈線紋は波頂部にあたる位置で紋様帯の下側に潜り込んで入り組む。縄紋は摩耗のため磨消縄紋か充塡縄紋かが判断できない。撚りは不明瞭ながら単節のＲＬのようである。器形は不明であるが、口縁部の上面観が方形を示すものと思われ、深鉢とすれば器形や紋様帯等は市来式に近いものがあり、紋様要素が刺突紋である違いを除けば長崎県有喜貝塚出土の台付浅鉢に類似している。後期中葉頃の所産であろうか。

226～228は後期後半と思われる資料で、227と228は同一個体である。226は口縁部が外傾して直行する深鉢で端部に不明瞭な３条の沈線を施す。山形口縁を成すようである。227・228は浅鉢で、肩に２～３条の沈線紋を内面の口縁端部に１条の沈線紋を施す。内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキを施す。

ⅲ）石器（図55～図61）

中央部上層から出土した石器類は、位置を計測して取り上げたもので総数1,251点を数える。その内訳は石鏃56点、削器52点、ＵＦ11点、打製石斧１点、磨石類10点、石錘４点、石核20点、大形剥片632点、微細剥片465点である。削器の内いわゆる石匙は13点ある。整理期間の関係で石核については図示できなかったが、いわゆる十郎川型剥片剥離技術を想定させる残核である。また、石刃利用の削器や剥片鏃の出土から鈴桶技法の存在が推定できるが、これらの点数は少なく石核も出土していない。石材は讃岐岩質安山岩が650点で52％を占め、次いで黒曜岩が586点で47％、その他の石材が15点で１％である。

石鏃（229～282）　石鏃は56点出土し、54点を示した。微凹基でやや長身の二等辺三角形鏃や両側縁に突出のある五角形鏃等の晩期に特有なものもある。ここでは特徴的ないくつかの個別例について述べる。269～271は素材剥片の形状を大きく変えずに整形したものである。いずれも主要剥離面には殆ど調整を加えず、片面側の周縁部にやや急斜度の調整加工を施すため横断面形は台形である。272は円基で、水滴形の平面形を示す。276・277はいわゆる剥片鏃で、この２点のみ出土した。腰岳産と思われる黒色透明な良質の黒曜岩が用いられている。278はあるいは石錐とすべきかもしれない。279～282は石鏃未製品である。279は全体に調整加工が進み、完成品に近い段階のものである。片面側の一辺に礫面を留めるが、断面図で明らかなようにこの部分が厚みを残しており、結局、この部分の厚みを除去できないために製作が放棄されたものであろう。280は片側に礫面を有する剥片を素材とし、周縁からの調整加工が中途まで施された資料である。礫面を残す部分に亀裂が走っており、これが完成品への障害と考えられたのであろうか。281はかなり面的な加工が進み、完成まであと一息だったはずである。ところが、図表面の右側辺から加えられた押圧剥離が、思いの外に先まで抜けたため基部の一方と成るべき角の部分までが失われてしまい、結局放棄せざるを得なくなったと思われる例である。282の場合は周縁の加工から大まかに形を作る段階での折損による失敗例である。

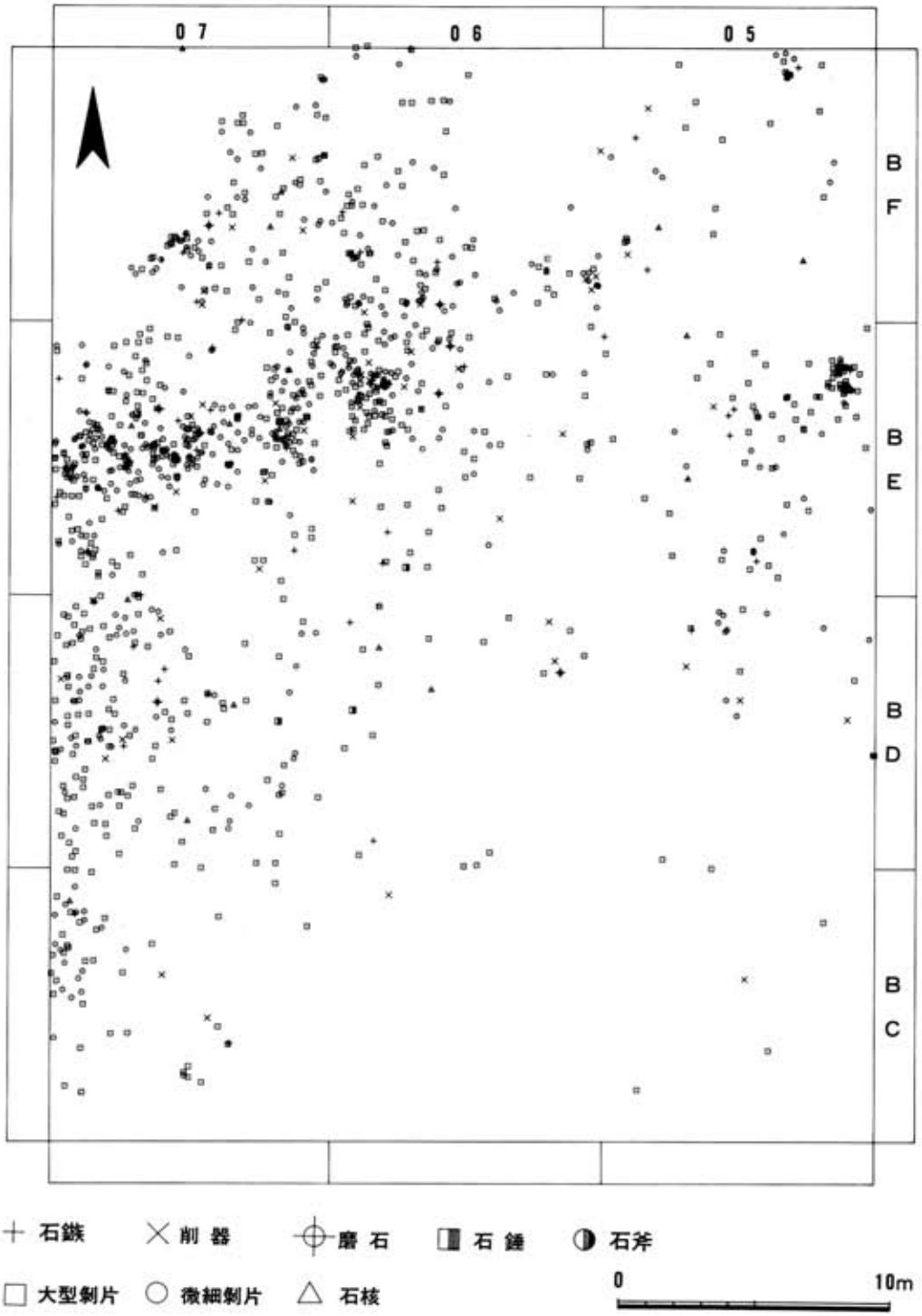


図54　上層の石器分布(1：250)

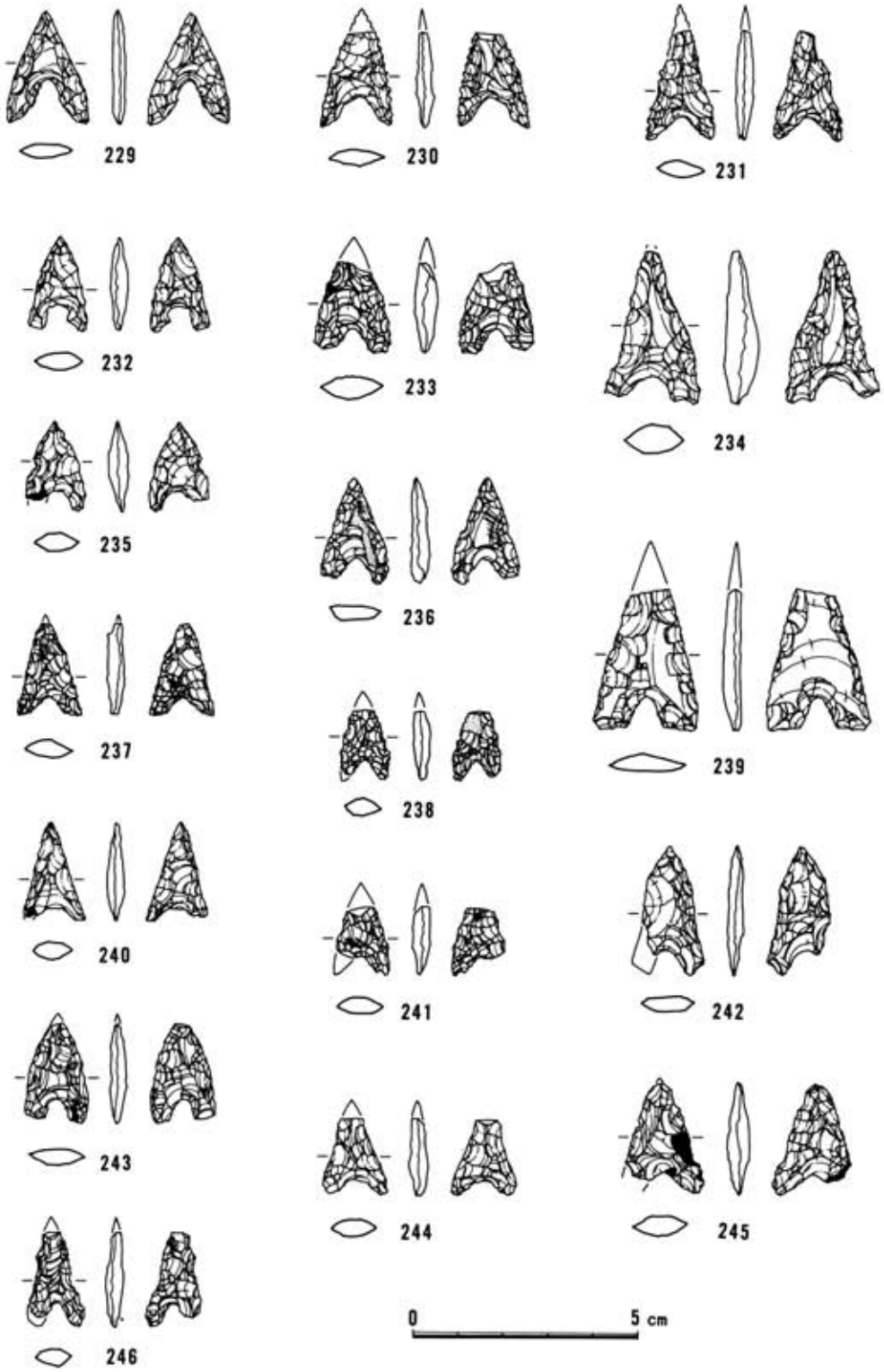


図55　上層の石器１（２：３）

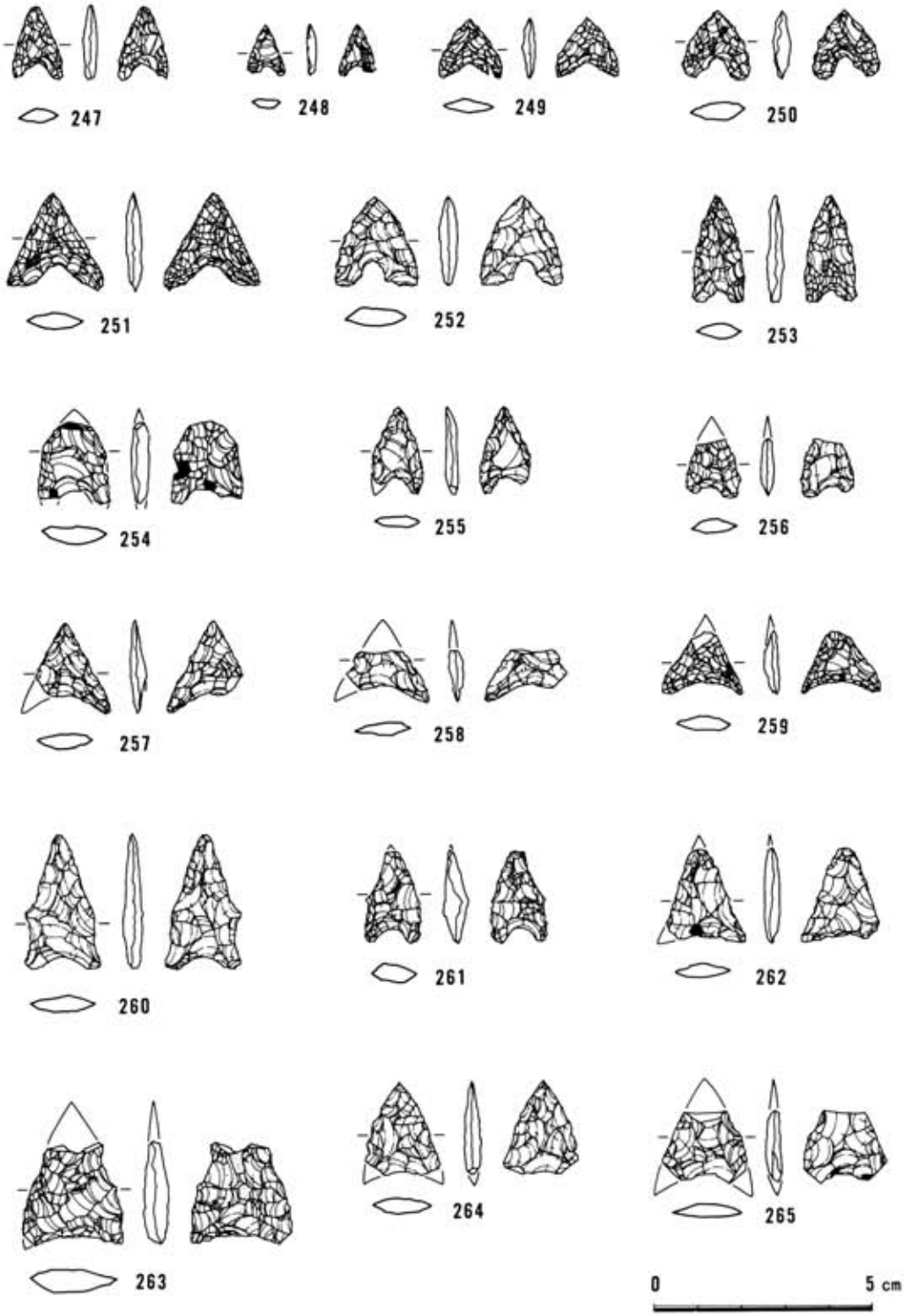


図56　上層の石器２（２：３）

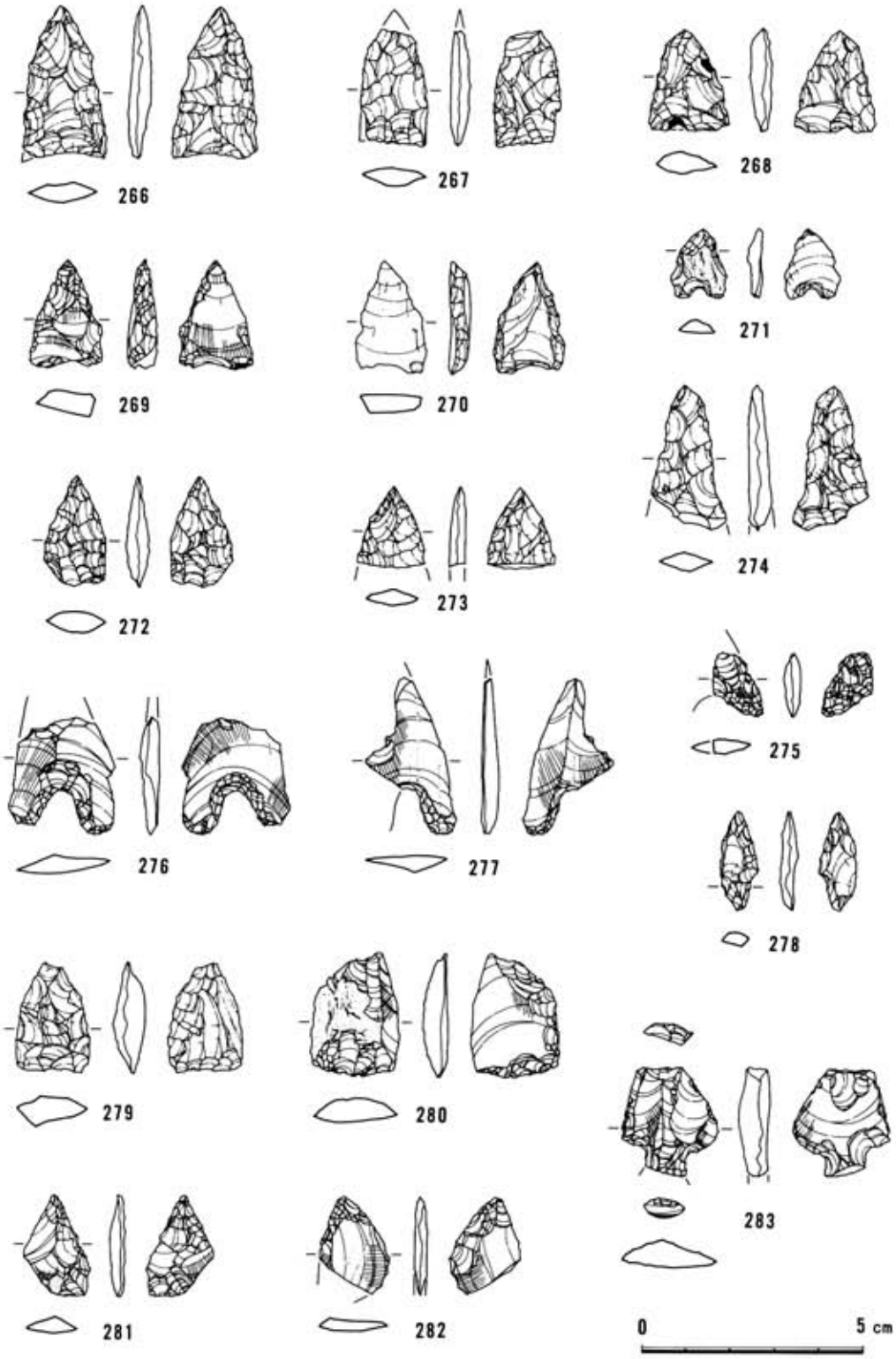


図57　上層の石器３（２：３）

表 3　上層の石器組成

種別 / 石材	石鏃	削器	UF	石斧	磨石	石錘	石器小計	大型剥片	微細剥片	石核	素材小計	計
黒曜岩	25	5	8	−	−	−	(38)	317	214	17	(548)	586
安山岩	31	47	3	−	−	−	(81)	315	251	3	(569)	650
その他	−	−	−	1	10	4	(15)	−	−	−	(−)	15
計	56	52	11	1	10	4	(134)	632	465	20	(1,117)	1,251

「つまみ形石器」(283)　製品ではなく剥片の中に含めているが、いわゆる「つまみ形石器」が２点出土しており、うち１点を図示した。打面は調整打面で、頭部調整の痕跡はない。石刃の基部に近い部位に両側から抉りを入れ、折りとったものである。表面側の剥離方向と主要剥離面側の剥離方向とは同一である。黒色透明な良質の黒曜岩が用いられている。

削器（284～297）　削器は52点出土し、うち14点を図示した。284～287はいわゆる縦型の石匙、288～290はいわゆる横型の石匙である。調整加工が面的な部分もあるが、概して刃部の作出や整形、素材剥片の厚みや打瘤の除去に留まっている。ここでは７点のみ図示したが、削器の中でもいわゆる石匙の割合がかなり高いことは注意される。291はやや幅広の厚手の剥片の２辺に調整加工を施した削器で、網で表現した部位は磨りガラス状に摩滅しており、使用痕の可能性が強い。あるいは掻器とすべきかもしれない。292は石刃の両側縁に調整加工を施した削器である。先端部は折損している。293は長大な石刃にあまり加工を加えずに用いたと思われるもので、両側縁に不連続の微細剥離痕がある。削器としたが、ＵＦとすべきかもしれない。294～296は素材剥片の形状を残したまま、１辺に調整加工を施して刃部としたもので、294の刃部は片面調整でやや角度が大きく、295・296の刃部は両面調整で角度が小さい。297は厚みのある剥片ないし残核に粗い調整加工を面的に施したものである。

磨製石斧（298）　298はＢＥ０６区画の西畦から出土した磨製石斧で、位置を記録していないため組成表には含まれていない。確実な磨製石斧としては、中央部の上層・下層を通じてこの１点のみである。表面は著しく摩耗しており、刃部も欠損のため不明瞭であるが、両刃である。

打製石斧（299）　299は打製石斧で、１点のみ出土した。縦長で偏平な礫を選んで周縁部のみに調整加工を施したもので、刃部は欠損のため不明である。

石錘（300～303）　４点出土し、全て図示した。いずれも長軸側の両端を打ち欠いた石錘で、礫の形状を改変することなく、抉りのみを施している。

磨石類（304～309）　10点出土し、うち６点を図示した。いずれも磨面と思われる部位を有するが、側縁に敲打痕を顕著に留めるものもある。

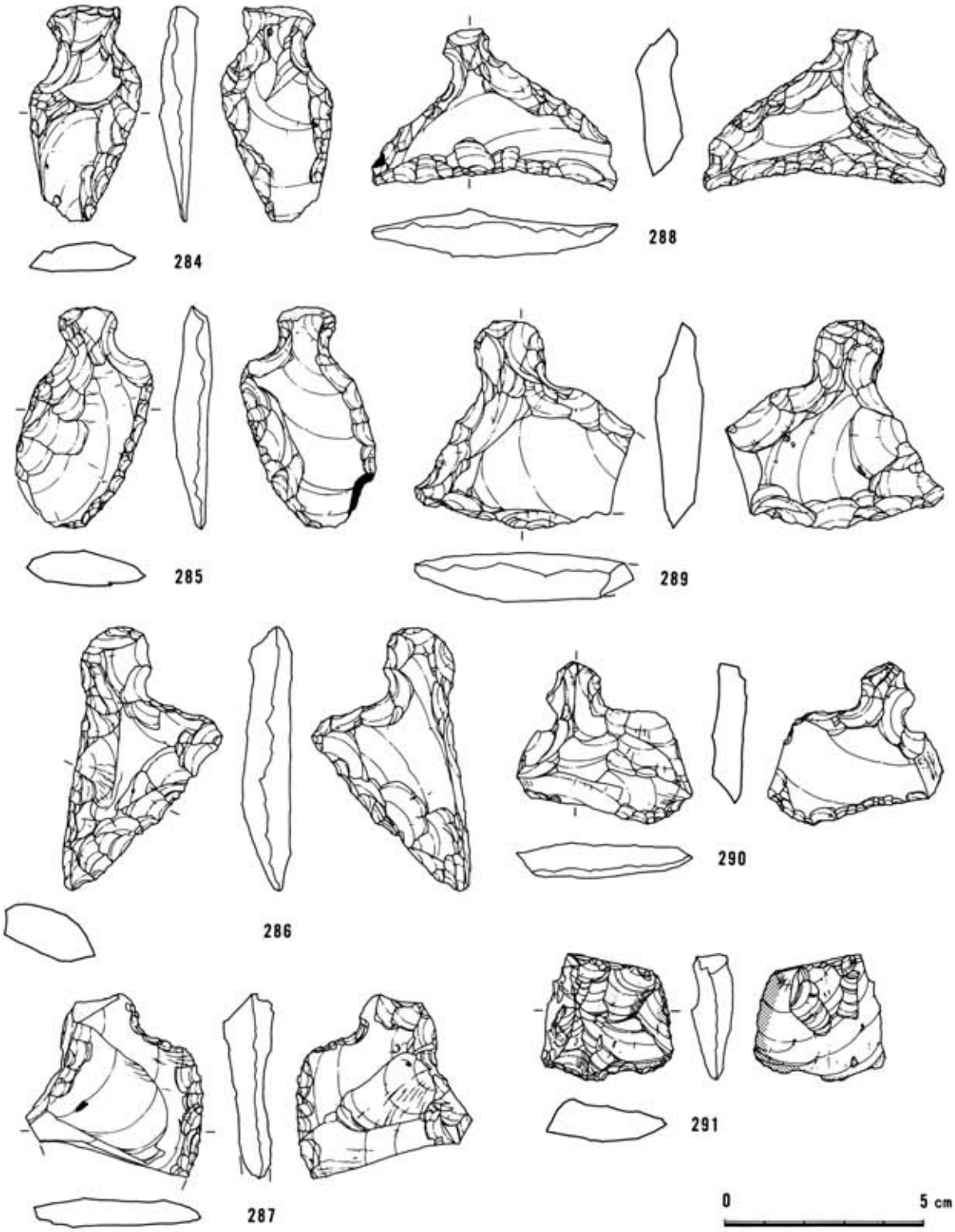


図58　上層の石器４（２：３）

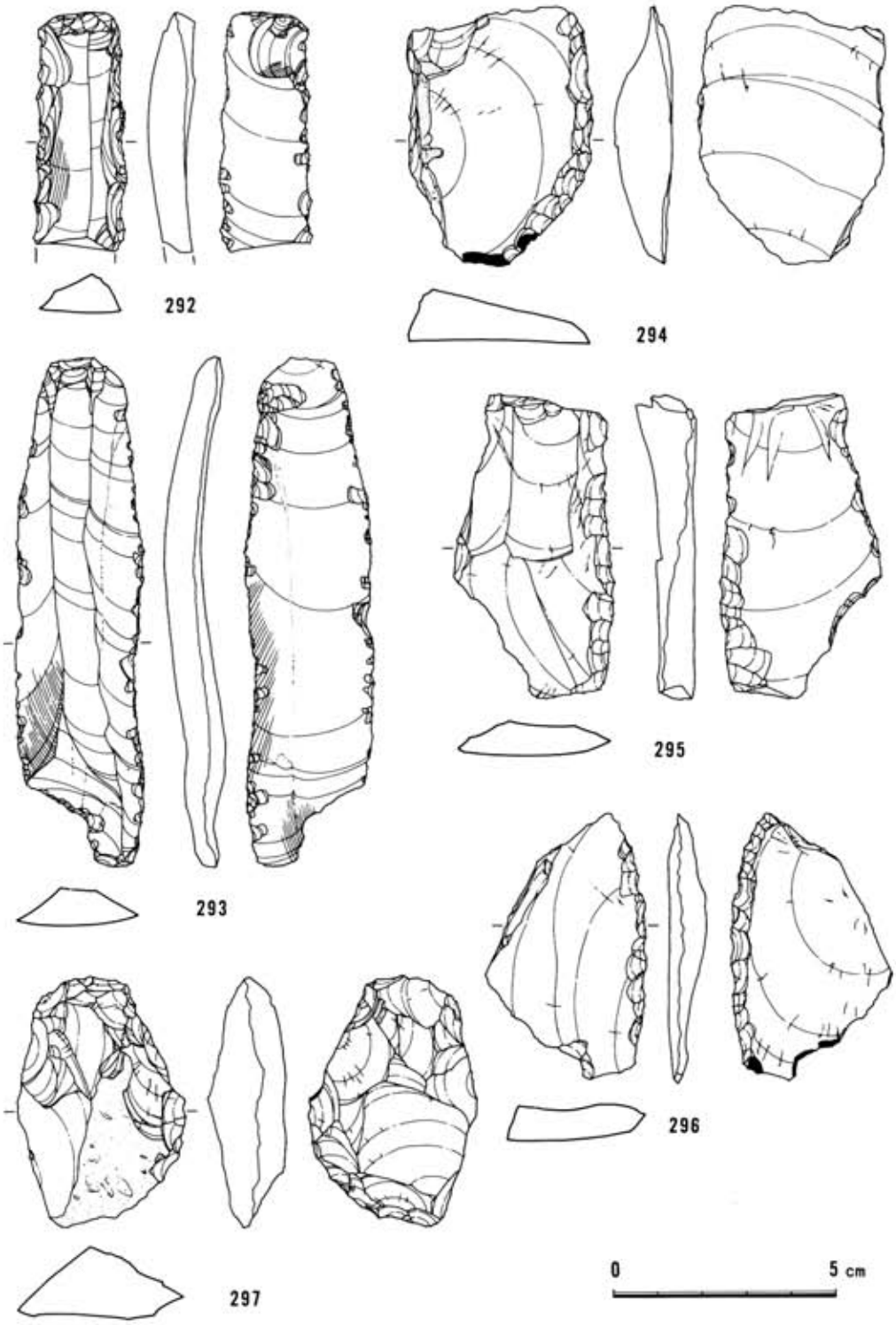


図59　上層の石器５（２：３）

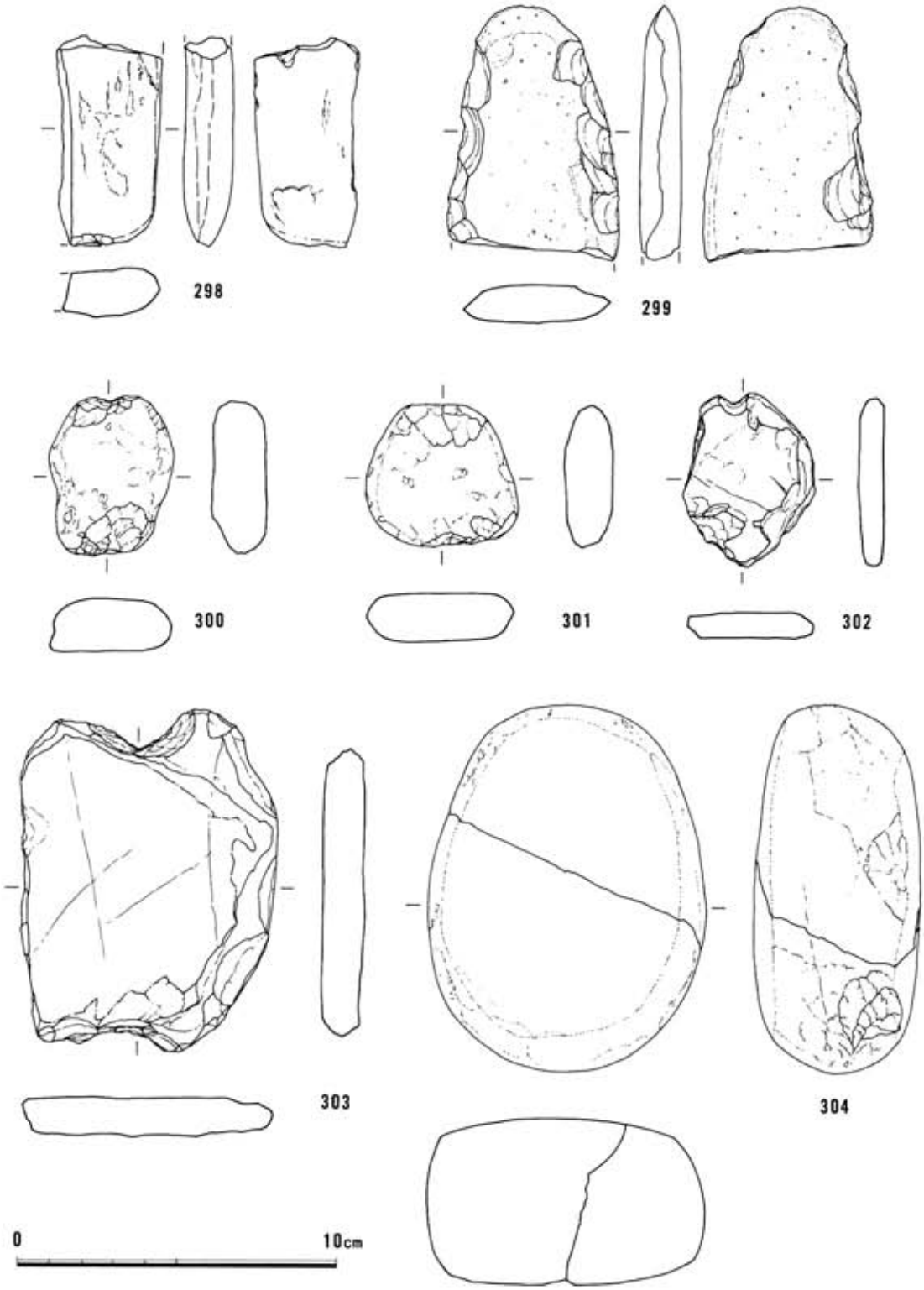


図60　上層の石器６（１：２）

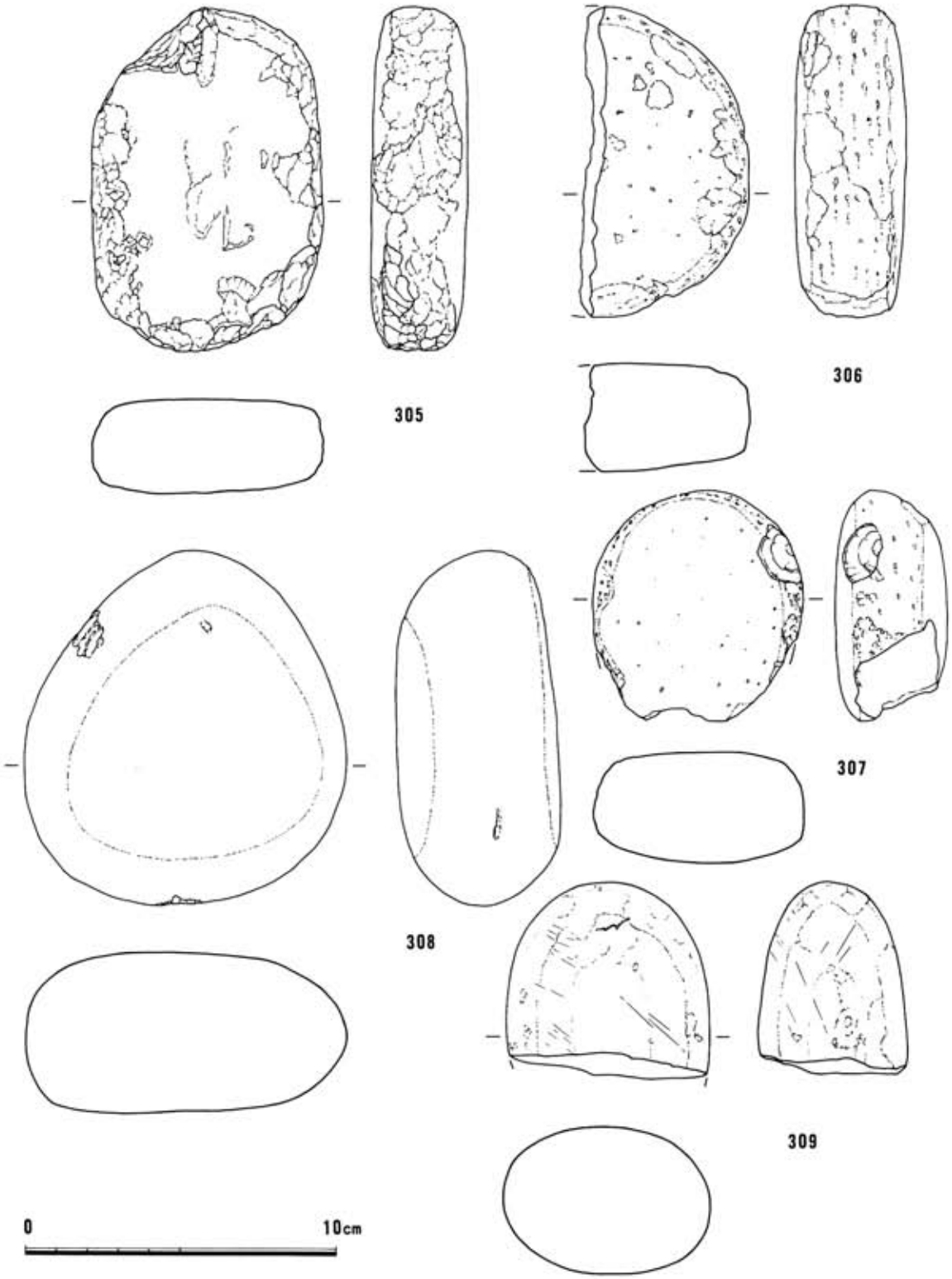


図61　上層の石器７（１：２）

（４）その他の遺構と遺物

ｉ）ＳＫ212と出土遺物（図62）

ＢＦ０７区画の南辺中央部に位置する。平面形はやや歪な隅丸長方形で、主軸はN55°Eである。長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.14mで、底面は平坦である。埋土は灰褐色シルト質砂である。中央部やや西よりの埋土上部から二つに割れた状態の土師器鉢１個体が出土した。

310は土師器鉢で、底部を一部欠くが、ほぼ完形である。丸底から頸部で強く折れて外傾し、僅かに内湾気味に伸びる。外面頸部以下はハケメ、口縁部はヨコナデ、内面はナデである。

ii）その他の遺物（図63・64）

311は銅鏃で、銹化が進んでおり遺存状態は良好ではないが、旧状は概ね知りうる。神埼町川寄吉原遺跡出土例に形態・大きさが類似する。弥生時代後期の所産であろう。

312はＢＣ０６区画下層から出土したナイフ形石器である。縦長剥片素材の２側縁調整ナイフ形石器で、表面は剥離面の稜が丸みを帯びるほど著しく摩滅しており、混入と判断する。

313～319は確実な包含層以外から出土した石鏃である。313は表面の風化度がかなり強い。314は側縁が鋸歯状を成す。

320は後述する北側部のＳＸ238に混入していた石製穂摘具で、1/3程の破片であるが外湾刃半月形と考えられる。素材はいわゆる「小豆色凝灰岩」で、搬入品の可能性がある。

321・322は土製投弾である。

323はほぼ完存の手捏土器で、胎土や色調等から古墳時代の所産と考えられる。

324～331は弥生時代の甕で、324は口縁端よりやや下がった位置に小さめの刻みを施した突帯を巡らせる。325は如意形口縁で口唇部下端に刻みを施す。326は口縁端部の遺存状態が悪く不確実ではあるが、如意形口縁を有し口縁下に刻目突帯を１条巡らせるものである。327・328は断面が三角形というよりはやや発達した口縁部である。329は小径で厚みのある底部である。330は安定した平底の底部である。331は小径で不安定な丸底に近づきつつある底部で、外器面の調整はタタキである。

332は須恵器の高台付杯である。333は瓦器椀の底部で、器面は摩耗しているため調整等は不明瞭である。334は13世紀代の土師器鍋、334～337は14～15世紀代の土師器鍋である。

338～341は中国産磁器である。338は鎬蓮弁紋の龍泉窯系青磁椀で、小破片で不確実であるが、釉調や釉の厚み等から、横田・森田分類のIII類である可能性が強い。339は口縁部が丸みをもって僅かに外反する青磁椀で、厚く釉がかかる。340はいわゆる口禿げの白磁皿である。341は白磁皿で端反りとなるものであろう。342の青花は小破片で口径は不確実であるが、碁笥底の皿と考えられる。

343はＴ字形口縁の内外のみに鉄釉を施す肥前陶器（唐津焼）の擂鉢で、武雄市甕屋Ａ窯跡群に類例があり、寛永年間を中心とした時期を与えておく。

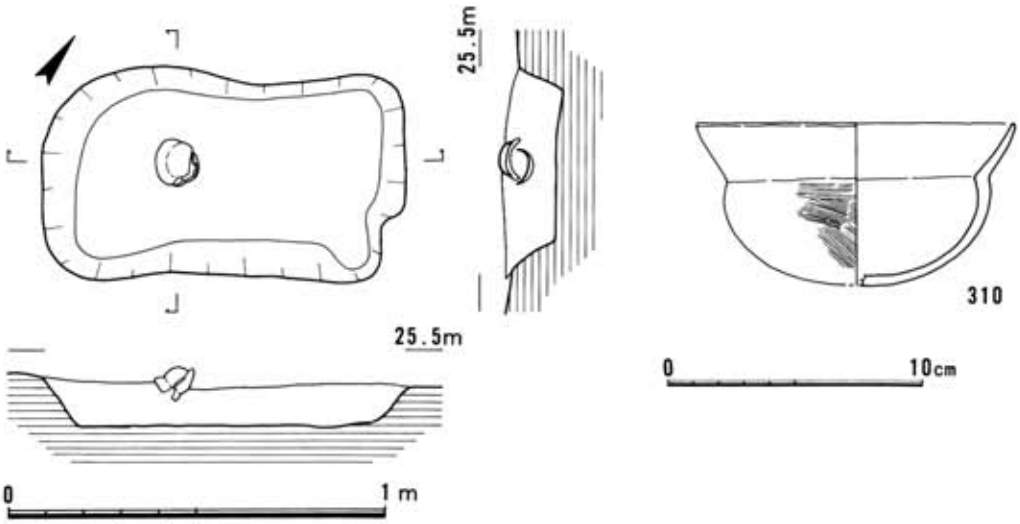


図62　SK212(1：20)，出土遺物(1：3)

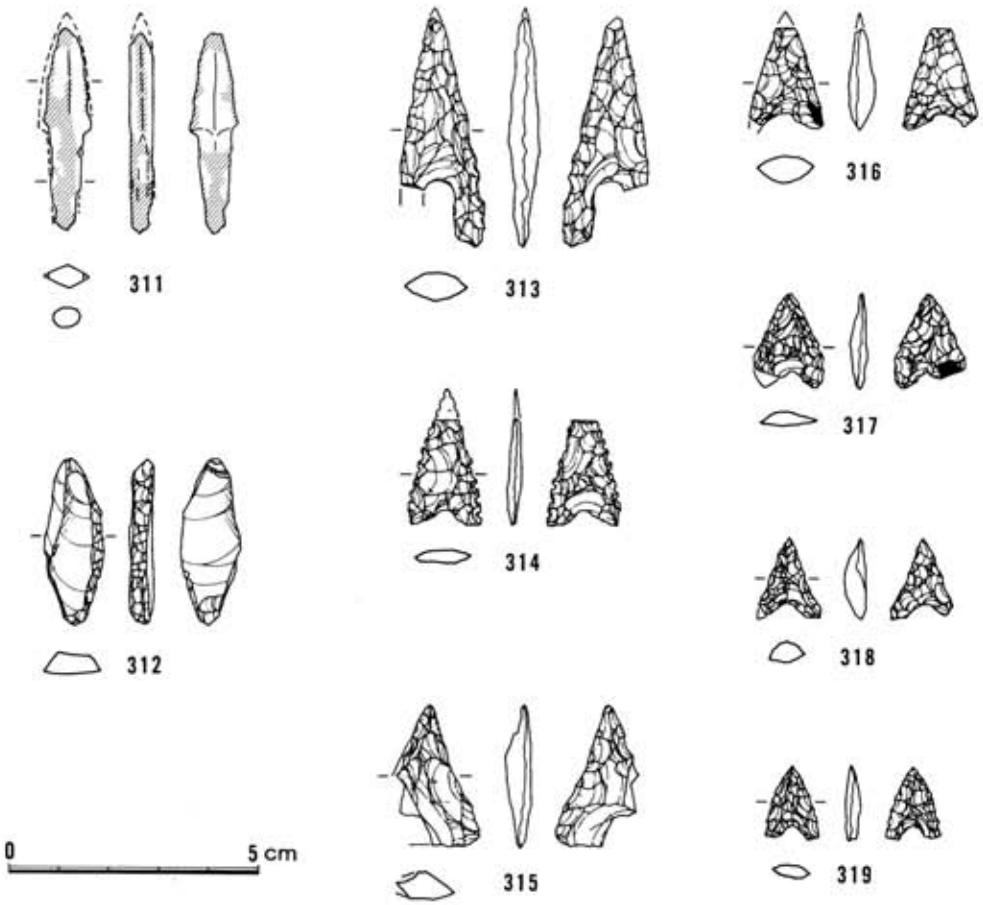


図63　銅鏃・ナイフ形石器・石鏃(2：3)

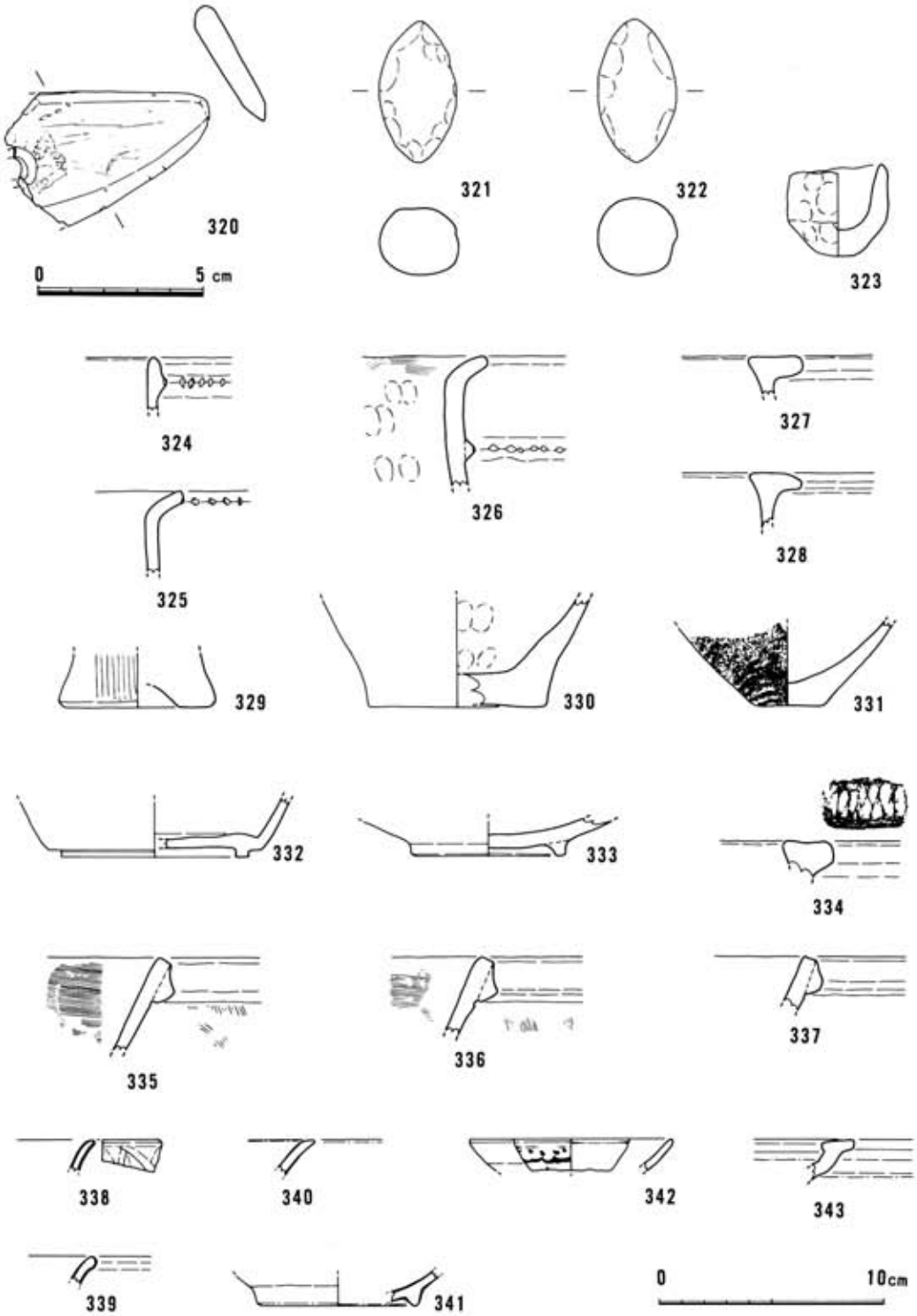


図64　弥生時代以降の遺物(320～323は１：２，324～343は１：３)

３．北側部の遺構と遺物

（１）泥炭部の遺構と遺物

調査区の北西隅は旧地形が段丘側（１区側）に向かって落ち込んでおり、この部分に泥炭が堆積していた。確認調査の際に、この部分にはＢ－６試掘坑を設定し、縄紋晩期の土器、石器、古墳時代初頭の土師器が少量出土したことから、この部分の掘り下げを行った。Ｂ－６試掘坑が泥炭部を南北に縦断するような形だったため、先ず堆積状況を把握するためにＢＧ１０・ＢＧ１１区画とＢＨ１０・ＢＨ１１区画の境に沿った形で東西方向の試掘坑を設定した。泥炭には古墳時代までの遺物が包含されていたが、それより下位の暗褐色砂質土には縄紋晩期の遺物のみが含まれることから、泥炭層の形成が古墳時代以降であることが推定された。古墳時代の土器を出土した小穴２基はいずれも埋土が泥炭であり、このことからも古墳時代のある時期に泥炭の形成が行われていたことはほぼ疑いない。遺物は出土量が少なく、緩やかに落ち込む地形に遺存しているため、出土層位のみによる区分で区画毎に取り上げた。

Ｐ－１（図69）

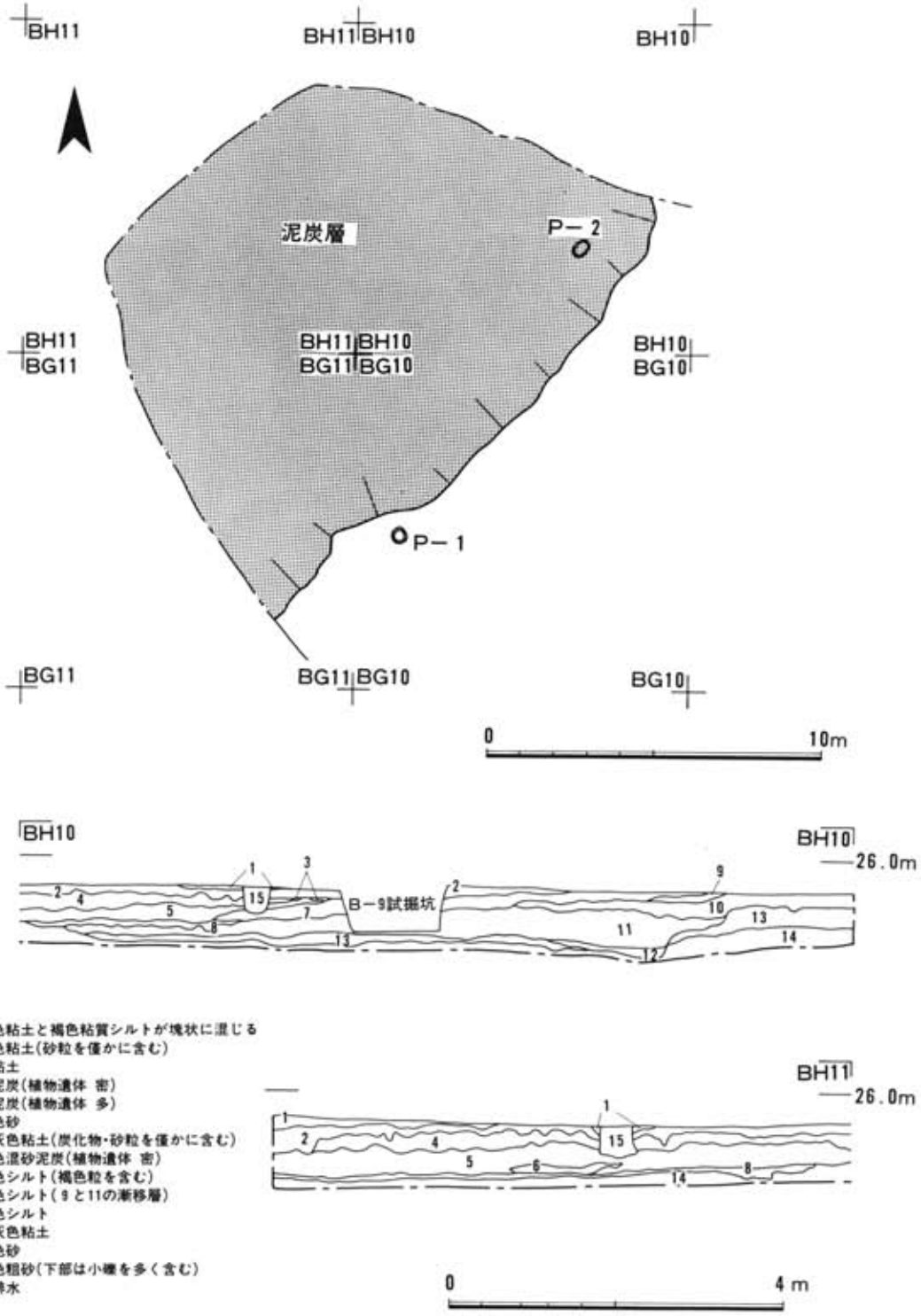
Ｐ－１はＢＧ１０区画の西辺中央部に位置し、泥炭の堆積する落ち際にあたる。長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.12mで、埋土は黒色泥炭である。内部から土師器高杯の脚部と甕、編物が出土した。甕は小穴の底面で、甕の底部外面に張り付いた状況で出土した。

383はＰ－１の底部から出土した編物である。底部は綾状に編んだ網代編みで、体部は外側に放射状に伸びる経材に横材が編みこまれている。

384は口縁部を欠くやや長胴の土師器甕で、外面は目の細かいハケメ調整である。外面には煤の付着が顕著に認められる。385は高杯の脚部で、裾部が強く折れる。

縄紋土器（図66～68）

晩期の浅鉢（344～359・373・374）　344～348は外反気味に開く口縁部で、内外面ないし片面に沈線を巡らせ端部が丸みを帯びる。344・345は口縁端部が強く短く内折し、346・347もやや弱く内折するが、348は真っすぐ収まる。349～351は胴部が強く屈折し、短く反転して外反しつつ立ち上がる部分の破片である。352は胴部が屈折し、頸部で強く折れて反転し、やや外反気味に長く伸びて口縁部に続く。口縁端部はやや丸みを帯び、内外面に沈線を巡らせる。353は胴部が強く屈折し、頸部で強く折れて反転し、口縁部は外傾して短く伸びる。口縁端部はやや尖り気味に収め、内外面に沈線を巡らせる。354～356は胴部の丸みがやや強く頸部がほとんどなく口縁部のみが短く外折する器形と考えられ、それぞれ少しずつ異なる口縁部の特徴を有している。354は端部の丸みが強く、内外面の沈線は深く明瞭に施す。355は丸みの強い端部が内側に短く折れ、内面は段をなすが、外面は沈線を巡らせる。356は端部がやや尖り気味に収まり、内外面の沈線はややにぶい。357は外反して端部を面取りする口縁部で、胴部で屈折して底部に



1：青灰色粘土と褐色粘質シルトが塊状に混じる
2：暗灰色粘土(砂粒を僅かに含む)
3：灰色粘土
4：黒色泥炭(植物遺体 密)
5：褐色泥炭(植物遺体 多)
6：灰白色砂
7：暗青灰色粘土(炭化物・砂粒を僅かに含む)
8：黒褐色混砂泥炭(植物遺体 密)
9：淡黄色シルト(褐色粒を含む)
10：灰白色シルト(9と11の漸移層)
11：青灰色シルト
12：暗青灰色粘土
13：青灰色砂
14：灰白色粗砂(下部は小礫を多く含む)
15：暗渠排水

図65　北側泥炭部(1：200)，土層(1：80)

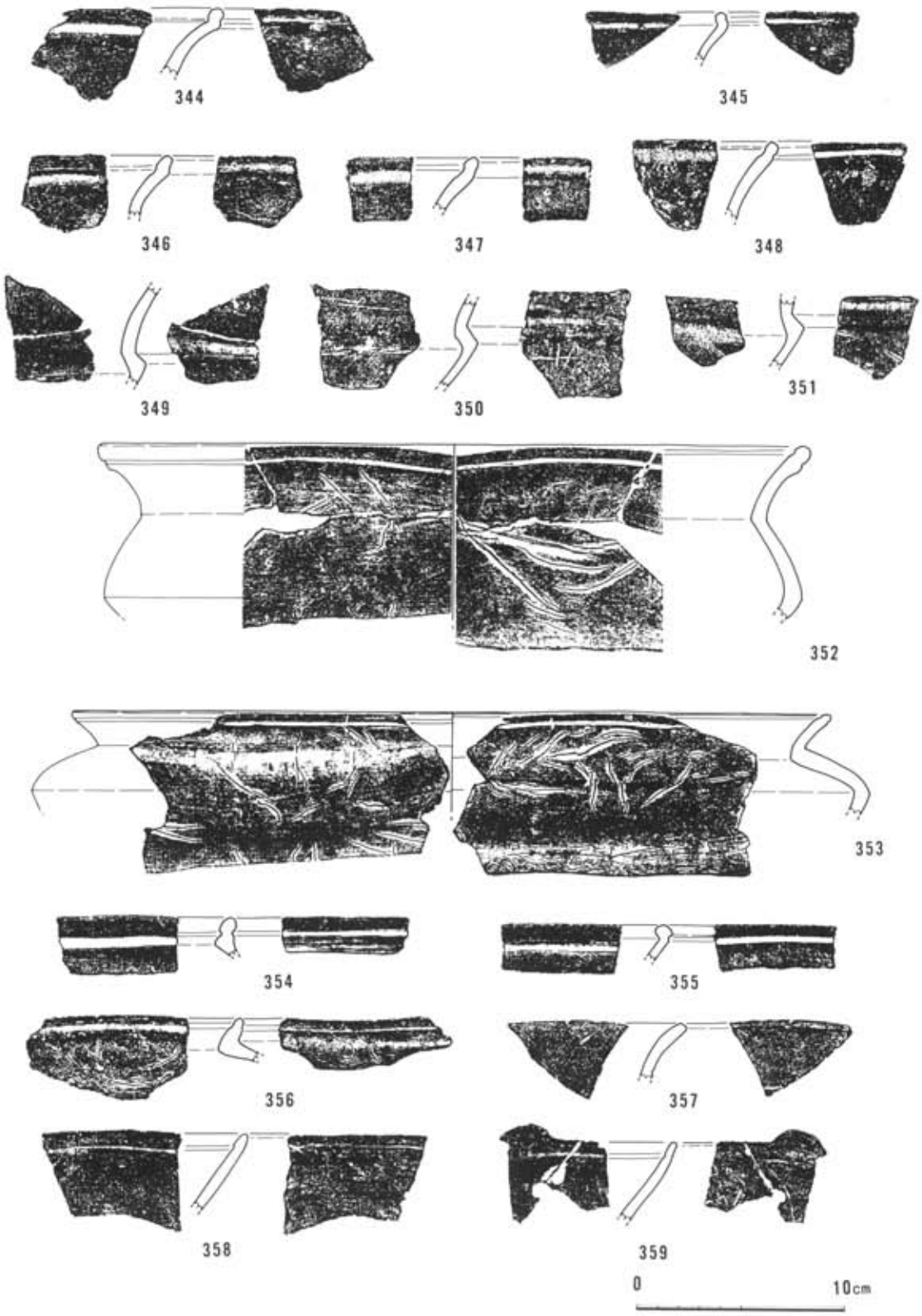


図66　泥炭部の縄紋時代遺物１（１：３）

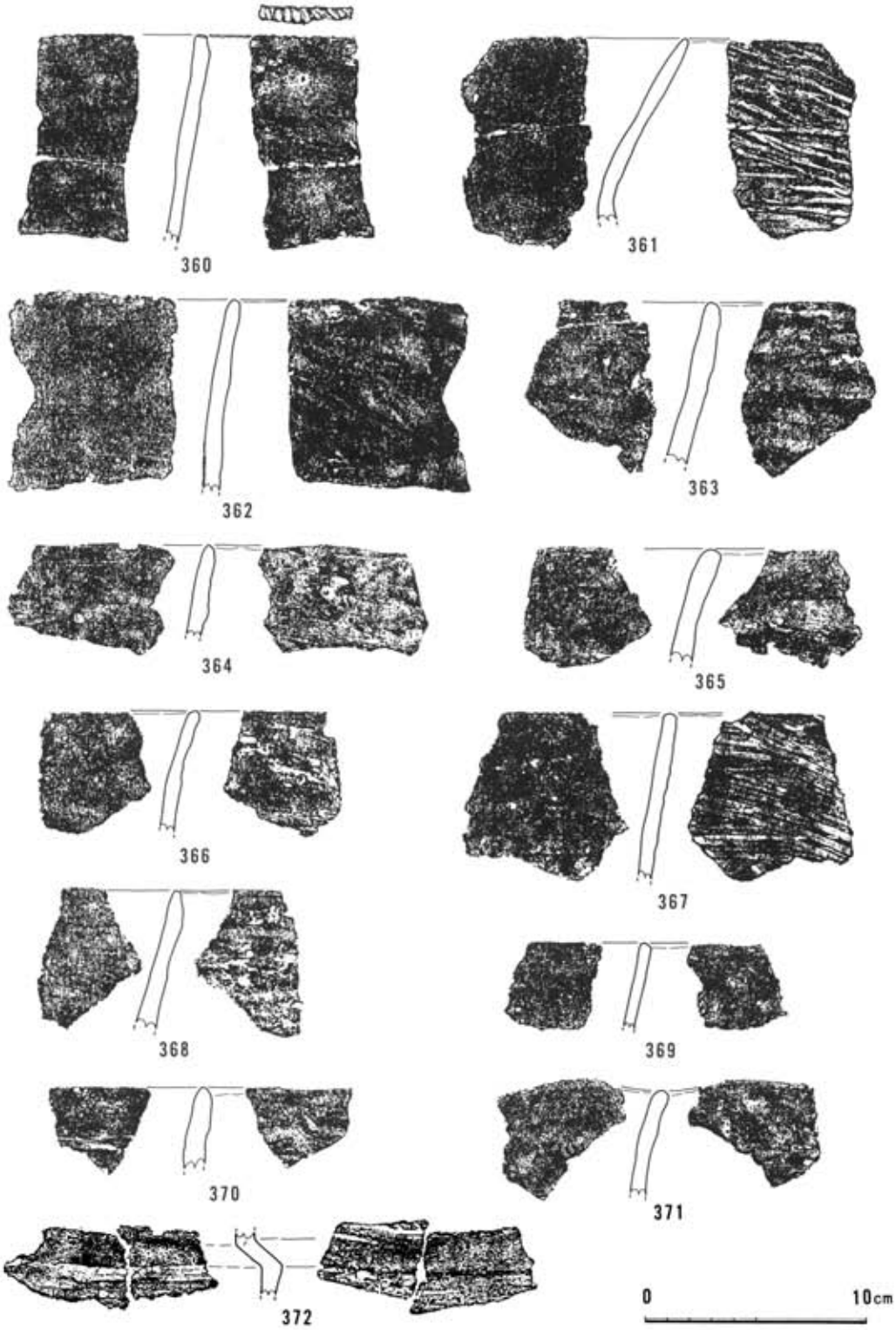


図67　泥炭部の縄紋時代遺物２（１：３）

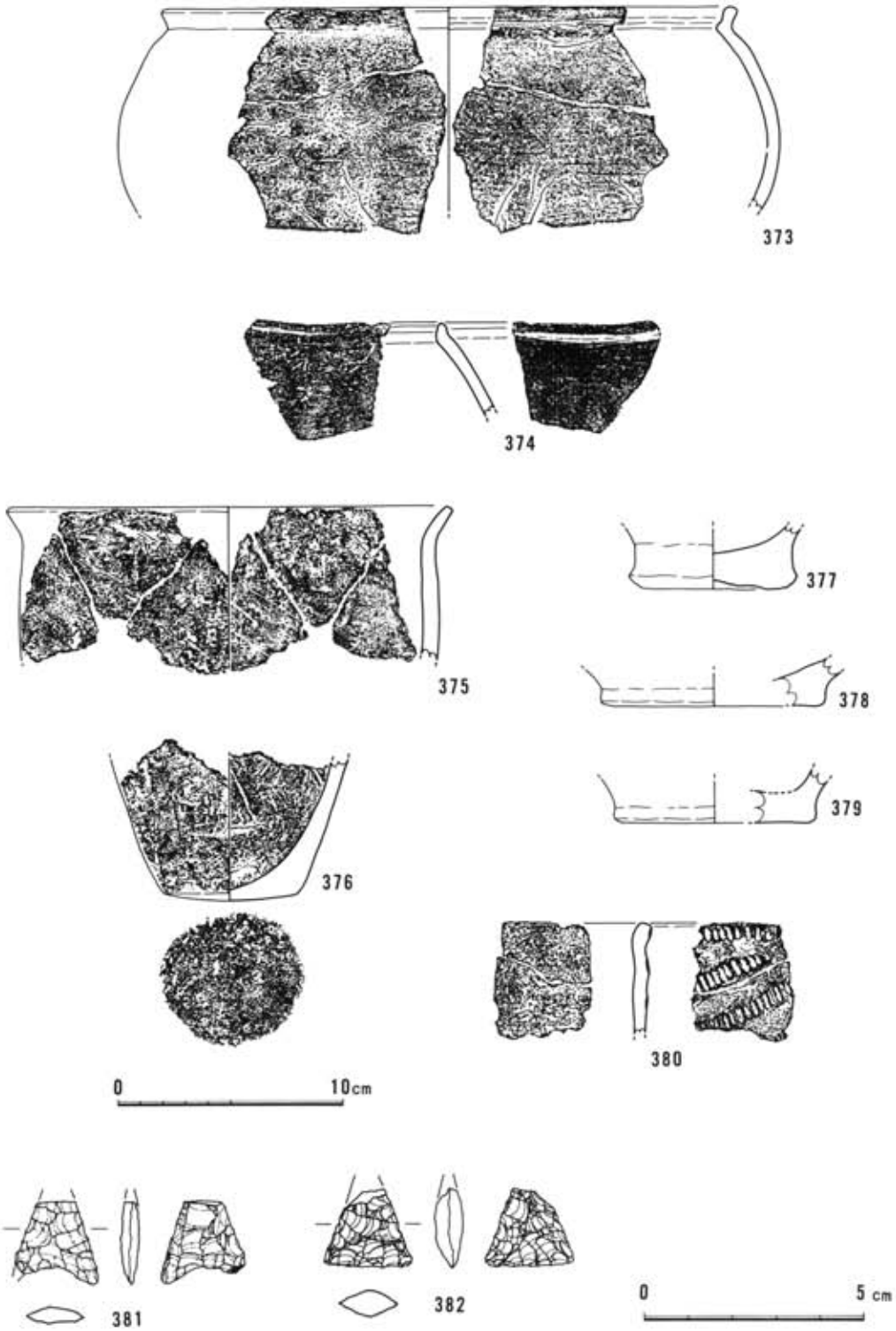


図68　泥炭部の縄紋時代遺物３（373～380は１：３，381・382は２：３）

続く器形であろう。

358・359は同一個体で、口縁部から単純にすぼまり内面に浅い沈線を１条巡らせる。359には楕円形の突起がある。373・374は体部が球形に近く、口縁端部のみが外折する。373は内面に弱い沈線を施し、端部を丸く収める。374は口縁部の内外面に弱い沈線を巡らせ、端部を僅かに尖り気味に収める。これらの浅鉢はいずれも内外面に丁寧な横方向のヘラミガキを施す。

晩期の深鉢（360～372・375～379）　いずれも小破片で、全体の器形は不明瞭である。360は僅かに外傾して直行する口縁部で、内外面は丁寧にナデられており、端部に刻目を施す。361は頸部でくびれた後、大きく外傾して立ち上がる口縁部で、器面調整は内面がナデ、外面が二枚貝条痕である。362～371は僅かに外傾しつつも、ほぼ直行して立ち上がる口縁部である。器面はナデで仕上げるものがほとんどで、367のみが外面に二枚貝条痕を留める。372は肩部が強く屈折し、頸部で再びくびれて口縁部に続く。375は胴部が張らずに口縁部が短く外反する。ここでは深鉢としたが、全体の器形は不明である。376～379は底部で、377～379は厚みのある平底である。376は小径の不安定な平底で、外面は板ナデ状の器面調整が観察される。外底面は中央部が僅かに膨らみ、安定感に欠ける。泥炭層からの出土であり、あるいは全く後代の所産であるかも知れない。

中期の土器（380）　380は中央部下層の第１群ａ類に比定されるもので、口縁部に押引紋と凹線紋の組み合わせによる紋様を施し、胎土に滑石を含む深鉢である。器面や割れ面は摩耗しており、混入と考えられる。

石器（図68）

図示したのは石鏃２点のみであるが、これ以外に磨製石斧片、敲石、砥石、黒曜岩と讃岐岩質安山岩の石核・剥片が出土している。381は微凹基の、382は平基の石鏃で、いずれも先端部を欠く。382はかなり厚みのある製品である。

弥生土器・土師器（図70）

386は弥生時代中期の甕で口縁部は断面Ｌ字状を成し、口縁下に断面三角形の低い突帯を巡らせる。弥生土器はこれ１点のみ出土した。387・388は土師器甕である。387は強くくびれた頸部から口縁部が外傾して伸び、端部は面取りし、体部内面はヘラケズリによって薄く仕上げている。388はなで肩で弱くくびれる頸部から口縁部が緩やかに外反する。389は頸部から外反して突帯状に張り出した後、僅かに外傾してまっすぐ立ち上がる複合口縁壺である。390は複合口縁を成すと思われる小型の壺で、試掘調査時のＢ－６試掘坑で泥炭層から出土した。頸部と体部との境に粘土紐を巡らせ、これに刻目を施している。器面がやや摩耗しており、調整は不明瞭である。

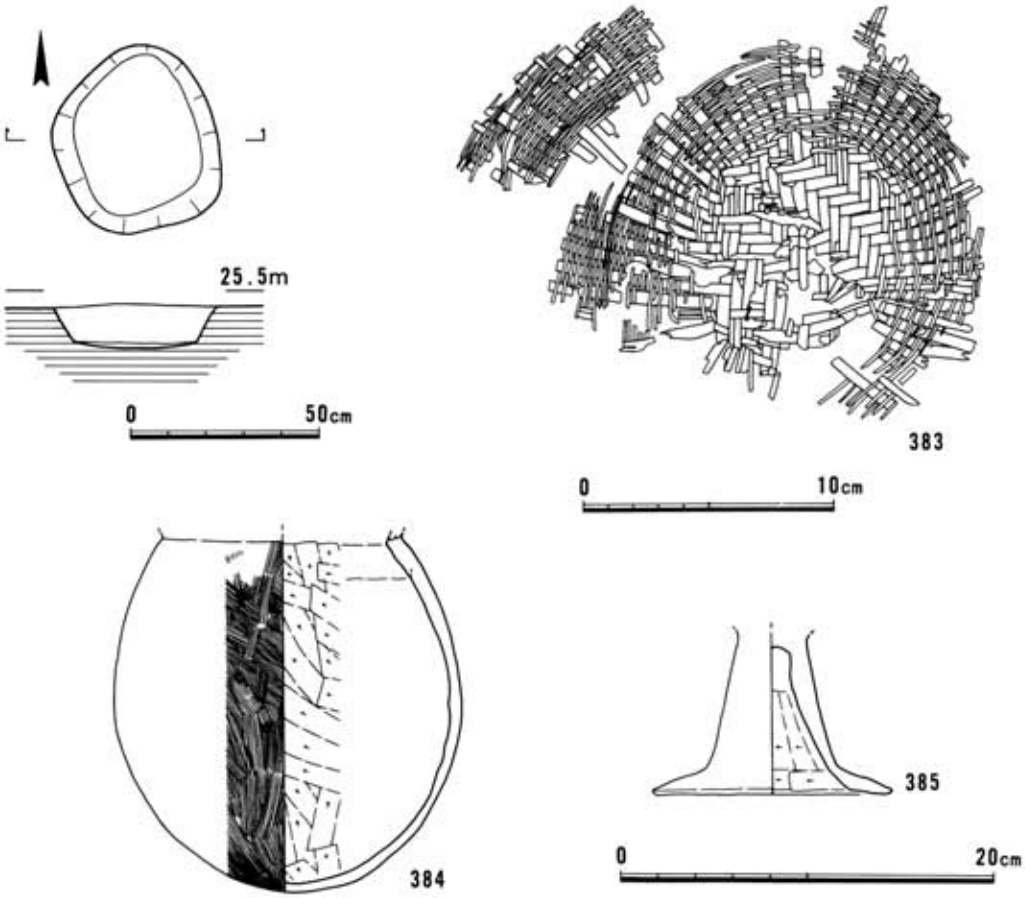


図69　P－1（1：20），出土遺物(383は1：3，384・385は1：4）

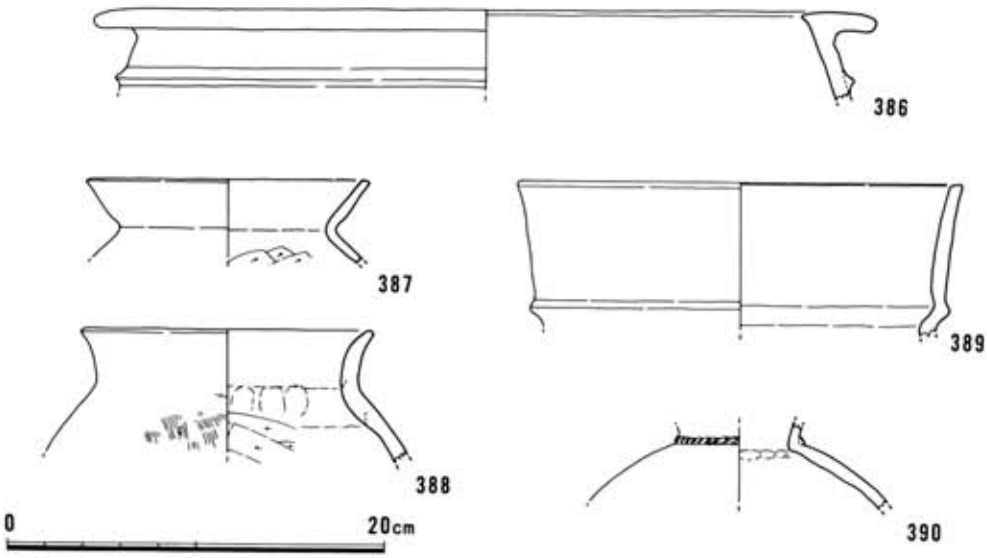


図70　泥炭部の弥生土器・土師器（1：4）

（２）ＳＸ238（図71～73）

調査区北側中央部のＢＩ０６区画で土器の集中が認められたため、精査して浅く不定形な土坑を確認した。全体の規模や形状は不明であるが、検出した部分では長軸9.4m、短軸1.9m以上、深さ0.5mである。埋土は炭化物を多く含む黒色土である。当初は３つの遺構の重複と見て、ＳＸ238、ＳＸ239、ＳＸ240の遺構番号を与えていたが、明瞭な区分が難しいことや出土遺物の内容等からＳＸ238として一括し、ＳＸ238をＳＸ238Ａ、ＳＸ239をＳＸ238Ｂ、ＳＸ240をＳＸ238Ｃとして報告する。ただし、西側のＳＸ238Ａ・ＳＸ238Ｂと東側のＳＸ238Ｃとは間に浅い部分を挟むことから、別遺構の可能性はなお残る。出土遺物は混入と考えられる弥生時代の石製穂摘具と土弾１点ずつを除き、全て古墳時代初頭の土師器である。

391～398は甕である。391は強くくびれた頸部から口縁部が外傾するもので、口縁端部は内側につまみあげる。体部外面には一見ハケメ状の目の細かいタタキを、内面にはヘラケズリを施してかなり薄手に仕上げている。392も口縁端部を内側につまみあげる。393の外面は粗いタタキの後ハケメで整えており、内面の胴部はヘラケズリの痕跡をナデ消している。394はなで肩で、口縁部は僅かに内湾気味に外傾して立ち上がる。口縁端部は内側につまみあげる。肩部に櫛描の波状紋を巡らせている。395はなで肩で頸部のくびれがやや弱く、口縁部は僅かに内湾気味に立ち上がる。396は頸部が強く折れて口縁部が僅かに外反しつつ立ち上がる。やや長胴で、胴部は内外面共にケズリに近い強いハケメを施す。397は頸部で一端くびれて緩やかに立ち上がり、口縁部で再び外反する。長胴で全体に器壁が厚く、胴部外面は板ナデである。398は口縁部を欠くため不確実であるが、いわゆる畿内第５様式系の甕と考えられる。やや長胴で、底部は小径でやや厚みがある。器面調整は、外面が左下がりのタタキ、内面は目の細かいハケメで、粘土帯の接合痕が明瞭に残る。

399～406は壺としたものである。399は長頸壺、400は短頸壺の口縁部である。401は体部が球形で、頸部で強く折れて口縁部が外傾する。体部外面の器面調整はタタキである。402は体部が球形で頸部の強く折れる小型の壺で、外面はミガキに近い非常に丁寧なナデで仕上げられている。403は体部が球形で、尖り気味の丸底をなす小型の壺で、外面は丁寧なヘラミガキが施される。404は頸部がすぼまる受け口状の口縁部である。405は口縁下に段を有する精製の壺で、段をなす部分に波状の暗紋を３条廻す。また図示はしていないが、内外面共に横方向の細かいヘラミガキを施す。全体の器形は不明であるが、あるいは複合口縁をなすものかもしれない。406は丸底で体部は偏球形に近く、頸部でくびれて短い口縁部が僅かに外傾気味に立ち上がる。壺の項で説明したが、むしろ鉢とすべきかもしれない。

407は高杯の杯部である。屈曲部から口縁部までが長く、外面には放射状の暗紋が認められる。408は高杯の脚部である。杯部は接合部分ではがれており、柱状部は中実である。外面は丁寧なヘラミガキを施し、裾部に３箇所の穿孔がある。414は脚柱状部は太く、脚裾部は大きく開いて

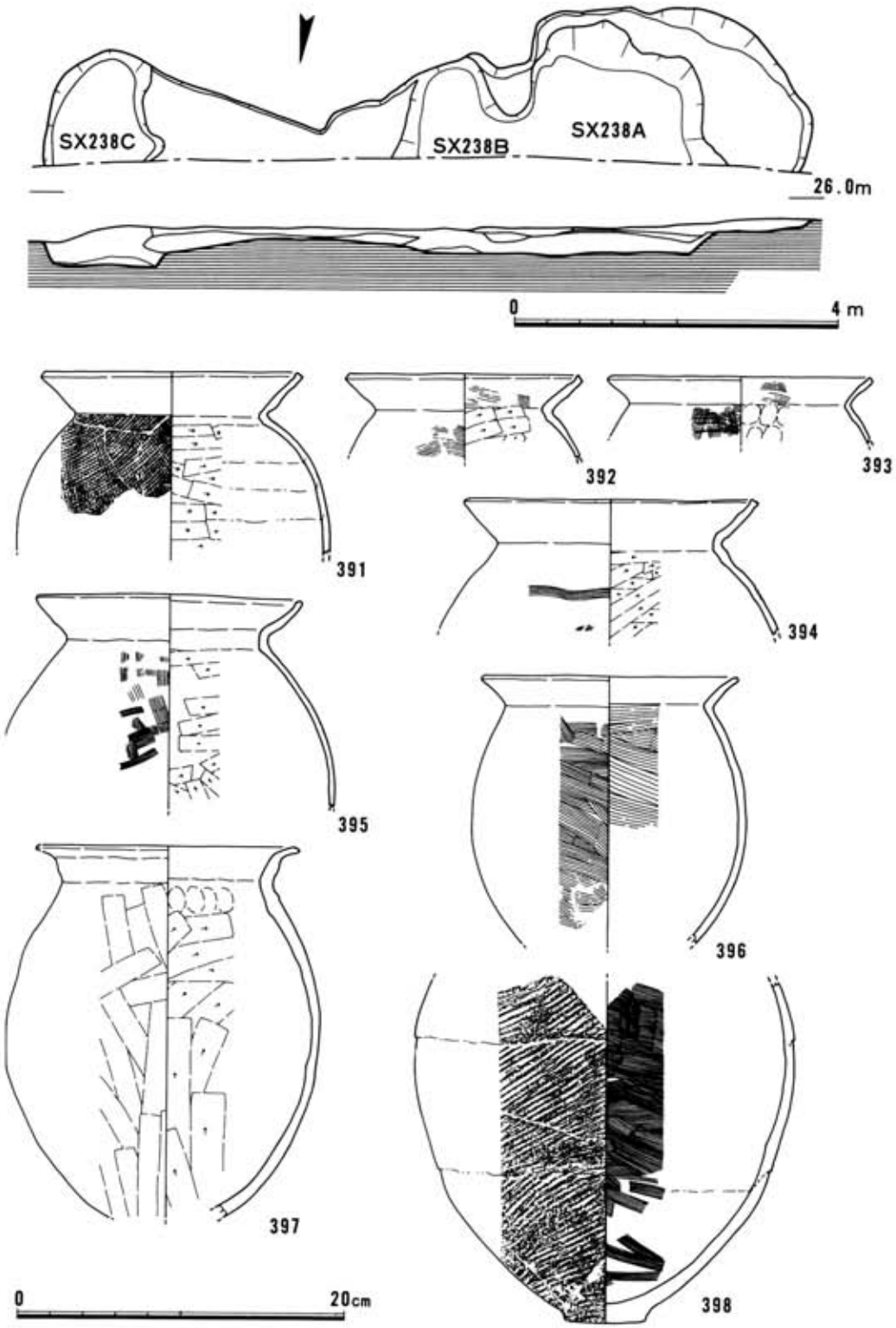


図71　SX238(1：80)，出土土器1(1：4)

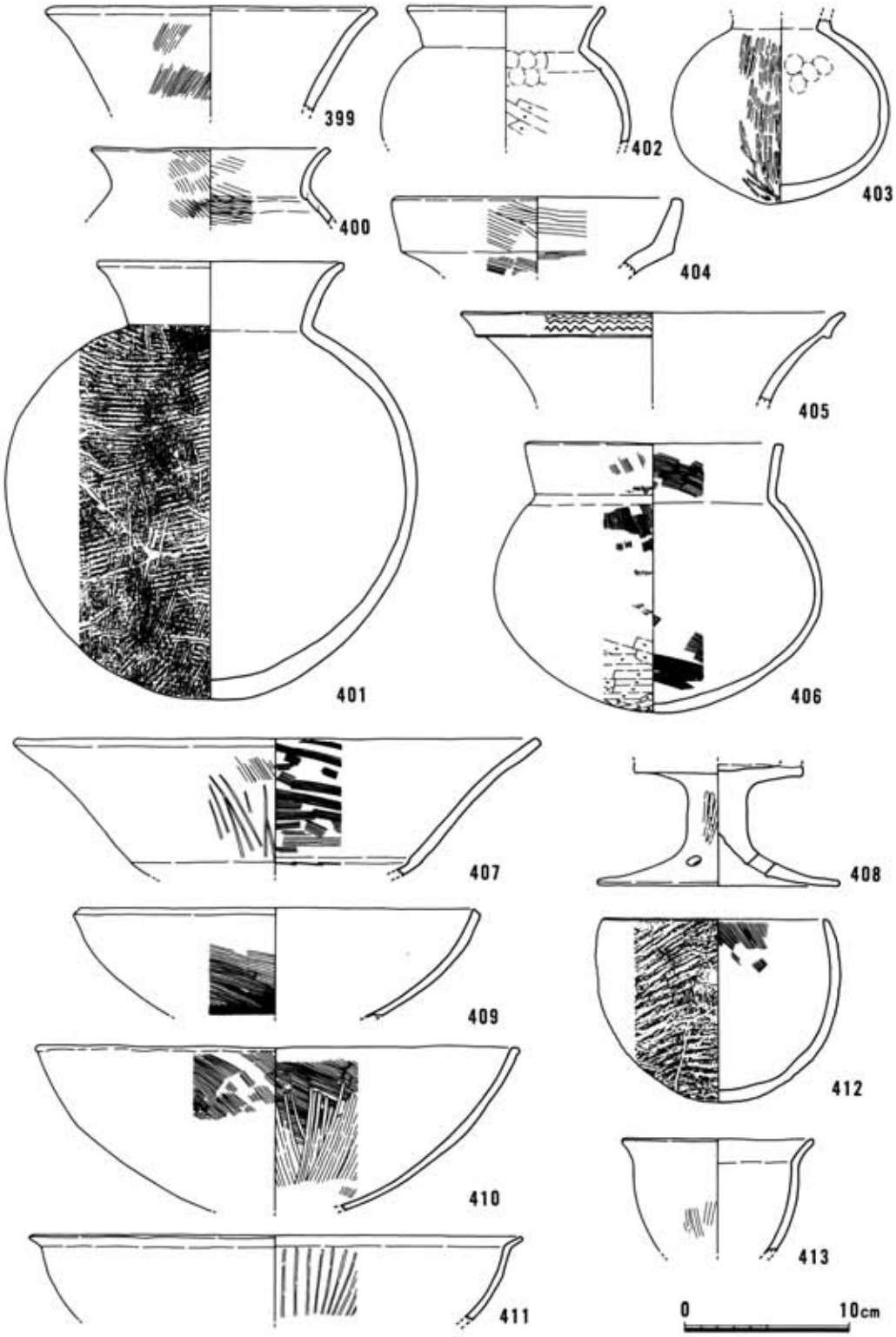


図72　SX238出土土器２（１：４）

3箇所の穿孔を有する。鉢部は緩やかに開いて口縁部は直行する。

409～413・415～427は鉢である。409・410は大型の鉢で、口縁部の下で緩やかに内折してすぼまる。口縁端部は丁寧に面取りする。410は内面に放射状の暗紋を施す。411は口縁部が短く外折する。図示していないが内外面とも細かい横方向のヘラミガキが施され、更に内面には放射状の暗紋を加えている。412は丸底から内湾気味に立ち上がる。外面は粗いタタキが施される。413は口縁部が外反気味に大きく開き、頸で折れてすぼまる。415～421は脚台付の鉢とした。415～417は口縁部が真っすぐ開き、やや外に踏ん張る低い脚台が付く。416は体部の内外面に縦方向のヘラミガキを施す。418～421は脚台部である。422～423・425は底部から単純に開くが、424は体部で緩やかに内折して口縁部が直行する。422～424は比較的丁寧な作りであるが、425は器面に指オサエの痕跡を留める。426・427は器高の低い小型の浅い鉢で、全体に粗雑な作りである。

428は完形に近い手捏土器である。

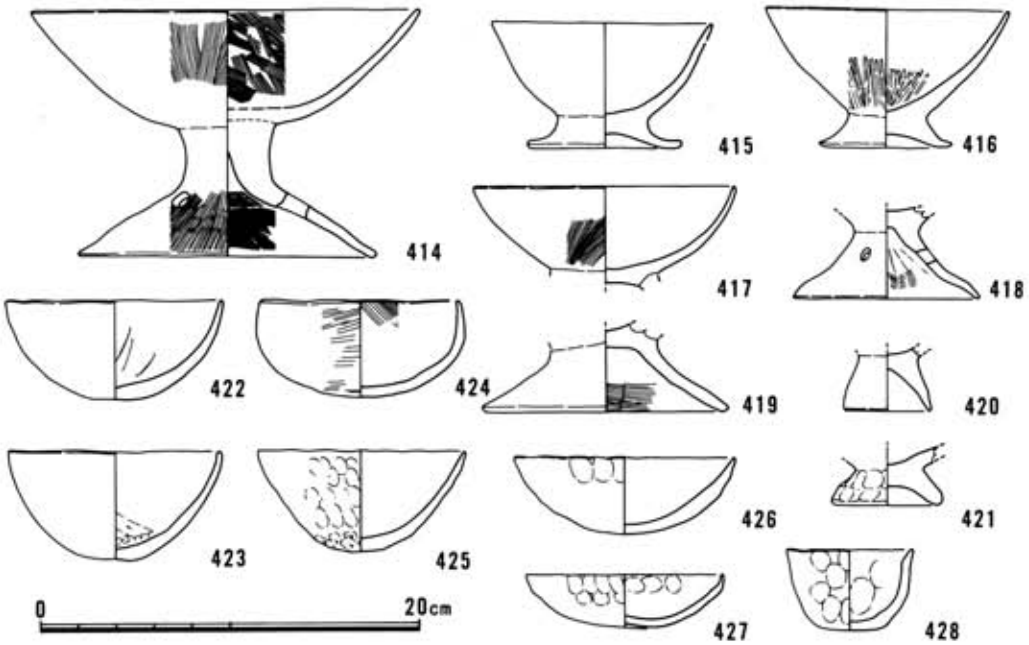


図73　SX238出土土器3（1：4）

４．南側部の遺構と遺物

（１）ＳＸ222（図74～76）

表土除去後に、調査区南東側のＡＷ０５区画辺りで古墳時代の土師器数個体が顔を出していたが、中央部の調査が終盤に差しかかった段階でこの部分を精査したところ、完形に近い多数の土器が密集して遺存していることが解った。土器溜、竪穴建物、あるいは古墳等の可能性を想定しつつ検出を進めたところ、1.3×1.1m程の範囲で一つのまとまりが押さえられた。この土器群は水田区画の境界にあたる東側が削平によって失われているものの、完形の土器が据え置かれたような状況であることが理解された。器種は中・小型の壺を主体に高杯を若干含むが甕はなく、日常的な様相の希薄さが感じられた。このまとまりが概ね全体を表した時点で、手捏土器や滑石製の有孔円板と剣形品が出土し、この土器群が祭祀遺構である可能性が俄に高まった。周辺を更に広げて調査を進め、最初に確認された土器群の南西にも土器群の広がりを確認した。南西側の土器群は長軸3.5m、短軸2.5mの略長方形の広がりを持ち、当初確認された土器群とは北東から南西方向に向かって大きくは連なりながらも、その間に空白地帯を有している。南西側からも中・小型の壺を主体して、高杯・大型の壺を加えた器種が出土した。また多数の手捏土器や、有孔円板、臼玉、管玉、勾玉といった滑石製模造品、ガラス小玉、更に内行花紋系倭鏡片が出土した。遺物群の底面や周辺には明確な掘り込み等の構造は認められなかった。廃土を含めてこの範囲の土壌の水洗選別を行ったところ、予想通り多数の臼玉が検出された。この祭祀遺構をＳＸ222とし、最初に確認した北東側の土器群をＳＸ222Ａ、南西側の土器群をＳＸ222Ｂとして報告する。

ＳＸ222の上面はシルト層に覆われており、半ば露出した状態の遺物群が洪水等により極めて短い期間に封入されたものと推定された。周辺を広げて精査したところＳＸ222の北西側に自然流路と考えられる落ち込みが確認された。更にこの流路の続きを求めて遺構検出を試みたが、複雑な土層堆積によって明確な形で全容を把握することはできなかった。解ったのは、この流路が幅数m程の小規模なもので、２区の範囲では西側から蛇行しつつ東側に流れていたらしいということである。そしてＳＸ222の位置はこの流路が蛇行して向きを北東に変えたところの岸にあたり、概ね流路に平行して営まれている。ＳＸ222ＡとＳＸ222Ｂとの関係は現場での所見による限り、重複関係もなく、限りなく同時期に近いとしか言いようがないが、洪水によると思われる同一のシルト層に覆われていることから、少なくとも埋没の時期については同時期と考えられよう。双方の出土土器に型式差を見いだせないことも傍証となろう。しかしその一方で、後述するような土器の器種や滑石製模造品の種別の偏りといった差異は看過できない。土器の遺存状態の違いも流路に対する位置関係だけでは片付けられないようにも思える。

ＳＸ222Ａは50個体以上の土器が完全に近い状態で遺存する。中・小型の壺を主体とする土器

が正置あるいは横置され、ある土器の口縁部に別の土器が収められる等、投げ棄てられたのではなく据え置かれた有り様が生々しい。これらの土器は上下には重なっておらず、平面的に密集するのみである。土器の他には、滑石製模造品の剣形品３点と単孔円板２点が出土した。臼玉も24点が土器の中から検出されている。この遺物群に伴う掘り込み等の施設は全く確認できなかった。

ＳＸ222ＢはＳＸ222Ａに比して範囲も広く、土器の数も非常に多い。中・小型の壺を主体とするが、手捏土器の量も目立ち、高杯もかなりある。また西側に高杯がややまとまり、北東側に大型の壺や甕が集中する等、器種毎に若干の分布の偏りがありそうである。ＳＸ222Ａに比べて破損しているものが多く、平面的に密集するばかりでなく重層的に遺存している。土器の他には、内行花紋系倭鏡１面、滑石製模造品の双孔円板11点、勾玉１点、管玉２点、臼玉208点、ガラス小玉３点が出土した。なお、現位置で押さえられたもの以外に、水洗選別によって滑石製模造品の管玉３点、臼玉746点、ガラス小玉４点が検出された。ＳＸ222Ａと同様に掘り込みは確認されなかったが、北東部の一角に幼児頭大から拳大以下の花崗岩礫40点近くが集中する。これらが人為的なものであることは疑いないが、その配置は雑然としている。礫には加工痕や赤化等は認められない。

ＳＸ222Ａ出土土器（図77～78）

429～432は高杯で、それぞれ形態が少しずつ異なる。429・430は杯部が中位で屈折して段を成し、脚部は真っすぐ伸び裾部で外折する。429の脚裾部が強く折れるのに対し、430はやや緩やかである。431は杯部が屈折せずに丸みを帯びる。432は脚部が大きく開く。433・434は小型の複合口縁壺である。435～460は中・小型の壺である。461～473は手捏土器で、本来は小型広口壺の模倣であろうが、極端にデフォルメされていて特定できない。473は器台に乗せた小型広口壺の模倣であろう。

ＳＸ222Ｂ出土土器（図79～90）

474～497は高杯である。474～492は杯部が中位で屈折して段を成し、脚部は真っすぐ伸び裾部で外折する。491は他と比べて低脚である。493～497は杯部が中位で屈折して段を成し、脚部は裾まで大きく開く。498～502は甕である。胴部は球形に近いがややなで肩で、頸部で強く折れて口縁部は真っすぐ外傾する。４個体を甕として図示したが、大型の壺との区分はかならずしも明瞭ではない。503～506は大型の壺。503・504は口縁部が僅かに内湾気味に立ち上がり、505はその傾向が一層顕著である。506は中位で段をなした後外反気味に開く退化した複合口縁の壺である。507～532は中型の広口壺、533～556・558～588は小型の広口壺、557は小型の複合口縁壺である。589～597は手捏土器で、壺の形状を留めるものである。極めて小型の壺と壺の形を留めるやや大型の手捏土器との識別は、成形や調整の手法、主として口縁部にヨコナデが用いられているか否かで判断した。598～713は手捏土器で、模倣器種を特定できない程デフォ

図74　SX222の位置と土層（1：60）

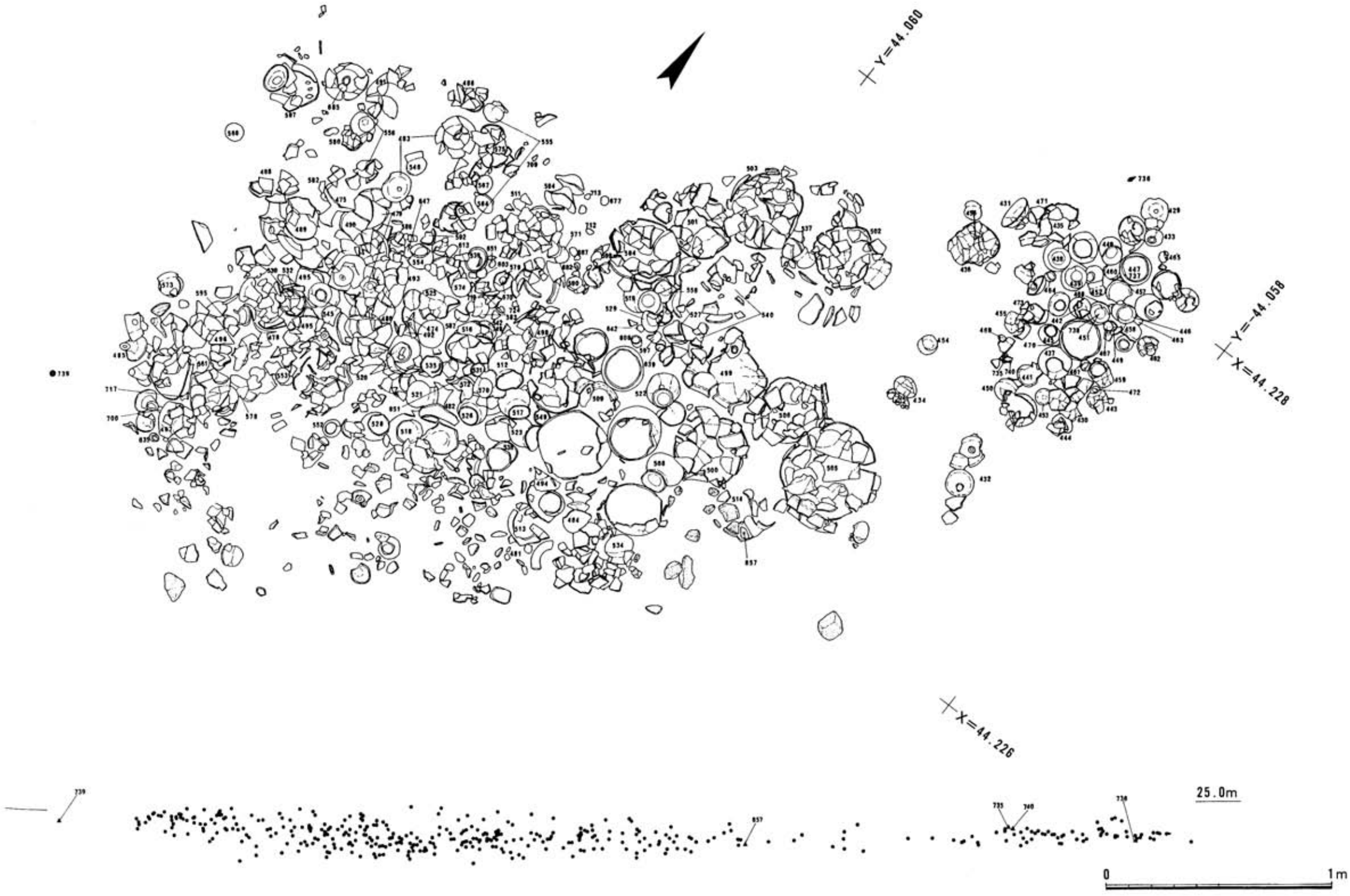


図75　SX222の上部(1：20)

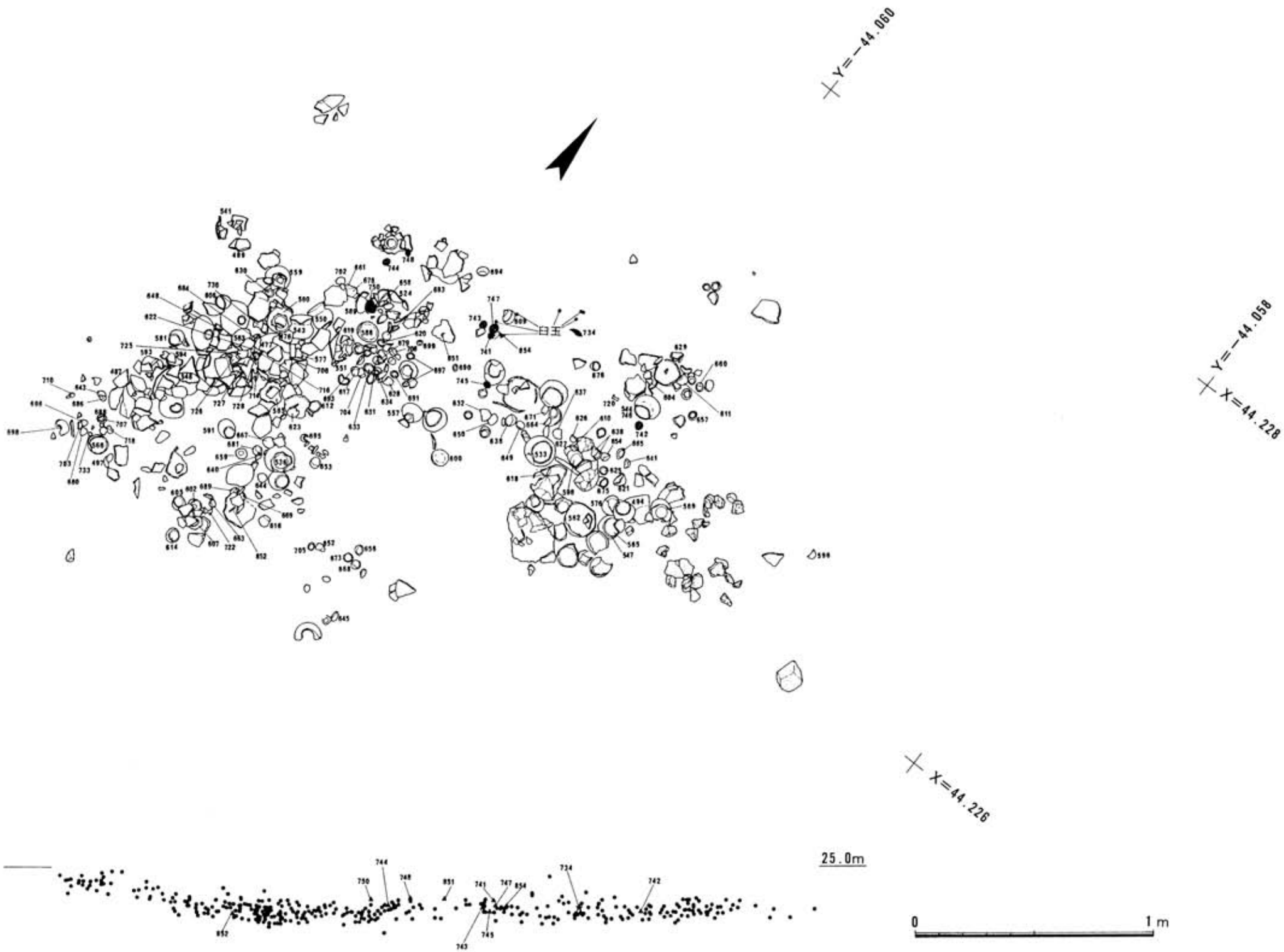


図76　SX222の下部(1：20)

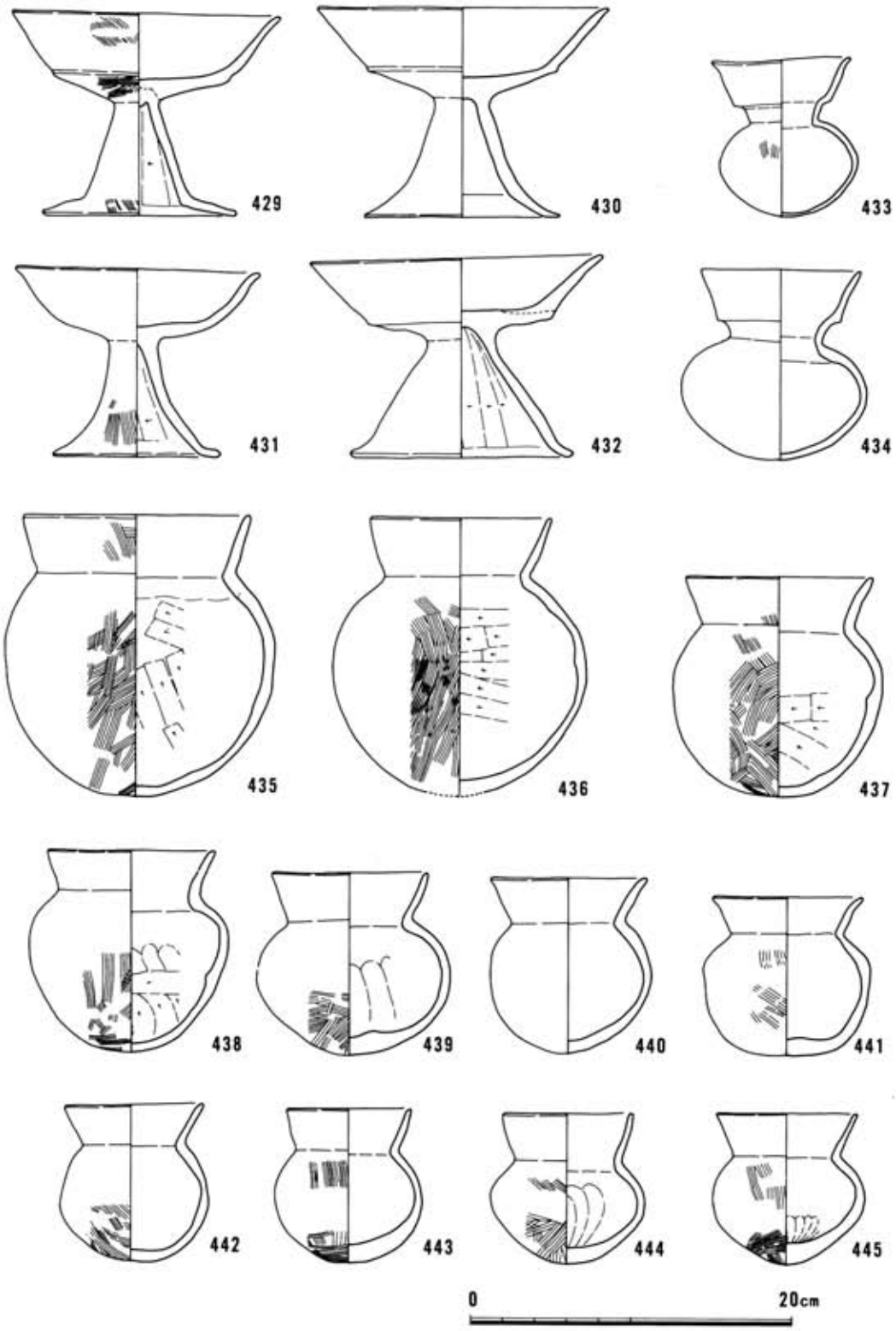


図77　SX222A出土土器1（1：4）

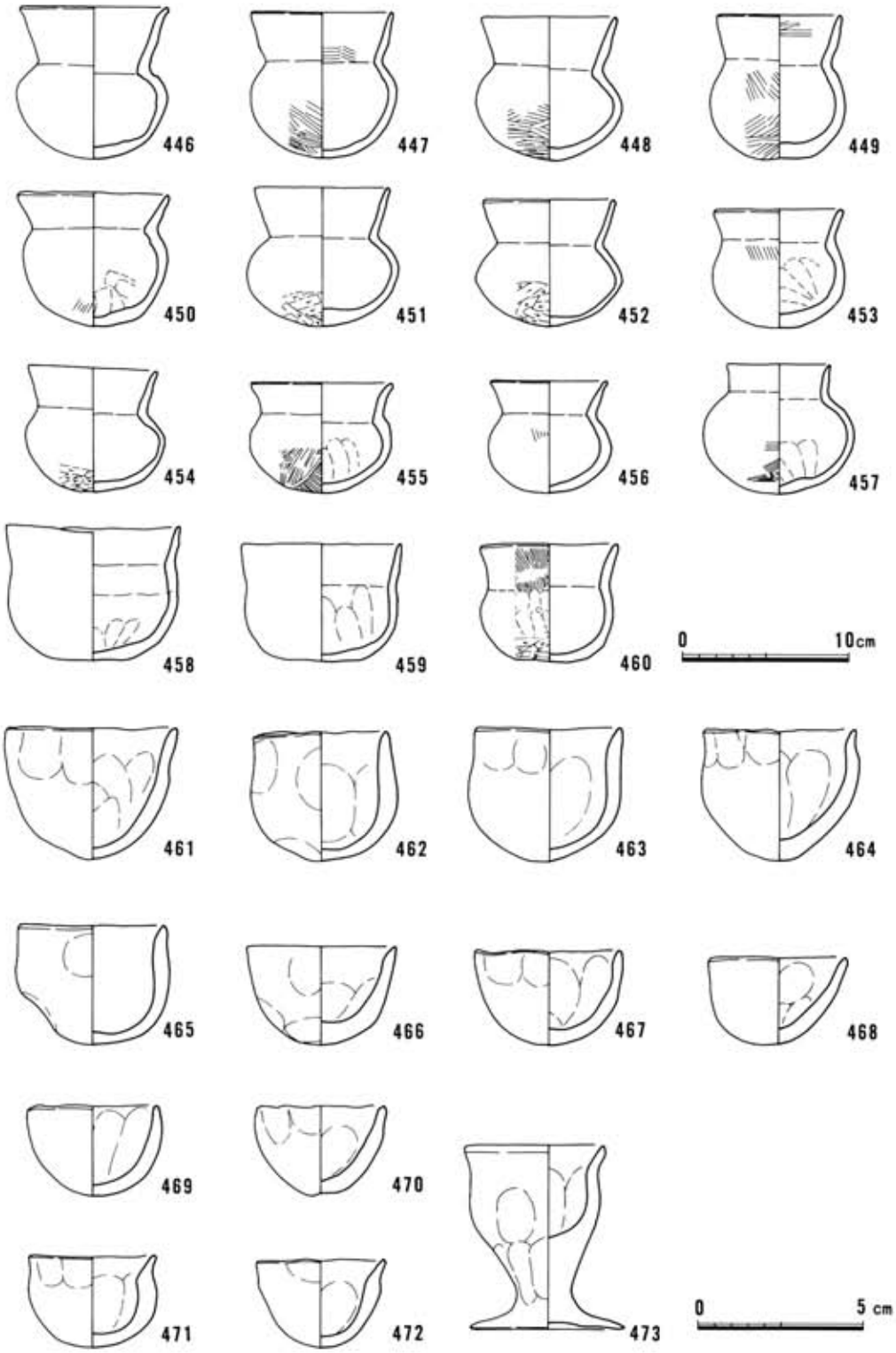


図78　SX222A出土土器２（１：４），土製模造品（１：２）

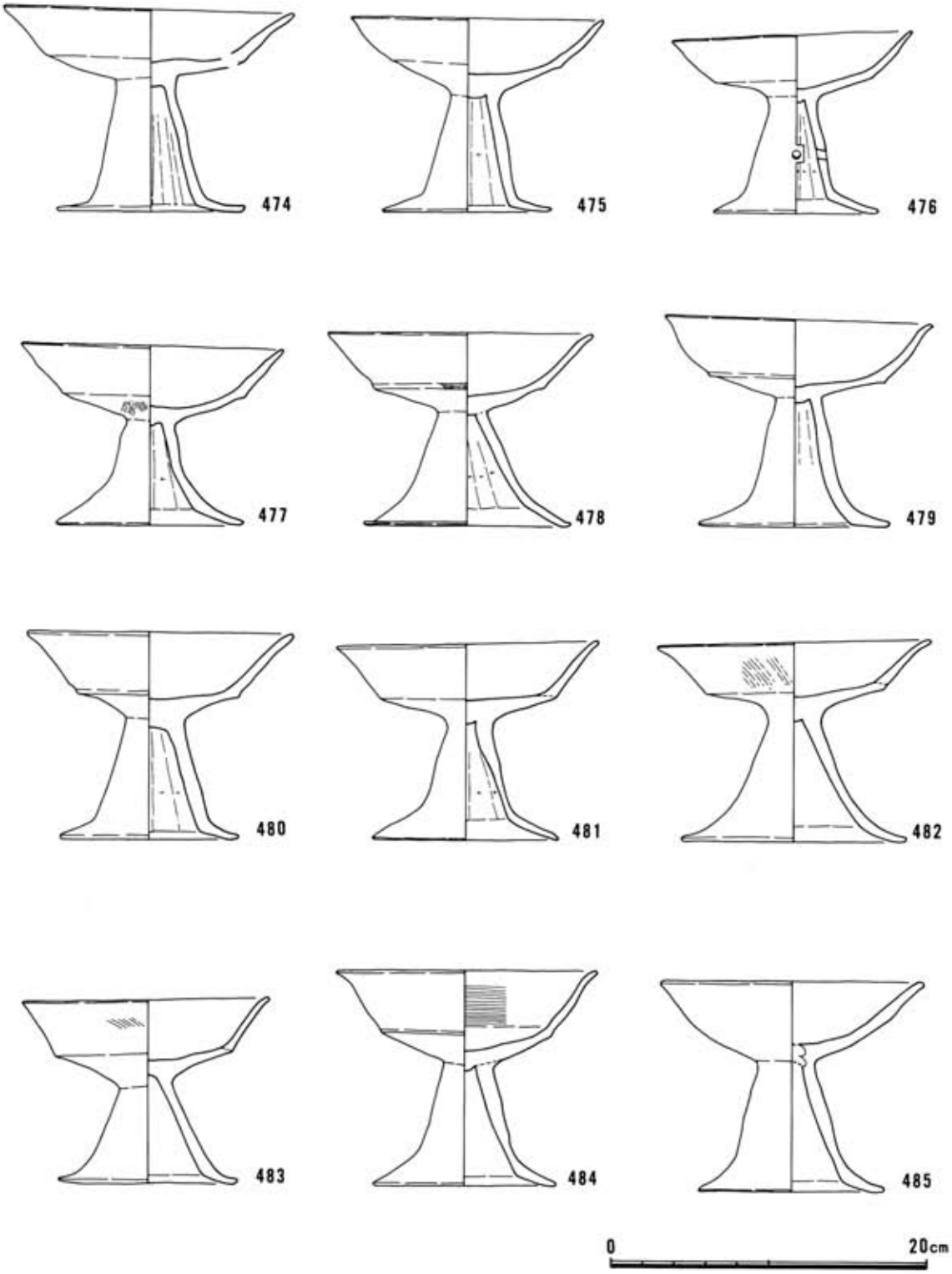


図79　SX222B出土土器1（1：4）

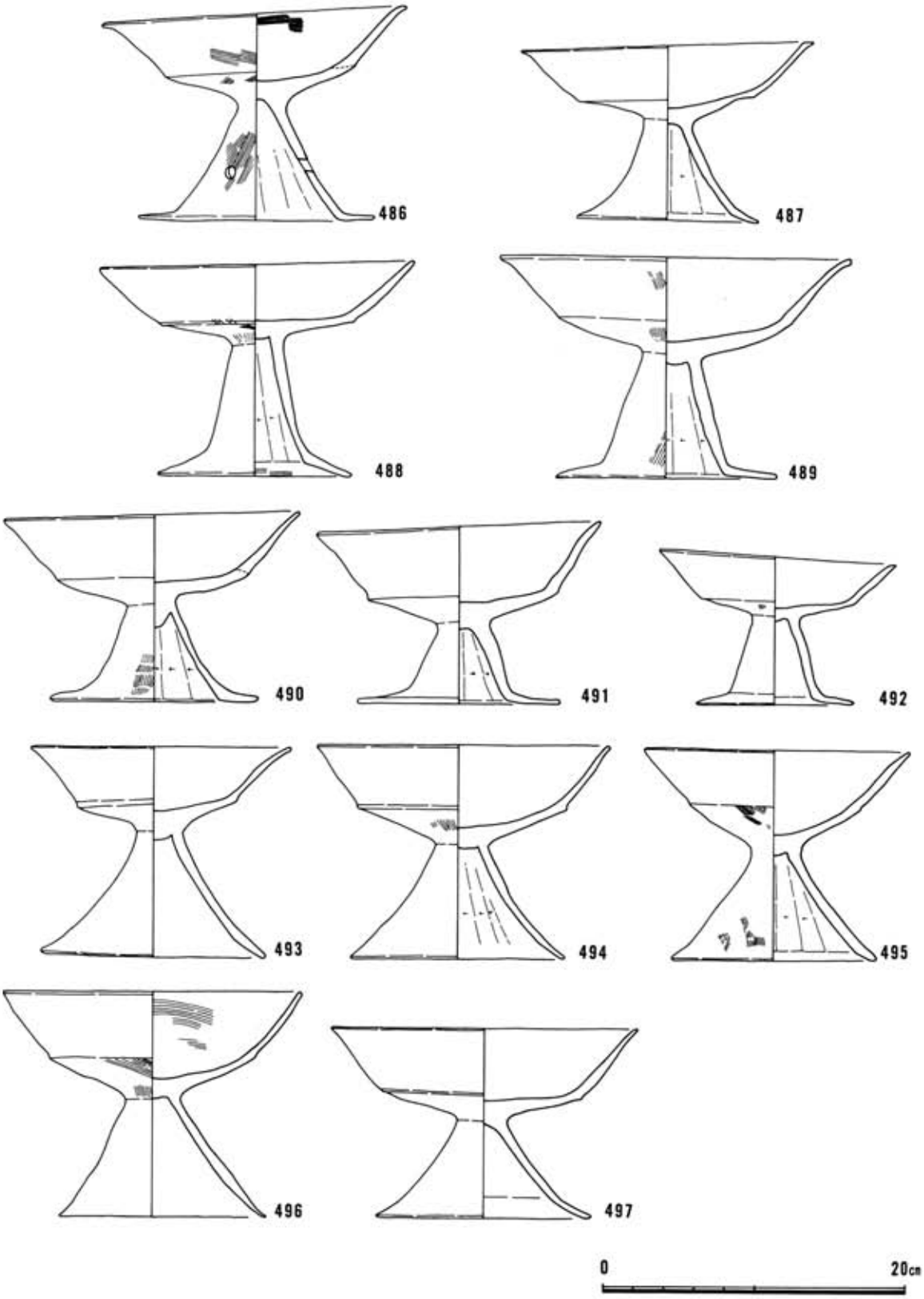


図80　SX222B出土土器２（１：４）

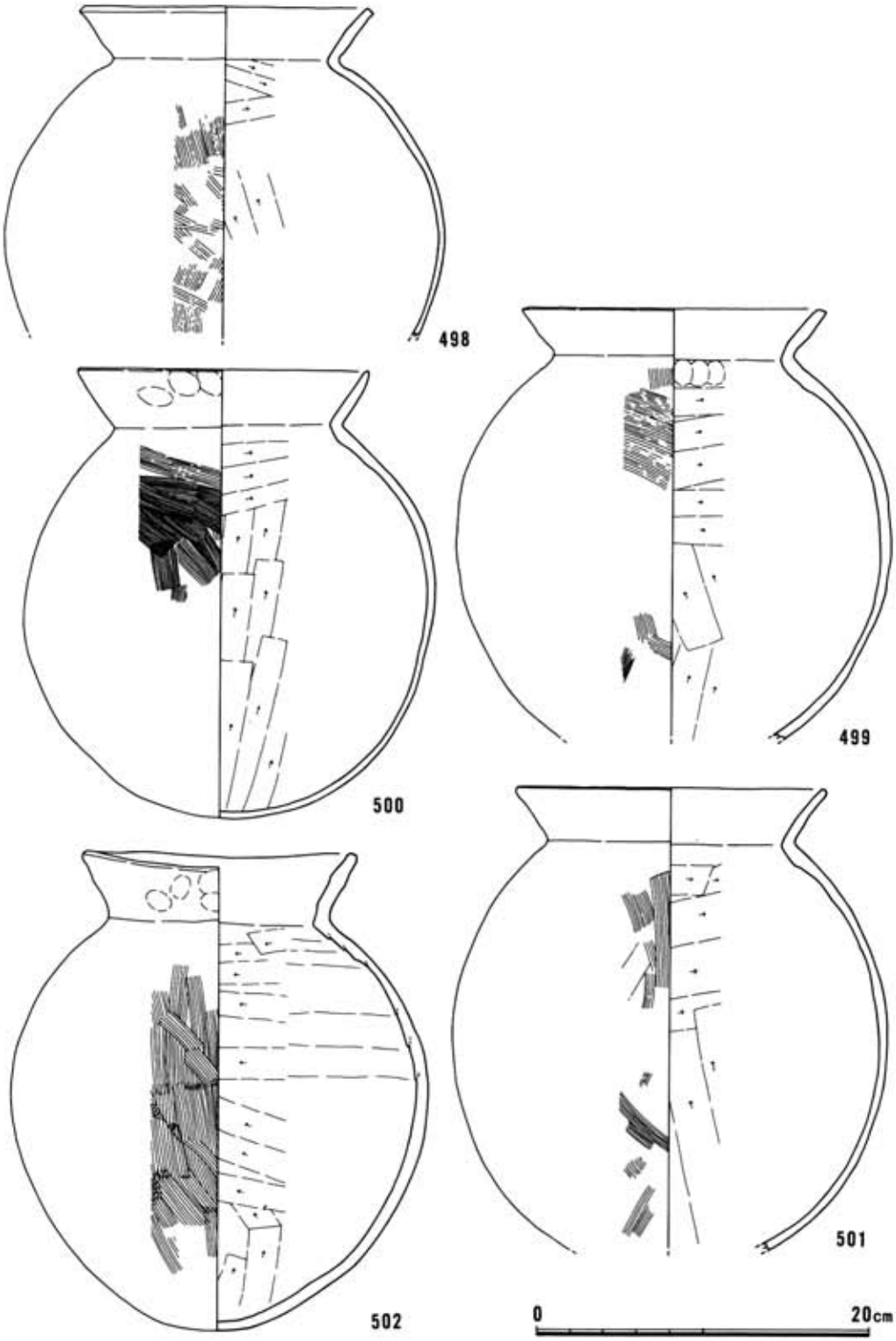


図81　SX222B出土土器３（１：４）

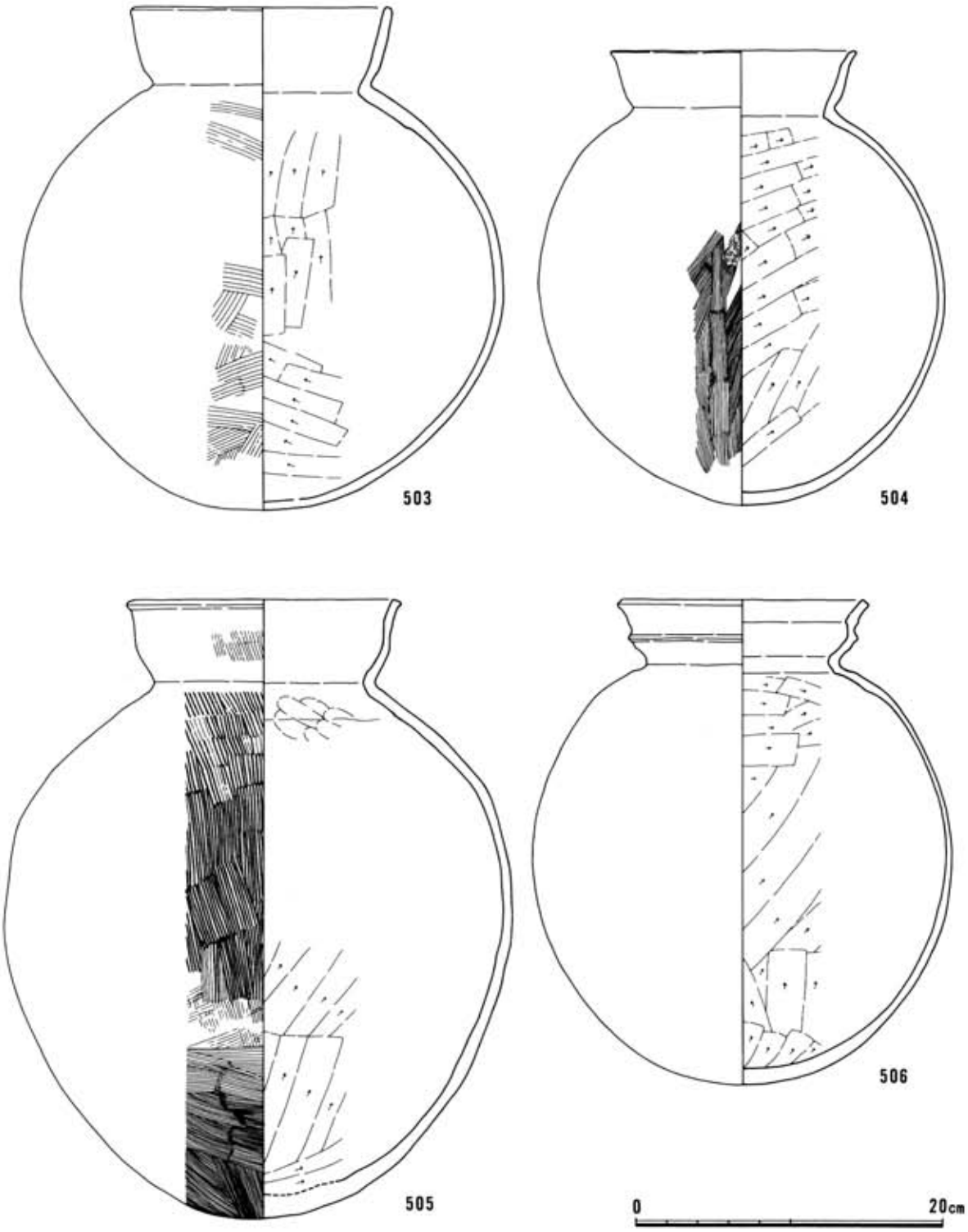


図82　SX222B出土土器４（１：４）

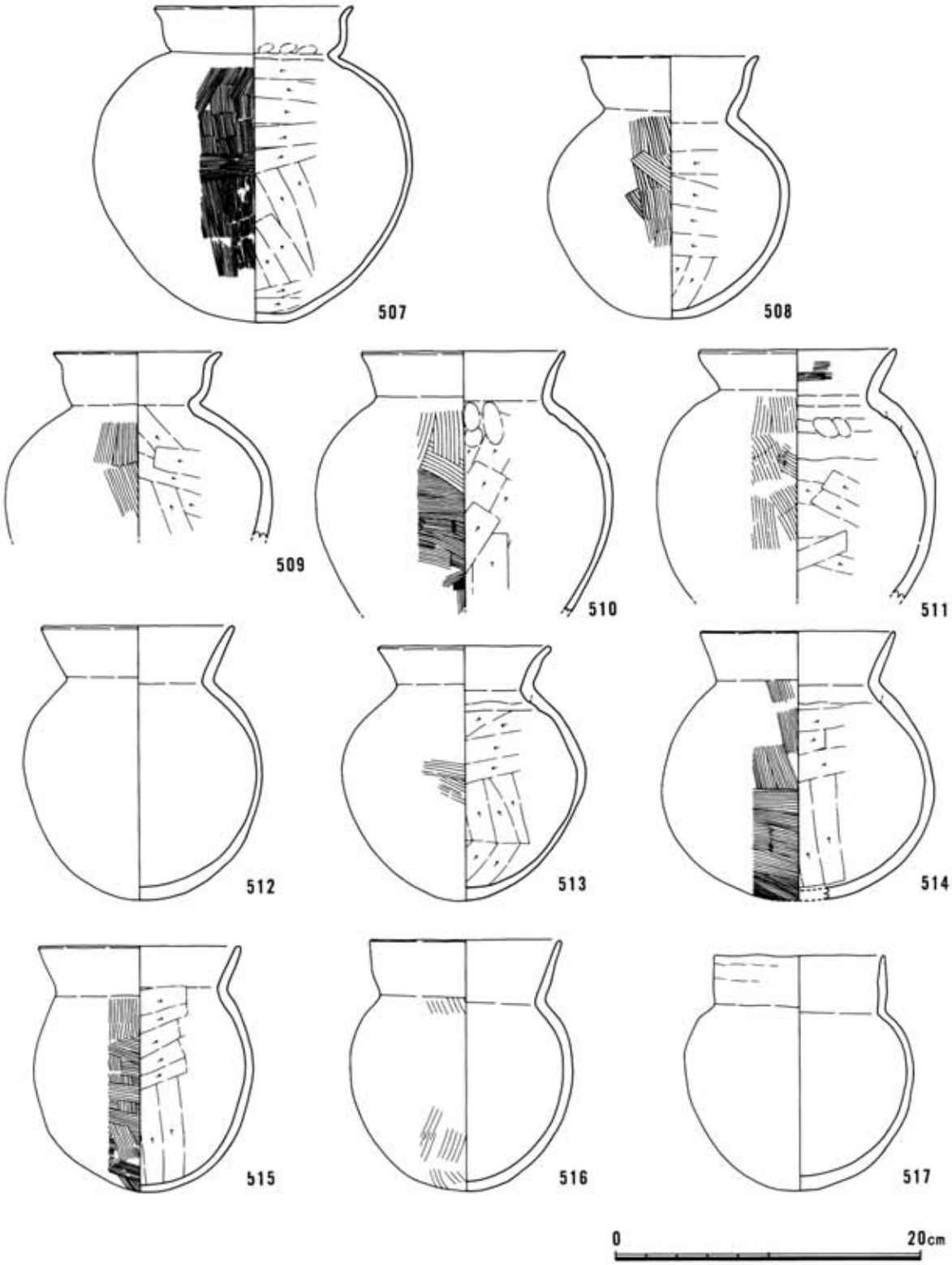


図83　SX222B出土土器５（１：４）

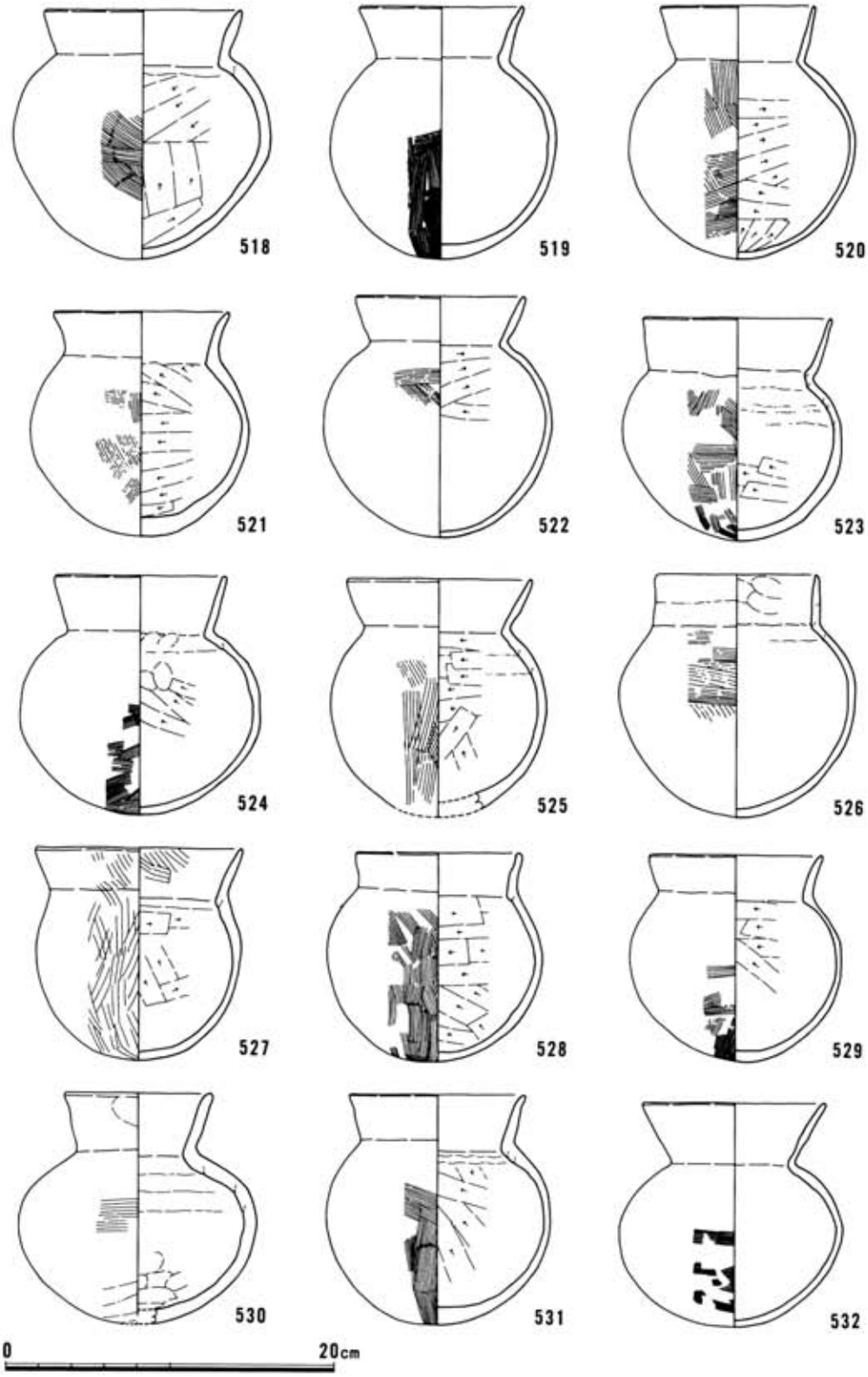


図84　SX222B出土土器6（1：4）

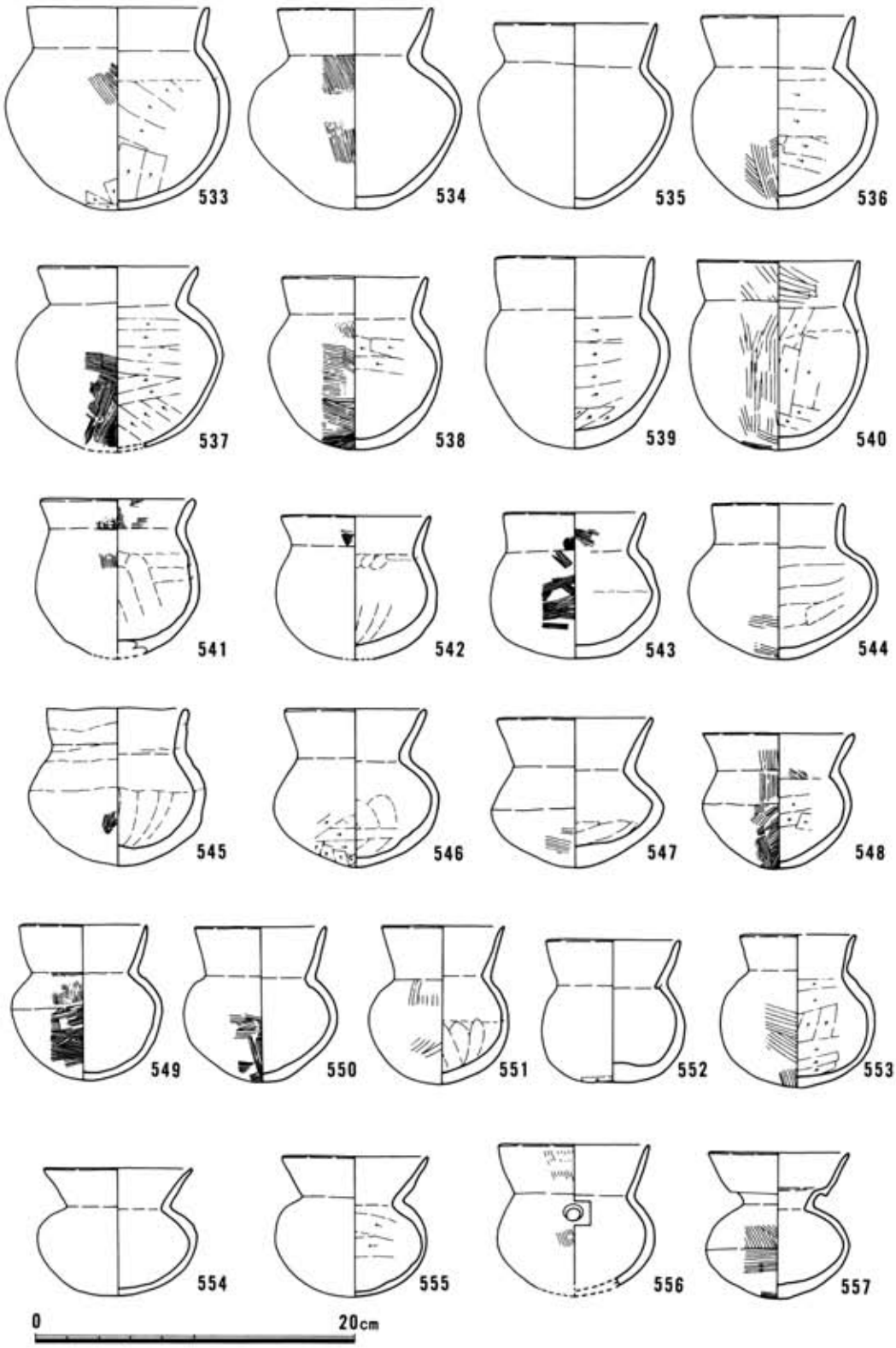


図85　SX222B出土土器７（１：４）

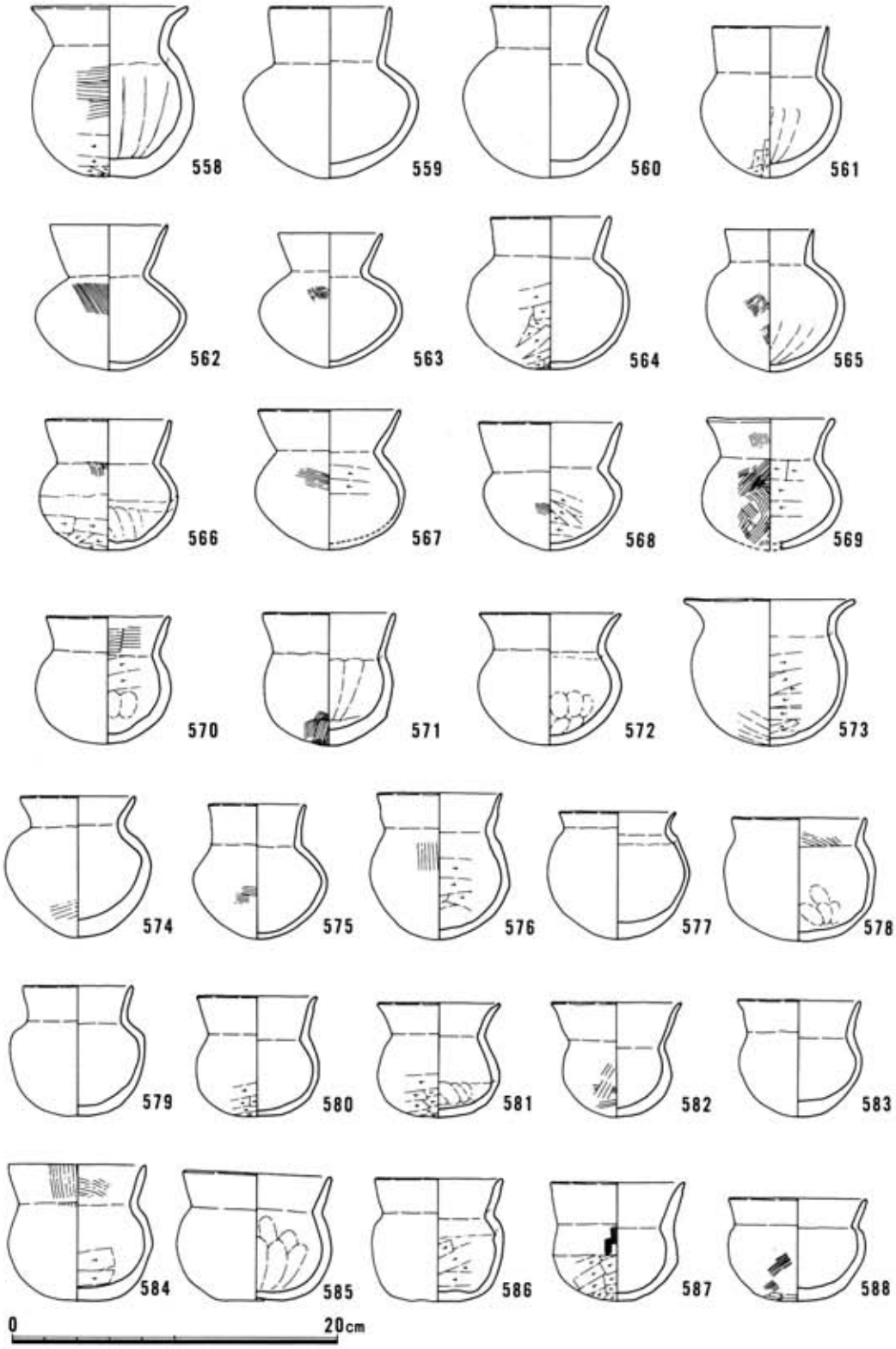


図86　SX222B出土土器８（１：４）

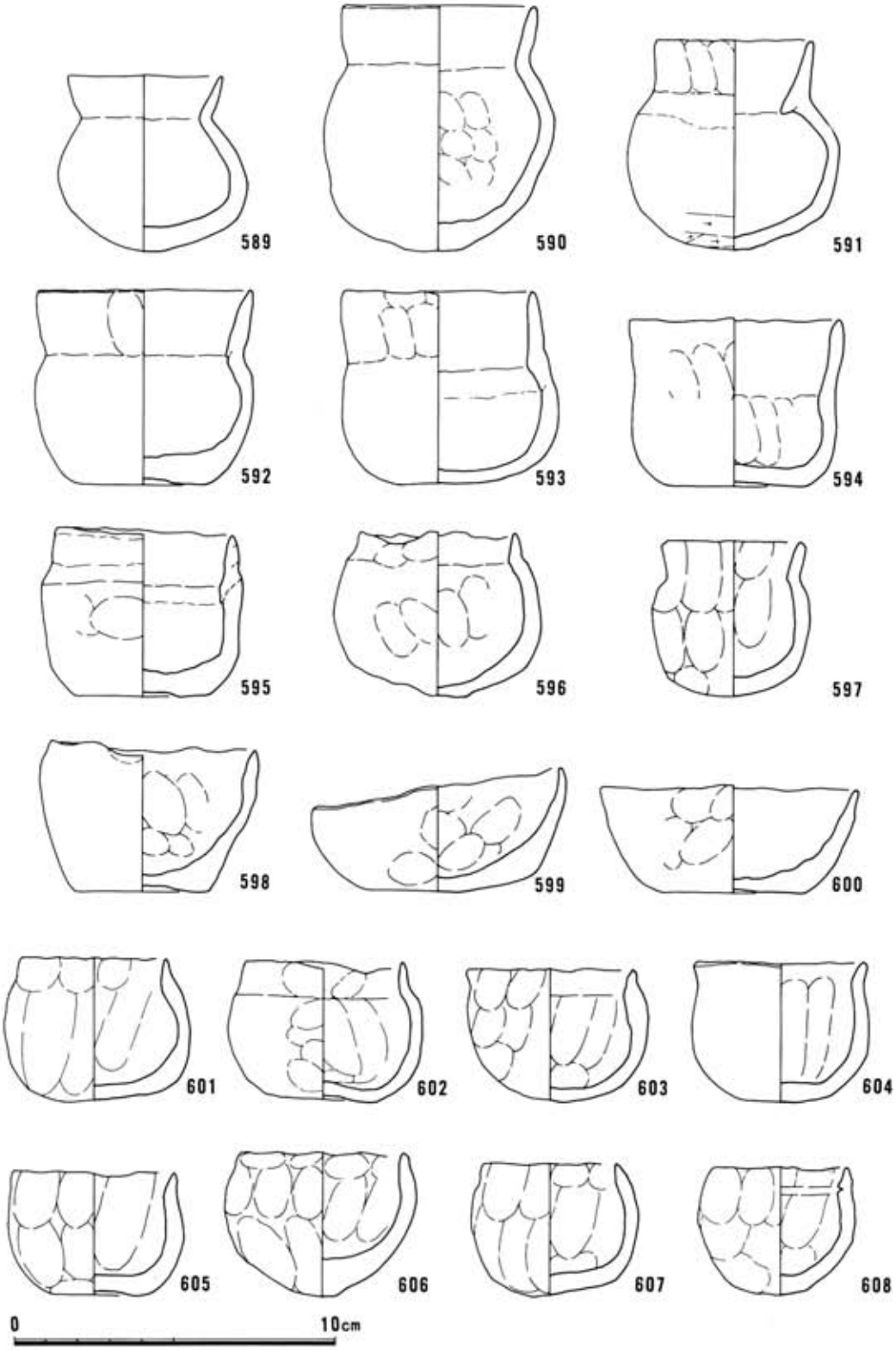


図87　SX222B出土手捏土器１（１：２）

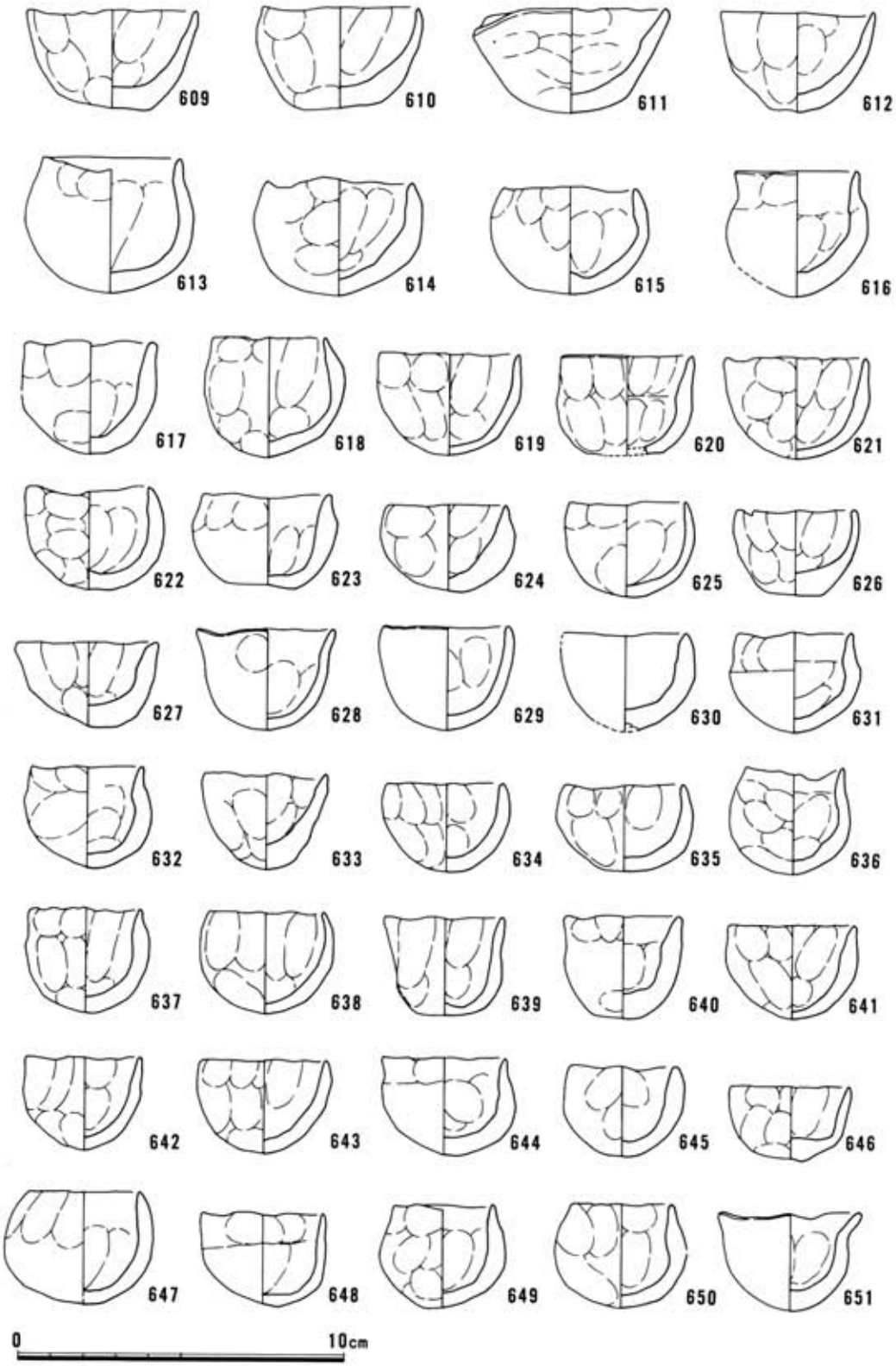


図88　SX222B出土手捏土器２（１：２）

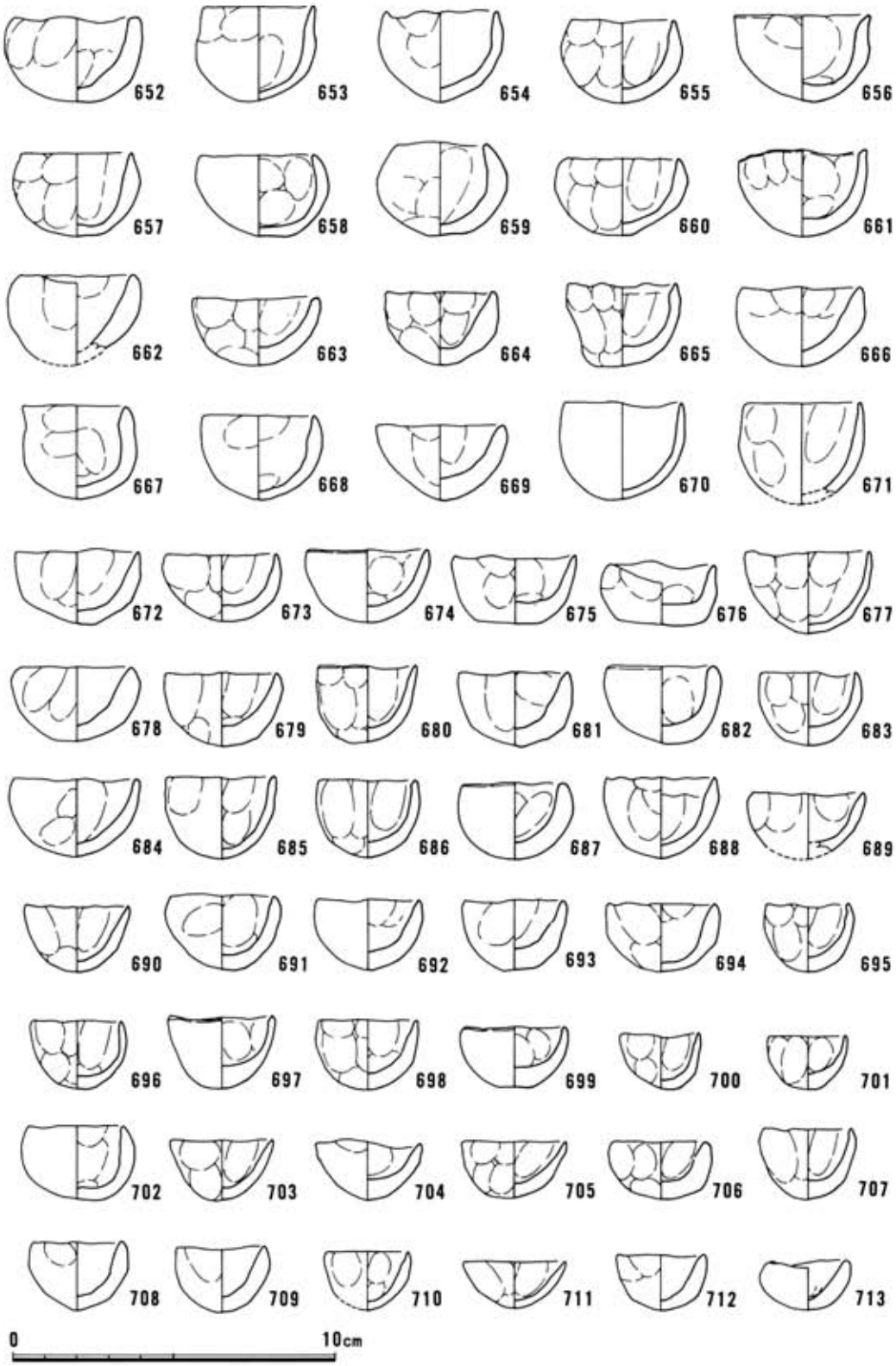


図89　SX222B出土手捏土器３（１：２）

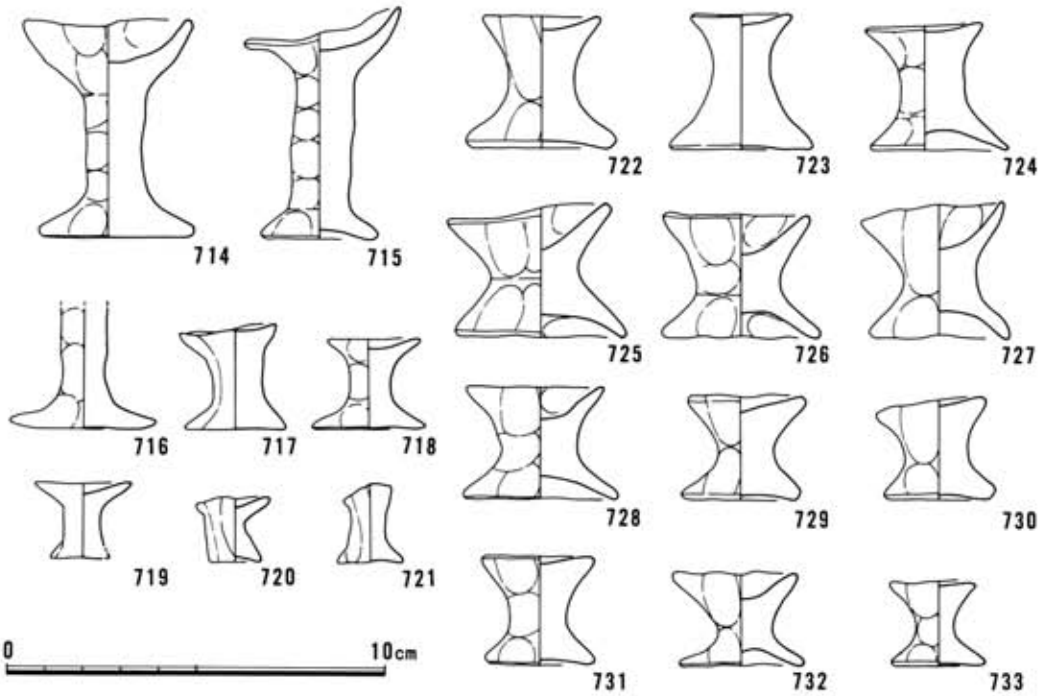


図90　SX222B出土手捏土器４（１：２）

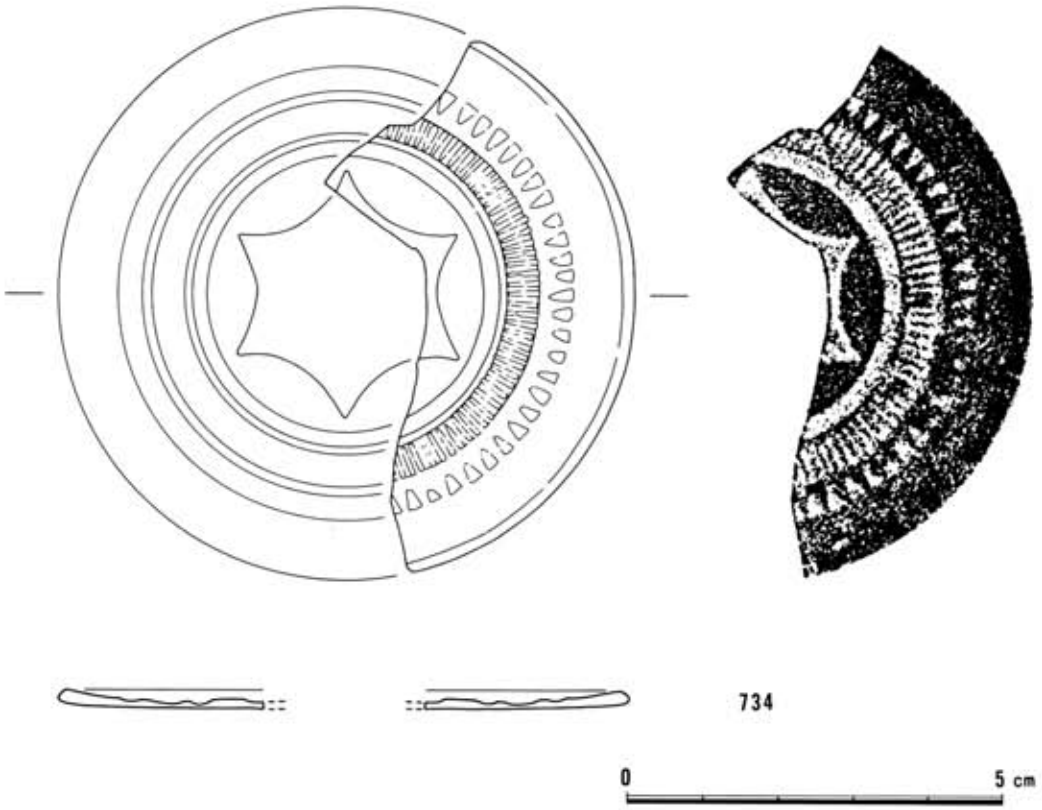


図91　SX222B出土銅鏡（１：１）

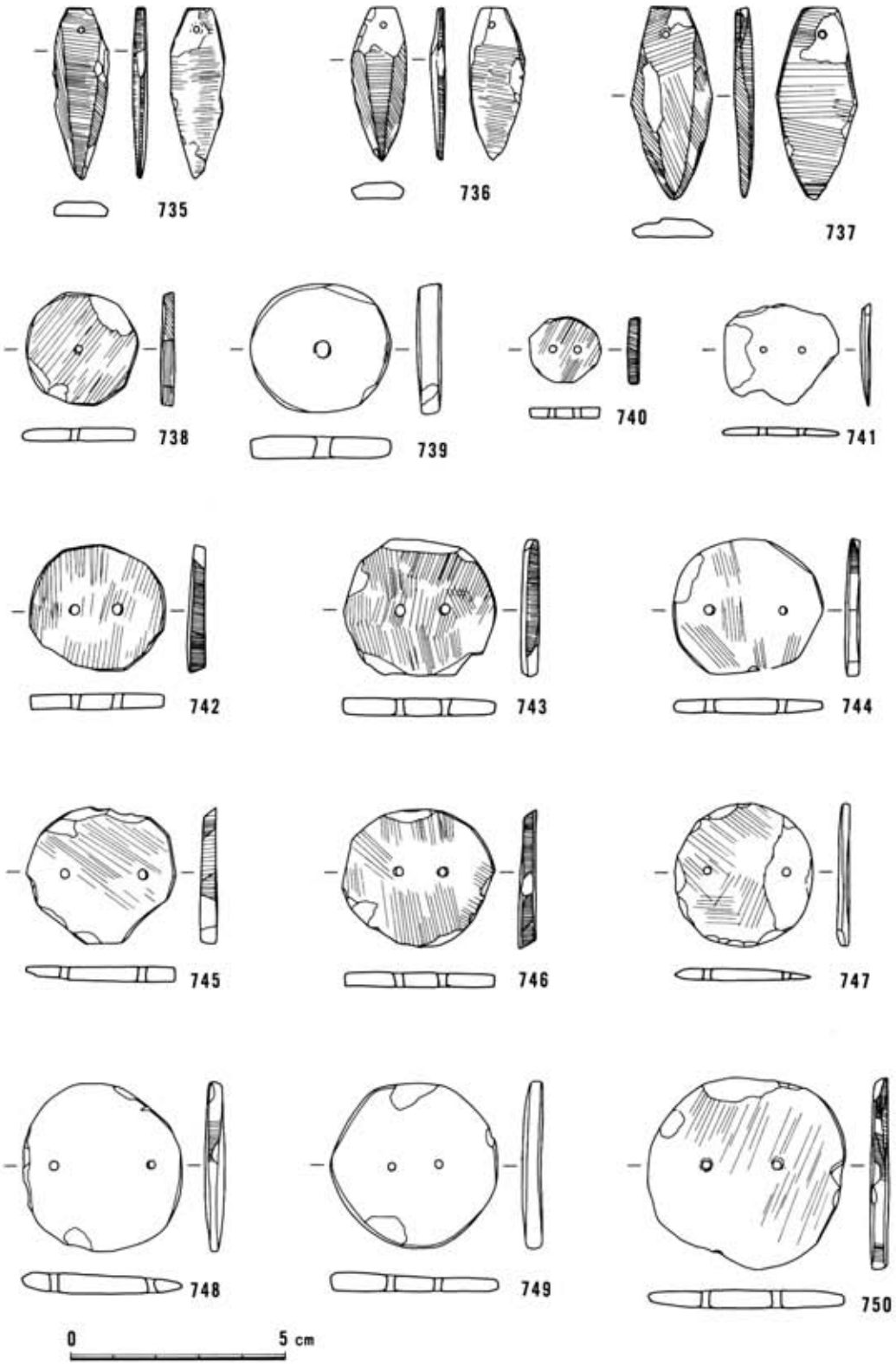


図92　SX222出土滑石製模造品１（２：３）

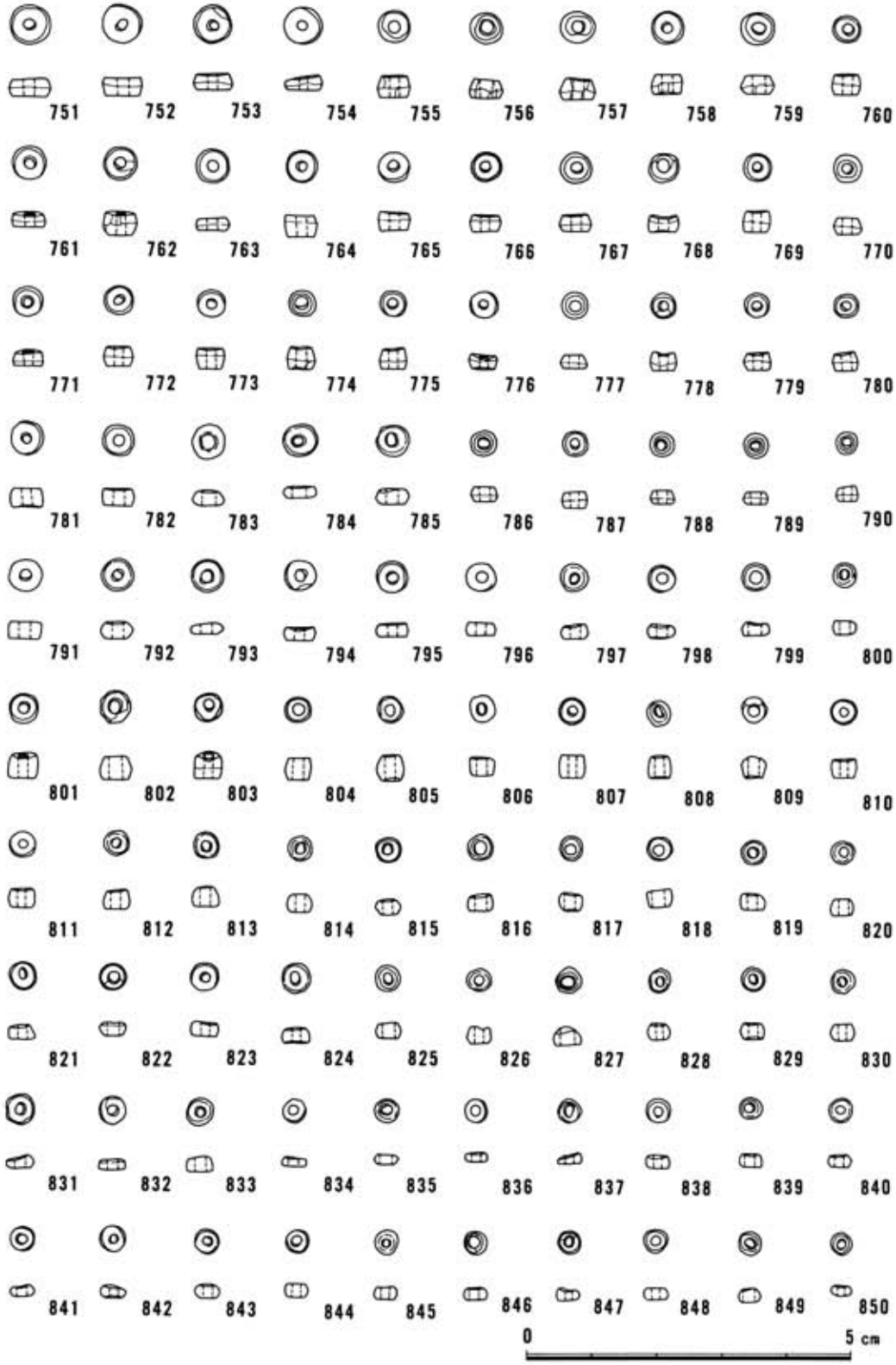


図93　SX222出土滑石製模造品２（１：１）

ルメされたもの。714～733は器台形の手捏土器である。

ＳＸ222Ｂ出土銅鏡（図91）

734は内行花紋の倭鏡である。約1/3程の破片で鈕は失われており、復元面径は7.6cmである。遺存状態は非常に良好であるが、鋳上がりはあまり良くなく細かい部分は潰れている。破損面は鋭く、摩滅も加工も全く認められない。外区は素紋帯から鋸歯紋帯、櫛歯紋帯と続き、内区は六花に復元される内行花紋のみが確認される。鈕座の部分は欠失しており不明である。

ＳＸ222出土滑石製模造品（図92～94）

735～737は剣形品で、３点共にＳＸ222Ａから出土した。図の表面側が稜を持ち、裏面側は平坦に作られており、基部側に孔を穿つ。738・739は単孔の有孔円板で、共にＳＸ222Ａから出土した。738は偏平で孔も小さく全体の作りが双孔円板に似るのに対し、739はやや厚みがあり、孔も大きい。740～750は双孔の有孔円板で、11点全てがＳＸ222Ｂからの出土である。751～850は臼玉で、900点以上出土したが100点のみ図示した。検出した臼玉のほとんどは土壌水洗によるものである。851は勾玉で、ＳＸ222Ｂから１点のみ出土した。852～856は管玉で、ＳＸ222Ｂから２点出土した他、土壌水洗による３点がある。

ＳＸ222出土ガラス小玉（図94）

857～863はガラス小玉で、ＳＸ222Ｂから３点が出土した他、土壌水洗による４点がある。

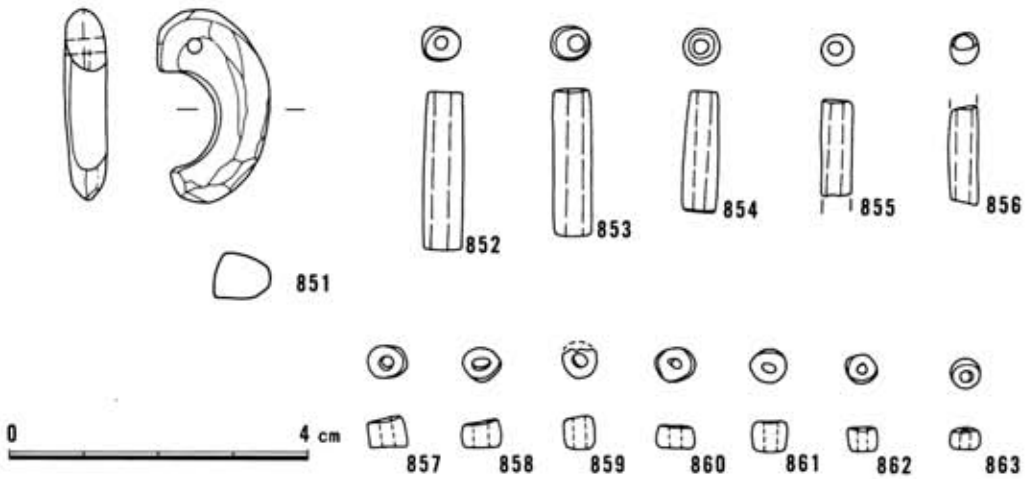


図94　SX222出土滑石製模造品３・ガラス小玉（１：１）

表4　２区出土遺物一覧　　法量の単位はcm・g，（　）は復元値

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
1	図26	ＳＸ202下	8017	縄紋土器・深鉢		灰黄褐色	滑石混入	93004432
2	図26	ＳＸ202下	8021	縄紋土器・深鉢		灰黄褐色	滑石混入	93004430
3	図26	ＳＸ202下	8024	縄紋土器・深鉢		灰黄褐色	滑石混入	93004431
4	図26	ＳＸ207	6843	縄紋土器・深鉢		褐色灰	滑石混入	93004425
5	図26	ＳＸ207	6844	縄紋土器・深鉢		明褐灰色		93004424
6	図26	ＳＸ207	6845	縄紋土器・深鉢	②(8.8)	外：にぶい黄褐色・内：褐灰色		93004421
7	図26	ＳＸ217	9010	縄紋土器・深鉢		外：明黄褐色・内：褐灰色		93004427
8	図26	ＳＸ218	7299	縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄橙色・内：灰白色	滑石混入	93004429
9	図26	ＳＸ221	9169	縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色		93004426
10	図26	ＳＸ221	9168	縄紋土器・深鉢	②(10.3)	外：明黄褐色・内：にぶい黄橙色		93004422
11	図26	ＳＸ249	10129	縄紋土器・深鉢		外：灰黄褐色・内・褐灰色		93004428
12	図26	ＳＸ208	5530･5532	縄紋土器・深鉢		外：明黄褐色・内：にぶい黄橙色		93004423
13	図26	ＳＸ208	5529･5533	縄紋土器・深鉢		外：灰白色・内：にぶい黄色		93004433
14	図26	ＳＸ208	7791	縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色		93004434
15	図27	ＢＤ０７	1317外	縄紋土器・深鉢	①35.1②(16.5)③(40.5)	外：にぶい橙色・内：明褐灰色	滑石混入	93002635
16	図28	ＢＤ０７	1342外	縄紋土器・深鉢	①36.7②(17.0)	外：にぶい褐色・内：にぶい赤褐色	滑石混入	93002634
17	図29	ＢＤ０７	1411外	縄紋土器・深鉢	①32.1	にぶい黄橙色	滑石混入	93002636
18	図31	ＢＤ０５	8567	縄紋土器・深鉢	①30.3	にぶい黄褐色	滑石混入	93002646
19	図31	ＢＥ０６	4664外	縄紋土器・深鉢	①(24.4)	にぶい黄橙色	滑石混入	93002639
20	図31	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄橙色・内：黒褐色	滑石混入	93004326
21	図32	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢	①(34.0)	灰褐色	滑石混入	93002642
22	図32	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：灰黄褐色・内：褐灰色	滑石混入	93002643
23	図32	ＢＥ０６	3938	縄紋土器・深鉢	①46.0	外：灰黄褐色・内：白灰色	滑石混入	93002644
24	図32	ＢＥ０６	4456	縄紋土器・深鉢		外：灰色・内：灰白色	滑石混入	93002645
25	図32	ＢＤ０７	1525	縄紋土器・深鉢		褐灰色	滑石混入	93004341
26	図33	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		褐色	滑石混入	93002649
27	図33	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		灰白色	滑石混入	93004327
28	図33	ＢＥ０６	4334	縄紋土器・深鉢		灰白色	滑石混入	93004328
29	図33	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色	滑石混入	93002648
30	図33	ＢＥ０６	4500	縄紋土器・深鉢		褐灰色	滑石混入	93004330
31	図33	ＢＥ０７	9692	縄紋土器・深鉢		灰白色	滑石混入	93004329
32	図33	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色	滑石混入	93002647
33	図33	ＢＥ０６	4185	縄紋土器・深鉢		外：灰褐色・内：明褐色	滑石混入	93004350
34	図33	ＢＤ０７		縄紋土器・深鉢		淡橙色	滑石混入	93004337
35	図33	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		黒褐色	滑石混入	93004347
36	図34	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		にぶい黄褐色	滑石混入	93004340
37	図34	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：灰黄褐色・内：褐灰色	滑石混入	93004349
38	図34	ＢＥ０７	3512	縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色	滑石混入	93004339
39	図34	ＢＥ０６	3407	縄紋土器・深鉢		にぶい赤褐色	滑石混入	93004338
40	図34	ＢＥ０６	3314	縄紋土器・深鉢		灰白色	滑石混入	93004343
41	図34	ＢＤ０６	9496	縄紋土器・深鉢		灰褐色	滑石混入	93004342
42	図34	ＢＥ０６	4320	縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色	滑石混入	93004348
43	図34	ＢＥ０７	3598	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：にぶい黄橙色	滑石混入	93002650
44	図34	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		にぶい黄橙色	滑石混入	93004345
45	図34	ＢＥ０６	西畦	縄紋土器・深鉢		灰褐色	滑石混入	93004332
46	図34	ＢＥ０６	4171	縄紋土器・深鉢		灰褐色	滑石混入	93004335
47	図34	ＢＥ０６	4333	縄紋土器・深鉢		灰褐色	滑石混入	93004334
48	図34	ＢＥ０６	4683	縄紋土器・深鉢		外：にぶい赤褐色・内：にぶい橙色	滑石混入	93004336
49	図34	ＢＥ０８		縄紋土器・深鉢		外：にぶい褐色・内：灰褐色	滑石混入	93004351
50	図34	ＢＥ０６	4319	縄紋土器・深鉢		褐灰色	滑石混入	93004331
51	図35	BD07･BE06	1474外	縄紋土器	①(35.4)	明褐灰色	滑石混入	93002638
52	図35	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢	①(28.3)	外：褐灰色・内：灰褐色	滑石混入	93002641
53	図36	ＢＤ０６	2414	縄紋土器		灰褐色	滑石混入	93004333
54	図36	ＢＤ０６	8441	縄紋土器		黒褐色	滑石混入	93004344
55	図36	ＢＥ０７		縄紋土器		黒褐色	滑石混入	93004353
56	図36	ＢＥ０７	2030	縄紋土器		暗赤褐色	滑石混入	93004346
57	図36	ＢＥ０５		縄紋土器		外：褐灰色・内：にぶい赤褐色	滑石混入	93004352
58	図36	ＢＥ０７		縄紋土器	②13.4	橙色	滑石混入	93004360
59	図36	ＢＥ０７		縄紋土器	②(12.7)	外：にぶい赤褐色・内：明褐色	滑石混入	93004362
60	図36	ＢＥ０７		縄紋土器	②(14.4)	外：暗褐色・内：にぶい橙色	滑石混入	93004363
61	図36	ＢＥ０７		縄紋土器	②(11.8)	外：赤褐色・内：黒褐色	滑石混入	93004361
62	図36	ＢＥ０６	3306	縄紋土器		にぶい黄橙色	滑石混入	93004356
63	図36	ＢＥ０６	3421	縄紋土器		にぶい黄橙色	滑石混入	93004357
64	図36	ＢＤ０６	2463	縄紋土器		明褐色	滑石混入	93004355
65	図36	ＢＥ０６	4194	縄紋土器		外：にぶい橙色・内：にぶい黄橙色	滑石混入	93004358
66	図36	ＢＥ０６	4440	縄紋土器		外：橙色・内：黒褐色	滑石混入	93004359
67	図37	ＢＥ０６	4792･4793	縄紋土器・深鉢	①(44.8)	外：にぶい黄褐色・内：にぶい黄橙色		93004364
68	図38	ＢＥ０６	3922･4366	縄紋土器・深鉢	①(26.2)	黒褐色		93004368

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
69	図38	ＢＥ０６	4541	縄紋土器・深鉢		外：灰黄褐色・内：にぶい黄橙色		93004369
70	図38	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄橙色・内：褐色		93004366
71	図38	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：にぶい黄橙色		93004365
72	図38	ＢＥ０６	4794	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：にぶい黄褐色		93004383
73	図38	ＢＥ０６	6238	縄紋土器・深鉢		外：暗褐色・内：にぶい橙色		93004389
74	図38	ＢＤ０６	5426	縄紋土器・深鉢		黒褐色		93004388
75	図38	ＢＤ０６	5425	縄紋土器・深鉢		黒褐色		93004387
76	図38	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：暗褐色・内：にぶい黄橙色		93004377
77	図38	ＢＤ０７	6475	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：暗褐色		93004390
78	図38	ＢＤ０６	2416	縄紋土器		外：橙色・内：黒褐色		93004381
79	図38	ＢＥ０６	4817	縄紋土器・深鉢		褐色		93004384
80	図38	ＢＤ０５	4768	縄紋土器		にぶい黄褐色		93004382
81	図38	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄橙色・内：黒褐色		93004376
82	図39	ＢＤ０７	9829	縄紋土器・深鉢		外：暗褐色・内：にぶい黄橙色		93004371
83	図39	BD06・BE06	3261・6840	縄紋土器・深鉢		外：にぶい褐色・内：灰褐色		93004373
84	図39	ＳＸ201	B-9試掘坑	縄紋土器・深鉢		暗褐色		93004375
85	図39	ＢＤ０７	3854	縄紋土器・深鉢		外：にぶい橙色・内：灰褐色		93004374
86	図39	ＢＤ０７	東試掘坑	縄紋土器・深鉢		暗褐色		93004372
87	図39	ＢＥ０５	9178	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：にぶい黄橙色		93004370
88	図39	ＢＤ０７	1896	縄紋土器・深鉢		外：暗黒褐色・内：明黄褐色		93004399
89	図39	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		黄褐色		93004391
90	図39	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：灰褐色・内：黄褐色		93004400
91	図39	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：灰黄褐色・内：にぶい黄橙色		93004402
92	図39	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄褐色・内：暗黄褐色		93004398
93	図39	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：灰色・内：黒灰色		93004392
94	図39	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：灰褐色・内：褐色		93004401
95	図39	ＢＥ０６	4722	縄紋土器・深鉢		黄白色		93004396
96	図40	ＢＤ０６	1569	縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄褐色・内：にぶい黄橙色		93004380
97	図40	ＢＥ０６	4837	縄紋土器		にぶい黄橙色		93004385
98	図40	ＢＥ０６	5056	縄紋土器		黒褐色		93004386
99	図40	ＢＥ０７		縄紋土器		外：にぶい黄橙色・内：黒褐色		96004379
100	図40	ＢＥ０７		縄紋土器		外：にぶい黄橙色・内：褐色		93004378
101	図40	ＢＥ０７		縄紋土器・深鉢		外：黄白色・内：にぶい黄褐色		93004394
102	図40	ＢＥ０７		縄紋土器		にぶい黄橙色		93004367
103	図40	ＢＣ０５	5149	縄紋土器		黄白色		93004395
104	図40	ＢＤ０５	7508	縄紋土器		明黄褐色		93004393
105	図40	ＢＥ０６	北畦下層	縄紋土器・深鉢		外：灰白色・内：黄褐色		93004397
106	図41	ＢＥ０６	6335	縄紋土器	②11.6	明黄褐色		93004407
107	図41	ＢＥ０７		縄紋土器	②14.2	外：明黒灰色・内：黒灰色		93004406
108	図41	ＢＤ０７	東畦下層	縄紋土器		外：黄褐色・内：淡黄色		93004403
109	図41	ＢＥ０６	4670	縄紋土器		外：暗灰黄色・内：灰黄色		93004419
110	図41	ＢＥ０７	3807	縄紋土器		外：淡黄色・内：灰白色		93004404
111	図41	ＢＥ０６	6345	縄紋土器		外：黄白色・内：灰黒色		93004416
112	図41	ＢＥ０７		縄紋土器		灰黄褐色		93004410
113	図41	ＢＥ０７		縄紋土器		黄褐色		93004408
114	図41	ＢＥ０７		縄紋土器		外：淡黄褐色・内：黄褐色		93004409
115	図42	ＢＥ０６	4515	縄紋土器		灰黄褐色		93004420
116	図42	ＢＤ０６	3107	縄紋土器		外：黄褐色・内：黒灰色		93004415
117	図42	ＢＤ０７	6478	縄紋土器		外：黄褐色・内：灰黒色		93004418
118	図42	ＢＥ０６	6369	縄紋土器		外：黄褐色・内：暗黄褐色		93004413
119	図42	ＢＤ０７	東試掘坑	縄紋土器		灰黄色		93004411
120	図42	ＢＥ０６	5820	縄紋土器		外：黄白色・内：黄褐色		93004414
121	図42	ＢＤ０６	9907	縄紋土器		暗褐色		93004412
122	図42	ＢＥ０７	4570	縄紋土器		黄褐色		93004417
123	図42	ＢＥ０７	5086	縄紋土器	②7.5	黄褐色		93004405
124	図42	ＢＤ０５	4663	縄紋土器・深鉢	②7.7	外：にぶい橙色・内：にぶい黄橙色		93002640
125	図44	ＢＥ０６	3944	石鏃	①3.6②2.4③0.7④4.8	讃岐岩質安山岩		93001053
126	図44	ＢＤ０６	5990	石鏃	①1.7②1.1③0.3④0.4	讃岐岩質安山岩		93001034
127	図44	ＢＤ０７	9634	石鏃	①1.5②1.2③0.3④0.5	讃岐岩質安山岩		93001030
128	図44	ＢＥ０６	4435	石鏃	①4.5②2.0③0.5④3.4	讃岐岩質安山岩		93001054
129	図44	ＢＥ０７	8310	石鏃	①2.2②1.0③5.5④0.9	讃岐岩質安山岩		93001040
130	図44	ＢＤ０６	2482	石鏃	①1.8②0.9③0.4④0.5	讃岐岩質安山岩		93001041
131	図44	ＢＤ０６	5847	石鏃	①2.1②1.2③0.5④0.9	讃岐岩質安山岩		93001039
132	図44	ＢＥ０７		石鏃	①3.1②1.7③0.5④1.6	黒曜岩		93003683
133	図44	ＢＤ０５	4841	石鏃	①2.6②1.5③0.4④0.8	黒曜岩		93001044
134	図44	ＢＣ０６	4047	石鏃	①2.5②1.1③0.4④0.7	黒曜岩		93001038
135	図44	ＢＤ０６	9256	石鏃	①3.2②1.4③0.4④1.4	讃岐岩質安山岩		93001035
136	図44	ＢＥ０７		石鏃	①2.8②1.8③0.4④1.3	讃岐岩質安山岩		93003681
137	図44	ＢＥ０７		石鏃	①2.2②1.5③0.4④1.0	讃岐岩質安山岩		93003680

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
138	図44	ＢＥ０７		石鏃	①2.0②1.6③0.4④0.9	讃岐岩質安山岩		93003684
139	図44	ＢＥ０６	4549	石鏃	①2.5②1.5③0.3④0.9	讃岐岩質安山岩		93001049
140	図44	ＢＥ０７	3522	石鏃	①2.1②1.5③0.3④0.7	讃岐岩質安山岩		93001052
141	図44	ＢＣ０６	4027	石鏃	①2.1②1.4③0.3④0.7	讃岐岩質安山岩		93001043
142	図44	ＢＤ０６	3772	石鏃	①2.3②1.6③0.4④1.1	黒曜岩		93001037
143	図44	ＢＤ０６	3770	石鏃	①1.9②1.7③0.6④1.2	黒曜岩		93001042
144	図45	ＢＥ０６	6327	石鏃	①1.8②1.6③0.4④0.7	讃岐岩質安山岩		93001029
145	図45	ＢＤ０６	3213	石鏃	①1.8②1.3③0.3④0.5	讃岐岩質安山岩		93001036
146	図45	ＢＥ０６	3971	石鏃	①1.7②1.9③0.4④1.0	讃岐岩質安山岩		93001048
147	図45	ＢＤ０６	1570	石鏃	①1.5②1.5③0.3④0.5	黒曜岩		93001046
148	図45	ＢＥ０７	3830	石鏃	①1.5②1.3③0.3④0.5	讃岐岩質安山岩		93001032
149	図45	ＢＥ０６	3442	石鏃	①1.8②1.5③0.3④0.6	讃岐岩質安山岩		93001031
150	図45	ＢＤ０６	1567	石鏃	①1.5②1.4③0.4④0.5	黒曜岩		93001051
151	図45	ＢＥ０６	4061	石鏃	①1.9②1.7③0.4④0.6	讃岐岩質安山岩		93001033
152	図45	ＢＥ０７		石鏃	①2.4②2.2③0.5④2.3	讃岐岩質安山岩		93003682
153	図45	ＢＥ０６	6470	石鏃	①2.7②1.1③0.5④1.2	黒曜岩		93001050
154	図45	ＢＤ０７	3875	石鏃	①2.5②0.9③0.3④0.7	讃岐岩質安山岩		93001027
155	図45	ＳＸ211下	6462	石鏃	①1.1②0.8③0.3④0.2	黒曜岩		93001055
156	図45	ＢＥ０６	4225	石鏃	①1.2②0.9③0.3④0.3	讃岐岩質安山岩		93001028
157	図45	ＢＥ０７	3587	石鏃	①1.1②1.2③0.4④0.5	黒曜岩		93001047
158	図45	ＢＣ０７	8030	石鏃	①1.5②0.6③0.4④0.3	黒曜岩		93001045
159	図45	ＢＥ０７	3516	石鏃未製品	①2.5②1.8③0.5④1.6	黒曜岩		93001026
160	図45	ＢＤ０７	3867	削器	①4.0②2.7③0.9④9.1	讃岐岩質安山岩		93003708
161	図45	ＢＥ０７	3897	削器	①4.6②3.2③1.0④15.1	讃岐岩質安山岩		93003704
162	図46	B-10試掘坑		削器	①8.2②4.9③0.9④30.8	讃岐岩質安山岩		93003701
163	図46	ＢＣ０６	4729	削器	①3.3②3.7③0.6④5.2	讃岐岩質安山岩		93003706
164	図46	ＢＤ０６	3655	削器	①6.1②3.7③1.7④29.7	讃岐岩質安山岩		93003702
165	図46	ＢＤ０７	1382	削器	①5.7②3.6③1.3④26.7	讃岐岩質安山岩		93003703
166	図46	ＢＣ０６	4036	削器	①4.5②3.7③0.6④7.4	讃岐岩質安山岩		93003707
167	図46	ＢＤ０７	1384	削器	①5.4②4.0③1.1④21.9	讃岐岩質安山岩		93003705
168	図47	ＢＥ０６	6330	削器	①13.0②8.2③1.9④200	讃岐岩質安山岩		93003710
169	図47	ＢＥ０６	4810	削器	①10.9②6.0③2.1④140	讃岐岩質安山岩		93003711
170	図47	ＢＥ０６	3923	削器	①13.0②6.5③2.1④150	讃岐岩質安山岩		93003712
171	図48	ＢＥ０５	9177	石核	①11.5②4.0③1.8④66.9	讃岐岩質安山岩		93003713
172	図48	ＢＣ０６	7565	石核	①7.6②8.8③4.5④310	讃岐岩質安山岩		93003714
173	図48	ＢＤ０７	1341	石核	①4.3②9.3③4.0④110	讃岐岩質安山岩		93003715
174	図48	ＢＥ０７	3561	石核	①6.8②3.6③3.1④74.6	讃岐岩質安山岩		93003716
175	図49	ＢＤ０６	2413	石錘	①9.0②4.4③1.4④59.6			93004966
176	図49	ＢＤ０６	3253	石錘	①4.8②4.6③1.7④47.8			93004967
177	図49	ＢＤ０６	3068	石錘	①4.2②4.1③1.7④40.2			93004969
178	図49	ＢＥ０６	3435	石錘	①3.5②3.5③1.2④16.1			93004968
179	図49	ＢＤ０６	3688	石錘	①4.8②4.5③1.6④44.8			93004970
180	図49	ＢＥ０６	4696	磨石	①7.3②4.4③4.0④147.6			93004975
181	図49	ＢＤ０６	3144	磨石	①7.9②5.1③3.5④185.2			93004976
182	図49	ＢＥ０５	6788	敲石	①8.7②6.3③6.7④488			93004973
183	図51	ＢＣ０７	1011	縄紋土器・浅鉢		灰黄褐色		93003815
184	図51	ＢＥ０６	3340	縄紋土器・浅鉢		褐灰色		93003805
185	図51	ＢＤ０７	709	縄紋土器・浅鉢		黒色		93003821
186	図51	ＢＥ０７	2572	縄紋土器・浅鉢		外：灰黄褐色・内：褐灰色		93003831
187	図51	ＢＥ０７	2673	縄紋土器・浅鉢		灰白色		93003819
188	図51	ＢＥ０７	2565	縄紋土器・浅鉢		外：灰オリーブ色・内：黒色		93003812
189	図51	ＢＥ０７	2511	縄紋土器・浅鉢		外：灰黄褐色・内：褐灰色		93003832
190	図51	ＢＥ０５	6719	縄紋土器・浅鉢		灰黄褐色		93003820
191	図51	ＢＣ０７	998	縄紋土器・浅鉢		にぶい橙色		93003806
192	図51	ＢＦ０５	5386	縄紋土器・浅鉢		暗灰黄色		93003813
193	図51	ＢＤ０７	227・791	縄紋土器・浅鉢		灰黄色		93003810
194	図51	ＢＣ０７	1306	縄紋土器・浅鉢		暗灰黄色		93003814
195	図51	ＢＣ０７	1262	縄紋土器・浅鉢		にぶい黄色		93003818
196	図51	ＢＥ０６	3289	縄紋土器・浅鉢		外：灰白色・内：暗オリーブ灰色		93003833
197	図51	ＢＤ０６	1705	縄紋土器・浅鉢		オリーブ黒色		93003811
198	図51	ＢＥ０７	2600	縄紋土器・浅鉢		褐灰色		93003804
199	図51	ＢＥ０７	2284	縄紋土器・浅鉢		灰白色		93003830
200	図51	ＢＣ０７	1259	縄紋土器・浅鉢		にぶい黄褐色		93003822
201	図51	ＢＤ０７	566	縄紋土器・浅鉢		浅黄色		93003809
202	図52	ＢＥ０７	2861	縄紋土器・深鉢		灰白色		93003803
203	図52	ＢＥ０５	8006	縄紋土器・深鉢		外：オリーブ褐色・内：黒褐色		93003828
204	図52	ＢＦ０５	7113	縄紋土器・深鉢		暗赤褐色		93003826
205	図52	ＢＥ０５	7016	縄紋土器・深鉢		黒褐色		93003827
206	図52	ＢＥ０５	7815	縄紋土器・深鉢		暗オリーブ褐色		93003829

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
207	図52	ＢＥ０７	2251	縄紋土器・深鉢		灰オリーブ色		93003834
208	図52	ＢＥ０５	7010	縄紋土器・深鉢		黒色		93003816
209	図52	ＢＥ０７	2300	縄紋土器・深鉢		外：灰褐色・内：黒褐色		93003817
210	図52	ＢＦ０５	5443	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：灰黄褐色		93003823
211	図52	ＢＣ０７	832	縄紋土器・深鉢		黒褐色		93003836
212	図52	ＢＤ０７	525	縄紋土器・深鉢		外：にぶい黄褐色・内：黒褐色		93003835
213	図52	ＢＣ０７	882	縄紋土器・深鉢		にぶい黄褐色		93003839
214	図53	ＢＤ０７	562	縄紋土器・深鉢	②(11.8)	にぶい黄色		93003848
215	図53	ＢＥ０７	2096	縄紋土器・深鉢	②(7.2)	外：にぶい橙色・内：黒褐色		93003842
216	図53	ＢＣ０６	4030	縄紋土器・深鉢	②(7.4)	黒褐色		93003840
217	図53	ＢＤ０７	404	縄紋土器・深鉢	②(8.0)	外：赤褐色・内：にぶい橙色		93003824
218	図53	ＢＥ０５	6705	縄紋土器・深鉢	②(10.0)	灰黄色		93003849
219	図53	ＢＥ０６	2990	縄紋土器・深鉢	②5.2	外：にぶい橙色・内：褐灰色		93003843
220	図53	ＢＥ０７	2216	縄紋土器・深鉢	②(11.1)	にぶい褐色		93003850
221	図53	ＢＦ０５	7122	縄紋土器・深鉢	②8.1	外：にぶい橙色・内：浅黄色		93003845
222	図53	ＢＤ０７	507	縄紋土器・深鉢	②(9.0)	灰黄褐色		93003837
223	図53	ＢＤ０７	639	縄紋土器・深鉢	②(8.0)	灰黄色		93003844
224	図53	ＢＤ０７	793・794	縄紋土器・深鉢	②(9.0)	外：にぶい橙色・内：黒褐色		93003838
225	図53	ＢＣ０５	4612	縄紋土器		にぶい黄橙色		93003851
226	図53	ＢＥ０７	2907	縄紋土器・深鉢		灰白色		93003802
227	図53	ＢＤ０７	7115・7116	縄紋土器・浅鉢		暗灰色		93003807
228	図53	ＢＦ０５	5371	縄紋土器・浅鉢		暗灰色		93003808
229	図55	ＢＥ０５	6743	石鏃	①2.5②1.8③0.3④0.9	讃岐岩質安山岩		93003627
230	図55	ＢＥ０５	5076	石鏃	①2.1②1.6③0.4④0.9	讃岐岩質安山岩		93003649
231	図55	ＢＥ０７	2064	石鏃	①2.4②1.5③0.4④1.0	讃岐岩質安山岩		93003659
232	図55	ＢＤ０７	378	石鏃	①2.1②1.3③0.4④0.7	讃岐岩質安山岩		93003657
233	図55	ＢＥ０７	2856	石鏃	①2.0②1.7③0.5④1.3	黒曜岩		93003675
234	図55	ＢＥ０７	2705	石鏃	①3.4②2.1③0.7④3.2	讃岐岩質安山岩		93003654
235	図55	ＢＦ０５	5782	石鏃	①2.0②1.3③0.4④0.8	讃岐岩質安山岩		93003648
236	図55	ＢＤ０７	1938	石鏃	①2.4②1.5③0.4④0.9	黒曜岩		93003668
237	図55	ＢＦ０６	5222	石鏃	①2.1②1.4③0.4④0.7	黒曜岩		93003629
238	図55	ＢＤ０６	3777	石鏃	①1.5②1.1③0.4④0.5	黒曜岩		93003644
239	図55	ＢＣ０７	1291	石鏃	①3.1②2.3③0.4④2.5	讃岐岩質安山岩		93003652
240	図55	ＢＦ０７	5585	石鏃	①2.2②1.4③0.4④0.7	讃岐岩質安山岩		93003643
241	図55	ＢＥ０７	1183	石鏃	①1.5②1.2③0.4④0.5	讃岐岩質安山岩		93003672
242	図55	ＢＥ０５	6979	石鏃	①2.8②1.4③0.4④1.2	讃岐岩質安山岩		93003632
243	図55	ＢＤ０７	422	石鏃	①2.2②1.4③0.4④1.0	黒曜岩		93003651
244	図55	ＢＥ０７	8099	石鏃	①1.7②1.4③0.5④0.8	讃岐岩質安山岩		93003626
245	図55	ＢＦ０７	5525	石鏃	①2.4②1.7③0.5④1.4	讃岐岩質安山岩		93003639
246	図55	ＢＦ０５	8820	石鏃	①2.1②1.2③0.4④0.6	黒曜岩		93003636
247	図56	ＢＥ０５	7319	石鏃	①1.7②1.1③0.3④0.4	黒曜岩		93003641
248	図56	ＢＥ０７	2065	石鏃	①1.1②0.9③0.2④0.2	黒曜岩		93003653
249	図56	ＢＥ０７	2315	石鏃	①1.3②1.4③0.3④0.3	黒曜岩		93003664
250	図56	ＢＥ０７	2211	石鏃	①1.6②1.5③0.4④0.6	黒曜岩		93003674
251	図56	ＢＥ０６	3282	石鏃	①2.2②2.2③0.4④1.0	黒曜岩		93003640
252	図56	ＢＥ０７	2269	石鏃	①2.0②1.9③0.4④1.2	讃岐岩質安山岩		93003669
253	図56	ＢＥ０６	6217	石鏃	①2.4②1.2③0.4④0.8	黒曜岩		93003638
254	図56	ＢＦ０６	5816	石鏃	①1.8②1.6③0.4④1.3	黒曜岩		93003633
255	図56	ＢＤ０７	1868	石鏃	①2.0②1.1③0.3④0.5	讃岐岩質安山岩		93003673
256	図56	ＢＥ０６	1240	石鏃	①1.3②1.2③0.3④0.4	讃岐岩質安山岩		93003658
257	図56	ＢＥ０７	2938	石鏃	①2.1②1.7③0.4④0.6	讃岐岩質安山岩		93003660
258	図56	ＢＦ０６	5810	石鏃	①1.2②1.8③0.3④0.5	讃岐岩質安山岩		93003628
259	図56	ＢＤ０７	120	石鏃	①1.4②1.8③0.3④0.5	黒曜岩		93003671
260	図56	ＢＥ０６	2962	石鏃	①3.0②1.7③0.4④1.5	讃岐岩質安山岩		93003630
261	図56	ＢＦ０６	5715	石鏃	①2.1②1.3③0.5④1.0	黒曜岩		93003645
262	図56	ＢＥ０７	2053	石鏃	①2.1②1.8③0.4④1.0	讃岐岩質安山岩		93003663
263	図56	ＢＥ０７	2857	石鏃	①2.3②2.3③0.5④2.5	黒曜岩		93003670
264	図56	ＢＥ０７	8026	石鏃	①2.1②1.7③0.4④1.0	讃岐岩質安山岩		93003647
265	図56	ＢＦ０７	1190	石鏃	①1.6②1.9③0.4④1.1	讃岐岩質安山岩		93003662
266	図57	ＢＥ０６	2960	石鏃	①3.4②1.9③0.5④2.7	讃岐岩質安山岩		93003655
267	図57	ＢＤ０７	267	石鏃	①2.6②1.5③0.5④1.8	讃岐岩質安山岩		93003666
268	図57	ＢＦ０７	5288	石鏃	①2.3②1.8③0.5④1.9	讃岐岩質安山岩		93003634
269	図57	ＢＦ０５	7114	石鏃	①2.5②1.7③0.7④2.0	黒曜岩		93003637
270	図57	ＢＥ０７	2077	石鏃	①2.6②1.6③0.5④1.9	讃岐岩質安山岩		93003678
271	図57	ＢＥ０７	3031	石鏃	①1.6②1.3③0.3④0.5	讃岐岩質安山岩		93003635
272	図57	ＢＥ０７	2912	石鏃	①2.5②1.4③0.5④1.3	黒曜岩	受熱	93003665
273	図57	ＢＤ０７	71	石鏃	①1.8②1.5③0.4④0.9	讃岐岩質安山岩		93003676
274	図57	ＢＥ０５	6659	石鏃	①3.3②1.7③0.5④2.0	讃岐岩質安山岩		93003646
275	図57	ＢＤ０６	1630	石鏃	①2.6②2.4③0.5④2.0	黒曜岩		93003677

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
276	図57	ＢＤ０６	2428	石鏃	①3.5②2.0③0.4④2.3	黒曜岩		93003656
277	図57	ＢＤ０７	277	石鏃	①1.4②1.1③0.4④0.5	黒曜岩		93003661
278	図57	ＢＥ０７	2834	石鏃	①2.2②0.9③0.4④0.7	讃岐岩質安山岩	石錐？	93003679
279	図57	ＢＥ０７	2218	石鏃未製品	①2.5②1.7③0.8④2.2	讃岐岩質安山岩		93003719
280	図57	ＢＣ０７	1022	石鏃未製品	①2.8②2.0③0.6④3.0	黒曜岩		93003717
281	図57	ＢＥ０５	6695	石鏃未製品	①2.3②1.5③0.4④0.8	黒曜岩		93003650
282	図57	ＢＥ０７	1188	石鏃未製品	①2.2②1.6③0.3④0.8	黒曜岩		93003667
283	図57	ＢＦ０５	8840	「つまみ形石器」	①2.5②2.2③0.7④3.0	黒曜岩		93003718
284	図58	ＢＥ０６	2369	削器	①5.4②2.7③0.9④11.0	讃岐岩質安山岩		93003723
285	図58	ＢＤ０７	1918	削器	①5.5②3.0③0.9④15.1	讃岐岩質安山岩		93003722
286	図58	ＢＥ０６	2384	削器	①6.6②3.9③1.2④22.9	讃岐岩質安山岩		93003725
287	図58	ＢＤ０７	338	削器	①4.6②4.3③1.2④17.1	讃岐岩質安山岩		93003726
288	図58	ＢＥ０６	2635	削器	①3.9②6.1③1.2④16.7	讃岐岩質安山岩		93003721
289	図58	ＢＤ０７	767	削器	①5.2②5.5③1.2④28.1	讃岐岩質安山岩		93003727
290	図58	ＢＤ０６	1658	削器	①3.5②4.4③0.9④12.1	讃岐岩質安山岩		93003724
291	図58	ＢＥ０５	7809	削器	①3.1②3.3③1.0④9.0	黒曜岩		93003720
292	図59	ＢＤ０６	2645	削器	①5.4②2.1③1.0④10.8	黒曜岩		93003733
293	図59	ＢＤ０５	4309	削器	①11.5②2.9③0.9④30.6	黒曜岩		93003728
294	図59	ＢＦ０６	5457	削器	①5.8②4.1③1.3④26.7	讃岐岩質安山岩		93003731
295	図59	ＢＦ０６	1238	削器	①6.9②3.6③1.3④23.5	讃岐岩質安山岩		93003729
296	図59	ＢＥ０６	3398	削器	①6.0②3.6③0.8④15.2	讃岐岩質安山岩		93003730
297	図59	ＢＤ０７	117	削器	①5.5②3.8③1.8④29.9	讃岐岩質安山岩		93003734
298	図60	ＢＥ０６	西畦	磨製石斧	①6.7②3.3③1.5④55.5			93003739
299	図60	ＢＦ０５	5789	打製石斧	①8.1②5.4③1.3④84.2			93003738
300	図60	ＢＤ０７	664	石錘	①5.0②3.9③1.7④48.4			93004979
301	図60	ＢＤ０６	2438	石錘	①4.5②4.7③1.6④48.6			93004978
302	図60	ＢＥ０６	3880	石錘	①5.6②4.1③0.8④26.7			93004977
303	図60	ＢＤ０７	1801	石錘	①5.7②7.8③1.3④202.5			93004980
304	図60	BE06・BD07	1719・2372	磨石	①11.6②8.8③5.3④863			93004983
305	図61	ＢＤ０６	2412	磨石	①11.0②7.4③3.0④399			93004981
306	図61	ＢＤ０７	420	磨石	①10.0②5.3③3.5④243.6			93003736
307	図61	ＢＥ０７	2034	磨石	①7.5②6.7③3.6④244.6			93003737
308	図61	ＢＦ０７	5488	磨石	①11.3②10.4③5.8④865			93003735
309	図61	ＢＥ０７	2041	磨石	①6.2②6.5③2.7④272.4			93004982
310	図62	ＳＫ212	5550	土師器・鉢	①12.5③6.4	橙色		93001378
311	図63	ＢＣ０８	8568	銅鏃	①4.0②0.8③0.4④3.6茎部幅0.6			93001575
312	図63	ＢＣ０６	4403	ナイフ形石器	①3.3②1.2③0.5④2.0	黒曜岩		93003709
313	図63	C-9試掘坑		石鏃	①4.6②1.7③0.6④2.8	讃岐岩質安山岩		93003689
314	図63	B-9試掘坑		石鏃	①2.0②1.4③0.3④0.7	讃岐岩質安山岩		93003687
315	図63	A-32試掘坑		石鏃	①2.8②1.7③0.5④1.5	讃岐岩質安山岩		93003688
316	図63	ＢＦ０８	6472	石鏃	①2.0②1.5③0.6④1.1	讃岐岩質安山岩		93003642
317	図63	ＢＤ０８	8583	石鏃	①1.9②1.4③0.3④0.5	黒曜岩		93003631
318	図63	ＢＥ０６	西畦	石鏃	①1.6②1.2③0.4④0.5	黒曜岩		93003690
319	図63	ＢＥ０８		石鏃	①1.4②1.1③0.3④0.3	黒曜岩		93003691
320	図64	SX238B		石製穂摘具	①6.0②4.0③0.9④22.0			93001391
321	図64	SX238B		土弾	①4.3②2.3④15.5	淡黄色		93001377
322	図64	ＢＥ０６	2651	土弾	①4.3②2.4④17.0	淡黄色		93001376
323	図64	ＢＤ０７	105	手捏土器	①2.8③2.8	淡黄色		93001375
324	図64	ＢＦ０６	5021	弥生土器・甕		外：黒色・内：褐灰色		93001372
325	図64	ＢＦ０５	8822	弥生土器・甕		にぶい褐色		93001373
326	図64	ＢＥ０５	5762	弥生土器・甕		にぶい褐色		93001374
327	図64	ＢＥ０７	6451	弥生土器・甕		淡黄色		93001367
328	図64	ＢＥ０５	5173	弥生土器・甕		淡黄色		93001368
329	図64	ＢＥ０５	5129	弥生土器・甕	②（7.0）	にぶい橙色		93001369
330	図64	ＢＤ０７	1750	弥生土器・甕	②（7.9）	外：にぶい黄橙色・内：黒色		93001370
331	図64	ＢＥ０７	2007	弥生土器・甕	②3.1	にぶい黄橙色		93001371
332	図64	ＢＤ０５		須恵器・杯	②8.4	灰色		93001383
333	図64	ＢＥ０６	2628	瓦器・椀	②（6.9）	黒色（底部外面：白色）		93001384
334	図64	ＢＤ０５	4269	土師器・鍋		にぶい黄橙色		93001379
335	図64	ＢＤ０５	4382	土師器・鍋		外：黒褐色・内：褐色		93001382
336	図64	ＢＤ０５	4271	土師器・鍋		にぶい黄橙色		93001381
337	図64	C-17試掘坑		土師器・鍋		にぶい黄橙色		93001380
338	図64	ＢＦ０７	5630	青磁・椀		素地：灰白色・釉調・明緑灰色		93001389
339	図64	ＢＣ０５	4146	青磁・椀		素地：灰白色・釉調・明緑灰色		93001388
340	図64	ＢＦ０５	4493	白磁・皿		素地：灰白色・釉調・灰白色		93001386
341	図64	C-17試掘坑		白磁・皿	②（7.2）	素地：灰白色・釉調・灰白色		93001387
342	図64	ＢＤ０６	1707	青花・皿	①（9.1）	素地：灰白色・釉調・灰白色・呉須：にぶい青灰色		93001390
343	図64	C-17試掘坑		肥前陶器・擂鉢		素地：にぶい黄橙色・釉調・暗褐色		93001385
344	図66	ＢＨ１０		縄紋土器・浅鉢		黒色		93002666

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
345	図66	ＢＨ１０		縄紋土器・浅鉢		灰黄褐色		93002680
346	図66	ＢＨ１０	２層	縄紋土器・浅鉢		灰黄色		93002665
347	図66	ＢＨ１０	２層	縄紋土器・浅鉢		黄灰色		93002673
348	図66	ＢＧ１０	７層	縄紋土器・浅鉢		オリーブ褐色		93002674
349	図66	ＢＨ１０		縄紋土器・浅鉢		黒色		93002681
350	図66	ＢＨ１０		縄紋土器・浅鉢		黒褐色		93002675
351	図66	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・浅鉢		黒色		93002679
352	図66	BG10･BH10	７・８層	縄紋土器・浅鉢	①(34.0)	灰褐色		93002663
353	図66	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・浅鉢	①(36.3)	黄灰色		93002664
354	図66	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・浅鉢		オリーブ黒色		93002671
355	図66	ＢＨ１０		縄紋土器・浅鉢		オリーブ黒色		93002670
356	図66	ＢＨ１０	５層	縄紋土器・浅鉢		暗オリーブ色		93002677
357	図66	ＢＧ１１	８層	縄紋土器・浅鉢		暗オリーブ褐色		93002672
358	図66	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・浅鉢		オリーブ黒色		93002678
359	図66	ＢＨ１０	２層	縄紋土器・浅鉢		にぶい黄褐色		93002678
360	図67	ＢＨ１０	２層	縄紋土器・深鉢		黒色		93002692
361	図67	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢		にぶい黄褐色		93002688
362	図67	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢		黒褐色		93002690
363	図67	ＢＨ１０	２層	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：灰黄褐色		93002689
364	図67	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢		にぶい黄褐色		93002684
365	図67	ＢＨ１１	５層	縄紋土器・深鉢		赤黒色		93002687
366	図67	ＢＨ１０		縄紋土器・深鉢		黒褐色		93002686
367	図67	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢		外：黒褐色・内：にぶい黄褐色		93002691
368	図67	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢		灰褐色		93902693
369	図67	ＢＧ１１	２層	縄紋土器・深鉢		にぶい黄褐色		93002683
370	図67	ＢＨ１０		縄紋土器・深鉢		褐色		93002694
371	図67	ＢＨ１０		縄紋土器・深鉢		暗褐色		93002685
372	図67	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢		黒褐色		93002669
373	図68	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・浅鉢	①(25.3)	外：黒褐色・内：黒色		93002667
374	図68	ＢＧ１１	８層	縄紋土器・浅鉢		オリーブ黒色		93002676
375	図68	ＢＨ１０		縄紋土器	①(19.9)	にぶい黄褐色		93002668
376	図68	ＢＨ１０	５層	縄紋土器	①7.6③7.2	外：にぶい黄褐色・内：にぶい褐色		93003801
377	図68	ＢＨ１０		縄紋土器・深鉢	②(7.5)	暗灰黄色		93002697
378	図68	ＢＨ１０	８層	縄紋土器・深鉢	②(10.0)	暗灰黄色		93002696
379	図68	ＢＧ１０	４層	縄紋土器・深鉢	②(9.0)	外：暗灰黄色・内：黒褐色		93002695
380	図68	ＢＧ１１	２層	縄紋土器・深鉢		外：明黄褐色・にぶい黄橙色	滑石混入	93002682
381	図68	ＢＧ１１	８層	石鏃	①1.9②1.9③0.4④1.2	讃岐岩質安山岩		93003685
382	図68	ＢＨ１０		石鏃	①1.8②1.9③0.6④②1.6	黒曜岩		93003686
383	図69	BG10･P-1		編物・籠？				93001588
384	図69	BG10･P-1		土師器・甕		黒褐色		93000860
385	図69	BG10･P-1		土師器・高杯	②(12.9)	にぶい黄橙色		93000861
386	図70	ＢＨ１１	５層	弥生土器・甕	①(41.4)	にぶい黄橙色		93002629
387	図70	ＢＨ１０	４層	土師器・甕	①(14.9)	にぶい黄橙色		93002632
388	図70	ＢＨ１１	４層	土師器・甕	①(15.4)	にぶい黄橙色		93002630
389	図70	ＢＨ１１	４層	土師器・壺	①(23.6)	灰黄色		93002631
390	図70	B-6試掘坑		土師器・壺		にぶい黄橙色		93002633
391	図71	ＳＸ238Ｃ		土師器・甕	①15.8	にぶい黄橙色		93001685
392	図71	ＳＸ238Ａ		土師器・甕	①(14.4)	明黄褐色		93001652
393	図71	ＳＸ238Ａ		土師器・甕	①(16.4)	明黄褐色		93001653
394	図71	ＳＸ238Ｃ		土師器・甕	①(18.0)	にぶい黄橙色		93001677
395	図71	ＳＸ238Ｃ		土師器・甕	①16.1	外：灰黄褐色・内：にぶい黄橙色		93001687
396	図71	ＳＸ238Ａ		土師器・甕	①(15.7)	外：明黄褐色・内：褐色		93001655
397	図71	ＳＸ238Ａ		土師器・甕	①(16.0)	黒色		93001667
398	図71	ＳＸ238Ｃ		土師器・甕	②4.9	外：にぶい黄褐色・内：にぶい黄橙色		93001688
399	図72	ＳＸ238Ａ		土師器・壺	①(20.2)	淡黄褐色		93001656
400	図72	ＳＸ238Ｂ		土師器・壺	①(14.6)	浅黄色		93001671
401	図72	ＳＸ238Ａ		土師器・壺	①(15.0)③26.7	黄褐色		93001668
402	図72	ＳＸ238Ｂ		土師器・壺	①(12.0)	にぶい橙色		93001672
403	図72	ＳＸ238Ｃ		土師器・壺		にぶい黄橙色		93001684
404	図72	ＳＸ238Ｂ		土師器・壺	①(17.6)	外：にぶい黄橙色・内：黒褐色		93001669
405	図72	ＳＸ238Ｂ		土師器・壺	①(23.2)	橙色		93001673
406	図72	ＳＸ238Ｃ		土師器・壺	①15.6③16.5	にぶい黄橙色		93001686
407	図72	ＳＸ238Ｃ		土師器・高杯	①(32.2)	にぶい黄橙色		93001678
408	図72	ＳＸ238Ｃ		土師器・高杯	②(14.6)	にぶい黄橙色		93001683
409	図72	ＳＸ238Ａ		土師器・鉢	①(24.8)	明黄褐色		93001654
410	図72	ＳＸ238Ａ･Ｂ		土師器・鉢	①29.6	にぶい黄橙色		93001676
411	図72	ＳＸ238Ｂ		土師器・鉢	①(30.2)	外：明黄褐色・内：黒褐色		93001651
412	図72	ＳＸ238		土師器・鉢	①13.7③11.1	外：黒褐色・内：黒色		93001666
413	図72	ＳＸ238Ｃ		土師器・鉢	①11.6	浅黄橙色		93001681

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
414	図73	SX238A・B		土師器・高杯	①(20.5)②15.6③13.1	浅黄橙色		93001670
415	図73	SX238C		土師器・鉢	①(11.6)②8.1③6.7	外：にぶい黄褐色・内：浅黄橙色		93001682
416	図73	SX238		土師器・鉢	①13.0②7.0③7.3	淡黄褐色		93001663
417	図73	SX238A		土師器・鉢	①13.8	外:淡黄褐色・内：黄褐色		93001657
418	図73	SX238		土師器・鉢	②9.9	黄橙色		93001665
419	図73	SX238A		土師器・鉢	②13.0	淡黄褐色		93001664
420	図73	SX238A		土師器・鉢	②4.7	黄褐色		93001662
421	図73	SX238A		土師器・鉢	②5.9	灰白色		93001659
422	図73	SX238C		土師器・鉢	①11.4③5.3	にぶい黄橙色		93001679
423	図73	SX238C		土師器・鉢	①11.2③5.8	にぶい橙色		93001680
424	図73	SX238B		土師器・鉢	①(10.6)③5.2	浅黄橙色		93001674
425	図73	SX238		土師器・鉢	①11.0③5.4	淡黄褐色		93001658
426	図73	SX238A		土師器・鉢	①11.7③4.1	明黄褐色		93001661
427	図73	SX238A		土師器・鉢	①10.4③2.8	外：暗黄褐色・内：黄褐色		93001660
428	図73	SX238B		手捏土器	①(6.8)③4.3	にぶい黄橙色		93001675
429	図77	SX222A	No. 2	土師器・高杯	①16.7②12.0③12.7	にぶい橙色		93000679
430	図77	SX222A	No.44	土師器・高杯	①(18.0)②(12.0)③13.0	浅黄橙色		93000678
431	図77	SX222A	No.25	土師器・高杯	①15.3②10.4③11.8	浅黄橙色		93000682
432	図77	SX222A	No.53	土師器・高杯	①18.1②13.7③12.7	にぶい黄橙色		93000680
433	図77	SX222A	No. 1	土師器・壺	①8.6③9.9	浅黄橙色		93000622
434	図77	SX222A	No.64	土師器・壺	①(9.8)③11.8	外：黄橙色・内：褐色		93000630
435	図77	SX222A	No.24	土師器・壺	①(14.3)③17.5	橙色		93000644
436	図77	SX222A	No.33	土師器・壺	①(11.2)	にぶい黄橙色		93000645
437	図77	SX222A	No.2・46	土師器・壺	①(11.5)③13.6	にぶい橙色		93000650
438	図77	SX222A	No.27	土師器・壺	①10.5③12.5	浅黄橙色		93000649
439	図77	SX222A	No.23	土師器・壺	①9.6③11.3	外：にぶい橙色・内：にぶい黄橙色		93000648
440	図77	SX222A	No.18	土師器・壺	①9.7③10.9	にぶい橙色		93000618
441	図77	SX222A	No.48	土師器・壺	①(9.3)③9.9	にぶい黄橙色		93000636
442	図77	SX222A	No.36	土師器・壺	①(8.7)③9.9	にぶい褐色		93000632
443	図77	SX222A	No.43	土師器・壺	①(7.7)③9.5	にぶい黄橙色		93000626
444	図77	SX222A	No.45	土師器・壺	①8.1③9.3	にぶい黄橙色		93000627
445	図77	SX222A	No.50	土師器・壺	①(8.7)③9.3	浅黄橙色		93000637
446	図78	SX222A	No.15	土師器・壺	①8.9③9.1	にぶい橙色		93000617
447	図78	SX222A	No.17-2	土師器・壺	①8.4③8.7	外：浅黄橙色・内：黒褐色		93000675
448	図78	SX222A	No.46-1	土師器・壺	①8.1③8.6	にぶい黄橙色		93000635
449	図78	SX222A	No.38	土師器・壺	①7.6③8.6	にぶい黄橙色		93000624
450	図78	SX222A	No.51	土師器・壺	①9.1③8.0	にぶい黄橙色		93000638
451	図78	SX222A	No.37	土師器・壺	①8.1③8.4	橙色		93000633
452	図78	SX222A	No.21	土師器・壺	①7.9③7.6	明赤褐色		93000620
453	図78	SX222A	No.47	土師器・壺	①7.8③7.0	浅黄橙色		93000628
454	図78	SX222A	No.63	土師器・壺	①(7.7)③7.6	明赤褐色		93000639
455	図78	SX222A	No.59	土師器・壺	①(8.4)③6.6	にぶい橙色		93000629
456	図78	SX222A	No.34	土師器・壺	①7.0③6.7	浅黄橙色		93000623
457	図78	SX222A	No.65	土師器・壺	①(6.2)③7.8	にぶい黄橙色		93000640
458	図78	SX222A	No.13	土師器・壺	①10.3③8.1	浅黄橙色		93000616
459	図78	SX222A	No.41	土師器・壺	①(9.5)③7.1	にぶい黄橙色		93000634
460	図78	SX222A	No.19	土師器・壺	①8.2③7.1	にぶい黄橙色		93000676
461	図78	SX222A	No.70	手捏土器	①5.1③4.0	にぶい黄橙色		93000596
462	図78	SX222A	No.8	手捏土器	①4.0③3.9	にぶい黄橙色		93000585
463	図78	SX222A	No.14	手捏土器	①4.4③4.0	にぶい橙色		93000587
464	図78	SX222A	No.28	手捏土器	①4.6③4.0	にぶい黄橙色		93000589
465	図78	SX222A	No.3	手捏土器	①4.5③3.6	にぶい褐色		93000584
466	図78	SX222A	No.66	手捏土器	①(4.5)③3.0	にぶい黄橙色		93000592
467	図78	SX222A	No.10	手捏土器	①(4.4)③2.9	にぶい黄橙色		93000586
468	図78	SX222A	No.67	手捏土器	①(4.2)③2.6	浅黄橙色		93000594
469	図78	SX222A	No.58	手捏土器	①3.9③2.7	にぶい橙色		93000591
470	図78	SX222A	No.69	手捏土器	①3.9③2.7	にぶい橙色		93000595
471	図78	SX222A	No.24	手捏土器	①3.8③2.8	淡黄色		93000588
472	図78	SX222A	No.40	手捏土器	①3.8③2.7	にぶい黄橙色		93000590
473	図78	SX222A	No.61	手捏土器	①(4.2)②(4.6)③5.5	にぶい黄橙色		93000593
474	図79	SX222B	No.461外	土師器・高杯	①18.6②12.1③13.0	浅黄橙色		93000851
475	図79	SX222B	No.428	土師器・高杯	①16.0②10.7③12.4	浅黄橙色		93000681
476	図79	SX222B	No.674外	土師器・高杯	①(15.2)②(10.4)③11.6	黄橙色		93000856
477	図79	SX222B	No.675・796	土師器・高杯	①16.8②12.0③11.6	橙色		93000573
478	図79	SX222B	No.278外	土師器・高杯	①16.8②13.1③12.2	黄橙色		93000854
479	図79	SX222B	No.431・441	土師器・高杯	①16.9②(12.1)③13.4	にぶい黄橙色		93000688
480	図79	SX222B	No.443外	土師器・高杯	①17.0②11.4③13.2	橙色		93000848
481	図79	SX222B	No.188	土師器・高杯	①16.6②11.8③12.7	淡黄橙色		93000570
482	図79	SX222B	No.382・378	土師器・高杯	①(17.3)②(14.2)③12.9	暗黄橙色		93000572

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
483	図79	ＳＸ222Ｂ	No.145･148	土師器・高杯	①(15.8)②11.5③11.9	橙色		93000684
484	図79	ＳＸ222Ｂ	No.405	土師器・高杯	①16.6②11.6③13.7	灰黄褐色		93000847
485	図79	ＳＸ222Ｂ	No.249	土師器・高杯	①16.6②11.8③13.3	浅黄色		93000858
486	図80	ＳＸ222Ｂ	No.127外	土師器・高杯	①20.1②(15.6)③14.3	橙色		93000683
487	図80	ＳＸ222Ｂ	No.628	土師器・高杯	①19.1②11.8③12.0	ぶ褐色		93000850
488	図80	ＳＸ222Ｂ	No.424	土師器・高杯	①20.8②12.8③14.3	浅黄橙色		93000687
489	図80	ＳＸ222Ｂ	No.425･677	土師器・高杯	①23.0②14.4③14.8	橙色		93000853
490	図80	ＳＸ222Ｂ	No.437外	土師器・高杯	①19.6②13.8③12.8	浅黄橙色		93000852
491	図80	ＳＸ222Ｂ	No.142外	土師器・高杯	①18.7②(13.3)③12.2	浅黄橙色		93000849
492	図80	ＳＸ222Ｂ	No.461	土師器・高杯	①15.5②10.3③10.3	橙色		93000575
493	図80	ＳＸ222Ｂ	No.442-1	土師器・高杯	①17.2②14.9③14.0	橙色		93000689
494	図80	ＳＸ222Ｂ	No.468･544	土師器・高杯	①(19.3)②14.1③14.2	にぶい橙色		93000685
495	図80	ＳＸ222Ｂ	No.280･436	土師器・高杯	①17.4②13.5③14.0	淡橙色		93000571
496	図80	ＳＸ222Ｂ	No.263外	土師器・高杯	①19.8②(13.8)③15.0	にぶい橙色		93000574
497	図80	ＳＸ222Ｂ	No.247･620	土師器・高杯	①(20.2)②14.2③12.6	にぶい橙色		93000686
498	図81	ＳＸ222Ｂ	No.114	土師器・甕	①17.8	にぶい橙色		93000582
499	図81	ＳＸ222Ｂ	No.81	土師器・甕	①18.2	灰黄褐色		93000579
500	図81	ＳＸ222Ｂ	No.75	土師器・甕	①17.6③27.0	橙色		93000844
501	図81	ＳＸ222Ｂ	No.107	土師器・甕	①18.6	にぶい黄褐色		93000581
502	図81	ＳＸ222Ｂ	No.82	土師器・甕	①(16.6)③28.9	外：にぶい橙色・内：にぶい黄橙色		93000690
503	図82	ＳＸ222Ｂ	No.88	土師器・壺	①(16.8)③32.6	浅黄褐色		93000846
504	図82	ＳＸ222Ｂ	No.105	土師器・壺	①15.9③29.4	にぶい黄橙色		93000580
505	図82	ＳＸ222Ｂ	No.73	土師器・壺	①17.7③40.1	外：黒褐色・内：黄橙色		93000843
506	図82	ＳＸ222Ｂ	No.80	土師器・壺	①16.2③31.4	外：黄褐色・内：灰褐色		93000578
507	図83	ＳＸ222Ｂ	No.132	土師器・壺	①12.9③20.6	橙色		93000845
508	図83	ＳＸ222Ｂ	No.76	土師器・壺	①11.6③17.1	浅黄橙色		93000767
509	図83	ＳＸ222Ｂ	No.92	土師器・壺	①10.9	浅黄橙色		93000825
510	図83	ＳＸ222Ｂ	No.793	土師器・壺	①(13.2)	にぶい黄褐色		93000583
511	図83	ＳＸ222Ｂ	No.159	土師器・壺	①13.0	浅黄橙色		93000841
512	図83	ＳＸ222Ｂ	No.414	土師器・壺	①12.4③15.3	黄橙色		93000812
513	図83	ＳＸ222Ｂ	No.193	土師器・壺	①11.3③16.7	にぶい黄橙色		93000826
514	図83	ＳＸ222Ｂ	No.74	土師器・壺	①(12.8)	褐色		93000831
515	図83	ＳＸ222Ｂ	No.437	土師器・壺	①13.0③16.0	淡黄色		93000805
516	図83	ＳＸ222Ｂ	No.418	土師器・壺	①(12.4)③16.4	浅黄橙色		93000655
517	図83	ＳＸ222Ｂ	No.412	土師器・壺	①11.2③15.3	浅黄橙色		93000654
518	図84	ＳＸ222Ｂ	No.377	土師器・壺	①(12.0)③15.2	にぶい黄橙色		93000827
519	図84	ＳＸ222Ｂ	No.111	土師器・壺	①10.0③15.4	浅黄橙色		93000770
520	図84	ＳＸ222Ｂ	No.462	土師器・壺	①(9.6)③15.4	黄灰色		93000807
521	図84	ＳＸ222Ｂ	No.379	土師器・壺	①10.7③13.8	淡黄色		93000780
522	図84	ＳＸ222Ｂ	No.77	土師器・壺	①10.3③14.8	浅黄色		93000803
523	図84	ＳＸ222Ｂ	No.409	土師器・壺	①(11.6)③13.6	にぶい橙色		93000653
524	図84	ＳＸ222Ｂ	No.530	土師器・壺	①(10.4)③14.6	浅黄色		93000814
525	図84	ＳＸ222Ｂ	No.460	土師器・壺	①11.3	外：黄橙色・内：浅黄色		93000813
526	図84	ＳＸ222Ｂ	No.473	土師器・壺	①10.2③14.8	外：浅黄橙色・内：灰黄色		93000773
527	図84	ＳＸ222Ｂ	No.90･102	土師器・壺	①(12.6)③13.0	にぶい黄橙色		93000673
528	図84	ＳＸ222Ｂ	No.376	土師器・壺	①10.1③12.8	にぶい黄褐色		93000652
529	図84	ＳＸ222Ｂ	No.101	土師器・壺	①10.6③12.6	黄橙色		93000784
530	図84	ＳＸ222Ｂ	No.276	土師器・壺	①9.0	浅黄橙色		93000840
531	図84	ＳＸ222Ｂ	No.466	土師器・壺	①(10.7)③14.1	黄橙色		93000828
532	図84	ＳＸ222Ｂ	No.276	土師器・壺	①(11.3)③13.7	にぶい黄橙色		93000660
533	図85	ＳＸ222Ｂ	No.574	土師器・壺	①(11.4)③12.6	黄橙色		93000829
534	図85	ＳＸ222Ｂ	No.403	土師器・壺	①9.6③12.4	浅黄橙色		93000771
535	図85	ＳＸ222Ｂ	No.463-1	土師器・壺	①19.1③11.5	黄橙色		93000785
536	図85	ＳＸ222Ｂ	No.659	土師器・壺	①(9.5)③12.0	黄橙色		93000782
537	図85	ＳＸ222Ｂ	No.87	土師器・壺	①10.0	灰黄色		93000775
538	図85	ＳＸ222Ｂ	No.470	土師器・壺	①(9.1)③10.7	外：淡黄色・内：黒褐色		93000808
539	図85	ＳＸ222Ｂ	No.166	土師器・壺	①(9.8)③11.9	淡黄橙色		93000832
540	図85	ＳＸ222Ｂ	No.89･90	土師器・壺	①10.0③11.8	にぶい黄橙色		93000672
541	図85	ＳＸ222Ｂ	No.676	土師器・壺	①(9.7)	浅黄橙色		93000811
542	図85	ＳＸ222Ｂ	No.419	土師器・壺	①9.2	にぶい黄橙色		93000696
543	図85	ＳＸ222Ｂ	No.685	土師器・壺	①8.8③9.1	黄橙色		93000788
544	図85	ＳＸ222Ｂ	No.339	土師器・壺	①8.2	浅黄橙色		93000778
545	図85	ＳＸ222Ｂ	No.309	土師器・壺	①8.8③9.8	黄橙色		93000777
546	図85	ＳＸ222Ｂ	No.146	土師器・壺	①8.8③9.8	浅黄橙色		93000651
547	図85	ＳＸ222Ｂ	No.546	土師器・壺	①(9.6)③9.3	黄橙色		93000810
548	図85	ＳＸ222Ｂ	No.636	土師器・壺	①9.4③8.5	浅黄色		93000802
549	図85	ＳＸ222Ｂ	No.410	土師器・壺	①8.0③9.7	灰白色		93000798
550	図85	ＳＸ222Ｂ	No.687	土師器・壺	①8.1③9.7	黄橙色		93000783
551	図85	ＳＸ222Ｂ	No.673	土師器・壺	①(7.6)③9.8	浅黄橙色		93000670

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
552	図85	SX222B	No.375	土師器・壺	①8.3③8.8	浅黄橙色		93000779
553	図85	SX222B	No.295	土師器・壺	①(7.2)③9.5	黄橙色		93000833
554	図85	SX222B	No.447	土師器・壺	①(9.3)③8.0	浅黄橙色		93000697
555	図85	SX222B	No.126・155	土師器・壺	①(9.1)③8.7	外：浅黄橙色・内：にぶい黄橙色		93000657
556	図85	SX222B	No.139・144	土師器・壺	①9.3③9.5	橙色		93000804
557	図85	SX222B	No.502	土師器・壺	①8.7③9.1	浅黄橙色		93000839
558	図86	SX222B	No.110	土師器・壺	①9.6③10.5	灰褐色		93000769
559	図86	SX222B	No.679	土師器・壺	①(7.5)③10.5	浅黄橙色		93000821
560	図86	SX222B	No.686	土師器・壺	①7.3③10.6	黄橙色		93000789
561	図86	SX222B	No.254	土師器・壺	①(7.2)③9.3	橙色		93000776
562	図86	SX222B	No.551	土師器・壺	①7.2③8.9	灰白色		93000704
563	図86	SX222B	No.645	土師器・壺	①(6.4)③8.3	灰黄色		93000787
564	図86	SX222B	No.154	土師器・壺	①7.4③9.4	淡黄色		93000806
565	図86	SX222B	No.542	土師器・壺	①5.5③8.8	外：灰白色・内：灰色		93000702
566	図86	SX222B	No.619	土師器・壺	①(7.7)③8.1	灰黄色		93000786
567	図86	SX222B	No.153	土師器・壺	①(8.8)③8.6	黄橙色		93000694
568	図86	SX222B	No.422	土師器・壺	①8.8③7.9	黄橙色		93000781
569	図86	SX222B	No.539	土師器・壺	①8.0	にぶい黄橙色		93000667
570	図86	SX222B	No.415	土師器・壺	①(7.6)③7.8	にぶい橙色		93000662
571	図86	SX222B	No.160	土師器・壺	①8.1③8.1	にぶい黄橙色		93000797
572	図86	SX222B	No.417	土師器・壺	①8.7③8.1	にぶい橙色		93000663
573	図86	SX222B	No.260	土師器・壺	①(10.6)③9.0	にぶい黄橙色		93000658
574	図86	SX222B	No.454	土師器・壺	①7.1③8.7	淡黄色		93000800
575	図86	SX222B	No.150	土師器・壺	①(6.0)③8.3	黄橙色		93000693
576	図86	SX222B	No.545	土師器・壺	①(7.6)③9.0	浅黄橙色		93000809
577	図86	SX222B	No.775	土師器・壺	①7.1③7.9	灰黄色		93000790
578	図86	SX222B	No.290	土師器・壺	①(8.4)③7.6	浅黄橙色		93000659
579	図86	SX222B	No.165-2	土師器・壺	①(6.7)③8.0	灰白色		93000819
580	図86	SX222B	No.136	土師器・壺	①7.4③7.5	橙色		93000817
581	図86	SX222B	No.633	土師器・壺	①(7.5)③7.1	黄橙色		93000794
582	図86	SX222B	No.429	土師器・壺	①8.0③7.1	浅黄橙色		93000799
583	図86	SX222B	No.456・457	土師器・壺	①7.7③7.2	浅黄橙色		93000801
584	図86	SX222B	No.122	土師器・壺	①8.4③8.4	黄橙色		93000816
585	図86	SX222B	No.667	土師器・壺	①9.2	にぶい橙色		93000669
586	図86	SX222B	No.444	土師器・壺	①(7.8)③7.6	黒褐色		93000664
587	図86	SX222B	No.459	土師器・壺	①8.3③7.3	浅黄橙色		93000698
588	図86	SX222B	No.533	土師器・壺	①8.5③6.3	にぶい黄橙色		93000701
589	図87	SX222B	No.527	手捏土器・壺	①4.9③5.4	灰白色		93000700
590	図87	SX222B	No.115	手捏土器・壺	①6.0③7.6	褐灰色		93000815
591	図87	SX222B	No.653	手捏土器・壺	①4.8③6.5	黄橙色		93000795
592	図87	SX222B	No.157	手捏土器・壺	①(6.7)③6.0	浅黄橙色		93000818
593	図87	SX222B	No.630	手捏土器・壺	①5.9③6.0	灰黄色		93000792
594	図87	SX222B	No.632	手捏土器・壺	①(6.4)③5.2	にぶい黄橙色		93000793
595	図87	SX222B	No.270	手捏土器・壺	①5.5③5.2	橙色		93000692
596	図87	SX222B	No.322	手捏土器・壺	①4.7③5.1	黄橙色		93000791
597	図87	SX222B	No.97	手捏土器・壺	①4.4③4.8	赤橙色		93000556
598	図87	SX222B	No.568	手捏土器	①6.3③4.6	浅黄橙色		93000695
599	図87	SX222B	No.117	手捏土器	①7.8③3.8	浅黄橙色		93000597
600	図87	SX222B	No.499	手捏土器	①7.7③3.2	灰色		93000691
601	図87	SX222B	No.780	手捏土器	①4.5③4.5	淡褐色		93000554
602	図87	SX222B	No.747	手捏土器	①4.8③4.3	橙色		93000742
603	図87	SX222B	No.169	手捏土器	①5.2③4.1	淡赤橙色		93000558
604	図87	SX222B	No.356	手捏土器	①(5.3)③4.4	浅黄橙色		93000604
605	図87	SX222B	No.745	手捏土器	①5.1③3.8	淡黄橙色		93000548
606	図87	SX222B	No.642	手捏土器	①5.2③4.5	淡橙色		93000542
607	図87	SX222B	No.748	手捏土器	①4.1③4.1	淡赤橙色		93000549
608	図87	SX222B	No.94	手捏土器	①4.1③4.0	外：暗赤褐色・内：にぶい黄橙色		93000501
609	図88	SX222B	No.360	手捏土器	①5.2③3.1	にぶい黄橙色		93000563
610	図88	SX222B	No.570	手捏土器	①4.8③3.2	灰黄色		93000569
611	図88	SX222B	No.351	手捏土器	①6.1③3.2	浅黄橙色		93000603
612	図88	SX222B	No.732	手捏土器	①4.8③3.1	黄橙色		93000736
613	図88	SX222B	No.453	手捏土器	①4.2③4.1	黄橙色		93000723
614	図88	SX222B	No.744	手捏土器	①4.5③3.6	黄橙色		93000741
615	図88	SX222B	No.448	手捏土器	①4.0③3.2	浅黄橙色		93000753
616	図88	SX222B	No.733	手捏土器	①3.9③3.9	黄橙色		93000737
617	図88	SX222B	No.524	手捏土器	①4.1③3.4	浅黄橙色		93000715
618	図88	SX222B	No.565	手捏土器	①3.4③3.7	にぶい黄橙色		93000568
619	図88	SX222B	No.535	手捏土器	①4.3③3.2	にぶい黄橙色		93000507
620	図88	SX222B	No.532-1	手捏土器	①4.1③3.1	淡黄橙色		93000532

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
621	図88	SX222B	No.557	手捏土器	①4.5③3.1	淡黄橙色		93000508
622	図88	SX222B	No.771	手捏土器	①3.8③3.2	橙色		93000745
623	図88	SX222B	No.665	手捏土器	①3.9③2.9	明褐色		93000609
624	図88	SX222B	No.738	手捏土器	①3.6③2.7	淡褐色		93000547
625	図88	SX222B	No.555	手捏土器	①3.6③2.9	灰白色		93000717
626	図88	SX222B	No.571	手捏土器	①3.8③2.6	にぶい黄橙色		93000513
627	図88	SX222B	No.569	手捏土器	①4.4③2.7	外：にぶい黄橙色・内：橙色		93000512
628	図88	SX222B	No.513	手捏土器	①4.3③3.1	浅黄橙色		93000607
629	図88	SX222B	No.349	手捏土器	①(3.9)③3.2	にぶい黄橙色		93000602
630	図88	SX222B	No.682	手捏土器	①(3.8)③3.0	橙色		93000728
631	図88	SX222B	No.519	手捏土器	①3.5③3.1	にぶい黄橙色		93000757
632	図88	SX222B	No.585	手捏土器	①3.4③3.2	浅黄橙色		93000720
633	図88	SX222B	No.525	手捏土器	①3.8③3.0	浅黄橙色		93000716
634	図88	SX222B	No.517	手捏土器	①3.7③2.8	にぶい黄橙色		93000506
635	図88	SX222B	No.242	手捏土器	①3.6③2.7	外：にぶい黄橙色・内：淡黒色		93000559
636	図88	SX222B	No.582	手捏土器	①3.1③3.3	灰白色		93000719
637	図88	SX222B	No.573	手捏土器	①3.5③3.2	褐色		93000514
638	図88	SX222B	No.567	手捏土器	①3.6③3.2	にぶい黄橙色		93000511
639	図88	SX222B	No.98	手捏土器	①3.7③3.0	にぶい黄橙色		93000502
640	図88	SX222B	No.739	手捏土器	①3.6③3.2	黄橙色		93000739
641	図88	SX222B	No.558	手捏土器	①4.0③2.9	黄橙色		93000509
642	図88	SX222B	No.103	手捏土器	①3.6③2.9	にぶい黄橙色		93000503
643	図88	SX222B	No.613	手捏土器	①4.0③2.9	黄橙色		93000540
644	図88	SX222B	No.655	手捏土器	①3.8③3.1	灰黄色		93000726
645	図88	SX222B	No.714	手捏土器	①3.3③2.8	浅黄色		93000731
646	図88	SX222B	No.495	手捏土器	①3.8③2.3	淡黄橙色		93000531
647	図88	SX222B	No.446	手捏土器	①3.4③3.5	淡黄色		93000722
648	図88	SX222B	No.778	手捏土器	①3.7③2.9	にぶい黄橙色		93000746
649	図88	SX222B	No.581	手捏土器	①3.1③3.2	浅黄橙色		93000718
650	図88	SX222B	No.584	手捏土器	①3.2③3.2	淡褐色		93000516
651	図88	SX222B	No.168	手捏土器	①(4.5)③3.0	にぶい黄橙色		93000601
652	図89	SX222B	No.722	手捏土器	①3.9③2.6	黄橙色		93000734
653	図89	SX222B	No.725	手捏土器	①3.5③2.9	黄橙色		93000735
654	図89	SX222B	No.560	手捏土器	①3.5③2.8	浅黄橙色		93000761
655	図89	SX222B	No.776	手捏土器	①3.2③2.6	淡黄褐色		93000553
656	図89	SX222B	No.720	手捏土器	①4.2③2.7	淡黄色		93000733
657	図89	SX222B	No.335	手捏土器	①3.5③2.6	にぶい黄橙色		93000561
658	図89	SX222B	No.529	手捏土器	①3.6③2.5	にぶい赤褐色		93000608
659	図89	SX222B	No.654	手捏土器	①2.7③2.8	灰黄色		93000725
660	図89	SX222B	No.337	手捏土器	①3.4③2.4	にぶい黄橙色		93000562
661	図89	SX222B	No.691	手捏土器	①3.9③2.7	黒褐色		93000610
662	図89	SX222B	No.770	手捏土器	①3.5③(2.8)	にぶい褐色		93000762
663	図89	SX222B	No.751	手捏土器	①3.9③2.1	外：灰白色・内：黄橙色		93000550
664	図89	SX222B	No.576	手捏土器	①3.5③2.3	にぶい黄橙色		93000515
665	図89	SX222B	No.559	手捏土器	①3.4③2.5	にぶい黄橙色		93000510
666	図89	SX222B	No.736	手捏土器	①3.7③2.4	にぶい黄橙色		93000738
667	図89	SX222B	No.661	手捏土器	①3.2③2.9	淡黄色		93000727
668	図89	SX222B	No.718	手捏土器	①3.4③2.6	灰白色		93000732
669	図89	SX222B	No.753	手捏土器	①4.0③2.3	灰白色		93000743
670	図89	SX222B	No.165-3	手捏土器	①3.6③3.0	橙色		93000721
671	図89	SX222B	No.579	手捏土器	①3.6③(3.1)	淡黄橙色		93000567
672	図89	SX222B	No.782	手捏土器	①3.8③2.4	淡黄色		93000747
673	図89	SX222B	No.719	手捏土器	①3.6③2.1	灰白色		93000543
674	図89	SX222B	No.777	手捏土器	①(3.8)③2.2	浅黄橙色		93000611
675	図89	SX222B	No.556	手捏土器	①3.8③2.1	浅黄橙色		93000760
676	図89	SX222B	No.342	手捏土器	①3.2③1.9	浅黄橙色		93000751
677	図89	SX222B	No.118	手捏土器	①3.8③2.5	黄橙色		93000504
678	図89	SX222B	No.689	手捏土器	①3.4③2.3	黄橙色		93000729
679	図89	SX222B	No.518	手捏土器	①3.5③2.3	外：にぶい黄橙色・内：灰黄色		93000565
680	図89	SX222B	No.603	手捏土器	①3.1③2.4	灰黒色		93000534
681	図89	SX222B	No.740	手捏土器	①3.4③2.3	灰黄褐色		93000740
682	図89	SX222B	No.162	手捏土器	①(3.4)③2.4	にぶい黄橙色		93000600
683	図89	SX222B	No.531	手捏土器	①3.0③2.3	外:灰黒色・内：黒色		93000566
684	図89	SX222B	No.769	手捏土器	①3.9③2.4	明褐色		93000744
685	図89	SX222B	No.130	手捏土器	①3.3③2.6	淡黄橙色		93000557
686	図89	SX222B	No.612	手捏土器	①3.1③2.4	外：淡黒色・内：灰褐色		93000539
687	図89	SX222B	No.161	手捏土器	①3.2③2.4	にぶい黄橙色		93000599
688	図89	SX222B	No.615	手捏土器	①3.4③2.5	橙色		93000724
689	図89	SX222B	No.754	手捏土器	①3.4③(2.0)	淡黄橙色		93000551

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
690	図89	ＳＸ222Ｂ	No.503	手捏土器	①3.2③2.1	淡黒灰色		93000564
691	図89	ＳＸ222Ｂ	No.512	手捏土器	①3.2③2.3	浅黄橙色		93000756
692	図89	ＳＸ222Ｂ	No.806	手捏土器	①3.2③2.1	淡黄色		93000748
693	図89	ＳＸ222Ｂ	No.536	手捏土器	①3.0③2.2	黒褐色		93000759
694	図89	ＳＸ222Ｂ	No.362	手捏土器	①3.3③2.1	浅黄橙色		93000752
695	図89	ＳＸ222Ｂ	No.731	手捏土器	①2.6③2.1	外：淡黄褐色・内：灰黒色		93000545
696	図89	ＳＸ222Ｂ	No.606	手捏土器	①2.9③2.1	外：淡黒色・内：淡黄橙色		93000537
697	図89	ＳＸ222Ｂ	No.505・508	手捏土器	①(3.3)③2.2	黒褐色		93000606
698	図89	ＳＸ222Ｂ	No.755	手捏土器	①3.1③2.2	外：暗黄褐色・内：淡黄褐色		93000552
699	図89	ＳＸ222Ｂ	No.504	手捏土器	①(3.2)③1.9	黒褐色		93000605
700	図89	ＳＸ222Ｂ	No.246	手捏土器	①2.4③1.7	外：暗黄橙色・内：淡黄橙色		93000560
701	図89	ＳＸ222Ｂ	No.532-2	手捏土器	①2.5③1.7	黒灰色		93000533
702	図89	ＳＸ222Ｂ	No.690	手捏土器	①3.0③2.3	橙色		93000730
703	図89	ＳＸ222Ｂ	No.604	手捏土器	①3.2③1.9	外：淡橙色・内：淡黄橙色		93000535
704	図89	ＳＸ222Ｂ	No.523	手捏土器	①3.3③1.8	黒灰色		93000758
705	図89	ＳＸ222Ｂ	No.721	手捏土器	①3.3③1.8	灰白色		93000544
706	図89	ＳＸ222Ｂ	No.734	手捏土器	①3.1③1.8	黄褐色		93000546
707	図89	ＳＸ222Ｂ	No.614	手捏土器	①2.7③2.2	外：淡灰褐色・内：暗黄橙色		93000541
708	図89	ＳＸ222Ｂ	No.510	手捏土器	①2.8③2.1	黒褐色		93000755
709	図89	ＳＸ222Ｂ	No.124	手捏土器	①2.7③2.0	浅黄橙色		93000750
710	図89	ＳＸ222Ｂ	No.608	手捏土器	①2.5③1.8	暗褐色		93000538
711	図89	ＳＸ222Ｂ	No.604	手捏土器	①3.2③1.4	淡黒褐色		93000536
712	図89	ＳＸ222Ｂ	No.121	手捏土器	①2.7③1.7	橙色		93000749
713	図89	ＳＸ222Ｂ	No.119	手捏土器	①2.6③1.5	橙色		93000598
714	図90	ＳＸ222Ｂ	No.765	手捏土器・器台	①4.5②4.2③5.8	淡黄白色		93000522
715	図90	ＳＸ222Ｂ	No.809	手捏土器・器台	①4.3②3.1③6.2	淡黄橙色		93000529
716	図90	ＳＸ222Ｂ	No.784	手捏土器・器台	②3.9	黄白色		93000555
717	図90	ＳＸ222Ｂ	No.251	手捏土器・器台	①2.6②2.7③2.8	橙色		93000764
718	図90	ＳＸ222Ｂ	No.616	手捏土器・器台	①2.5②3.0③2.5	淡褐色		93000517
719	図90	ＳＸ222Ｂ	No.455	手捏土器・器台	①2.6②(1.6)③2.0	橙色		93000766
720	図90	ＳＸ222Ｂ	No.340	手捏土器・器台	①2.0②1.4③1.7	橙色		93000765
721	図90	ＳＸ222Ｂ	No.168	手捏土器・器台	①1.4②1.8③2.1	橙色		93000763
722	図90	ＳＸ222Ｂ	No.750	手捏土器・器台	①3.1②4.0③3.5	淡黄橙色		93000520
723	図90	ＳＸ222Ｂ	No.781	手捏土器・器台	①2.7②3.8③3.6	黄橙色		93000526
724	図90	ＳＸ222Ｂ	No.449	手捏土器・器台	①3.2②3.7③3.4	褐色		93000505
725	図90	ＳＸ222Ｂ	No.768	手捏土器・器台	①4.4②4.6③3.6	淡褐色		93000524
726	図90	ＳＸ222Ｂ	No.767	手捏土器・器台	①4.0②4.3③3.4	黄褐色		93000523
727	図90	ＳＸ222Ｂ	No.785	手捏土器・器台	①3.9②3.8③3.7	淡赤橙色		93000527
728	図90	ＳＸ222Ｂ	No.786	手捏土器・器台	①3.7②4.1③3.0	淡赤橙色		93000528
729	図90	ＳＸ222Ｂ	No.779	手捏土器・器台	①3.2②3.2③2.8	淡黄橙色		93000525
730	図90	ＳＸ222Ｂ	No.684	手捏土器・器台	①3.0②3.0③2.8	黄橙色		93000519
731	図90	ＳＸ222Ｂ	No.810	手捏土器・器台	①3.0②2.9③2.9	淡黄橙色		93000530
732	図90	ＳＸ222Ｂ	No.764	手捏土器・器台	①3.3②3.3③2.5	淡褐色		93000521
733	図90	ＳＸ222Ｂ	No.618	手捏土器・器台	①2.3②2.5③2.3	黄橙色		93000518
734	図91	ＳＸ222Ｂ	No.180	銅鏡	面径(7.6)④14.8			93001576
735	図92	ＳＸ222Ａ	No.55	石製模造品・剣形品	①3.9②1.2③0.4④2.3	滑石		93001703
736	図92	ＳＸ222Ａ	No.816	石製模造品・剣形品	①3.5②1.2③0.4④2.1	滑石		93001704
737	図92	ＳＸ222Ａ	No.17	石製模造品・剣形品	①4.4②1.8③0.4④4.8	滑石		93001702
738	図92	ＳＸ222Ａ	No.37	石製模造品・有孔円板	①2.6②2.6③0.3④3.8	滑石		93001701
739	図92	ＳＸ222Ｂ	No.71	石製模造品・有孔円板	①3.2②3.0③0.5④8.9	滑石		93001700
740	図92	ＳＸ222Ａ	No.56	石製模造品・有孔円板	①1.6②1.5③0.3④1.0	滑石		93001699
741	図92	ＳＸ222Ｂ	No.182	石製模造品・有孔円板	①2.6②2.3③0.2④1.7	滑石		93001696
742	図92	ＳＸ222Ｂ	No.173	石製模造品・有孔円板	①2.9②3.1③0.4④6.3	滑石		93001695
743	図92	ＳＸ222Ｂ	No.174	石製模造品・有孔円板	①3.5②3.2③0.4④7.6	滑石		93001690
744	図92	ＳＸ222Ｂ	No.175	石製模造品・有孔円板	①3.4②3.2③0.4④6.3	滑石		93001697
745	図92	ＳＸ222Ｂ	No.590	石製模造品・有孔円板	①3.5②3.2③0.4④6.8	滑石		93001693
746	図92	ＳＸ222Ｂ	No.339	石製模造品・有孔円板	①3.4②3.2③0.4④6.6	滑石		93001698
747	図92	ＳＸ222Ｂ	No.358	石製模造品・有孔円板	①3.3②3.2③0.3④4.3	滑石		93001692
748	図92	ＳＸ222Ｂ	No.176	石製模造品・有孔円板	①3.9②3.7③0.5④10.1	滑石		93001691
749	図92	ＳＸ222Ｂ	No.419	石製模造品・有孔円板	①3.8②3.8③0.4④9.9	滑石		93001689
750	図92	ＳＸ222Ｂ	No.521	石製模造品・有孔円板	①4.5②4.4③0.4④14.2	滑石		93001694
751	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.6④0.1 孔径0.2	滑石		93001742
752	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.6④0.2 孔径0.2	滑石		93001728
753	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.6④0.1 孔径0.2	滑石		93001724
754	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.6④0.1 孔径0.2	滑石		93001718
755	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001726
756	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001730
757	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001731
758	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001729

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
759	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001721
760	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001744
761	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001762
762	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.2 孔径0.2	滑石		93001746
763	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001767
764	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001725
765	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001732
766	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001752
767	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001750
768	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001751
769	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001745
770	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001741
771	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001761
772	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001756
773	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001740
774	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001736
775	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001748
776	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001737
777	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001749
778	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001754
779	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001753
780	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001755
781	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001723
782	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001766
783	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.3	滑石		93001778
784	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1以下 孔径0.3	滑石		93001779
785	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001781
786	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001764
787	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001760
788	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001759
789	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001739
790	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001738
791	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001722
792	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001780
793	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001768
794	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001735
795	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001757
796	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001743
797	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001788
798	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001793
799	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.5④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001789
800	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001811
801	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001765
802	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001808
803	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2	滑石		93001720
804	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001727
805	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001785
806	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001787
807	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001747
808	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.4 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001784
809	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001776
810	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001733
811	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001719
812	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001809
813	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001786
814	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001813
815	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001775
816	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1 孔径0.2	滑石		93001777
817	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001791
818	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001810
819	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001790
820	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001817
821	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001773
822	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001772
823	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001734
824	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001783
825	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001803
826	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001802
827	図93	ＳＸ222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.3	滑石		93001769

遺物番号	挿図	出土位置	取上番号	遺物の種類	法量①口径・長さ②底径・幅③器高・厚さ④重量	色調・石材	備考	登録番号
828	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001774
829	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.3④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001782
830	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001815
831	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001814
832	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001771
833	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001770
834	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001796
835	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001800
836	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.1	滑石		93001798
837	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001806
838	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001763
839	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001805
840	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001812
841	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001799
842	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001794
843	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001792
844	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.3 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001804
845	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.1	滑石		93001816
846	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001807
847	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001795
848	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.1	滑石		93001758
849	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001801
850	図93	S X222	水洗	石製模造品・白玉	①0.2 径0.4④0.1以下 孔径0.2	滑石		93001797
851	図94	S X222B	No.467	石製模造品・勾玉	①2.5④2.5	滑石		93001705
852	図94	S X222B	No.709	石製模造品・管玉	①2.1 径0.5④1.0 孔径0.2	滑石		93001706
853	図94	S X222	水洗	石製模造品・管玉	①2.0 径0.5④0.8 孔径0.2	滑石		93001708
854	図94	S X222B	No.181	石製模造品・管玉	①1.6 径0.5④0.5 孔径0.2	滑石		93001707
855	図94	S X222	水洗	石製模造品・管玉	①1.3 径0.4④0.4 孔径0.2	滑石		93001710
856	図94	S X222	水洗	石製模造品・管玉	①1.3 径0.4④0.3 孔径0.2	滑石		93001709
857	図94	S X222B	No.91	ガラス小玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2			93001711
858	図94	S X222B	No.411	ガラス小玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2			93001712
859	図94	S X222B	No.564	ガラス小玉	①0.5 径0.4④0.1 孔径0.2			93001713
860	図94	S X222	水洗	ガラス小玉	①0.3 径0.5④0.1 孔径0.2			93001714
861	図94	S X222	水洗	ガラス小玉	①0.4 径0.5④0.1 孔径0.2			93001715
862	図94	S X222	水洗	ガラス小玉	①0.4 径0.4④0.1 孔径0.2			93001716
863	図94	S X222	水洗	ガラス小玉	①0.3 径0.4④0.1 孔径0.2			93001717

第4章　総括

1．まとめ

平原遺跡2区には縄紋時代から近世までの広範な時代の痕跡が遺されていた。また、混入とみられるナイフ形石器の出土は、周辺地区における当該期遺跡の存在を暗示している。

我々がこの場所で確認できた最初の活動は縄紋時代中期の人々によるもので、立地や遺構の内容あるいは石器組成から想定されるのは定時的な野営地という性格である。この場が利用された年代は、土器型式から見て、あまり長期に及ばないものと思われ、理由は定かでないが後期に入る頃には既に放棄されている。

縄紋中期の遺構・遺物の層準より上位で縄紋晩期の遺物がややまとまって出土するが、遺構は確認されておらず、遺跡の性格は不明である。出土土器は、黒川式並行期を主体として若干の先行する型式を含んでいる。他に数点ではあるが確実に後期後葉に位置付けられる資料も出土しており、石器製作技術に関して鈴桶技法が希薄ながら認められるのはこれと関連づけるべきかもしれない。

刻目突帯紋土器期から弥生時代終末に至るまで目に見える形での土地利用の形跡はなく、前期と中期中葉～後半の遺物が中央部を中心に少量散在するのみである。隣接する1区の盛行期にあたる中期初頭から前葉と後期後半から終末の遺物はほとんど認められず、後期頃の所産と思われる銅鏃が1点出土したが、これも遺構に伴うものではない。

古墳時代においても集落としての利用はなされていないが、初頭から中期にかけて特異な遺構が形成されている。小流の落ち際に位置する古墳時代初頭の不定形な落ち込みＳＸ238からは様々な器種を含む土器群が出土し、概ね布留式古段階並行に比定できそうである。周辺に同時期の遺構はなく、水辺に設けられた何らかの祭祀に伴う廃棄土坑の可能性を指摘しておく。古墳時代前期の土坑ＳＫ212は、その形状や遺物の出土状況から土坑墓の可能性を持つが、墓を営むに相応しい立地とは思えず、結論は保留しておきたい。

南側部で検出された古墳時代中期の祭祀遺構ＳＸ222は、自然流路の肩に多量の土器や手捏土器・滑石製模造品等の祭具が集中的に遺棄されたもので、当該期の土器編年や祭祀行為の復元にあたって重要な情報を得ることができた。

古墳時代後期以降は再び目立った痕跡を留めなくなり、古代・中世から近世に至るまで少量の遺物が散見されるのみである。立地条件からすると、弥生時代以降には水田が営まれていた可能性が強いが、確たる証拠は得られなかった。

平原遺跡2区の調査成果のうち、特筆すべきは縄紋時代中期の遺構・遺物と古墳時代中期の祭祀遺構である。本報告を終えるにあたって、今後の検討課題を抽出する意味で、以下に簡単にまとめておく。

２．縄紋時代中期の遺構と遺物

（１）集石遺構について

２区で検出した45基の焼礫集積遺構は、主として形態的特徴からいくつかに群別が可能である。先ず、ＳＸ213・ＳＸ218の２基は定形的な石囲炉と考えてよいもので、仮にＡ類とする。

ＳＸ221・ＳＸ228の２基は中央部に向かって偏平な礫を斜めに立てて組みあげたもので、Ｂ類とする。ＳＸ221は石組の内部に礫が充塡されており、早期の配石を伴う集石炉に類似する。

最も多いのは径0.4～0.5mの略円形に礫が集中するもので、浅い掘り込みを伴うものもある。これらをＣ類とするが、構成礫の重量により、200ｇ以上の大きめの礫が多いもの（Ｃ１類；ＳＸ201・ＳＸ206・ＳＸ224・ＳＸ230・ＳＸ231・ＳＸ232・ＳＸ235・ＳＸ247・ＳＸ248・ＳＸ249・ＳＸ250）と、50～100ｇ前後の小さな礫が多いもの（Ｃ２類；ＳＸ204Ａ・ＳＸ204Ｂ・ＳＸ205・ＳＸ207・ＳＸ209・ＳＸ210・ＳＸ217Ａ・ＳＸ217Ｂ・ＳＸ220・ＳＸ223・ＳＸ226・ＳＸ227・ＳＸ229・ＳＸ233・ＳＸ234・ＳＸ236・ＳＸ241・ＳＸ242）とに分けられる。

Ｂ・Ｃ類の平面形はおおむね円形で、径は0.4～0.5mの範囲でほぼ収まり、早期の例に比べて小さいようである。掘り込み中には炭化物が混じるが、炭の層を成す程ではなく、掘り込みには顕著な硬化や赤変は認められない（これは土質によるものかもしれないが）。礫は遺跡周辺で採取し易い花崗岩・石英岩の亜円礫・亜角礫が８～９割以上の高率で用いられている。礫の破損は各遺構によっても異なるが、およそ４割以上の破損率である。Ｂ・Ｃ類は集石炉と見なせるが、接合率の低さからすると使用回数はあまり多くなさそうである。

礫の分布範囲が広く、上下に重ならないものをＤ類とするが、構成礫の大きさが比較的揃うＳＸ202・ＳＸ203（Ｄ１類）と構成礫の大きさがまちまちで集中度も弱いＳＸ211・ＳＸ225（Ｄ２類）に分けられる。Ｄ１類では遺構の範囲に炭化物が目立っている。また礫の大きさは揃っており、殊にＳＸ203の構成礫はほとんどが同じ大きさの完形礫である。遺構の広がりもＡ・Ｂ・Ｃ類に比べれば広いが、視覚的にまとまりが見られる。Ｄ２類はほとんど炭化物を伴わず、礫の大きさもまちまちで分布も散漫である。Ｄ１類もＤ２類も集石炉と何らかの関わりを持つ礫の集中と考えられるが、その実態は大きく異なりそうである。Ｄ１類については、礫を加熱した場、集石炉に有用な礫の集積、ある段階における集石炉そのもの等、Ｄ２類については、廃棄礫のまとまり、といった性格が想定されようか。

以上の分類に当てはまらないものや状況の不明なものを一括してＥ類とする。

各類型は、Ｅ類を除きその平面分布に明らかな違いが認められる。ＢＤ０６区画を中心とした中央部分ではＣ２類が多く、その縁辺部にＡ類・Ｂ類があるが、これらと違ってＣ１類はほとんどがＢＤ０７区画に集中する。またＤ１類は遺構集中部分の南西隅に位置し、Ｄ２類は集中部分からやや離れた位置にある。遺物分布との関係で言えば、大きな集中部としてしか認識

できず、分布域の細分は課題として残るが、活動空間の中心部分に定形炉や集石炉の分布がほぼ重なり、周辺部に廃棄単位の可能性が強い集石遺構が位置する。45基の集石遺構の内、炉として機能したものがどれだけあるか厳密には確定していないが、少なくともそれが全て同時に存在したということは、複数の集石炉が接している状況からも考えにくい。炉の構築を伴う活動が累積的にわたった結果として遺構群と遺物群とが大きく重なり合うのであろう。

では、集石炉の同時性を窺う手掛かりはないのだろうか。集石遺構間で礫の接合関係が認められたのは、ＳＸ209－ＳＸ210、ＳＸ206－ＳＸ207、ＳＸ204Ａ－ＳＸ205－ＳＸ217Ｂの３群で、いずれもＣ２類とした集石炉である。ＳＸ209－ＳＸ210は全面赤化礫同士の接合、ＳＸ206－ＳＸ207は１例が割れ面非赤化礫同士、１例が割れ面非赤化礫（ＳＸ206）と全面赤化礫（ＳＸ207）の接合、ＳＸ204Ａ－ＳＸ205－ＳＸ217Ｂでは割れ面非赤化礫同士の接合である。このうち割れ面非赤化礫（ＳＸ206）と全面赤化礫（ＳＸ207）との接合関係から、ＳＸ207→ＳＸ206という時間の流れを想定することも不可能ではないが、もう１例が割れ面非赤化礫同士の接合であることから限りなく同時期に近い使用を考えるべきであろう。他の２群も同様であり、特にＳＸ209－ＳＸ210の場合、全面赤化礫同士が接合することから、１個の礫が割れた（あるいは割られた）後に、各々の場で使用されている訳で、ほぼ同時期の集石炉と考えられる。ＳＸ210に伴って第１群土器の破片が、ＳＸ209に接して１個体に復元できる第１群土器が出土していることは、その傍証となるだろう。ある一時期に存在していた集石の数となると全くの推測とならざるをえないが、早期の分析例等からすると２～３基程度がおよそ妥当な線ではなかろうか。

土器編年の問題は次節で述べるが、平原遺跡２区下層の遺構群が中期の所産であることは間違いなく、少なくともこの段階まで九州北部で集石炉が確実に残存していたことを示すのである。九州における縄紋時代前期以降の集石炉は、かつて行った集成[1]以後に気付いたものに限っても長崎県深堀遺跡[2]、熊本県竜田陳内遺跡[3]、宮崎県天神河内第１遺跡[4]等の前期から中期の例を挙げうるし、宮崎県丸野第２遺跡[5]では後期前半から中葉の集石炉群が検出されている。鹿児島県内では、数は激減しながらも晩期まで残存するという指摘もあるが[6]、必ずしも時期が特定できなかったり、礫の集中ではあっても焼礫集積遺構とは確認できなかったりで、今のところ後期後半以降で確実なものはなさそうである。丸野第２遺跡では竪穴建物内に炉跡が認められず、集石炉が屋外炉としての機能を有していた可能性が強いが、九州東北部の豊前地域では、ほぼ同時期の竪穴建物の多くが屋内に石囲炉を配している。この事実をもって屋内定形炉の定着を主張するほど事は単純ではないが、後期に顕著となる東方世界からの文化流入の一つとして注意すべき現象である。

平原遺跡２区における事例[7]を九州における縄紋時代史の中に位置付ける作業は、前期から中期の集落様相が不明な現状が改善されて初めて可能となろう。

（2）縄紋土器について

下層出土の縄紋土器のうち主体を占める第1群a類と第2群a類について検討し、編年的位置について予察を示しておきたい。

第1群a類土器は深鉢形で、底部は平底ないしやや上底を成す。口縁部が直行するものの他、肩がやや張るものや口縁部が緩やかに外反するものがある。口縁部は平口縁であるが、4箇所程度の突起を有するものがある。施紋部位はほぼ口縁部から胴部上半に限られ、指によるような太く滑らかな凹線紋と半截竹管・篦・貝殻等による押引紋・刺突紋とが交互に施される。器壁は薄手のものからやや厚手のものまであり、いずれも胎土中に滑石粉末を含む。これらの特徴から第1群a類は、これまで並木式と呼ばれていた型式にほぼ相当するものと考えられ、今次調査の資料によってその様相がかなり明らかになったと言えよう。

並木式土器は鹿児島県大口市並木遺跡を標式とし、命名者である寺師見国の定義によれば[8]、「土器表面に浅い太形凹線を施し其の凹線と凹線との間の残された部分に、半截せる竹管、篦、貝殻等によって爪形或は変形爪形文の模擬縄文的手法を施した物で、形は大体に直口する鉢形で、口縁に鋸歯状の小刻線を入れる場合があり、亦突起のあるものもある、厚さは頸、胴部で八粍前後で、底部は平底或は軽度の凹底である。」というもので、胎土に滑石粉末を混入することも特徴の一つとして挙げられている。並木式と第1群a類の内容とは整合する。

並木式は、曽畑式から阿高式へと伸びる系統樹の上にあって、両者を繋ぐ中期前葉の土器である、というのが現在の大方の認識である。実はこのような理解は、あまり古くからの考えではない。並木式と阿高式との関係については、おそらく鹿児島県春日町遺跡[9]や同県江内貝塚[10]での層位的所見から並木式が阿高式に先行することが解った頃から、胎土への滑石の混入や太形凹線紋といった共通項によって両者が連続することが認識されはじめたものと思われる。しかし、更に溯って並木式・阿高式を曽畑式からの系統として明確に位置付けたのは前川威洋[11]や田中良之[12]であろう。

並木式から阿高式への移行過程を説明するにあたって、前川は並木式中の凹線紋を伴わない一群に着目し、凹線紋を有する並木式を経て阿高式へと滑らかに変化すると考えた。更に田中は、凹線紋を有するものに押引紋と凹線紋の施紋順序が違う二群を見いだし、押引紋のみのものから、押引紋主導で凹線紋も施されるもの、そして凹線紋主導で押引紋も施されるものへ、という変遷を考定し、それぞれ並木Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式とした。しかし、細別された並木Ⅰ～Ⅲ式は資料の蓄積が進んだ現時点でさえ層位的にも遺跡毎の出土状況においても分離することができず、逆に同一個体における「Ⅰ式」＋「Ⅱ式」や「Ⅱ式」＋「Ⅲ式」といった「細別型式」の共存が確認できるのである。並木式と阿高式とが系統を同じくして連続する型式であることは確実だが、その過程については再考される必要がある。また、曽畑式と並木式・阿高式が系統として連続するという考えについても、両者の差異があまりに大きいことから批判的な意見が

あり[13]、並木式の成立に関しても問題が多い。

第２群ａ類土器は、口縁部がほぼ直行する深鉢形で、底部はやや上げ底を成すものが多いようである。口縁部を肥厚させるのが最大の特徴で、紋様を有するものはこの肥厚部分に太めの沈線紋や粘土紐を貼り付けた浮線紋が施される。第２群ａ類は遺跡での出土状況から第１群ａ類とほぼ同時期と考えられるが、現在まで九州北部において注意されたことのない一群である。そこで幾分視野を広げて類例を求めると、九州南部の鹿児島県中尾田遺跡[14]Ⅲ層第Ⅲ類土器、殊に粘土紐を張り付けた山形の浮線紋土器に極めて良く類似するものがある。同種の土器は、鹿児島県下で成川遺跡[15]、島巡遺跡[16]、加治屋園遺跡[17]、出口遺跡[18]、松美堂遺跡[19]等から出土しており、量的には少ないものの出口遺跡での単純出土から一型式を成すものとして捉えうる。東 和幸は、これらを春日式土器に後続するものと位置付け、宮崎県大平遺跡を標式とする大平式と対比している[20]。大平式＝大平遺跡第一類土器[21]は、くびれた頸部から反転して口縁部が内湾し、底部は小径で外側に張り出す非常に独特な器形を有しており、これとほぼ同類の土器としては鹿児島県倉園Ａ遺跡[22]の資料がある。確かに大平第一類・倉園Ａと平原第２群ａ類・中尾田Ⅲ類とでは、類似点も多く両者が非常に近いものであることは疑いないが、分布も含めた相違点を考慮して、後者を仮に中尾田Ⅲ類土器と呼んで区別しておく。

第１群ａ類（並木式）と第２群ａ類（中尾田Ⅲ類）の関係であるが、遺跡での在り方からすれば両者は同時期か非常に近接した連続する時期かと考えられる。同時存在とすれば、精粗の関係か異系統の関係かにあるとみなければならないが、いずれも遺跡での実態からは支持し難い。また、並木式が中尾田Ⅲ類に先行すると考えれば、並木式と中尾田Ⅲ類との間に阿高式土器の入る余地がなくなり、この説も採用できない。したがって中尾田Ⅲ類は並木式に先行する可能性が強い。

春日式の位置については、その古い部分が船元Ⅲ式から里木Ⅱ式に並行し、新しい部分が里木Ⅲ式以降と捉えられており[23]、器形や単位紋様の共有や遺跡での出土状況から、この並行関係はかなり妥当性がありそうである。そうすると、中尾田Ⅲ類やそれに続く並木式が里木Ⅲ式以降の中期後葉段階にまで新しく位置付けなければならないという驚くべきことになる。並木式・阿高式は、江内貝塚で春日式の上層から出土しており[24]、少なくとも里木Ⅱ式並行期より溯らないことは言えそうである。問題は北部九州における春日式並行期、あるいは船元Ⅰ・Ⅱ式並行期の土器型式である。春日式については従来貝殻条痕から轟式系とされてきたものや、船元式系等とされているものの中に類似資料を散見することができ、大きくは九州南部における動態と連動しているものと予想しており、船元Ⅰ・Ⅱ式については北部九州においても単純期が存在した可能性が濃厚である。並木式・阿高式の出自を曽畑式にもとめてきた従来の説を一旦清算して、新たな系統観の構築を目指す必要があるだろう。

３．祭祀遺構ＳＸ222について

ＳＸ222とした古墳時代の祭祀遺構は、平面分布からＳＸ222ＡとＳＸ222Ｂの２群と捉えられた。ＳＸ222Ａは、ほぼ完形の土器が密着した状態で据え置かれている。ＳＸ222Ｂは範囲が広く、破損している土器も多いが、その多くは個体としてまとまっており土器片の集合ではない。垂直分布も個体数が多いわりには重層的でない。また、礫が意図的に集積されており、それを磐座とまでは言えないにせよ、廃棄の場というよりは神まつりが執り行われた祭場そのものである可能性が強く示唆される。ＳＸ222Ａについては、その状況から１回の祭祀を示すものと言えるが、ＳＸ222Ｂについては、一度に多量の祭具が用いられたのか、複数回の祭祀行為の累積した結果なのかが問題である。破損の程度が、僅かながらも時間差を示すものであれば、ＳＸ222Ｂが先行し、ＳＸ222Ａの形成直後に洪水によって一気に埋没したと想定される。ＳＸ222ＡとＳＸ222Ｂの土器が複数の型式に跨がっていないこと、土器の損傷や器表面の摩耗が顕著でないこと、流路が非常に不安定であったと思われること、等から数年以上の幅を持つものではないと考えられる。

ＳＸ222から出土した遺物は、土師器（甕・中型壺・小型壺・小型複合口縁壺・高杯）、手捏土器（壺・器台）、滑石製模造品（剣形品３・双孔円板11・単孔円板２・勾玉１・管玉５・臼玉978）、内行花紋系倭鏡片１、ガラス小玉７、である。

滑石製模造品には剣形品、有孔円板（双孔・単孔）、臼玉、管玉、勾玉がある。剣形品３点はいずれもＳＸ222Ａからの出土で、菱形ないし柳葉形といった平面形を示し、片面のみに鎬のあるものである。２点の単孔円板は厚みや孔径がかなり異なることから、果たして同種の遺物と認定できるかどうか疑問である。双孔円板は大小２種があり、孔間距離や比率に一定の原理は窺えない。臼玉は中央部に稜があるものと、平玉と呼んだほうが良いものがあるが、明確には分離できない。勾玉は小型で断面が馬蹄形に近く、表面には線状痕や稜を留め艶出し仕上げは行っていない。

手捏土器は、小型壺・器台の模倣と考えられるもので、多くの場合原型を窺えぬ程にデフォルメされている。小型壺の特に小さいものとの区別が難しいが、口縁部内外のヨコナデ調整の有無を目安として分離した。

土師器は布留式の終末期か、その直後の段階にあたるもので、精製の器台・小型広口丸底壺といった器種の欠落は、それを裏付けるものであろう。筑前地域を中心とした先行研究[25]を参照しつつ、編年的位置を与えておく。いずれの案も布留式からの変容する過程で甕・高杯の型式変化や器種の交替という現象を見いだす点で意見が一致しているが、それらの変化をどの段階に認めるかで多少の齟齬をきたしている。これは当該期の土器が初期須恵器の出現と連動すること、各器種の出現率が遺構の性格や総量にも大きく左右されること等の事由による。平原ＳＸ222も祭祀遺構という性格から器種の偏りがある可能性は否めないが、ＳＸ222を一つの段階

として、その前後と合わせて次のように理解する。

①平原ＳＸ222直前の段階：甕は布留型の特徴を失いつつあるものの僅かに内湾口縁を留め、小型でやや広口の丸底壺や小型器台といった布留式を特徴づける器種が残存している段階である。高杯も脚柱状部が細長く膨らみを残す。

②平原ＳＸ222相当の段階：甕が布留的な内湾口縁を殆ど留めなくなり、口縁部が直行するものや外反するものに変化している。体部は球形で器壁は厚手となる。高杯では新たに「ハ」字状脚部を示す類が出現するが、杯部は屈曲部が明瞭で直線的に開く。

③平原ＳＸ222直後の段階：甕は頸の屈曲が弱いものも現れ、長胴化するのが特徴である。高杯は緩やかな変化であるが、杯部が丸みを帯び屈曲が弱くなる。それまでの鉢とは系譜の異なる椀が新たに出現し、安定した組成を示すようになる。取手付の甑が出現するのもこの段階である。

①段階は松木37号住居跡[26]、②段階は平原ＳＸ222・御床松原15号住居跡[27]、③段階は赤井手43号住居跡[28]・塚堂Ｄ地区９号・11号住居跡[29]・伊勢山３区１号住居跡[30]、等の資料を充てることができる。

初期須恵器との関係で言えば、③段階の土師器が、赤井手43号住居跡で陶邑ＴＫ73型式の樽形瓶と、松木140街区祭祀遺構で池の上Ｉａ式[31]の朝倉産広口壺と、共伴しており、並行関係の一部が押さえられるが、礫石８号墳や鈴熊ＳＴ001では陶邑ＴＫ216型式と[32]、池の上Ｄ－１土坑墓では池の上Ｉｂ式と共伴しているので[33]、③段階とした一群の時間幅がやや長いことがわかる。初期須恵器は祭祀遺構や墳墓において多く用いられることが知られており、平原ＳＸ222のような多量の土器を用いた祭祀遺構にあって１点も出土していない事実は、②段階が須恵器以前である可能性を示唆するが、須恵器の生産開始が果たして③段階の内に留まるものであるかどうかは、未確認の事項である。実年代としては①を４世紀第４四半紀頃、②を５世紀第１四半紀頃、③を５世紀第２～３四半紀頃としておく。

平原ＳＸ222の内容と編年的位置について述べたが、県内における石製模造品を出土した遺跡のうち、比較的内容のわかる３遺跡の例をみてみよう。

本遺跡と指呼の距離にある基山町伊勢山遺跡では、第１区２号住居址と第３区１号住居址を中心に祭祀遺物が出土している。第１区２号住居址からは、土師器高杯・杯・椀・壺・「坩」・甕・甑、「須恵器」杯、手捏土器「坩」26・器台27、土製丸玉６、滑石製模造品双孔円板１・単孔円板６・長方形板２・臼玉2,000、ガラス小玉１、鉄鏃２、土錘１、砥石１が出土している。また第３区１号住居址からは土師器高杯・杯・椀・壺・「坩」・甕・甑、「須恵器」甕、手捏土器「坩」17、滑石製双孔円板１・単孔円板３・勾玉２・臼玉４、鉄鏃１、鉄滓１、土製紡錘車１、砥石１が出土している。竪穴建物の床面に10cm程の黒色土の堆積があり、その上から祭祀遺物が出土したことから竪穴建物の廃絶後に祭場として利用されたものと報告されている。確かに

１棟の建物に伴う祭祀とするには多すぎる量である。第３区１号住居址は陶邑ＴＫ73型式並行期と考えられる。報告者は祭祀の対象として基山を挙げつつも、結論は保留している。

玄界灘沿岸部の唐津市中原遺跡[34]では、円墳とみられる５号墳の周溝北西隅で2.2×5.6mの範囲に土器や玉類・鉄器の集中する祭祀遺構が確認されている。出土遺物は、須恵器甕３・瓶１・有蓋高杯５・高杯蓋８、直口壺１、土師器壺１・椀１、滑石製単孔円板１・臼玉356、ガラス小玉11・琥珀丸玉・棗玉６、鉄鎌２、鉄摘鎌１、鉄刀子１、鉄鉋１、雛型鉄鎌１、石突状鉄器３、その他の鉄製品がある。またやや離れて須恵器高杯蓋１、土師器椀２が出土している。玉類と鉄器は中央部に集中し、甕に入れられていたものが散乱した状態と報告されている。また礫が散見されるが、これが葬石等の古墳外護施設のものなのか、祭祀遺構に伴うものなのかは明らかでない。主体部が検出されていないため、やや不安を残すが、古墳に伴う祭祀遺構として良いだろう。時期は須恵器から、陶邑ＴＫ23型式並行とみられる。

佐賀平野西部の三日月町石木遺跡[35]では、ＳＸ006流路から祭具とみられる遺物がまとまって出土している。個体数は不明であるが、土師器椀・鉢・蓋杯・杯蓋・小型広口壺・甕・支脚、須恵器蓋杯・杯蓋・高杯・瓶・短頸壺、滑石製双孔円板・子持勾玉、土製模造品（勾玉・鏡）、手捏土器（壺・器台・皮袋形）、木製品（舟形・鞍・竪杵・横槌・靴・鋤等）がある。遺物は流路に設けられた堰状遺構の部分から出土しているが、土器からみてかなりの時間幅がある。須恵器でいえば陶邑ＴＫ23型式からＴＫ209型式並行とみられ、他の遺物群もこの時間幅の中で考慮しなければならない。滑石製有孔円板と子持勾玉・土製模造品とはおそらく時期差があろう。祭祀行為の対象が何であるかは不明だが、出土状況から水に関わる祭祀と考えられる。

３遺跡の例を通覧してみたが、平原ＳＸ222と比較した場合どうであろうか。時期的には平原ＳＸ222と伊勢山第３区１号住居址がほぼ同時期で、中原５号墳北西隅祭祀遺構がやや後出し、石木ＳＸ006はこれと同時期からそれ以降に及ぶ。滑石製模造品ではいずれの場合も共通するのは有孔円板で、これに臼玉が加わるのが基本的な組み合わせであろう。子持勾玉や土製模造品は滑石製模造品の盛行期より後出的と考えられる。立地や祭祀の在り方で言えば、中原例が古墳に伴う祭祀、伊勢山例が集落内祭祀、石木例と平原例が集落外縁部の祭祀と言えようか。

滑石製模造品は、東北南部から九州北部にかけて疎密はあるものの全国的に分布しており、しかも地域的な変異の少ないことが指摘されている[36]。これらは畿内政権の強い影響下にその祭式が広がったものと理解されており、畿内を中心とした波紋の広がりというような単純な図式ではないが、九州においては北部の極めて限られた地域に集中し、特に筑後川以南にはほとんど及んでおらず[37]、およそ６世紀以降の土製模造品や子持勾玉の分布が九州南部にまで及んでいることと対照して、その背景が興味深いところである。

最後に、ＳＸ222における祭祀の対象が何であったかについて触れておく。再三繰り返してきたように、弥生時代以降の平原遺跡２区において集落や墓地が形成された痕跡はなく、墳墓に

伴う祭祀や集落内祭祀ではないことは明らかである。自然流路の脇にあたることからすれば水との関わりが考慮されるが、水源地や湖沼に位置するのではない。可能性の域を出ないが、この地が柚比地区においてもっとも水田に相応しい立地であることからすると、水田経営に伴う祭祀行為ではなかったかと思われる。今一つ、祭祀対象の候補として挙げられるのは、伊勢山遺跡のほぼ真東5.5km程、平原遺跡２区からは東北東7.5km程の位置に、独立丘として望見される標高130.6mの城山（花立山）である。さほど高い山ではないが朝倉平野の中で一際目立つ整美な山容を見せており、山麓からいささか遠すぎるのが難ではあるが神奈備型の神体山として信仰の対象となったことは充分に考えられる。もっとも、この時期、城山山麓には朝倉系初期須恵器窯の一つである山隈窯跡群が操業しており、霊山として崇める地にこうした生産遺跡が立地しうるのかという疑念がある。ここでは、水田に関わる利水・治水、あるいは雨乞いを目的とした祭祀と推論しておこう。

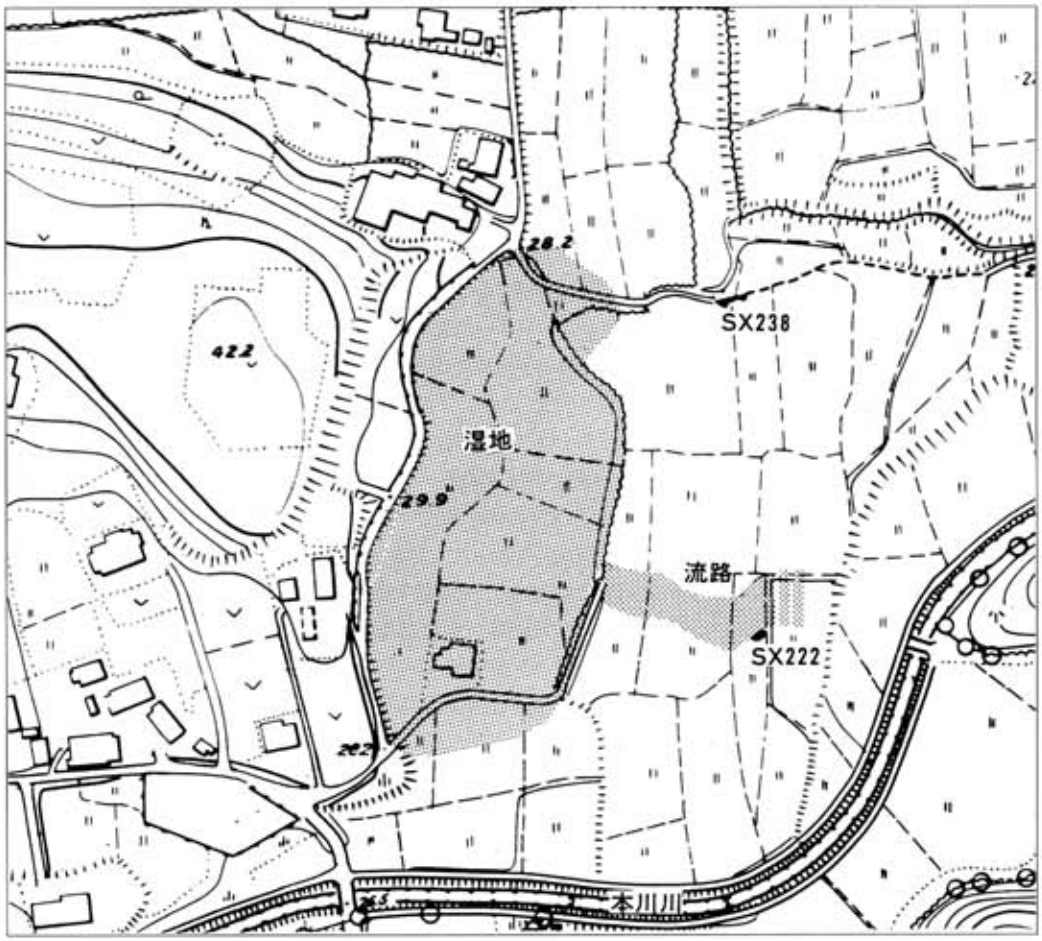


図95　流路・湿地とSX222の位置（1：2,500）

註

1）徳永 貞紹　1989　「九州の縄文時代集石遺構－研究の現状と課題－」『肥後考古』第７号　pp.60～82　肥後考古学会

2）長崎市教育委員会　1984　『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』

3）熊本県教育委員会　1988　『竜田陳内遺跡』熊本県文化財調査報告第98集

4）宮崎県教育委員会　1991　『天神河内第１遺跡』

　ここではＫ－Ａｈ上位で轟Ｂ式～春日式の前期～中期の土器群が出土しているが、その中でも下部で小型の集石が、石囲炉と呼んでよい配石遺構が上部で検出されており、時間差を示すものと指摘されている。

5）田野町教育委員会　1990　『丸野第２遺跡』田野町文化財調査報告書第11集

6）八木澤 一郎　1992　「鹿児島県下の縄文期集石Ｉ」「南九州縄文通信」Ｎｏ．６　pp.63～72　南九州縄文研究会

　中期～後期の例として挙げられたものを報文にあたると、宮之迫遺跡例は定形的な石囲炉とすべきもの、成川例は遺構としての纏まりが確認できず、榎木原例は晩期の所産ではないとの見解が示されている。中岳洞穴例は報文が手元にないため確認できなかったが、焼礫集積遺構、特に集石炉との関わりで言えば、現時点においては必ずしも八木澤の指摘は当たらない。無論、丸野第２遺跡の例から後期中葉までは集石炉が存続することが解るので、今後、後期後半以降の確実な例が検出される可能性は皆無ではないが、今のところ筆者は否定的に考えている。

7）平原遺跡２区の場合、河川に臨む立地を採るが石鏃はさほど多くなく、むしろ石鏃の数と種類の豊富さが目立つ。状況証拠が充分でなく推定というより憶測に近いが、水辺に集う鳥獣を狩るための一時的な居住地であろうと思われる。ただ、それが季節的な移動を伴うほどのものなのか、あるいは定住地から短期的に出向く狩猟基地なのかは定かでない。

8）寺師 見国　1943　『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』　鹿児島県肇国聖蹟調査会

9）河口 貞徳・河野 治雄　1955　「鹿児島市春日町遺蹟発掘調査報告」『鹿児島県考古学会紀要』第４号　pp.22～32　鹿児島県考古学会

10）池水 寛治　「鹿児島県出水郡江内貝塚」『日本考古学年報』14（昭和36年度）　pp.115～116　日本考古学協会

11）前川 威洋　1969　「九州における縄文中期研究の現状」『古代文化』第21巻第３・４号　pp.55～62　（財）古代学協会

12）田中 良之　1979　「中期・阿高式系土器の研究」「古文化談叢」第６集　pp.１～52　九州古文化研究会

13）水ノ江 和同　1990　「西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡』　pp.449～471　同士社大学考古学研究室

14）鹿児島県教育委員会　1981　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

　ここでも同一層から並木式や阿高式が出土しており、平原遺跡での所見に近い。

15）鹿児島県教育委員会　1983　『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

　同一層から春日式・並木式・阿高式等が出土している。

16）大口市教育委員会　1987　『島巡遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（６）

　同一層から並木式・阿高式等が出土している。

17）鹿児島県教育委員会　1981　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ　加治屋園遺跡・木の迫遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

　同一層から並木式が出土している。

18）大根占町教育委員会　1988　『出口遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）

19）菱刈町教育委員会　1990　『野中遺跡・松美堂遺跡』菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）

同一層から船元式・春日式・並木式・阿高式等が出土している。

20) 東 和幸　1989　「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』第23号　pp.38～45　鹿児島県考古学会

21) 茂山 護　1957　「串間市大平出土の縄文式土器」『九州考古学』1　pp.1～2　九州考古学会

22) 志布志町教育委員会　1985　『倉園A遺跡・土光遺跡・風穴遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

23) 東 和幸　1991　「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』No.5　pp.35～46　南九州縄文研究会

24)

高尾野町教育委員会　1992　『江内貝塚』高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

及び註10文献

25) 主に以下の論功を参照した。

①佐々木 隆彦　1980　「結語」『今光遺跡・地余遺跡』　pp.64～69　東急不動産株式会社

②佐々木 隆彦　1984　「松木遺跡群出土土器の展開」『松木遺跡Ⅰ』那珂川町文化財調査報告書第11集　pp.182～186

③柳沢 一男　1989　「北部九州土器編年の概要」『第25回埋蔵文化財研究集会　古墳時代前半期の古墳出土土器の検討　発表要旨』　埋蔵文化財研究会

④井上 裕弘　1991　「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』pp.315～372　児島隆人先生喜寿記念事業会

⑤柳田 康雄　1991　「九州」『古墳時代の研究　第6巻　土師器と須恵器』　雄山閣

なお、①今光編年と②松木編年の対応関係については、佐々木自身の記述によれば、今光Ⅳ期＝松木Ⅳ期の古段階（松木37号住居跡）→今光Ⅴ期（今光溝2）＝松木Ⅳ期の新段階（御床松原15号住居跡）→今光Ⅵ期の一部＝松木Ⅴ期＝赤井手43号住居跡、と理解できる。したがって今光・松木編年を一括して今光Ⅴ期＝松木Ⅴ期とするのはあくまでも引用者の意見であり、筆者はこうした立場をとらない。

26) 那珂川町教育委員会　1984　『松木遺跡Ⅰ』那珂川町文化財調査報告書第11集

27) 志摩町教育委員会　1983　『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集

28) 春日市教育委員会　1980　『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第6集

29) 福岡県教育委員会　1985　『塚堂遺跡Ⅳ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集

30) 佐賀県教育委員会　1970　『基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡』

31) 池の上遺跡の編年は柳田 康雄の修正案による（柳田 康雄　1982　「池の上墳墓群と陶質土器」『甘木市史』上巻　pp.294～300　甘木市史編纂委員会）。

32) 蒲原 宏行・多々良 友博・藤井 伸幸　1985　「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」『古文化談叢』第15集　pp.9～38　九州古文化研究会

33) 甘木市教育委員会　1979　『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書第5集

34) 唐津市教育委員会　1987　『中原遺跡』唐津市文化財調査報告第18集

35) 佐賀県教育委員会　1976　『石木遺跡』佐賀県文化財調査報告書第35集

36) 椙山 林継　1965　「古代祭祀遺跡の分布私考」『上代文化』第35輯　pp.53～68　国学院大学考古学会

37) 赤崎 敏男　1982　「九州の石製模造品」『古文化論集』下巻　pp.1149～1180　森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

滑石製模造品が中部九州以南に皆無という訳ではなく、最近も熊本平野で双孔円板の出土例があるが（熊本市教育委員会　1992　『上高橋高田遺跡　第1次調査区発掘調査概報Ⅰ』）、やはり筑後川辺りを境として極めて希薄となる傾向は支持できる。

付編　平原遺跡の古環境変遷

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平原遺跡の北西側には、脊振山系の中で東端に位置する九千部山がある。この九千部山から派生する高位段丘には、いくつもの小さい河川により開析された浅く狭長な谷が存在する。本遺跡は、谷を開析する小河川が平野部へと連なる丘陵地から丘陵下に広がる本川川左岸の低地にかけて位置する（図１）。丘陵地は平原遺跡１区・３区とされ、弥生時代中期～後期および古墳時代中期～後期の集落が検出されている。今回は低地の発掘調査が行われ、平原遺跡２区とされた。本調査区では、縄文時代中期から古墳時代中期にわたる遺構・遺物が検出されている。

発掘調査時において、本遺跡周辺地域の古環境変遷と稲作の消長・様態に関する検討を目的とした自然科学分析調査の必要性があるとされ、当社では佐賀県教育委員会と協議の結果、上記分析調査目的を考慮して、珪藻分析・花粉分析・イネ属同定・植物珪酸体分析の各分析調査を行うこととした。さらに縄文時代中期とされる集石の構築年代を確認するために、放射性炭素年代測定を行うとともに、集石の燃料材とされる炭化材の樹種を知るために材同定を行うこととした。

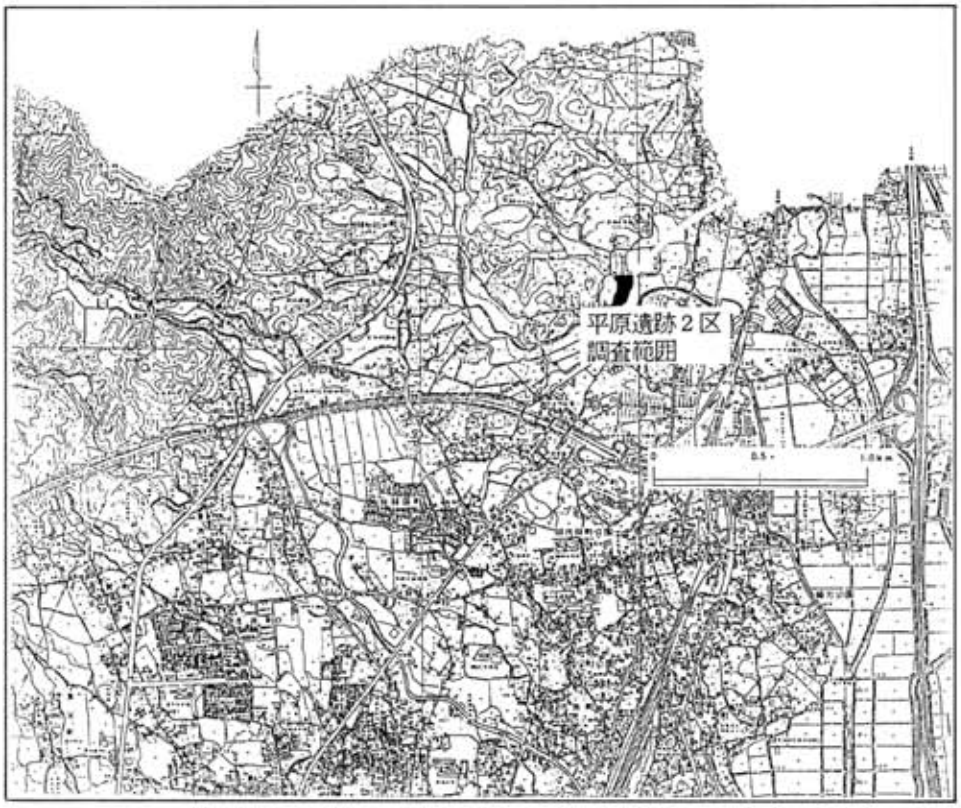
各分析調査項目の分析点数は、珪藻分析が22点、花粉分析が19点、植物珪酸体分析が19点、放射性炭素年代測定が２点、材同定が１点である。

１．平原遺跡２区の層序と試料

発掘調査区は、本川川の氾濫により形成された自然堤防と後背湿地が分布する。当社では、後背湿地である３箇所（第１地点～第３地点）の地点から土壌試料を採取した。また、自然堤防上である４箇所（第４地点～第７地点）の地点から佐賀県教育委員会により土壌試料が採取された。第１地点～第３地点は、下部から灰色砂～礫、灰色シルト～粘土、黒～褐色泥炭、暗灰色粘土となる。第４地点は全体的に砂を主体とした堆積物からなるが、最下部で腐植が混入し、上部でシルトが混じる。第５地点～第７地点は、下部から灰色砂～礫、その上位には部分的に砂層を挟む灰色粘土～シルトが堆積する。

試料は、各地点より３～５cmの厚さで連続的に採取した。採取試料から縄文時代中期～古墳時代中期の堆積物を中心にして各分析に供する試料を選択した。図２～４に試料採取地点の土層断面図を示し、図５に試料採取層位および分析位置を示す。

なお、発掘調査所見では第１地点～第３地点の土層断面では、８層が縄文時代晩期遺物包含層とされ、４層・５層が古墳時代中期の遺物包含層とされている。第４地点では３層が縄文時代中期の遺物包含層、２層が縄文時代晩期の遺物包含層とされている。第５地点～第７地点では土層断面の７層が縄文時代晩期の遺物包含層とされている。



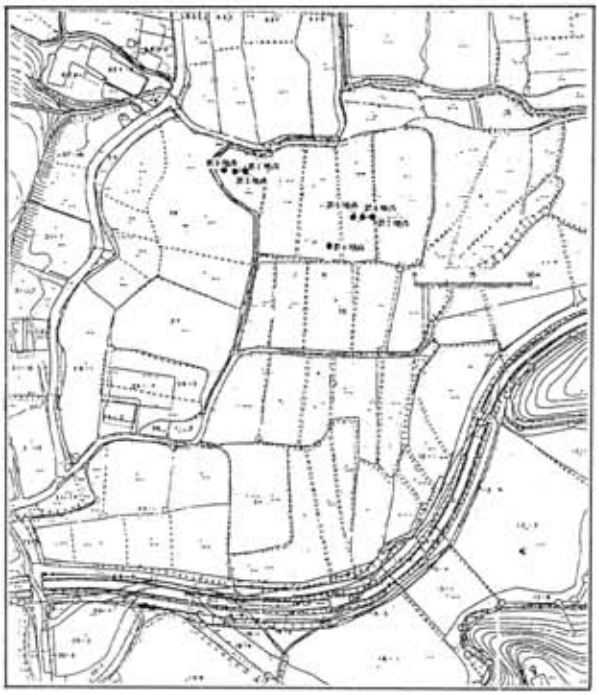


図１．遺跡の位置および試料採取地点

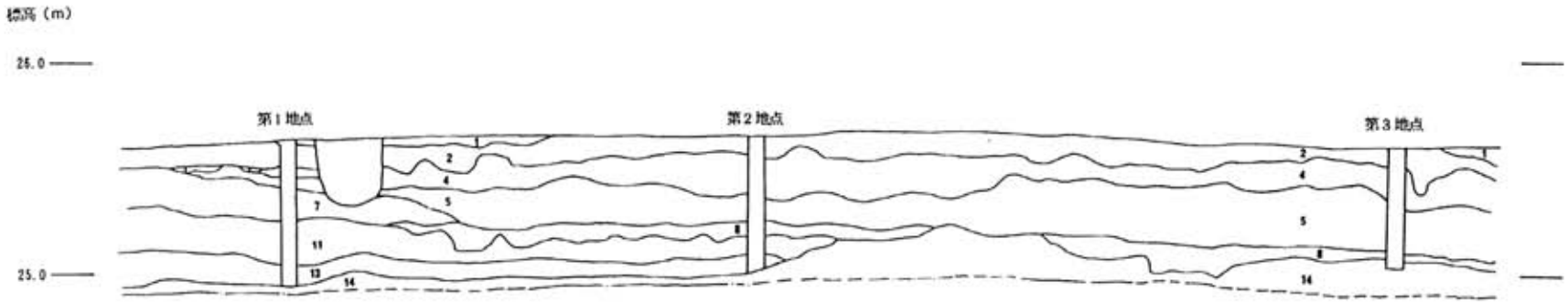


図2．第1地点～第3地点の土層断面

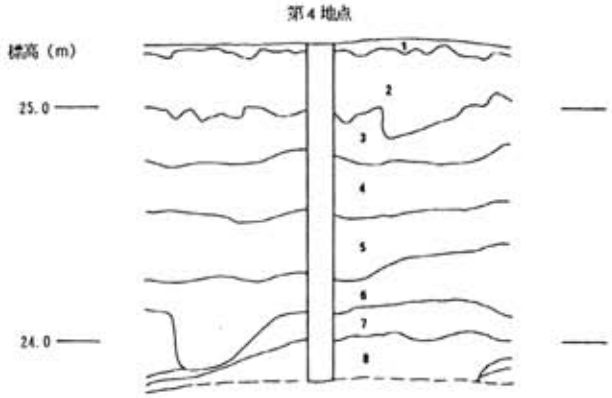


図3．第4地点の土層断面

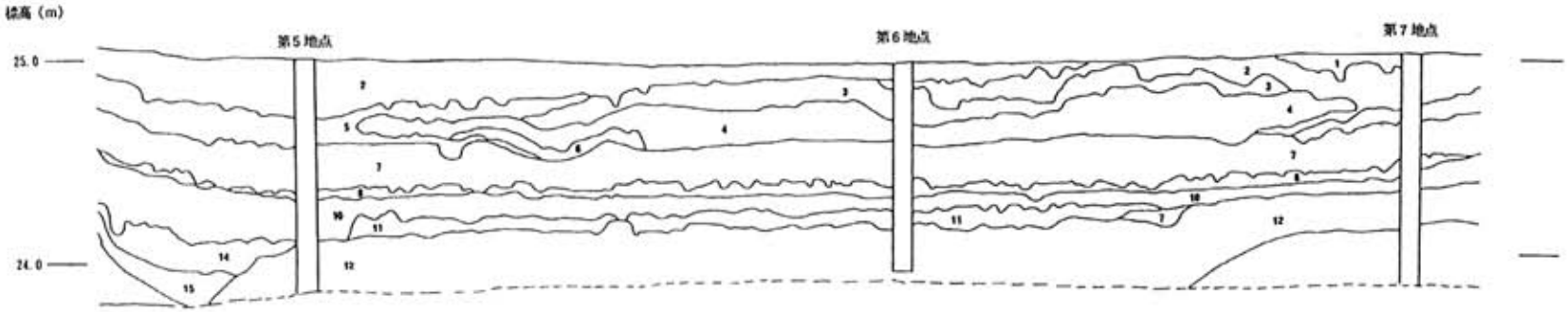


図4．第5地点～第7地点の土層断面

2．分析方法と結果の表示法

（1）珪藻分析

試料を湿重で約7g秤量し、過酸化水素水（H_2O_2）、塩酸（HCl）処理の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（なお、珪藻殻数の少ない試料はこの限りでない）。この際、珪藻殻の破損のない完形殻と破損のある非完形殻とを区別して計数し、珪藻殻の保存度（完形殻数／総数×100）を求めて考察の際に考慮した。種の同定は、K.Krammer & Lange-Bertalot（1986・1988・1991）などを用いる。なお、珪藻の生態性の解説を表1に示す。堆積環境の推定に当たっては、安藤（1990）の環境指標種群を用いる。

各試料から産出した珪藻化石は、産出個体数で現して一覧表として表示する。また、産出率2.0%以上を示す主な珪藻化石については、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の●は1％未満の出現率を、○は100個以下の試料における産出した種類を示す。

（2）花粉分析およびイネ属同定

湿重約10gの試料についてHF処理、重液分離（$ZnBr_2$:比重2.2）、アセトリシス処理、KOH処理の順に物理・化学的な処理を施して、花粉・胞子化石を試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。また、検出されるイネ科花粉化石については、ノマルスキー微分干渉装置を使用して表面微細構造を観察し、発芽孔周辺の肥厚状況・花粉粒径を考慮しながら、栽培植物とされるイネ属と他のイネ科に区分する。

結果は同定・計数結果の一覧表と主要花粉化石群集の層位的変化として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出している。図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、図中の●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料から検出された種類を示す。また、イネ属同定結果は、鈴木・中村（1977）にしたがい、イネ科花粉の中でイネ属の占める割合であるイネ属比率（%）として示す。

（3）植物珪酸体分析

試料約5gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下で、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸

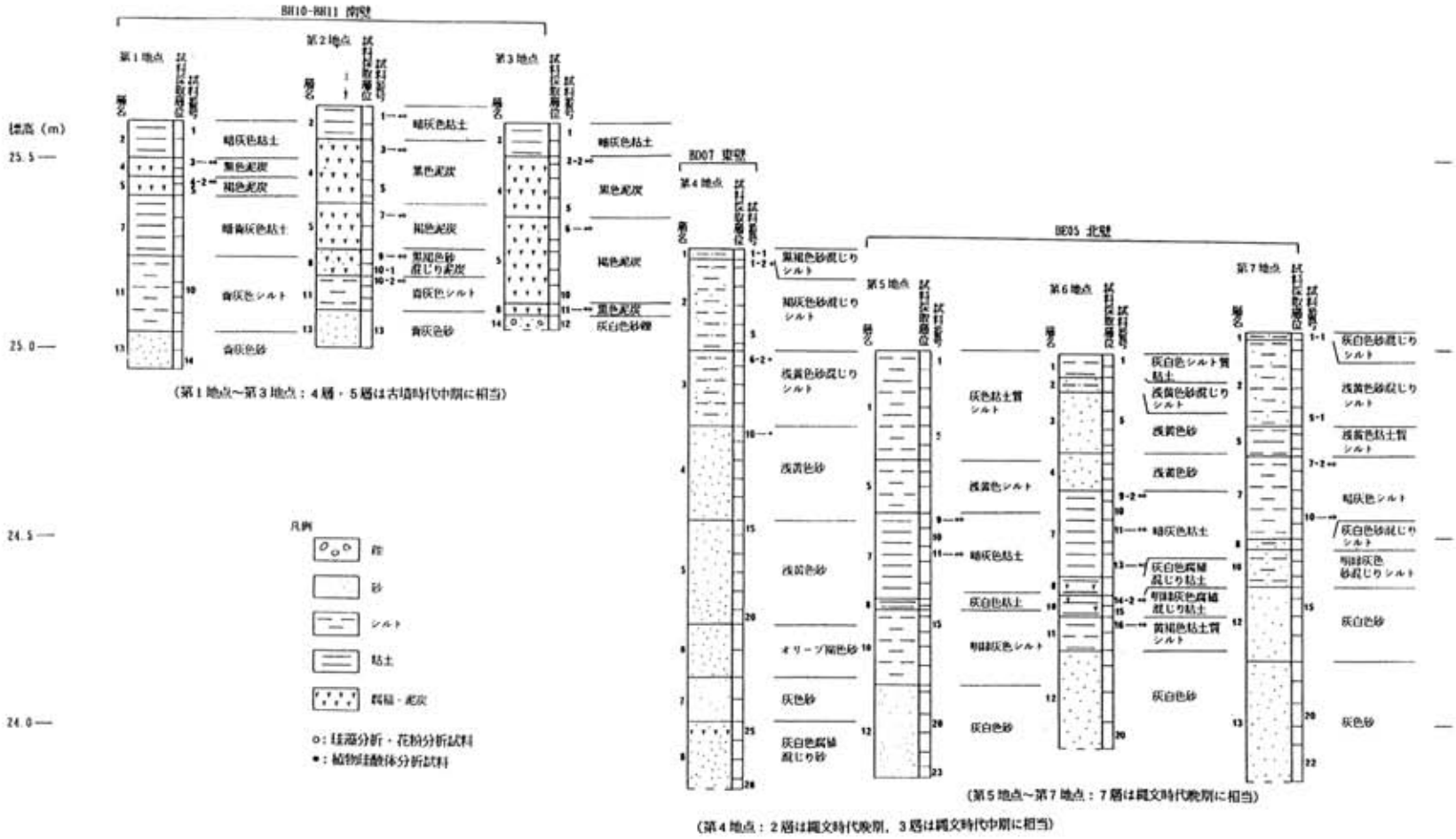


図５．試料採取層位および分析位置

体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類（Taxa）の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

表１．珪藻化石の生態性

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性		生育環境（例）
海水生種：強塩生種(Polyhalobous)		塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの		低緯度熱帯海域、塩水湖など
海水生種：真塩生種(Euhalobous)		海産生種、塩分濃度40.0～30.0パーミルに出現するもの		一般海域(ex大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種：中塩生種 (Mesohalobous)		汽水生種、塩分濃度30.0～0.5パーミルに出現するもの	強中塩生種(α-Mesohalobous) 弱中塩生種(β-Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種：貧塩生種 (Oligohalobous)		淡水生種：塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの		一般陸水域 (ex湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉)
塩分・ＰＨ・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性		
塩分に対する適応性	貧塩－好塩性種(Halophilous)	小量の塩分がある方がよく生育するもの		高塩類域(塩水湖上域・温泉・耕作土壌)
	貧塩－不定性種(Indifferent)	小量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの		一般陸水域(湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)
	貧塩－嫌塩性種(Halophobous)	小量の塩分にも耐えることができないもの		湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種(Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの		一般淡水～汽水域
ＰＨに対する適応性	真酸性種(Acidobionutic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・火口湖(酸性水域)
	好酸性種(Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・沼沢地
	pH-不定性種(Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの		一般陸水(ex湖沼・池沼・河川)
	好アルカリ性種(Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの		
	真アルカリ性種(Alkalibiontic)	特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く出現するもの		アルカリ性水域(少ない)
流水に対する適応性	真止水性種(Limnobiontic)	止水にのみ出現するもの		流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種(Limnophilous)	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの		湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種(Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの		河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種(Rheophilous)	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの		河川・川・小川・上流域
	真流水性種(Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの		河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸性珪藻	好気性種(Aerophilous)	好気的環境(Aerialhabitats) 水域以外の常に大気に晒された特殊な環境に生息する珪藻の一群で多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中やコケの表面に生息可能　特に、土壌中に生育する陸性珪藻を土壌珪藻という		・土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 ・洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着

注　塩分に対する区分は、Lowe（1974）、pHと流水に対する区分は、Hustedt（1937-38）による。

３．化石の産状

（１）珪藻化石

分析結果を表２・３、図６に示す。珪藻化石が比較的良好に産出した地点は、第１地点～第３地点であり、第４地点～第７地点からはほとんど産出しない。各地点の産出分類群の合計は、20属119分類群（85種・25変種・１品種・属まで判明したもの８種類）である。珪藻化石が産出した試料の完形殻の出現率は、55％～80％と高率である。次に各地点ごとに産出種の特徴を述べる。

・第１地点

試料番号３・4-2の２試料とも珪藻化石群集は酷似しており、湖沼沼沢湿地指標種群（N）の標

表2．第1地点～第3地点の珪藻分析結果

Species Name	Ecology			第1地点		第2地点					第3地点		
	H.R.	pH	C.R.	3	4-2	1	3	7	9	10-2	2-2	6	11
[K]*Achnanthes Lanceolata* (Breb.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14
Amphora ovalis Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Amphora ovalis var. *affinis* (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	3	10	9	3	2	8	-	5	2	14
[N]*Aulacosira ambigua* (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	126	104	16	135	8	1	-	138	45	3
[N]*Aulacosira distans* (Ehr.)Simonsen	Ogh-hob	al-il	l-bi	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
[M]*Aulacosira granulata* (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Aulacosira italica var. *valida*(Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	5	4	-	3	1	-	-	5	-	-
[・B]*Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2
Caloneis silecula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-
Cocconeis discubus Schumann	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
##*Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
##*Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
##[O]*Cymbella aspera* (Ehr.)Ccleve	Ogh-ind	al-il	ind	2	1	-	-	1	-	-	1	-	-
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	3	-	-	2	1	-	-	1	-	1
Cymbella helvetica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella heteropleura var. *minor* Cleve	Ogh-hob	al-il	l-ph	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-
[O]*Cymbella naviculiformis* Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1
##*Cymbella silesiaca* Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	3	2	-	1	-	-	-	2	-	-
[O]*Cymbella subaequalis* Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	13	11	1	15	-	-	-	16	6	2
##*Cymbella tumida* (Breb.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	2	-	-	-	2	2
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	1	-	1	1	-	-	-	1
Diploneis finnica (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1
Diploneis ovalis(Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2	7
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	2	-	4	7	1	6	-	3	2	5
[・]*Diploneis yatukaensis* Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	3	-	2	-	-	-	-	-
Eunotia arcus Ehuenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[O]*Eunotia flexuosa* (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Eunotia lunaris var. *subarcuata*(Naeg.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
[O]*Eunotia monodon* Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
[O]*Eunotia monodon* var. *tropica* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[O]*Eunotia pectinalis* (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
[O]*Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	1	-	2	-	-	-	16
[O]*Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
[・B][O]*Eunotia praerupta* Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria bicapitata A.Mayer	Ogh-hob	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-	3	-	-	-	1	2	1
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	1	-	1	-	-	-	4	2	-
#*Fragilaria construens* var. *venter* (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	13	12	1	10	-	-	-	4	2	1
Fragilaria cf. *oldenburgiana* Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
#*Fragilaria pinnata* Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria virescens var. *exigua* Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria virescens var. *elliptica* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[O]*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	2	-	1	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema augustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	2	-	-	1	1	-	-	-	-	3
Gomphonema augur Ehuenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema augur var. turris (Ehr.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
[O]*Gomphonema gracile* Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	-	1	-	2	1	1	-	-	2	13
Gomphonema grovei var. *lingulatum* (Hust.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema olivaceum var. *calcarea* Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	1	-	8
Gomphonema pumilum Reichjrdt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
##*Gomphonema sphacrophorum* Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-bi	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
[・A]*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	1	1	-	-	-	3
Hantzschia amphioxys var. *vivax* (Hantz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
[・A]*Melosira roeseana* Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[K]*Melosira varians* Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula bacillum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
#[・B]*Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
#*Navicula cuspidata* Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
#*Navicula cuspidata* var. *ambigua* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-bi	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elginensis var. *cuneata* H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	2	4	-	-	-	2
Navicula elginensis var. *neglecta* (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula laevissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
#[・A]*Navicula mutica* Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	2	-	1	-	-	-	-	2	1	2
#*Navicula pupula* Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula rhychocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
[・]*Navicula schoenfeldii* Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
[・]*Navicula tokyoensis* H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[K]*Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[・A]*Neidium alpinum* Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	1	1	1	1	-	-	-	-	1	4
Neidium dubium (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
[O]*Neidium iridis* (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	al-il	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia linearis W.Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-

表2のつづき

Species Name	Ecology			第1地点		第2地点					第3地点		
	H.R.	pH	C.R.	3	4-2	1	3	7	9	10-2	2-2	6	11
Nitzschia obtusa var. *scalpelliformis* Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia sinuata var. *delognei* (Grun.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[・] *Nitzschia terrestris* (Pet.) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
[O] *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata var. *sumatrana* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	1	2	-
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
[O] *Pinnularia gibba* Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	1	-	1	-	-	-	-	1	1
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
#*Pinnularia interrupta* W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia macilenta (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	4	-	2	-	-	-	-	1	-
Pinnularia maior Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ac-il	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
#*Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
[O] *Pinnularia nodosa* Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
[・] *Pinnularia schroederi* (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	3	-	-	-	1	-	1	2	1
Pinnularia streptoraphe Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
[・B] *Pinnularia subcapitata* Gregory	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
[O] *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	6	3	-	3	1	1	-	2	4	5
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	2	3	3	-	2	1	-	-	3	1
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	3	3	2	3	-	-	-	2	2	3
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
[O] *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1
[O] *Stauroneis phoenicenteron* fo. *gracilis* (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
[O] *Stauroneis phoenicenteron* var. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	1	1	-	3	1	-	-	2	-	1
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Synedra rumpens var. *fragilarioides* Grunow	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	-	-	1	-	-	-	4	1
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				207	175	54	210	35	29	0	201	101	199
Total Number of Diatoms				207	175	54	210	35	29	0	201	101	199

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性　pH：水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性

Ogh-hil：貧塩好塩性種
Ogh-ind：貧塩不定性種
Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk：貧塩不明種

al-bi：真アルカリ性種
al-il：好アルカリ性種
ind：pH不定性種
ac-il：好酸性種
ac-bi：真酸性種
unk：pH不明種

l-bi：真止水性種
l-ph：好止水性種
ind：流水不定性種
r-ph：好流水性種
r-bi：真流水性種
unk：流水不明種

環境指標群

［K］：中～下流性河川指標種，［M］：湖沼浮遊性種，［N］：湖沼沼沢湿地指標種，［O］：沼沢湿地付着生種，（以上は、安藤、1990による）、#：好汚濁性種，##:好清水性種（以上は、渡辺ほか、1986による），［・］：陸生珪藻（［・A］：A群，［・B］：B群、伊藤・堀内、1991による）

表3．第5地点～第7地点の珪藻分析結果

Species Name	Ecology			第5地点		第6地点					第7地点	
	H.R.	pH	C.R.	9	11	9-2	11	13	14-2	16	7-2	10
[・B] [O] *Eunotia praerupta* Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	1	-	-	-
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				1	0	0	2	0	1	0	0	0
Total Number of Diatoms				1	0	0	2	0	1	0	0	0

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性　pH：水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性

Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk：貧塩不明種

ac-il：好酸性種
unk：pH不明種

ind：流水不定性種
unk：流水不明種

環境指標種群

［O］：沼沢湿地付着生種，（以上は、安藤、1990による），#：好汚濁性種，##：好清水性種（以上は、渡辺ほか、1986による），［・］：陸生珪藻（［・A］：A群，［・B］：B群、伊藤、堀内、1991による）

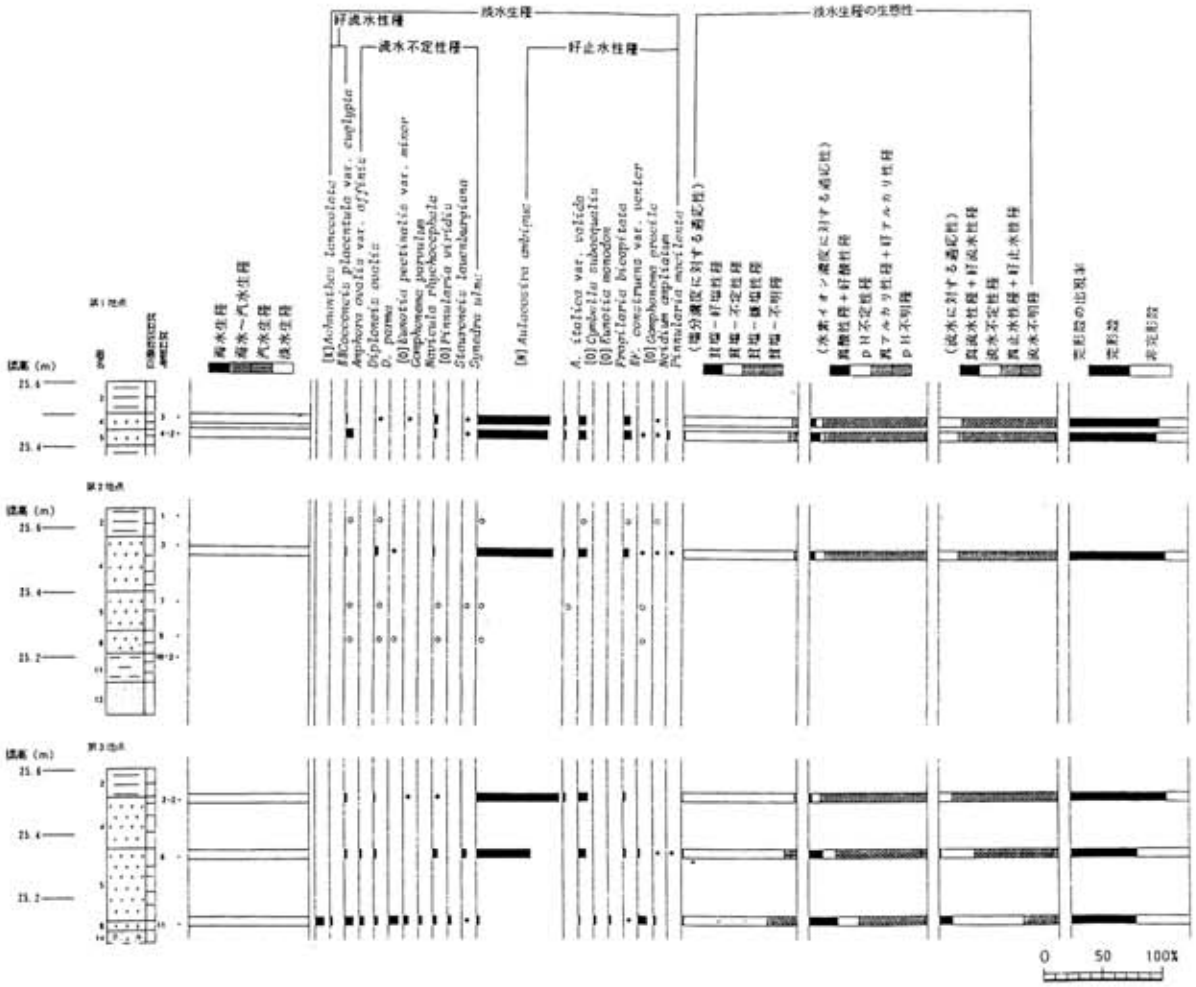


図6．第1地点～第3地点の主要珪藻化石の層位的変化

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出した。なお、●は1％未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。

環境指標種　[K]:中～下流性河川指標種 [N]:湖沼沼沢湿地指標種 [O]:沼沢湿地付着生種（以上、安藤，1990による）

#:好汚濁性種　　##:好止水性種　（以上、渡辺ほか，1986による）

徴種（安藤，1990）の *Aulacosira ambigua* が優占する。これに付随して沼沢湿地付着生種群（O）の主要構成種（安藤，1990）の *Cymbella subaequalis*、*Pinnularia viridis*、好止水性種の *Fra-gilaria construens* var. *venter*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis* を伴う。

・第２地点

珪藻化石が良好に産出したのは試料番号３であり、他の４試料（試料番号1・7・9・10-2）では54個体以下と少ない。また、珪藻化石群集は第１地点と近似しており、湖沼沼沢湿地指標種群（N）の標徴種の*Aulacosira ambigua* が優占する。これに付随して沼沢湿地付着生種群（O）の主要構成種の *Cymbella subaequalis*、好止水性種の *Fragilaria construens* var. *venter* を伴う。

・第３地点

珪藻化石群集は、試料番号11と試料番号６・2-2で大きく異なる。試料番号11は中～下流性河川指標種群（K）の主要構成種（安藤，1990）の *Achnanthes lanceolata*、沼沢湿地付着生種（O）の主要構成種の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema gracile*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis* などが多産する。これに対して、試料番号６・2-2は、第１地点・第２地点の珪藻化石の産状と近似しており、湖沼沼沢湿地指標種群（N）の標徴種の *Aulacosira ambigua* が優占し、沼沢湿地付着生種群（O）の主要構成種の *Cymbella subaequalis*、好止水性種の *Fragilaria construens* var. *venter* などを伴う。

・第４地点

全試料とも珪藻化石は全く検出されない。

・第５地点～第７地点

これらの地点では珪藻化石はほとんど産出しないか、産出しても壊れているものが大部分である。

（２）花粉化石

結果は、表４・５、図７・８に示す。花粉化石は、第１地点～第３地点では比較的良好に出現するが、第５地点～第７地点では保存状態が悪い。しかも第５地点の試料番号９、第６地点の試料番号9-2、第７地点の試料番号7-2・10の４試料では花粉化石の検出個体数も少ない。花粉化石群集は、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属（大半は、シイノキ属に同定される）が多産する。一方、草本花粉は各地点の下位ではほとんど検出されないが、上位に向かってイネ科が増加する。次に各地点ごとに結果を述べる。

・第１地点

各試料の花粉化石群集は大きく変化せず、コナラ属アカガシ亜属が多産し、次いでクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が出現する。この他、マツ属・コナラ属コナラ亜属・ウルシ属・ツツジ科を随伴する。草本花粉は、イネ科が上位に向かって増加傾向する。栽培植物とされるイネ属は、試料番号３で検出される。

表4．第1地点～第3地点の花粉分析結果

種　類 (Taxa)	試料番号	第1地点 3	第1地点 4-2	第2地点 1	第2地点 3	第2地点 7	第2地点 9	第2地点 10-2	第3地点 2-2	第3地点 6	第3地点 11
木　本　花　粉											
マキ属		-	2	1	2	2	2	1	2	-	2
モミ属		3	2	2	1	1	1	-	2	-	1
ツガ属		3	-	4	-	1	-	-	2	-	1
マツ属複維管束亜属		7	-	12	10	-	-	1	9	1	1
マツ属（不明）		9	3	11	5	2	-	-	6	-	2
スギ属		11	2	4	7	2	3	2	5	-	1
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		1	-	2	-	1	1	-	1	-	1
ヤマモモ属		1	2	3	-	-	-	3	3	2	-
サワグルミ属		-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属		4	1	4	5	-	2	1	4	1	1
ハンノキ属		1	1	1	2	1	-	2	1	-	-
コナラ属コナラ亜属		11	15	14	16	10	8	3	18	3	6
コナラ属アカガシ亜属		142	155	142	145	167	138	55	133	148	155
クリ属－シイノキ属－マテバシイ属		66	77	49	70	53	64	190	92	52	45
ニレ属－ケヤキ属		2	1	3	-	2	-	2	2	2	2
エノキ属－ムクノキ属		1	-	-	-	1	-	-	1	5	2
ヤドリギ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
シキミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カラスザンショウ属		-	1	1	-	-	1	-	-	-	-
キハダ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2	4
アカメガシワ属		-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
ウルシ属		1	8	1	2	1	-	-	1	-	-
モチノキ属		2	3	7	6	1	1	-	28	4	-
ニシキギ属		-	-	-	2	-	-	-	1	-	-
クロウメモドキ科		-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ツタ属		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属		-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
ウコギ科		2	-	-	-	1	1	1	-	-	1
ツツジ科		5	7	8	6	1	2	1	2	3	1
イボタノキ属		-	1	-	-	1	1	-	1	-	-
テイカカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ガマズミ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
スイカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
草　本　花　粉											
ガマ属		2	-	2	2	-	-	-	1	-	-
ヒルムシロ属近似種		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
オモダカ属		1	-	-	-	-	-	-	1	-	1
ミズオオバコ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イネ科		84	10	134	82	7	4	2	91	6	14
カヤツリグサ科		24	3	43	29	1	2	1	46	3	1
ホシクサ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属		1	-	1	2	1	-	-	2	-	1
ツユクサ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
クワ科		1	2	2	4	-	1	-	-	-	3
ギシギシ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節		3	1	2	3	1	-	-	2	-	1
アカザ科		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ科		2	-	-	-	-	1	-	-	1	-
アブラナ科		1	-	-	-	-	1	-	2	-	-
バラ科		3	1	1	2	5	1	-	1	1	1
マメ科		-	1	1	-	-	1	-	1	1	-
トウダイグサ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツリフネソウ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
ミソハギ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キカシグサ属		1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アリノトウグサ属		-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
セリ科		-	1	6	2	-	-	-	1	-	-
シソ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オギノツメ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ゴキズル属		1	-	-	-	-	-	-	3	-	1
ヨモギ属		15	4	30	9	2	5	1	15	2	2
オナモミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
他のキク亜科		4	-	8	-	-	-	-	1	-	-
タンポポ亜科		-	-	3	-	-	-	-	1	-	-
不明花粉		34	50	19	14	31	18	22	9	9	8
シ　ダ　類　胞　子											
シダ類胞子		130	64	168	124	42	34	82	122	16	17
合　計											
木本花粉		273	286	271	281	249	226	265	318	223	227
草本花粉		144	25	237	135	17	17	5	176	14	27
不明花粉		34	50	19	14	31	18	22	9	9	8
シダ類胞子		130	64	168	124	42	34	82	122	16	17
総花粉・胞子		581	425	695	554	339	295	374	625	262	279

表5．第5地点～第7地点の花粉分析結果

種　類（Taxa）　試料番号	第5地点 9	第5地点 11	第6地点 9-12	第6地点 11	第6地点 13	第6地点 14-2	第6地点 16	第7地点 7-2	第7地点 10
木　本　花　粉									
マキ属	-	3	-	1	1	-	-	-	-
モミ属	-	1	-	5	-	3	-	-	-
ツガ属	1	2	-	3	1	1	2	-	-
マツ属複維管束亜属	-	-	-	-	-	3	-	-	-
マツ属（不明）	1	5	-	5	2	18	1	-	-
スギ属	-	2	-	-	-	1	1	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	1	3	3	5	-	-
クマシデ属－アサダ属	-	3	-	2	2	2	4	-	-
ハンノキ属	-	3	-	2	1	1	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	20	-	33	4	7	16	1	-
コナラ属アカガシ亜属	4	150	5	107	98	58	80	1	-
クリ属－シイノキ属－マテバシイ属	2	38	-	65	76	149	95	-	-
ニレ属－ケヤキ属	-	1	-	1	2	3	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ヤドリギ属	-	7	-	6	-	-	1	-	-
カラスザンショウ属	-	-	-	-	3	1	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ウルシ属	-	7	1	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	4	-	-	6	-	1	-	-
クロウメモドキ科	-	1	-	-	1	-	-	-	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	2	1	-	-	-
ウコギ科	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ハイノキ属	-	-	-	-	1	1	-	-	-
エゴノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
テイカカズラ属	-	1	-	-	-	2	7	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草　本　花　粉									
ガマ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-
イネ科	-	15	-	20	2	3	3	-	-
カヤツリグサ科	-	10	-	3	-	1	-	-	-
クワ科	-	1	-	1	-	1	2	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	4	1	18	1	2	-	-	1
ナデシコ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
バラ科	-	3	-	-	1	1	4	-	-
ミソハギ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヒシ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	1	2	-	2	-	9	1	1	-
他のキク亜科	-	3	-	4	1	-	-	-	-
不明花粉	-	3	-	10	13	15	19	-	-
不明花粉 シダ類胞子	321	252	285	1031	1222	322	1743	505	658
合　計									
木本花粉	8	250	6	234	204	258	214	2	0
草本花粉	1	40	1	50	7	17	11	1	1
不明花粉	0	3	0	10	13	15	19	0	0
シダ類胞子	321	252	285	1031	1222	322	1743	505	658
総花粉・胞子	330	545	292	1325	1446	612	1987	508	659

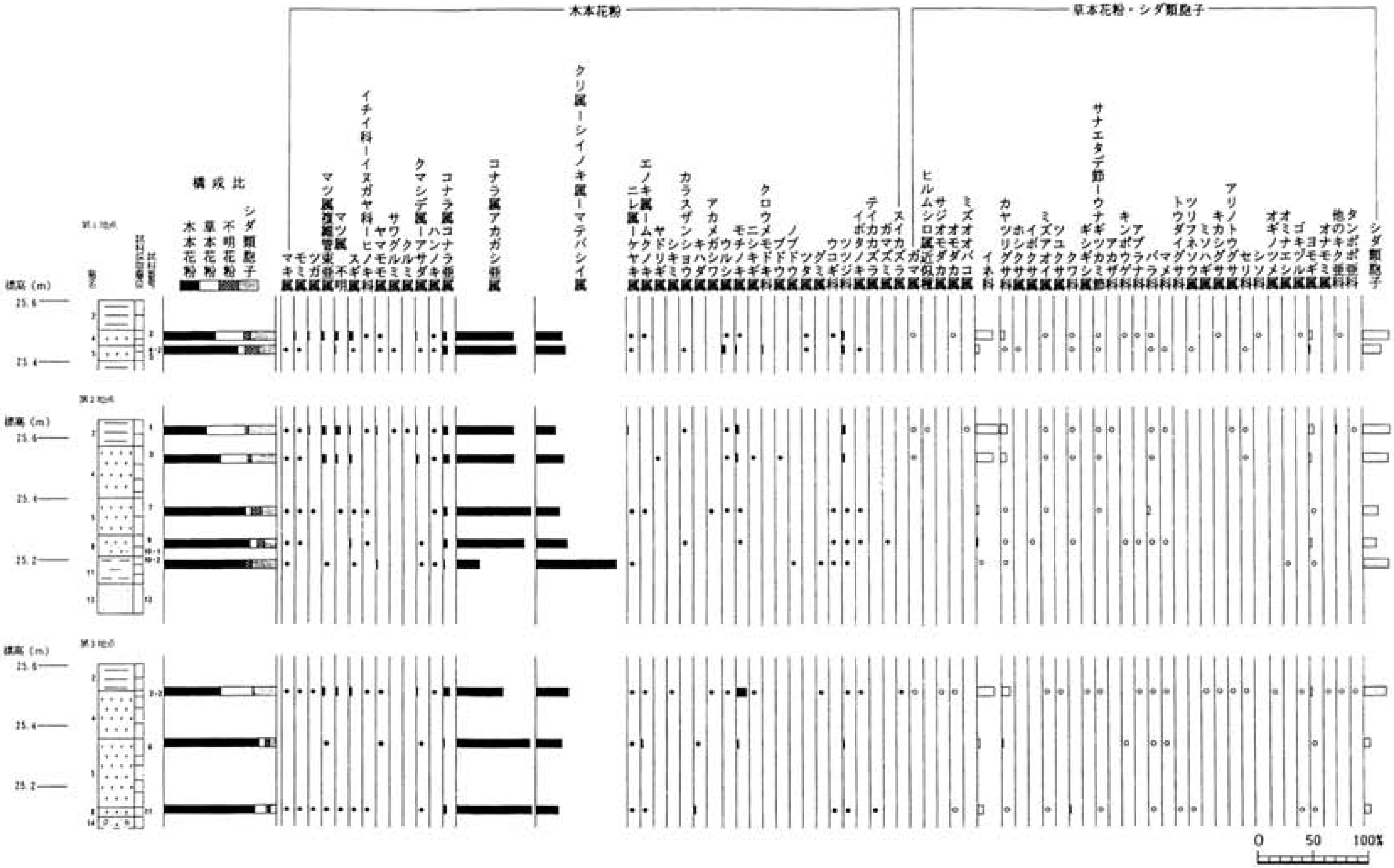


図7．第1地点～第3地点の花粉化石群集の層位的変化
出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数を基数として百分率として算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料において産出した種類を示す。

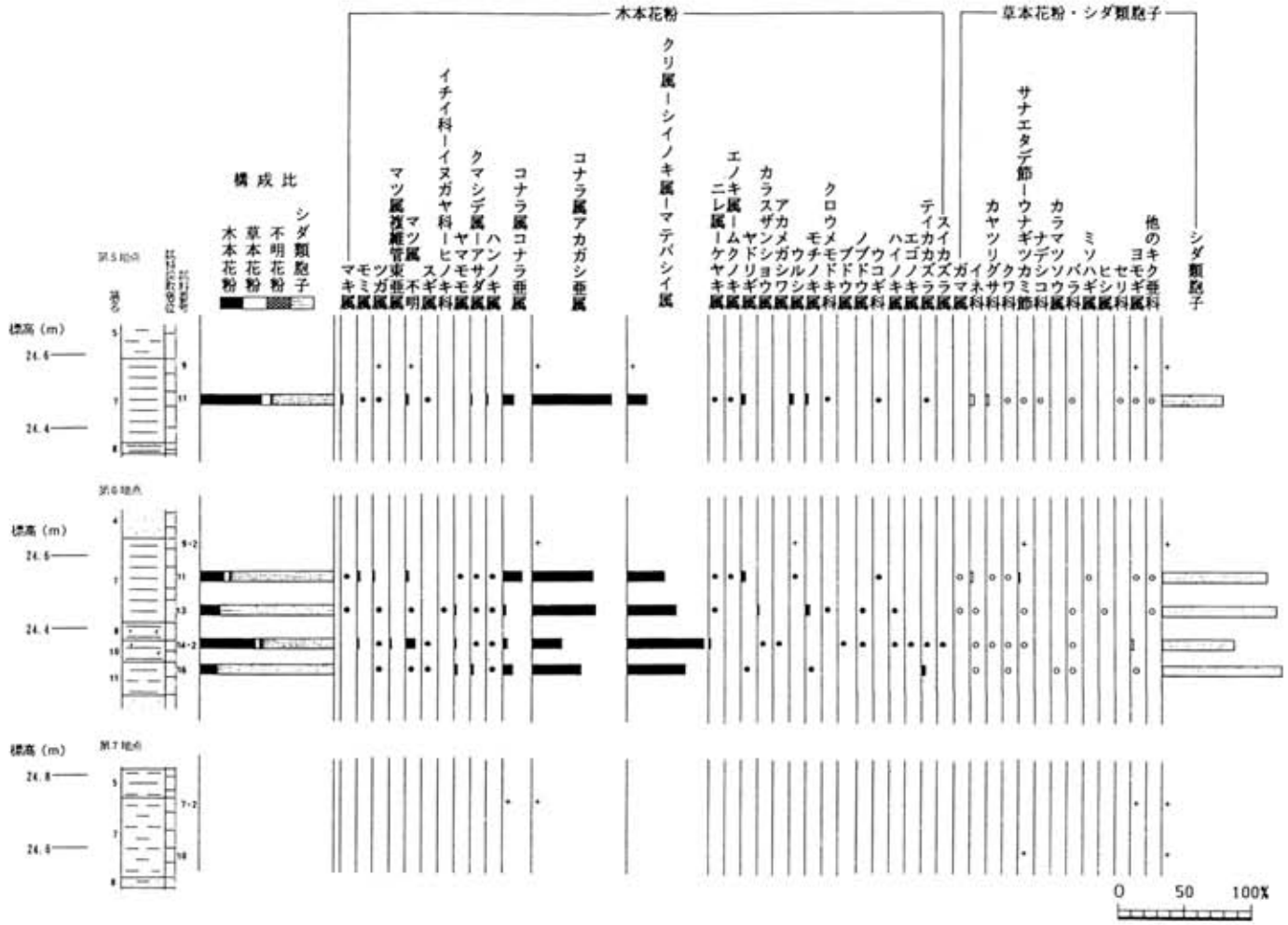


図8．第5地点～第7地点の花粉化石群集の層位的変化
出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数を基数として百分率として算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料において産出した種類を示す。

第２地点

各試料の花粉化石群集は、試料番号９・10-2との間を境として変化する。試料番号10-2はクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が多産し、次いでアカガシ亜属が出現する。これに対して試料番号９より上位になると、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属が多産するがその出現率が減少し、アカガシ亜属が最も高率に出現する。草本花粉では、上位に向かってイネ科が増加する。栽培植物とされるイネ属は、試料番号３より上位で検出される。

表６．イネ属同定結果

地点	層位	試料番号	イネ属比率(%)
1	4	3	35
	5	4-2	0
2	2	1	32
	4	3	31
	5	7	0
	8	9	0
	11	10-2	0
3	4	2-2	35
	5	6	0
	8	11	0
5	7	11	0
6	7	11	0
		13	0
	10	14-2	0
	11	16	0

・第３地点

各試料の花粉化石群集は大きく変化せず、アカガシ亜属が最も高率に出現し、次いでクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が出現する。草本花粉は、上位に向かってイネ科が増加する。

・第５地点

各試料の花粉化石の保存状態は悪く、シダ類胞子が多産する。試料番号11はアカガシ亜属が多産し、コナラ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属を伴う。草本花粉はほとんど検出されない。

・第６地点

各試料の花粉化石の保存状態は悪く、シダ類胞子が多産する。木本花粉ではアカガシ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属が多産する。このうち、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属は、上位に向かって減少する。草本花粉は、ほとんど検出されない。

・第７地点

花粉化石は、全試料ともほとんど検出されない。

（３）植物珪酸体

結果は、表７・８、図９・10に示す。イネ科起源の植物珪酸体は全試料で多く検出され、保存状態も良好である。第１地点～第３地点の植物珪酸体組成は、下位層にタケ亜科が多産するが、第４地点～第７地点では上位層でタケ亜科とイチゴツナギ亜科が多産する。次に各地点ごとの植物珪酸体の産状を記す。

・第１地点

試料番号4-2・３の植物珪酸体組成は類似しており、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともタケ亜科が多産し、キビ族・ヨシ属・コブナグサ属・イチゴツナギ亜科などが随伴する。栽培植物とされるイネ属は、２試料とも低率ではあるが検出される。

・第２地点

試料番号10-2・９・７・３・１の植物珪酸体組成はタケ亜科が多産し、キビ族・ヨシ属・コブ

表7．第1地点～第3地点の植物珪酸体分析結果

種　類（Taxa）　試料番号	第1地点 3	第1地点 4-2	第2地点 1	第2地点 3	第2地点 7	第2地点 9	第2地点 10-2	第3地点 2-2	第3地点 6	第3地点 11
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	5	2	3	1	-	-	-	2	3	1
イネ族マコモ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
キビ族ヒエ属	-	-	1	1	-	-	-	-	2	-
キビ族キビ属	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-
キビ族エノコログサ属	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-
キビ族（その他）	38	29	17	25	31	20	4	15	25	14
タケ亜科ネザサ節	17	2	9	-	1	2	1	3	1	-
タケ亜科（その他）	182	130	82	54	39	91	138	53	27	40
ヨシ属	24	38	14	11	8	15	21	19	2	3
ウシクサ族コブナグサ属	15	8	2	11	-	6	4	13	4	-
ウシクサ族ススキ属	2	6	7	2	1	1	2	1	-	-
イチゴツナギ亜科	20	13	9	7	3	3	3	13	25	24
不明キビ型	204	177	69	82	106	106	57	145	90	94
不明ヒゲシバ型	148	110	34	61	31	59	40	80	25	15
不明ダンチク型	143	134	54	57	34	78	49	82	38	23
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	11	5	11	18	-	3	-	22	7	11
イネ族マコモ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
キビ族	1	4	7	4	7	4	3	10	5	12
タケ亜科ネザサ節	1	-	2	2	-	-	-	-	-	-
タケ亜科（その他）	39	32	36	33	44	34	35	30	37	36
ヨシ属	2	5	2	5	3	4	5	1	2	1
ウシクサ族	5	4	1	3	4	-	13	1	-	5
シバ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
不明	50	51	45	45	45	59	45	43	51	68
合　計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	799	651	302	313	255	381	319	427	243	214
イネ科葉身機動細胞珪酸体	109	101	105	110	103	104	101	108	103	134
検　出　個　数	908	752	407	423	358	485	420	535	346	348
組　織　片										
タケ亜科機動細胞列	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
不明機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-

表8．第5地点～第7地点の植物珪酸体分析結果

種　類（Taxa）　試料番号	第5地点 9	第5地点 11	第6地点 9-2	第6地点 11	第6地点 13	第6地点 14-2	第6地点 16	第7地点 7-2	第7地点 10
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	-	1	-	1	-	-	-	1	2
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2
キビ族エノコログサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キビ族（その他）	5	17	8	10	10	19	8	6	25
タケ亜科ネザサ節	6	2	2	-	4	-	3	2	1
タケ亜科（その他）	86	48	121	59	132	68	61	79	113
ヨシ属	16	17	19	6	31	10	21	14	36
ウシクサ族コブナグサ属	14	31	12	18	-	1	-	26	40
ウシクサ族ススキ属	2	5	3	2	2	2	1	1	7
イチゴツナギ亜科	113	87	87	87	13	6	3	36	207
不明キビ型	94	87	97	72	74	168	70	36	85
不明ヒゲシバ型	46	43	67	17	66	40	27	26	31
不明ダンチク型	45	36	86	43	69	56	57	49	66
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	7	6	2	1	-	-	-	3	5
イネ族マコモ属	1	1	-	1	-	-	-	-	-
キビ族	4	2	2	13	1	3	3	6	1
タケ亜科ネザサ節	1	-	1	-	-	-	-	-	-
タケ亜科（その他）	38	17	44	38	37	46	46	45	44
ヨシ属	4	7	2	3	5	7	5	11	4
ウシクサ族	4	10	6	2	6	8	10	11	11
シバ族	-	1	-	-	-	-	-	-	-
不明	50	59	53	52	53	42	40	25	48
合　計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	427	375	502	315	401	370	251	276	615
イネ科葉身機動細胞珪酸体	109	103	110	110	102	106	104	101	113
検　出　個　数	536	478	612	425	503	476	355	377	728

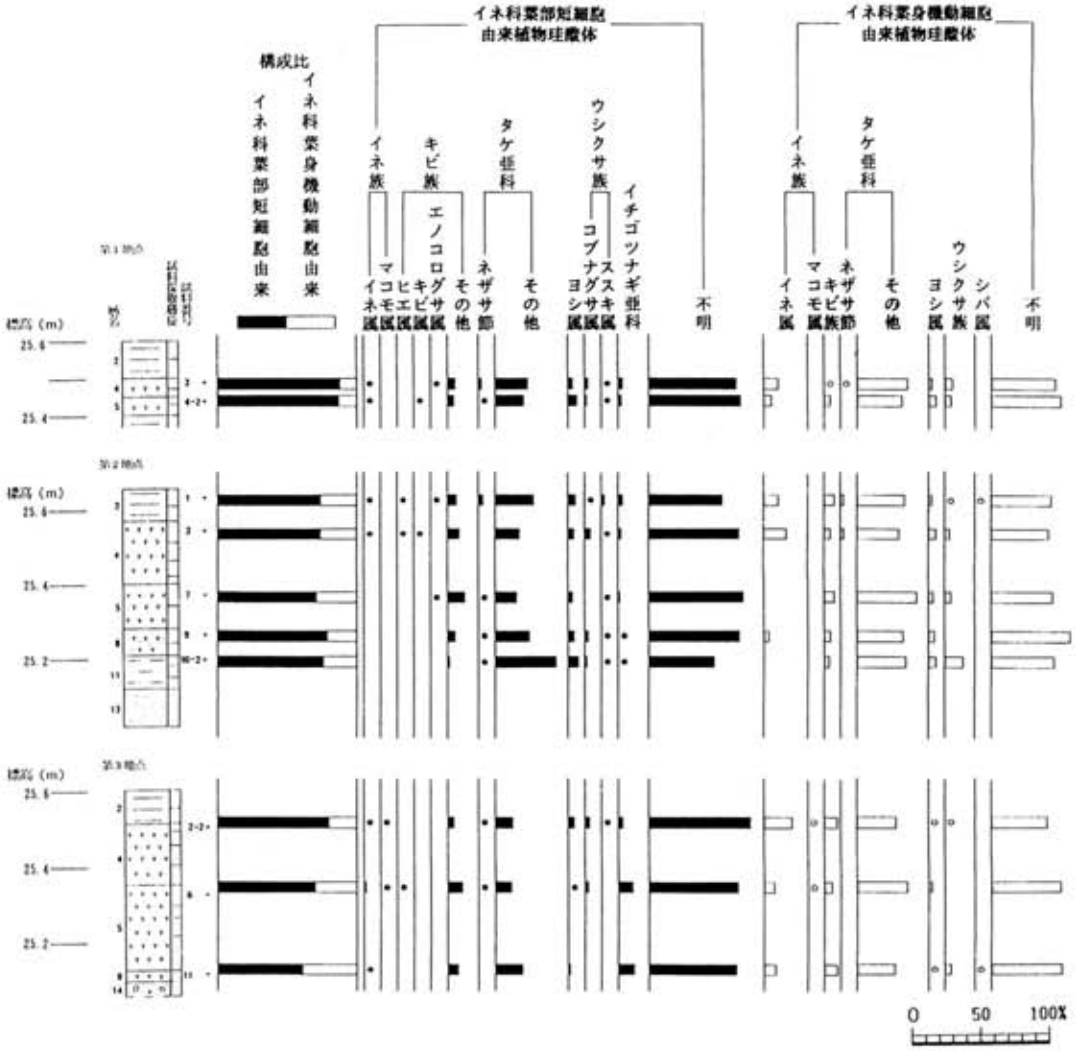


図9．第1地点～第3地点の植物珪酸体の層位的変化
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の検出した種類を示す。

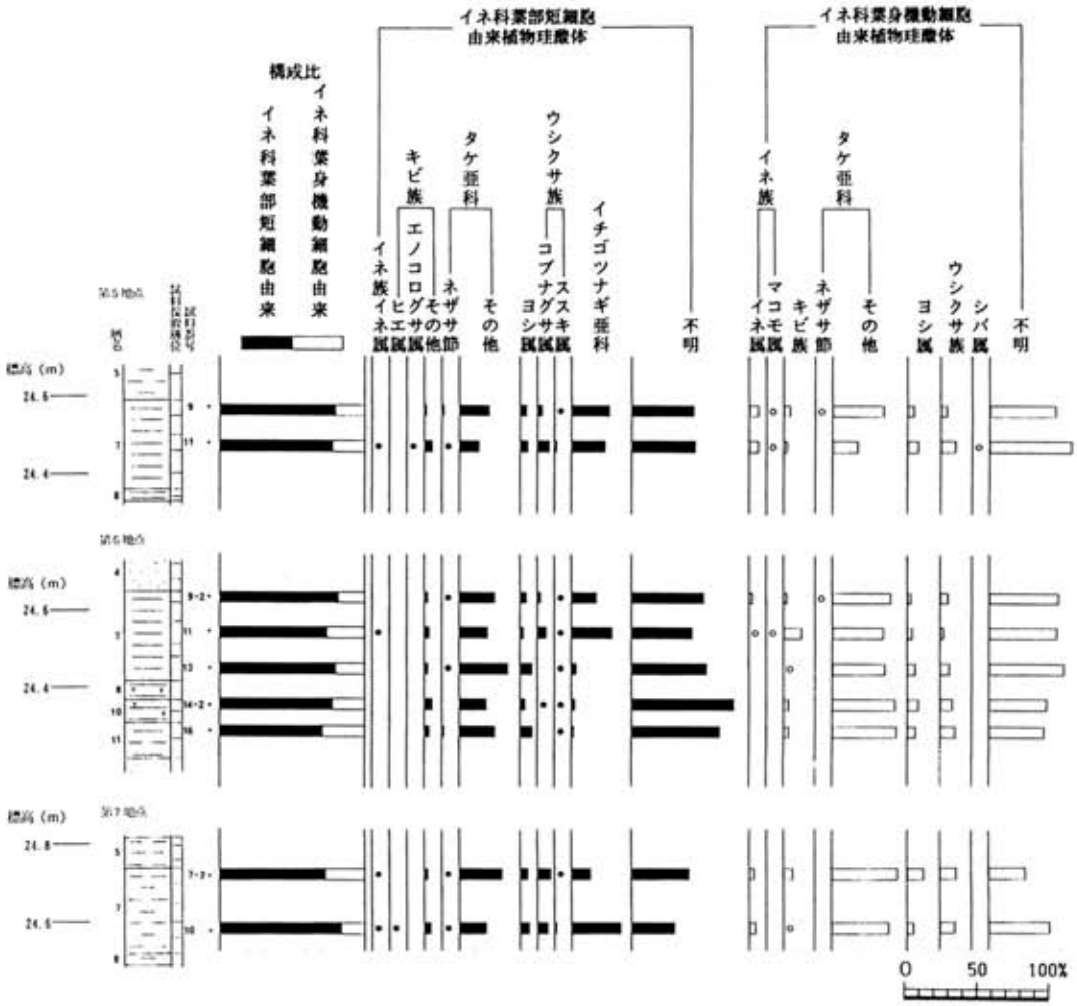


図10．第５地点～第７地点の植物珪酸体の層位的変化
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の検出した種類を示す。

ナグサ属などが随伴する。イネ属は試料番号９より上位で検出され、試料番号３・１で機動細胞珪酸体が多産する。

・第３地点

試料番号11・６・2-2の植物珪酸体組成はタケ亜科が多産し、キビ族・ヨシ属・コブナグサ属・イチゴツナギ亜科などが随伴する。イネ属は全試料とも検出され、上位に向かって機動細胞珪酸体が増加する。

・第５地点

試料番号11・９の植物珪酸体組成は、タケ亜科・イチゴツナギ亜科が多産し、キビ族・ヨシ属・コブナグサ属などが随伴する。イネ属は、２試料とも検出される。

・第６地点

試料番号16・14-2・13・11・9-2の植物珪酸体は、試料番号13・11の間を境にして変化する。試料番号16～13ではタケ亜科が多産するが、試料番号11・9-2ではタケ亜科に加えて、イチゴツナギ亜科も多産する。また、キビ族・ヨシ属・コブナグサ属が随伴する。イネ属は、試料番号11・9-2でわずかに検出される。

・第７地点

試料番号10・7-2では、タケ亜科・イチゴツナギ亜科が多産し、キビ族・ヨシ属・コブナグサ属などが随伴する。イネ属は、２試料とも低率ながら検出される。

４．遺跡周辺地域の古環境について

（１）水域環境について

第４地点～第７地点では、珪藻化石がほとんど検出されないために、これらの地点の水域環境について考察することは困難である。とくに第４地点のように珪藻化石が全く検出されなかった要因は、本地点が砂を主体とした層であるためと考えられる。珪藻は死後シルトサイズ以下の微細粒子と挙動を共にすることが知られている（小杉，1989）。このことを考慮すると、第４地点は本川川の氾濫の影響を受けたために、珪藻化石は流下してしまったと思われる。また、第５地点～第７地点についても自然堤防に位置することを考えると、第４地点と同様に珪藻化石が流出した可能性があるとともに、堆積物がシルト以下の微細粒子であることから、堆積物中に取り込まれる珪藻化石が少なかった可能性もある。

第１地点～第３地点では、珪藻化石が比較的良好に検出される。第１地点～第３地点の珪藻化石群集には層位的変化がみられる。すなわち、縄文時代晩期とされる８層では、中～下流性河川指標種群（K）の主要構成種（安藤，1990）の *Achnanthes lanceolata*、沼沢湿地付着生種群（O）の主要構成種の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema gracile*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis* などが多産することから、縄文時代晩期には分析調査地点周辺は流

水の影響を受ける沼沢のような水域が存在していたと考えられる。このことは、本地点が本川川の後背湿地に位置しているという地形的背景や層相とも調和的といえる。また、古墳時代中期の4層・5層では湖沼沼沢湿地指標種群の *Aulacosira ambigua* が優占し、これに付随して沼沢湿地付着生種群の *Cymbella subaequalis*、*Pinnularia viridis*、好止水性種の *Fragilaria construens* var. *venter* などを伴う。このことから、古墳時代中期には、本湿地内は沼沢～池沼のような河川の影響の少ない水域であったと推定される。とくに本層準が遺跡内に広範囲に堆積していることを考慮すると、このような安定した水域環境は遺跡全体に広がっていたことが示唆される。

すなわち、縄文時代晩期から古墳時代中期にかけては、沼沢のような水域から池沼のような水域に変化したものと思われる。

（2）周辺地域の古植生について

各地点で得られた花粉化石群集の特徴は、コナラ属アカガシ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属（大半はシイノキ属）が多産することである。これらの種類は高木性であり、花粉生産量が膨大である。したがって、これらの花粉化石の消長は、時間的・空間的に比較することが可能である。ここで多産するアカガシ亜属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属は、層位的な変化がみられ、縄文時代晩期遺物包含層の下位層ではクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が多産し、その上位層ではアカガシ亜属が多産する。また、古墳時代中期の遺物包含層では、マツ属が増加傾向を示す。また、草本花粉化石の出現傾向は、4層と5層の間を境として変化する。5層までは草本花粉化石の出現率が低く、検出される種類数も少ない。これに対して4層から上位ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科などを伴う。ただし、第5地点～第7地点で検出される花粉化石の保存状態は、その大半が悪い。花粉化石が種類により分解度が異なるとされていること（中村, 1967）を考慮すると、第5地点～第7地点の花粉化石群集は、当時の植生を充分に反映していない可能性もある。したがって、ここでは、花粉化石が比較的良好に検出された第1地点～第3地点を中心に考察を行うこととする。

一方、各地点から得られた植物珪酸体組成は、縄文時代晩期遺物包含層より下位層では、各地点ともタケ亜科が多産する。しかし、その上位層になると後背湿地では植物珪酸体組成に大きな変化がみれないが、自然堤防上ではタケ亜科の他にイチゴツナギ亜科が多産する。

このような特徴が認められる花粉化石や植物珪酸体の中には、本遺跡が本川川の氾濫原に位置していることから、異なった地域から運搬・堆積したものも含まれている可能性がある。したがって、ここで得られた花粉化石群集・植物珪酸体組成は比較的広い範囲の植生を反映していると推定される。このことを考慮して以下に考察を行うこととする。

a．森林植生

11層～2層堆積時には、現在の暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であるアカガ

シ亜属やシイノキ属が主に生育し、この他にもコナラ亜属・ウルシ属・モチノキ属・ツツジ属などの種類も生育していたと考えられる。

北九州地方における縄文時代の古植生に関する調査研究事例はいくつかみられる。その中で佐賀県伊万里湾内で縄文時代中期に堆積したとみられる貝層（伊万里貝層）では、クリ属－シイノキ属が多産し、次いでアカガシ亜属が出現する花粉化石群集が得られている（波多江ほか，1973）。また、長崎県島原半島雲仙岳の中腹に位置する原生沼では、約6,500年前以降の植生変遷が花粉分析の結果から検討されている（三好・伊藤，1980）。それによると、約6,500年前以降アカガシ亜属やシイノキ属からなる照葉樹林が成立していたが、約400年前以降になるとアカマツ二次林へ移行したとされている。また、黒田・畑中（1979）によると、北九州地方では約8,500年前から照葉樹林が発達するとされている。このように北九州地方では、アカガシ亜属やシイノキ属からなる照葉樹林が存在していたことが明らかにされている。今回の花粉化石群集組成からも先述の研究調査事例と同様な傾向が示され、11層～2層堆積時には照葉樹林が分布していたと推定される。ただし、縄文時代晩期以前ではシイノキ属が多産し、縄文時代晩期以降ではアカガシ亜属が多産する。このことから、照葉樹林を構成する種類は、縄文時代晩期以前と縄文時代晩期以降で異なっており、縄文時代晩期以前は主にシイノキ属を中心とした照葉樹林が分布したが、同時代時期以降にはアカガシ亜属を中心とした照葉樹林に変化した可能性がある。また、この時期を通じて木本花粉化石の出現率が高率であることから、本遺跡の付近に森林が存在していた可能性がある。

古墳時代中期の4層では、下位と比較してマツ属が増加する。また、同時に草本花粉化石の出現率が増加し、栽培植物とされるイネ属も検出される。縄文海進最盛期以降にマツ属の花粉化石が急増・多産する現象は日本各地で認められており、これが直接的あるいは間接的な人間の植生干渉に起因しているとされている（塚田，1981）。このことから、本遺跡周辺地域でも古墳時代中期以降になると人間の植生干渉が著しくなり、ニヨウマツ類を主体とする二次林と呼ばれる林分が存在していたと推定される。

b．低地の植生

縄文時代晩期以前の堆積層では、タケ亜科が多産し、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属を含む）などが検出される。タケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科植物と比較して風化に強く、生産量が多いとされている（近藤，1982：杉山・藤原，1986）。このことを考慮すると、タケ亜科の出現率は過大に評価される可能性がある。これらのことから、分析調査地点の周辺には、キビ族、タケ亜科、ススキ属などのイネ科植物が生育していたと推定される。また、遺跡周辺の比較的湿った場所には、マコモ属、ヨシ属、コブナグサ属などが生育しいていたと推定される。ただし、草本花粉化石の出現率が低く、しかも検出される種類が少ないため、低地の植生に関する詳細な検討は難しい。

縄文時代晩期にも本遺跡周辺には、タケ亜科、キビ族、ウシクサ族（ススキ属を含む）などの

イネ科植物が生育していたと推定される。ただし、後背湿地と自然堤防上では植物珪酸体組成が異なり、自然堤防上ではイチゴツナギ亜科が多産することが特徴である。このことから、自然堤防の周辺にはイチゴツナギ亜科などが生育していた可能性がある。

古墳時代中期以降になると、後背湿地の周辺はヒエ属などのキビ族、タケ亜科などのイネ科植物が主に生育しており、この他にもカヤツリグサ科・ヨモギ属などの種類が生育していたと思われる。また、周辺の水湿地にはガマ属、ヨシ属、コブナグサ属、ミズアオイ属などが生育していたのであろう。

c．稲作の消長および様態

縄文時代晩期の遺物包含層である第2地点・第3地点の8層および第5地点～第7地点7層では、機動細胞珪酸体・短細胞珪酸体とも栽培植物とされるイネ属が検出される。

福岡市板付遺跡では、刻目突帯文土器の段階で畦畔を伴う水田区画が検出されており、放射性炭素年代値が3,400年前を示す堆積層の花粉分析の結果では、イネ属花粉化石が出現する（中村・畑中，1976）。また、唐津市菜畑遺跡では夜臼式土器・板付Ⅰ式土器共伴期の水田址で畦畔や水路などの遺構が認められた。さらに、夜臼式・板付Ⅰ式より土器型式が古い山ノ寺式土器を含む堆積層からも水田址が確認された。これら水田層について花粉分析を行った結果、ともにイネ属の花粉化石が検出されている（中村，1982）。また、熊本県上南部遺跡C地点から出土した縄文時代晩期の上ノ原式土器の胎土中にイネ属のプラント・オパール（植物珪酸体）が含まれていたことが報告されている（藤原，1981）。このように北九州地方の稲作は、考古学・自然科学の両分野の調査・研究成果から、縄文時代晩期まで遡ることが明らかにされた。

本遺跡でも植物珪酸体分析の結果、縄文時代晩期の遺物包含層からイネ属がわずかに検出されたが、イネ属機動細胞珪酸体・短細胞珪酸体の出現率が低率であり、特に第5地点～第7地点ではイチゴツナギ亜科・タケ亜科が多産すること、花粉分析の結果、イネ科花粉化石の出現率が低率であり、イネ属花粉化石が検出されないこと、発掘調査により水田址が検出されないことから、当時本遺跡で稲作が行われていた可能性は低いと思われる。

古墳時代中期の遺物包含層（4層・5層）では、イネ属の機動細胞珪酸体が比較的良好に検出され、短細胞珪酸体も僅かながら検出される。現水田耕作土層を対象にして10ha当り500kgのイナワラを投入する作業を8年間続けた場合のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は16％とされている（近藤，1988）。この研究事例と今回の分析結果を比較すると、4層・5層のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は若干低い。しかし、花粉化石では4層になると、イネ科花粉化石の出現率が増加し、その中でイネ属が占める割合も30％以上となる。現在の水田耕土で花粉の動態研究を行った結果、イネ科花粉の中でイネ属花粉が占める割合（イネ属比率）が30％以上である場合、現在に近い集約度で稲作が行われていたとみなしてよい（鈴木・中村，1977）とされている。これらのことを考慮すると、4層が堆積した頃の遺跡周辺の低地では、稲作が行われていた可能性が高い。また、

サジオモダカ属・オモダカ属などの水生植物が水田雑草として存在していた可能性もある。

なお、随伴種のヒエ属・キビ属・エノコログサ属・キビ族・イチゴツナギ亜科は栽培植物の種を含むが、これらが栽培植物に由来するかは植物珪酸体の形態学的特徴からは現段階では判断はできない。

5．縄文時代中期の集石に関する分析調査

（1）集石の構築年代確認

縄文時代中期とされる集石（SX202・SX204）から検出された燃料材と考えられる炭化材を用いて放射性炭素年代測定を実施し、遺構の構築年代の確認を行った。測定については、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお、半減期の算出には、^{14}Cの半減期として LIBBY の半減期 5,570年を使用している。

測定結果は、SX202の炭化材では約4,500年前の年代値が得られ、SX204の炭化材は約4,700年前の年代値が得られた。これらの年代値は、キーリ・武藤（1982）によれば、縄文時代前期後半～末頃に相当し、集石が構築されたとされる縄文時代中期よりやや古い。これについては、本遺跡の地下水位などの影響により、試料中に古い放射性炭素が供給された可能性もあるが、土器型式編年との検討を要する。

表9．放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	年代値 y.B.P.(1950年よりの年数)	Codo No.
SX202	炭化材	4,580 ± 140 y.B.P.　2,630 B.C.	Gak-16540
SX204	炭化材	4,700 ± 120 y.B.P.　2,750 B.C.	Gak-16541

（2）燃料材の種類

縄文時代中期の集石（SX204）から検出された燃料材と考えられている炭化材の樹種名を知るために、材同定を実施した。観察方法は、試料を乾燥させた後、実体顕微鏡で観察・同定した。なお、試料が小片であったため、顕微鏡写真撮影はできなかった。

・コナラ属コナラ亜属の一種（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sp.）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列。試料はいずれも細片で、孔圏外小道管の観察はできない。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。以上の特徴から、コナラ属の内環孔材の形態をもつコナラ亜属の一種と同定した。コナラ亜属は、小道管の形態からクヌギ節とコナラ節に分類できるが、今回の試料は小

道管の観察ができなかったため、両者を分類することが不可能であった。

6. 総括

縄文時代晩期の低地の水域環境は、流水の影響を受ける沼沢のような水域であり、古墳時代中期になると安定し、沼沢～池沼のような水域が存在していたと思われる。

また、周辺地域の古植生については、縄文時代晩期以前は主にシイノキ属を中心とした照葉樹林が分布していたと考えられ、縄文時代晩期以降にはアカガシ亜属を中心とした照葉樹林に変化したと推定される。また、古墳時代中期の頃になると人間の植生干渉が著しくなり、ニヨウマツ類を主体とする二次林と呼ばれる林分が存在していたと推定される。とくに丘陵地では、弥生時代中期～後期および古墳時代中期～後期の集落が形成されていることから、その当時周辺植生への人間の干渉があったものと思われる。

縄文時代晩期の遺物包含層から栽培植物とされるイネ属珪酸体がわずかに検出された。しかし、イネ属珪酸体の出現率が低いことや水田址が検出されないことから、本遺跡およびその付近で稲作が行われた可能性は低い。また、古墳時代中期には植物珪酸体およびイネ属同定の結果から本遺跡周辺で稲作が行われていた可能性があり、サジオモダカ属・オモダカ属などの水生植物が水田雑草として存在していた可能性がある。しかし、今回の発掘調査では水田址が検出されないことから、その当時の稲作の様態は不明である。

縄文時代中期の集石から検出された炭化材の放射性炭素年代測定値は、キーリ・武藤（1982）の研究事例にしたがえば、縄文時代前期後半～末の範囲に相当する。今回の年代値は、縄文時代中期とされる集石の構築時期よりはやや古いが、年代値の許容範囲からSX202はほぼ調和するとみても良いかもしれない。また、SX204は縄文時代前期に属してしまうが、年代差はSX202とほぼ変わらない。いずれにせよ、これまでの状況成果を分析し、今回の年代値を検討する必要がある。

<引用文献>

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

藤原宏志（1981）プラント・オパール分析法の基礎的研究（4）－熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出－．考古学と自然科学，14，p.55-65.

Hustedt，F.（1937-1938）Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen- Flora von Java，Bali und Sumatra．Ⅰ～Ⅲ．Arch．Hydrobiol．Suppl.，15 p.131-809，16 p.1-155，274-394.

Hustedt，F.（1959）Die Kieselalgen Deutschlands．2.Teil．Rabenhorst's Kryptogamen

-Flora　von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz. Bd.7. p.845.

波多江信広・鎌田泰彦・赤井静夫（1973）佐賀県伊万里市の伊万里貝層．第四紀研究，12，p.103-112.

キーリ・C．T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．縄文文化の研究，縄文人とその環境，加藤晋平・小林達雄・藤本　強編，p.246-275，雄山閣出版株式会社.

Kobayasi,H. and S.Mayama (1982) Most pollution-tolerant diatoms of sevely polluted rivers in the vicinity of Tokyo. Jap. J. Phycology, 30,p.188-196.

近藤錬三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書，32p..

近藤錬三（1988）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析．十二遺跡発掘調査報告書，御代田町教育委員会，p.377-383.

近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析．日本ベントス研究会誌，35/36，p.17-28.

Krammer,K., and H.Lange-Bertalot. (1986・1988・1991) Bacillariophyceae, Suesswasser flora　von Mitteleuropa 2（1・2・3・4）:p.1-876,p.1-585,p.1-576,p.1-433.

Lowe, R.L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p.1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

塚田松雄（1981）過去一万二千年間－日本の植生史　II．新しい花粉帯．日本生態学会誌，31，p.201-215.

三好教夫・伊藤秀三（1980）雲仙・原生沼の花粉分析．長崎県環境部，雲仙・原生沼の研究，p.19-28.

中村　純（1967）花粉分析．古今書院，232p..

中村　純（1982）菜畑遺跡の花粉分析．唐津市文化財調査報告，5，p.341-353.

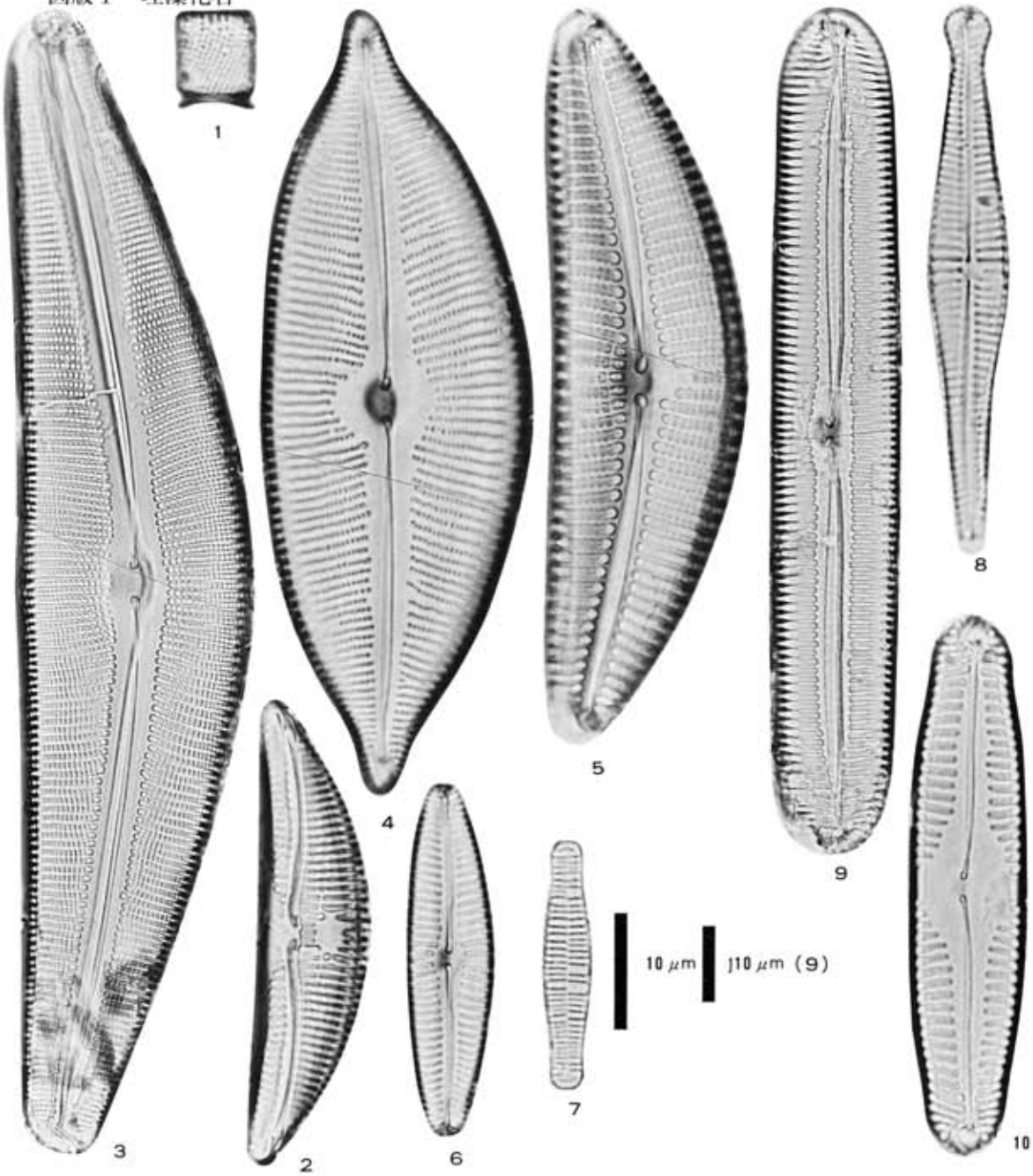
中村　純・畑中健一（1976）板付遺跡の花粉分析学的研究．福岡市埋蔵文化財調査報告書，35，p.29-46.

鈴木巧夫・中村　純（1977）稲科花粉の堆積に関する基礎的研究．文部省科研費特定研究，古文化財，稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－，中村　純編，p.1-10.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

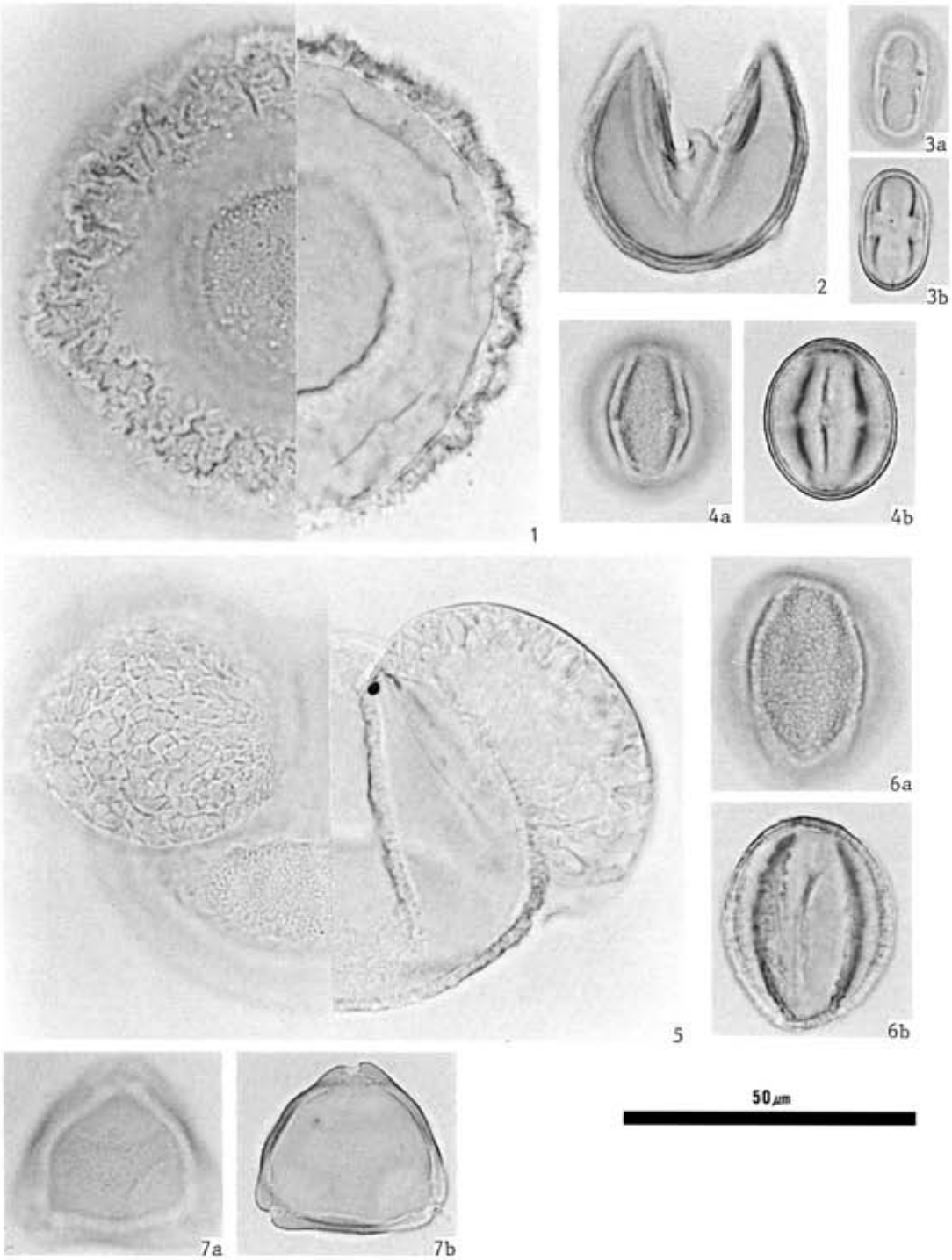
渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視（1988）珪藻群集による有機汚濁指数（ＤＡＩpo）の止水域への適用．水質汚濁研究，11，p.765-773.

図版１　珪藻化石



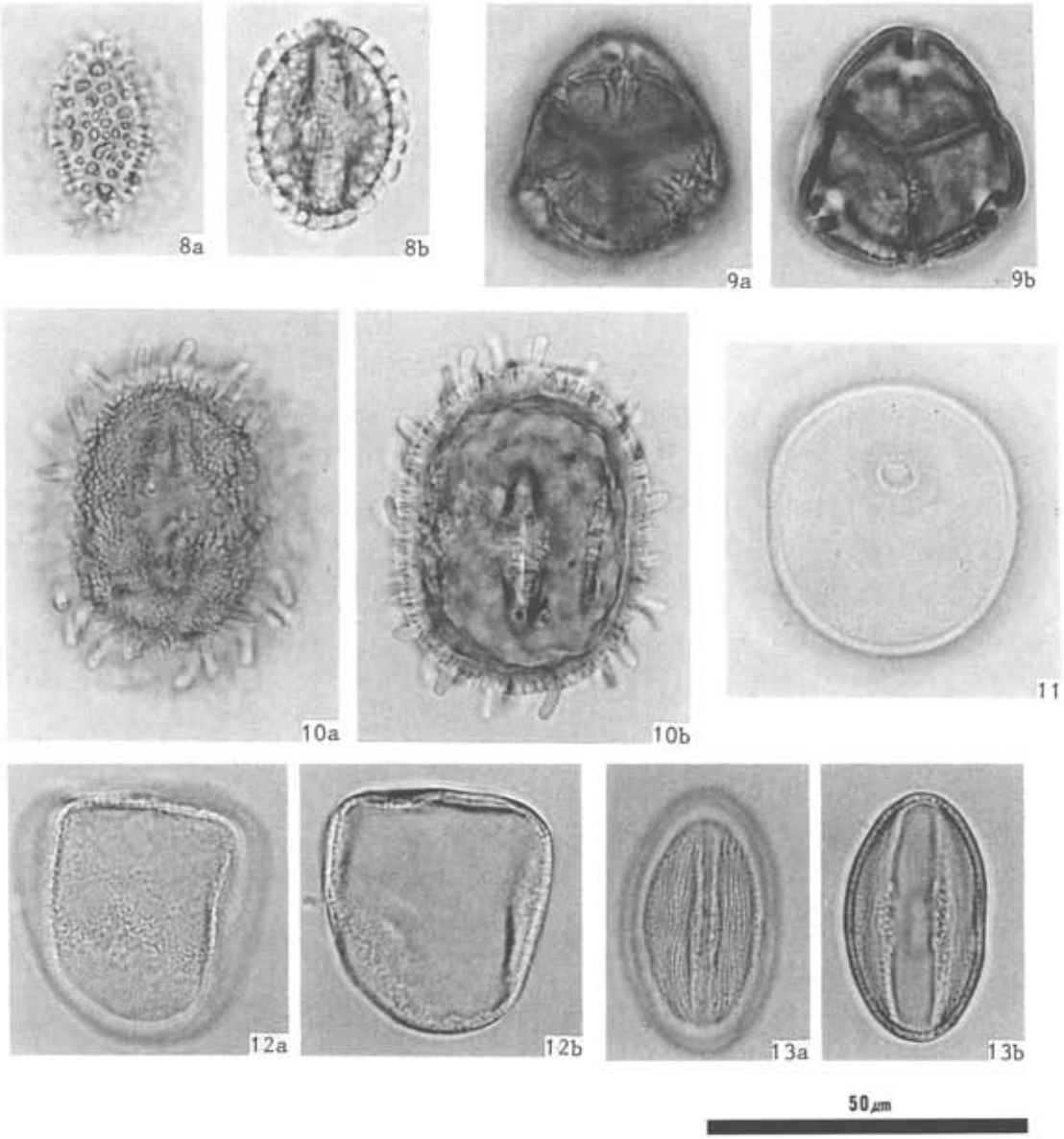
1. *Aulacosira ambigua* (Grum.) Simonsen（第１地点；試料番号4-2）
2. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck（第２地点；試料番号9）
3. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve（第１地点；試料番号4-2）
4. *Cymbella cuspidata* Kuetzing（第３地点；試料番号11）
5. *Cymbella* sp.-1（第３地点；試料番号6）
6. *Cymbella subaequalis* Grunow（第１地点；試料番号4-2）
7. *Fragilaria bicapitata* A. Mayer（第３地点；試料番号11）
8. *Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg（第１地点；試料番号3）
9. *Pinnularia macilenta* (Ehr.) Cleve（第１地点；試料番号4-2）
10. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt（第３地点；試料番号11）

図版２　花粉化石



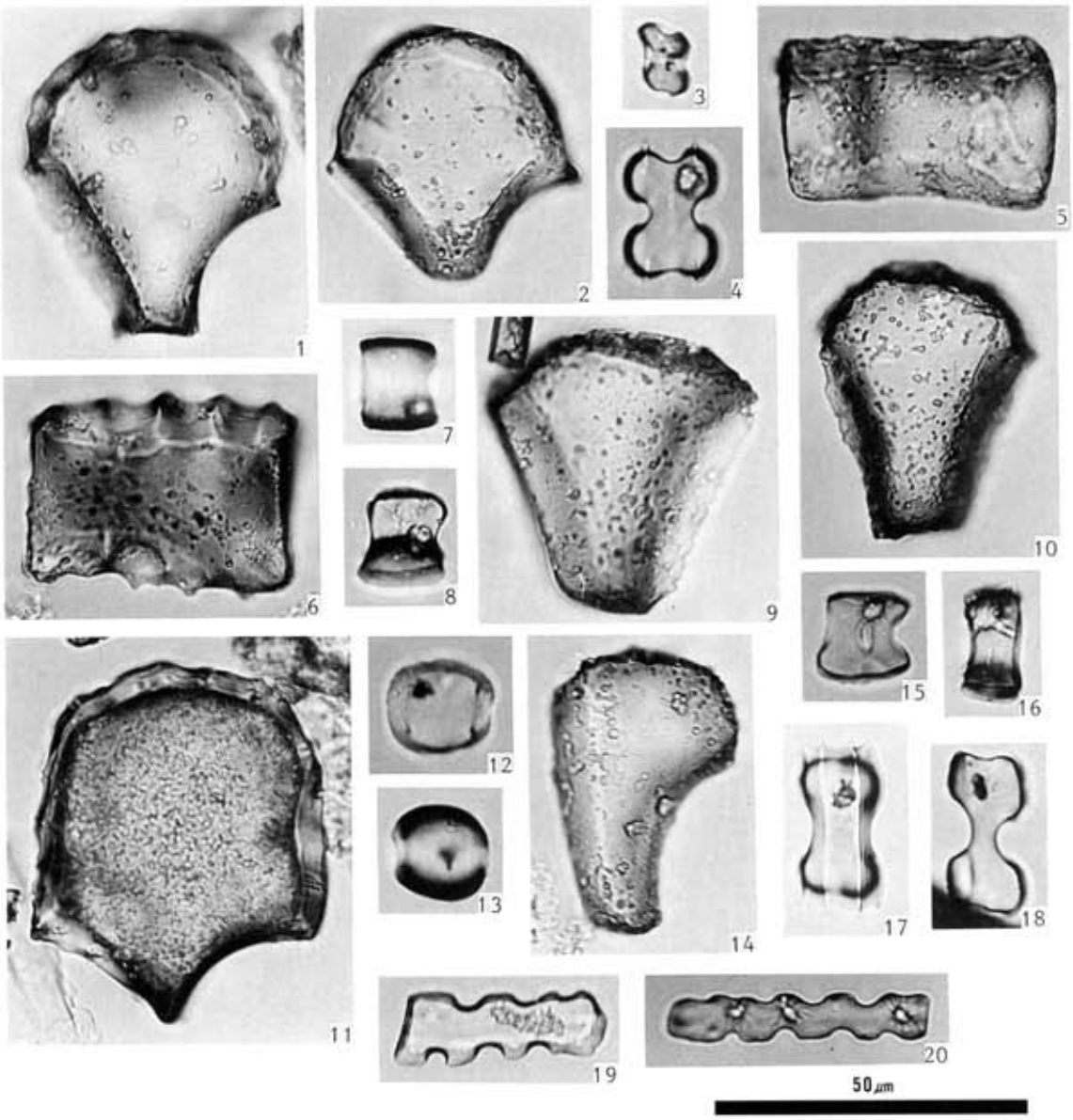
1．ツガ属（第３地点；試験番号2-2）
2．スギ属（第３地点；試料番号2-2）
3．シイノキ属（第３地点；試料番号2-2）
4．コナラ属アカガシ亜属（第３地点；試料番号2-2）
5．マツ属複維管束亜属（第３地点；試料番号2-2）
6．コナラ属コナラ亜属（第３地点；試料番号2-2）
7．ヤマモモ属（第３地点；試料番号2-2）

図版３　花粉化石



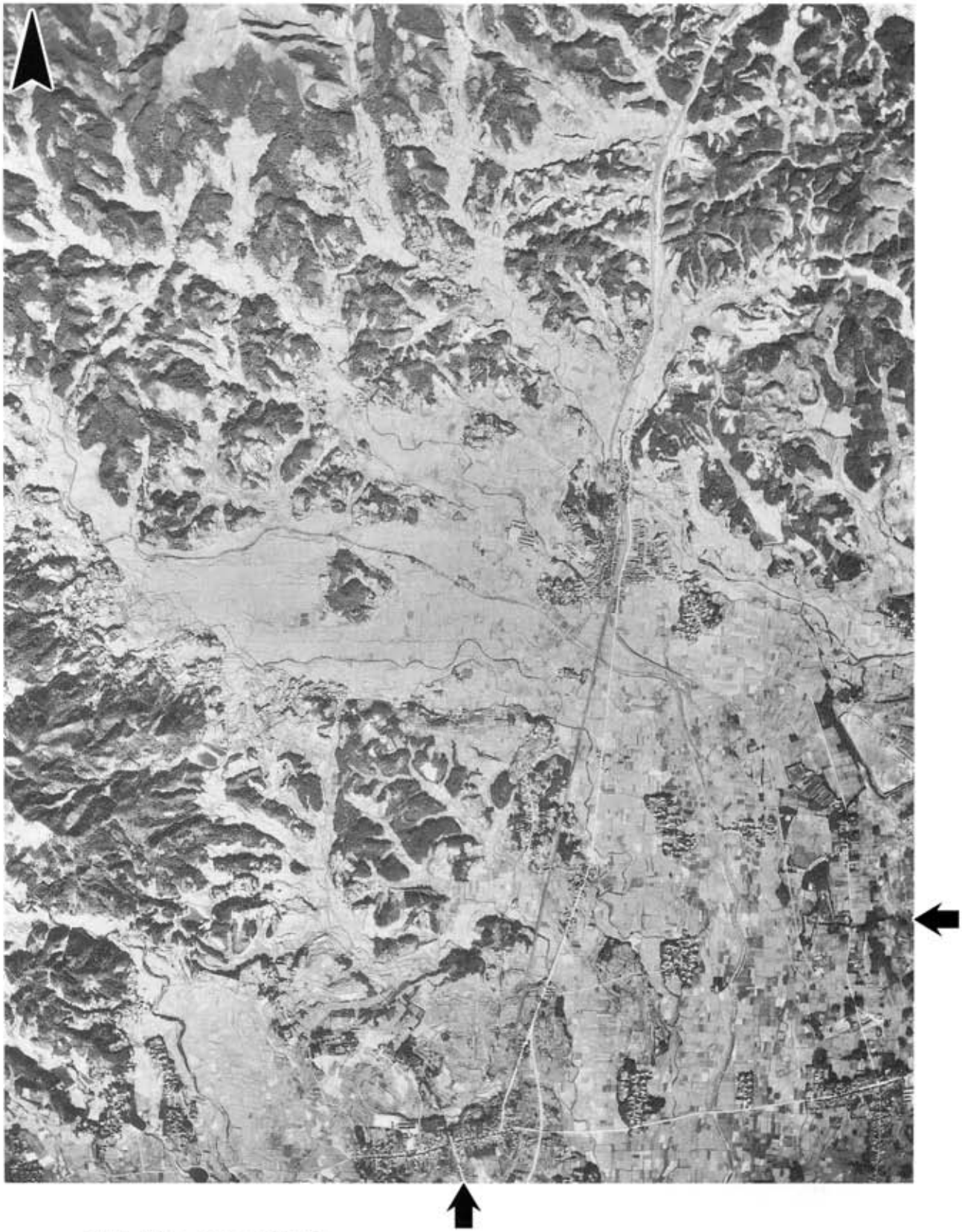
8．モモノキ属（第３地点；試料番号2-2）
9．ツツジ科（第３地点；試料番号2-2）
10．ヤドリギ属（第６地点；試料番号11）
11．イネ科（第３地点；試料番号2-2）
12．カヤツリグサ科（第３地点；試料番号2-2）
13．ゴキヅル科（第３地点；試料番号2-2）

図版 4　植物珪酸体



1．イネ属：機動細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号9)
2．マコモ属：機動細胞珪酸体(第 3 地点；試料番号2-2)
3．イネ属：短細胞珪酸体(第 5 地点；試料番号11)
4．キビ属：短細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号3)
5．キビ族：機動細胞珪酸体(第 5 地点；試料番号9)
6．ネザサ節：機動細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号3)
7．ネザサ節：短細胞珪酸体(第 1 地点；試料番号3)
8．ネザサ節：短細胞珪酸体(第 6 地点；試料番号11)
9．タケ亜科：機動細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号3)
10．ネザサ節：機動細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号1)
11．ヨシ属：機動細胞珪酸体(第 6 地点；試料番号14-2)
12．ヨシ属：短細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号3)
13．ヨシ属：短細胞珪酸体(第 7 地点；試料番号10)
14．ウシクサ族：機動細胞珪酸体(第 3 地点；試料番号2-2)
15．タケ亜科：短細胞珪酸体(第 3 地点；試料番号2-2)
16．タケ亜科：短細胞珪酸体(第 5 地点；試料番号9)
17．コブナグサ属：短細胞珪酸体(第 2 地点；試料番号1)
18．ススキ属：短細胞珪酸体(第 7 地点；試料番号10)
19．イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体(第 3 地点；試料番号2-2)
20．イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体(第 7 地点；試料番号10)

写 真 図 版

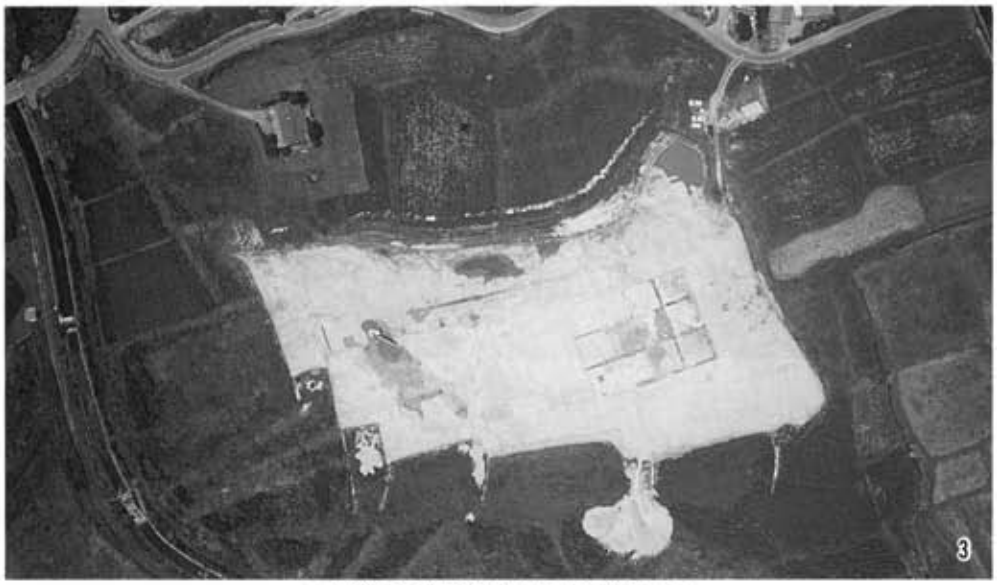


鳥栖市北部から基山町主要部

写真図版 2

平原遺跡全景（南上空から）

平原遺跡１・２区全景（南上空から）



平原遺跡２区全景（東上空から）

SX201（南から）

SX202（南東から）

SX203（南から）

SX204・SX205（南から）

SX204（北から）

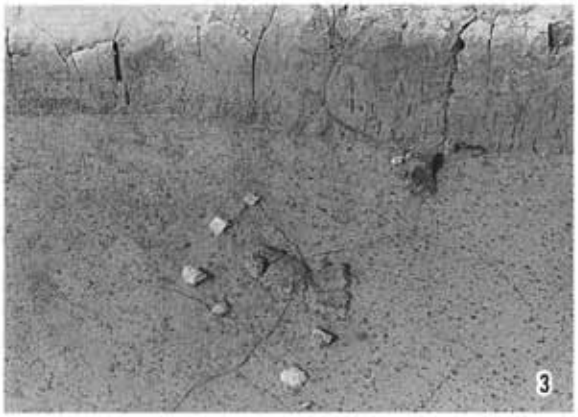
SX205（北から）

SX206（南から）

SX206下部（東から）

SX207（南から）

SX207・SX224（南から）



SX208（東から）

SX209（南から）

SX210下部（南東から）

SX211（南西から）

SX213（西から）

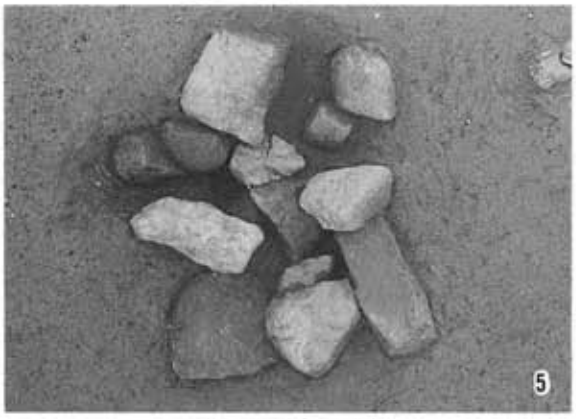
SX218・SX219（南から）

SX220（南から）

SX220下部（南から）

SX221（東から）

SX223（北から）



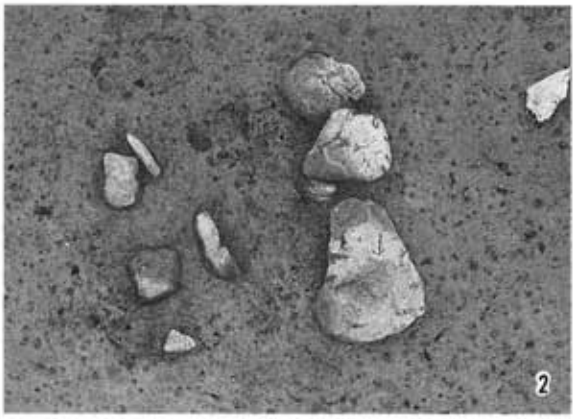
SX224（南から）

SX225（東から）

SX226（東から）

SX227（南から）

SX228（南東から）

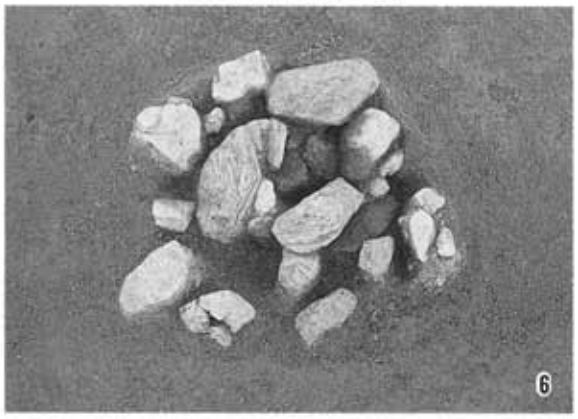


SX237（南から）

SX241（南西から）

SX242（北東から）

SX247（西から）



SX248（西から）

SX249（南から）

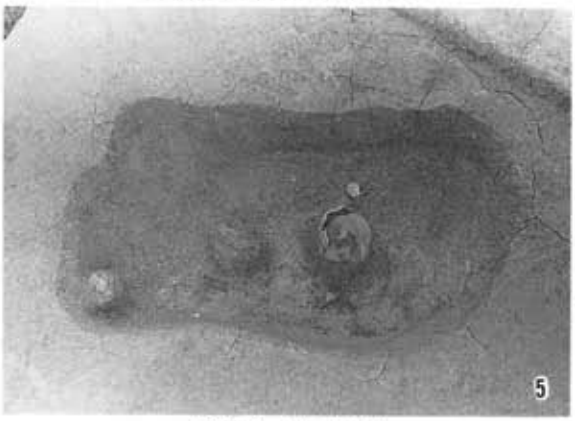
SX250（北から）

BD07下層遺物出土状況

BD07下層遺物出土状況

BD07下層遺物出土状況

BE06下層遺物出土状況



SK212（北から）

BG10　P－1 編物出土状況

土壌分析の試料採取

泥炭層の発掘作業

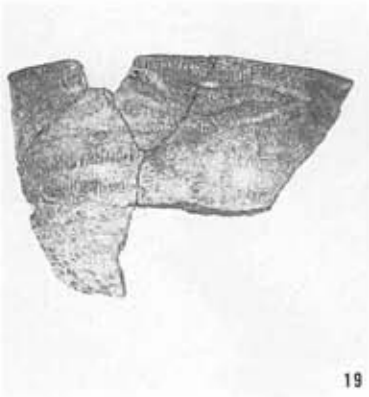
SX222（南東から）

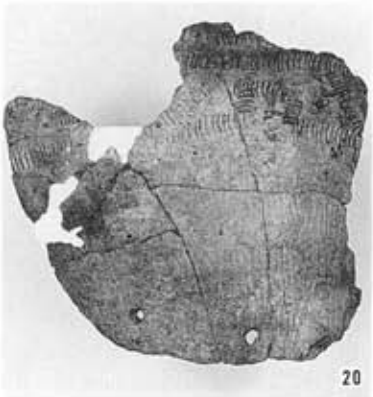
SX222A（東から）

SX222遺物出土状況

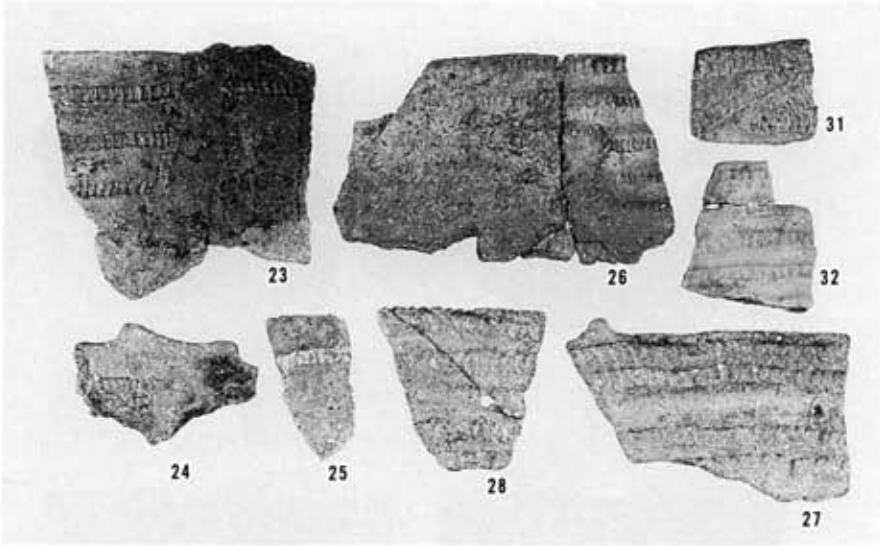
SX222北側流路（西から）

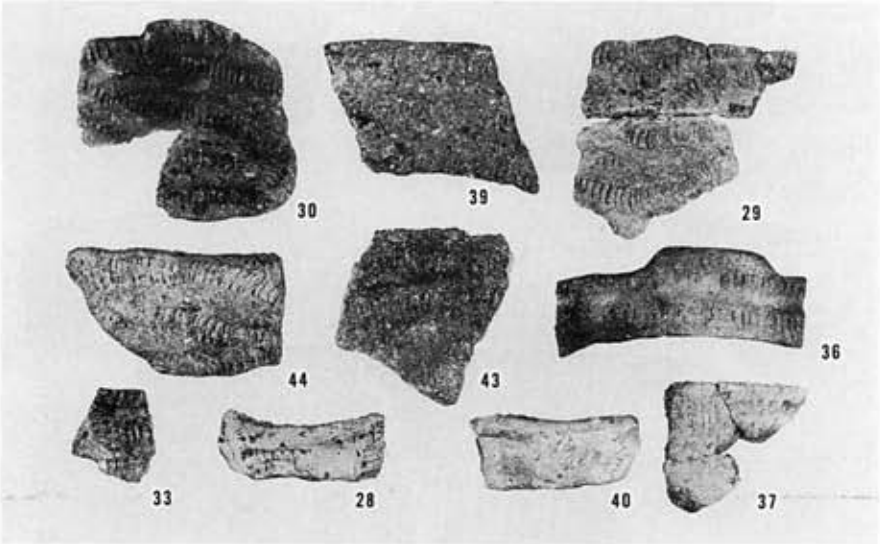
SX222北側流路土層堆積状況（AW07東壁）

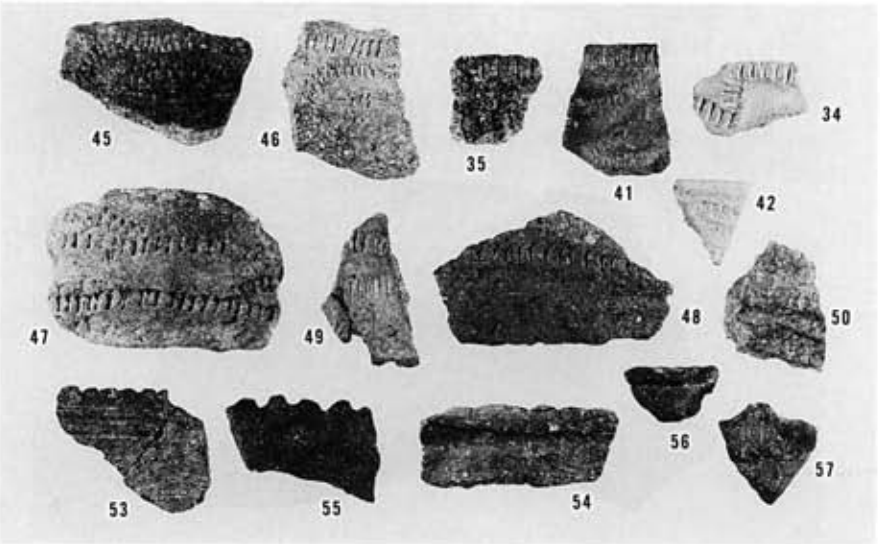




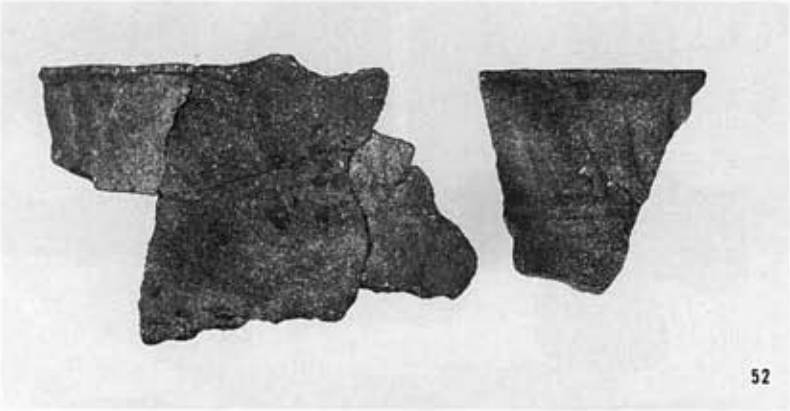
中央部下層の縄紋土器

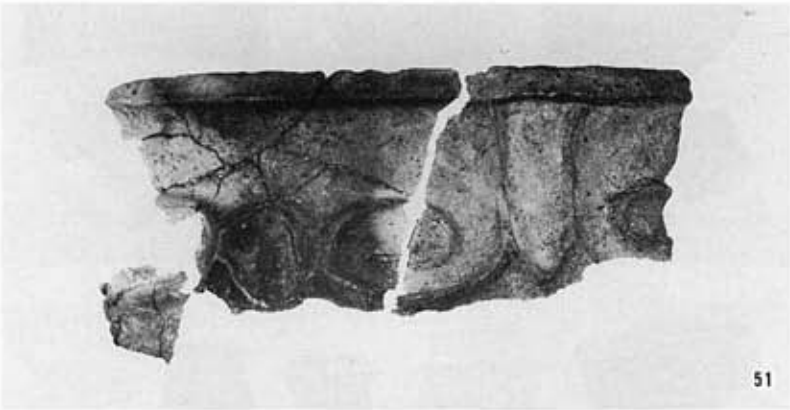

23
26
31
32
24
25
28
27


30
39
29
44
43
36
33
28
40
37

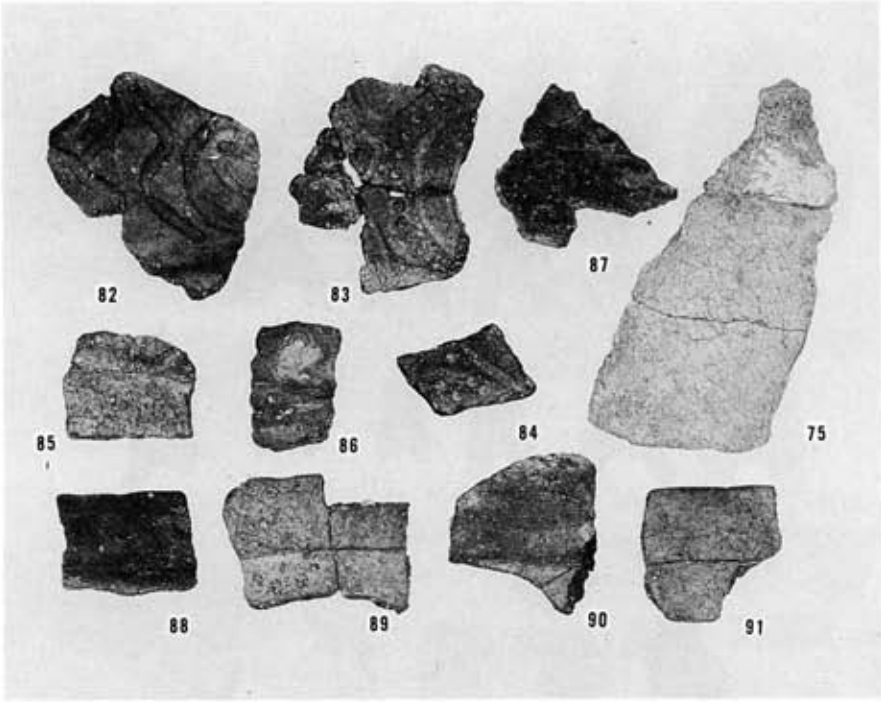

45
46
35
41
34
42
47
49
48
50
53
55
54
56
57

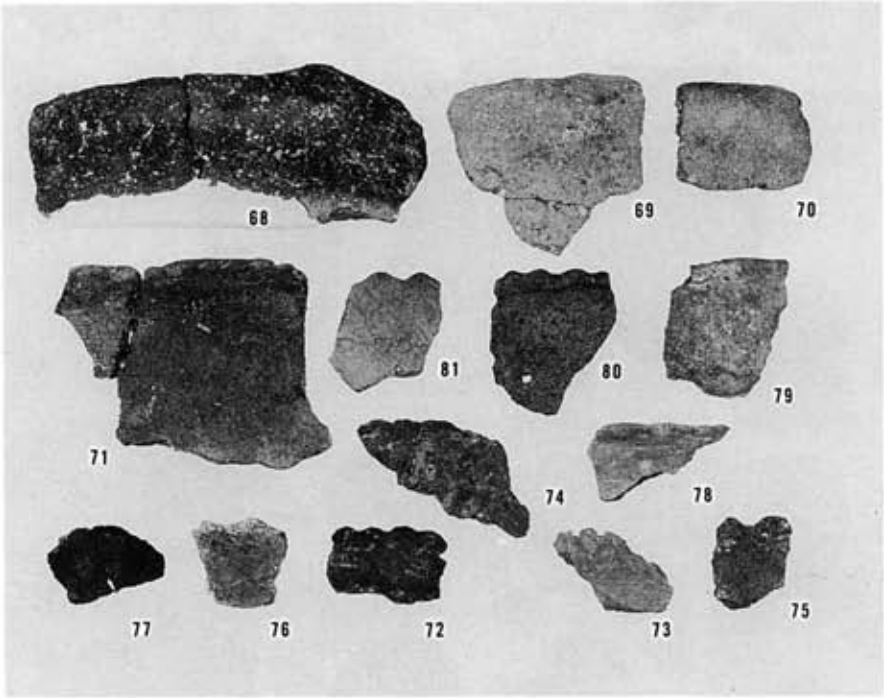
中央部下層の縄紋土器



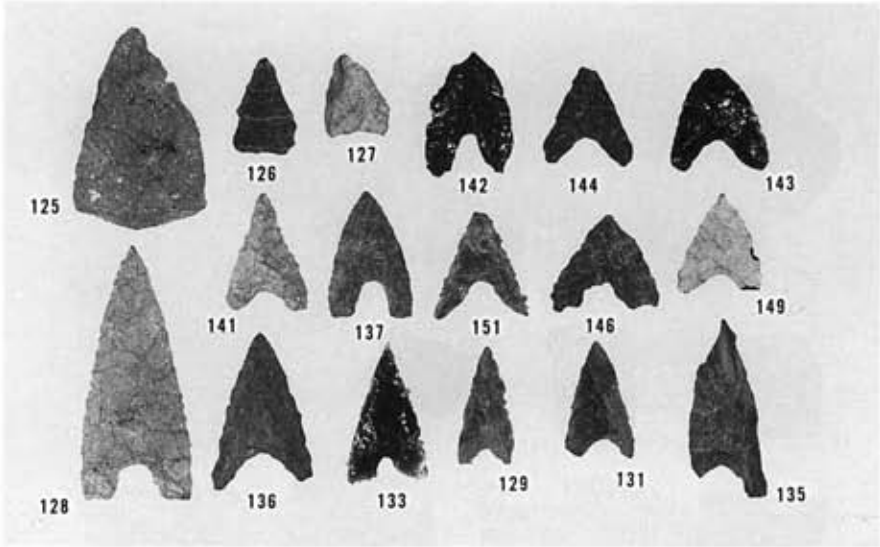


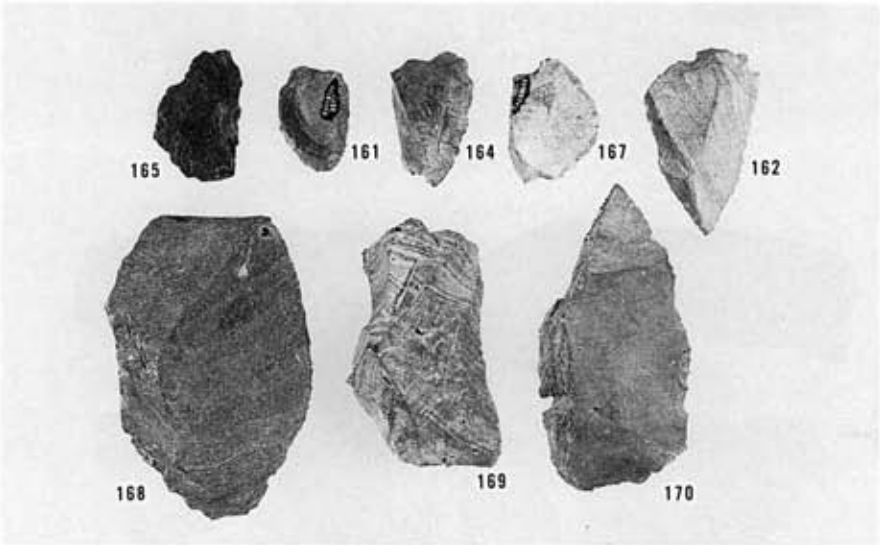
中央部下層の縄紋土器

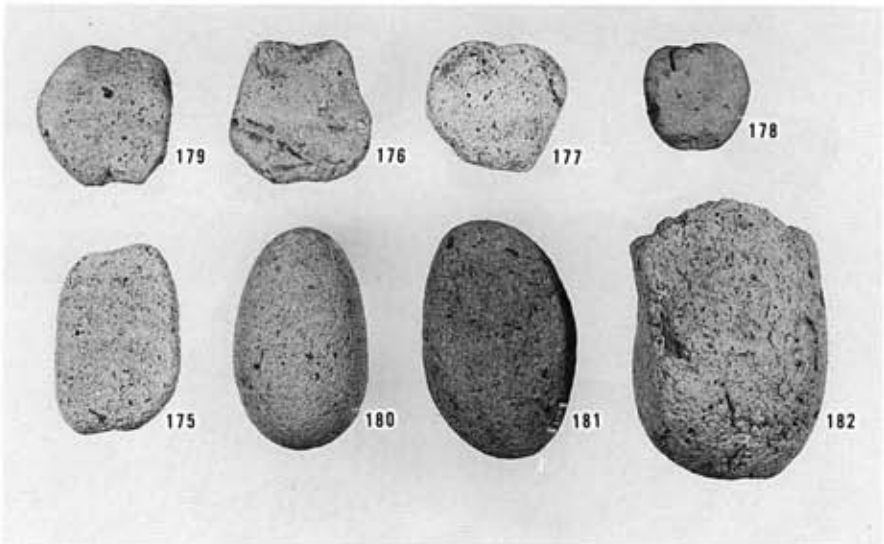

82
83
87
85
86
84
75
88
89
90
91


68
69
70
81
80
79
71
74
78
77
76
72
73
75

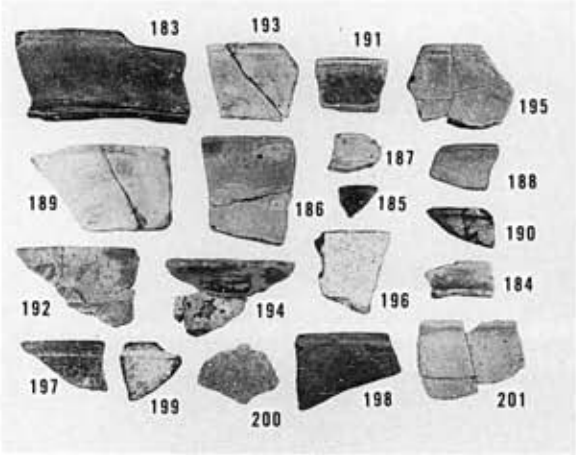
中央部下層の縄紋土器

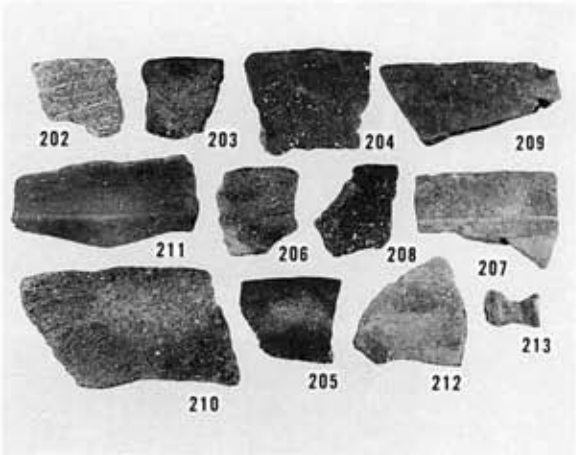

125
126
127
142
144
143
141
137
151
146
149
128
136
133
129
131
135

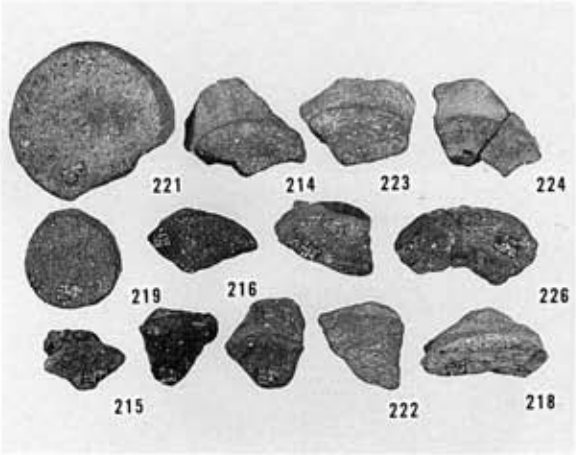

165
161
164
167
162
168
169
170

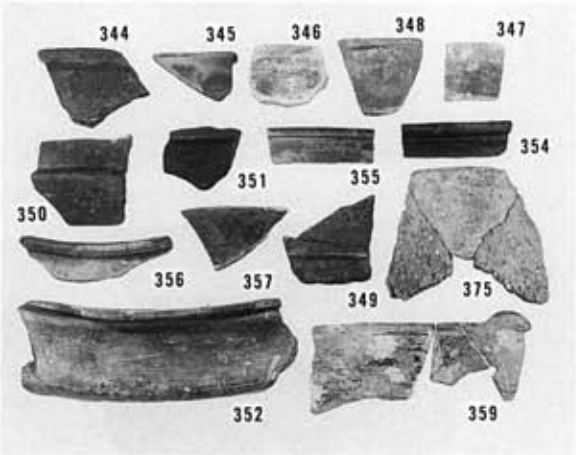

179
176
177
178
175
180
181
182

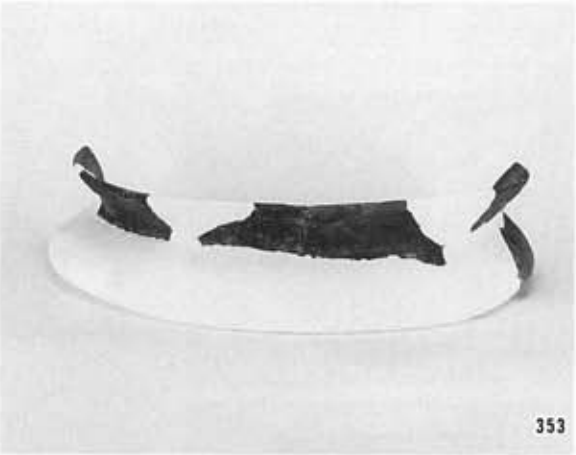
中央部下層の石器

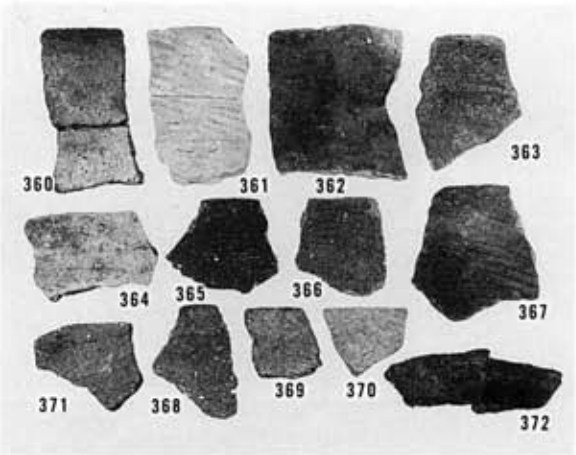












中央部上層の縄紋土器・泥炭部の縄紋土器

429

430

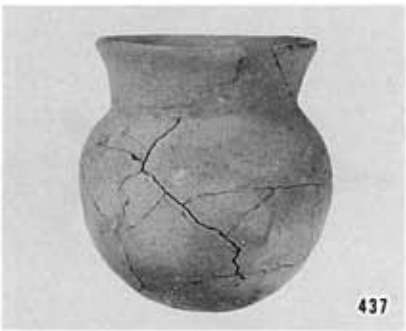
431

432

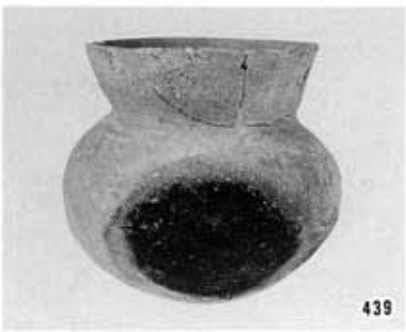
433

434

436


437

438


439

SX222A出土土器

440

442

443

446

447

449

450

452

453

454

455

457

458

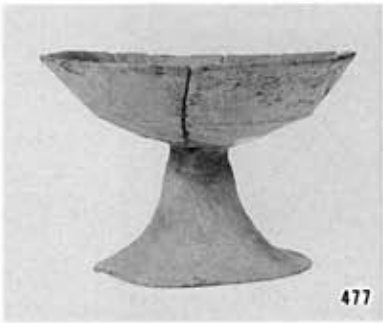
460

SX222A出土土器

474

475

476


477

478

479

480

481

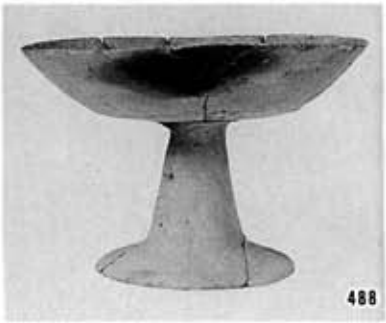
483

484

485

486

487


488

489

SX222B出土土器

SX222B出土土器

507

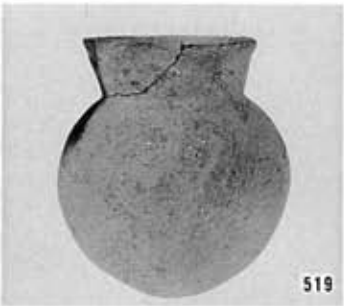
508

512

515

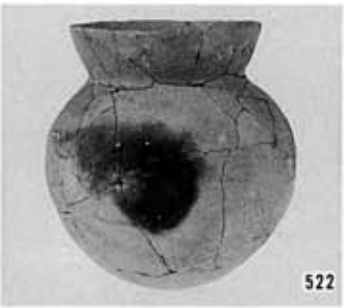
516

517


519

520

521


522

523

526

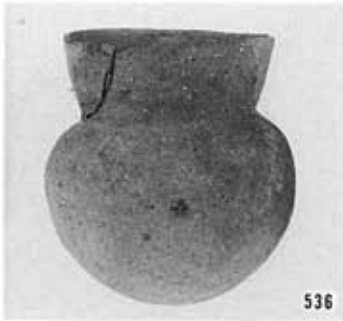
528

529

SX222B出土土器

534

535


536

537

542

543

544

545

546

547

548

549

550

554

556

SX222B出土土器

558

560

562

563

564

565

576

571

574

575

576

577

582

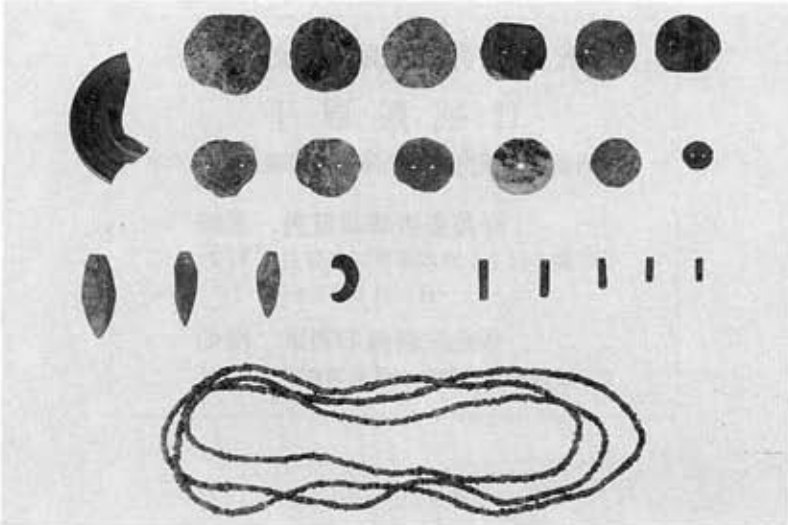
587

588

SX222B出土土器

SX222A出土手捏土器

SX222B出土手捏土器



SX222出土銅鏡・滑石製模造品

佐賀県文化財調査報告書第120集

平 原 遺 跡 II

－本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書２－

編集　佐賀県教育委員会
発行　佐賀県佐賀市城内１丁目１番59号
1993年３月31日

印刷　福博印刷株式会社
佐賀県佐賀市兵庫町修理田72の２